

湯倉洞窟

——長野県上高井郡高山村湯倉洞窟調査報告——

2001

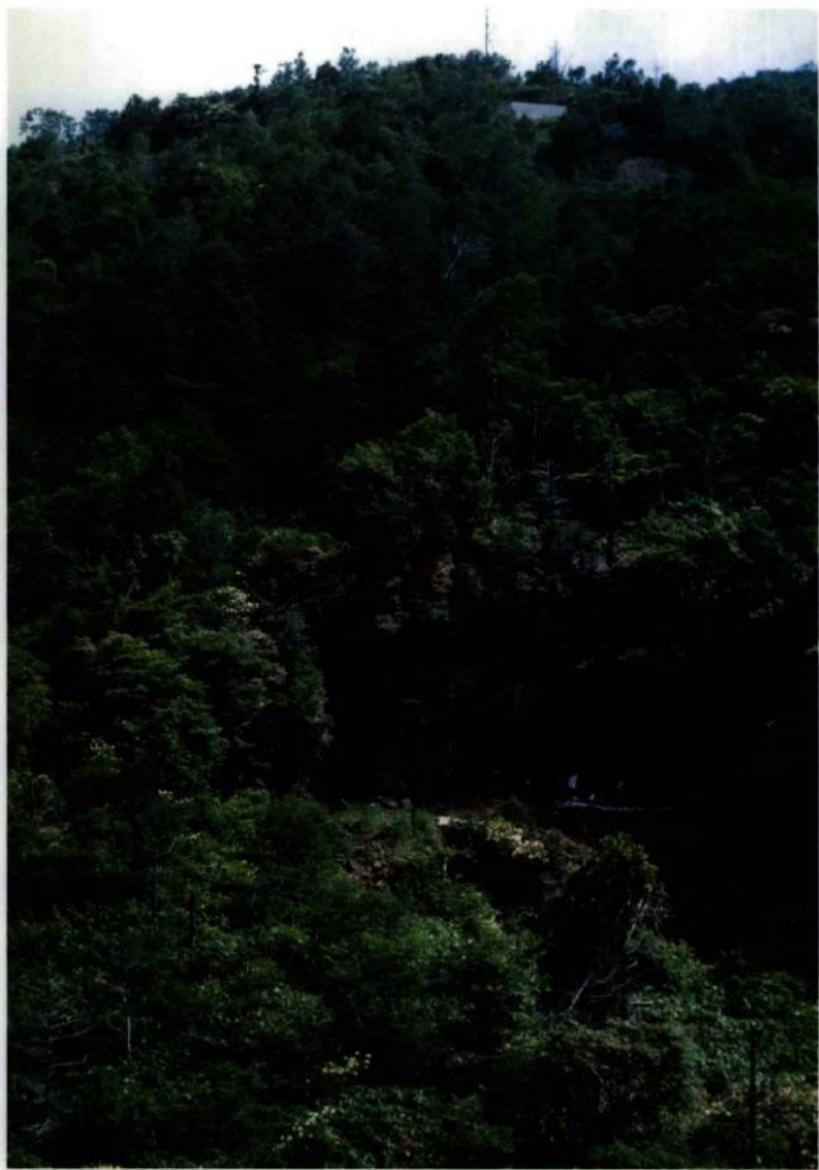
高山村教育委員会

湯倉洞窟

——長野県上高井郡高山村湯倉洞窟調査報告——

2001

高山村教育委員会



湯倉洞窟全景



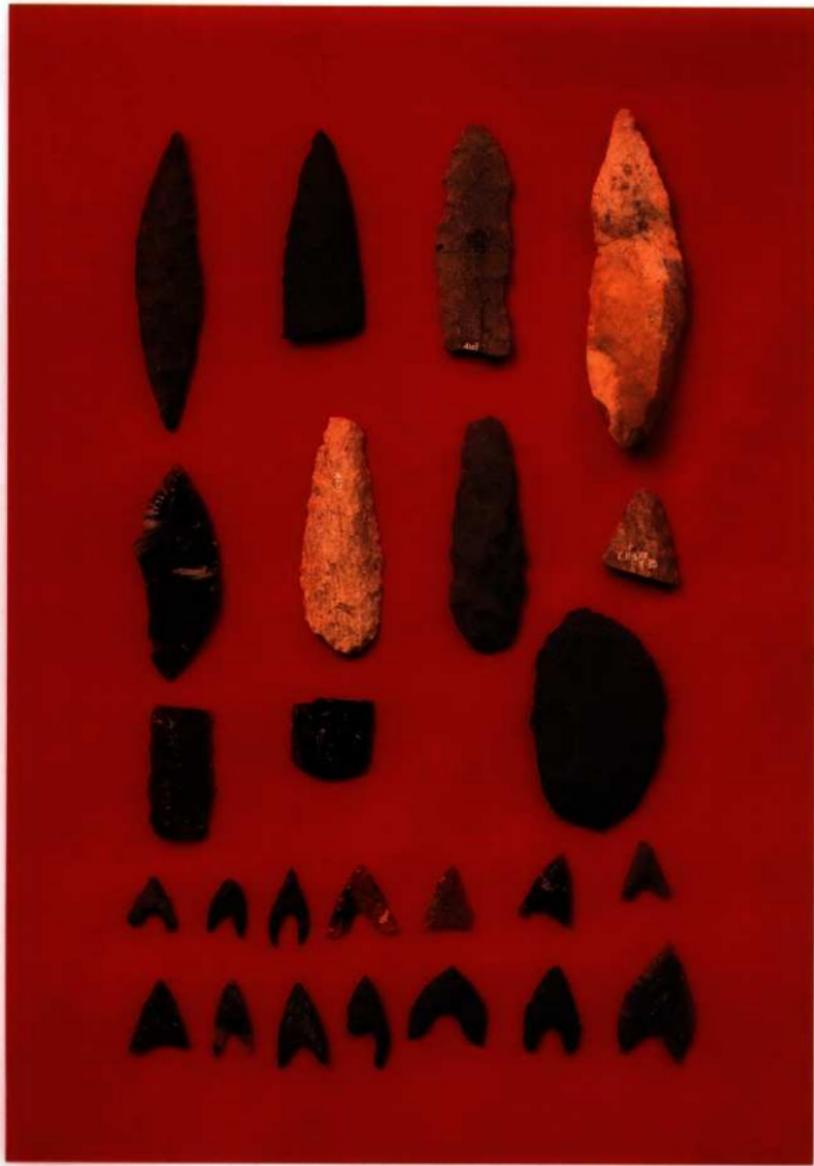
縄文草創期の土器



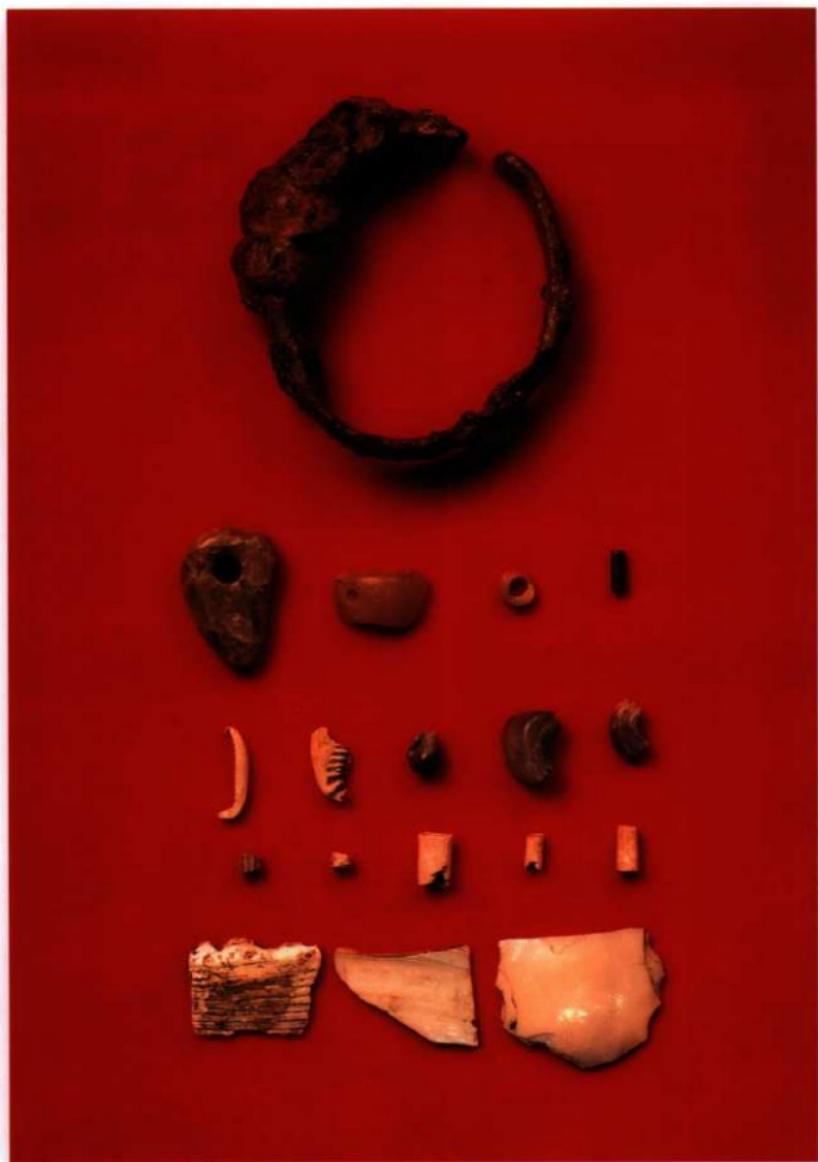
縄文後期の土器



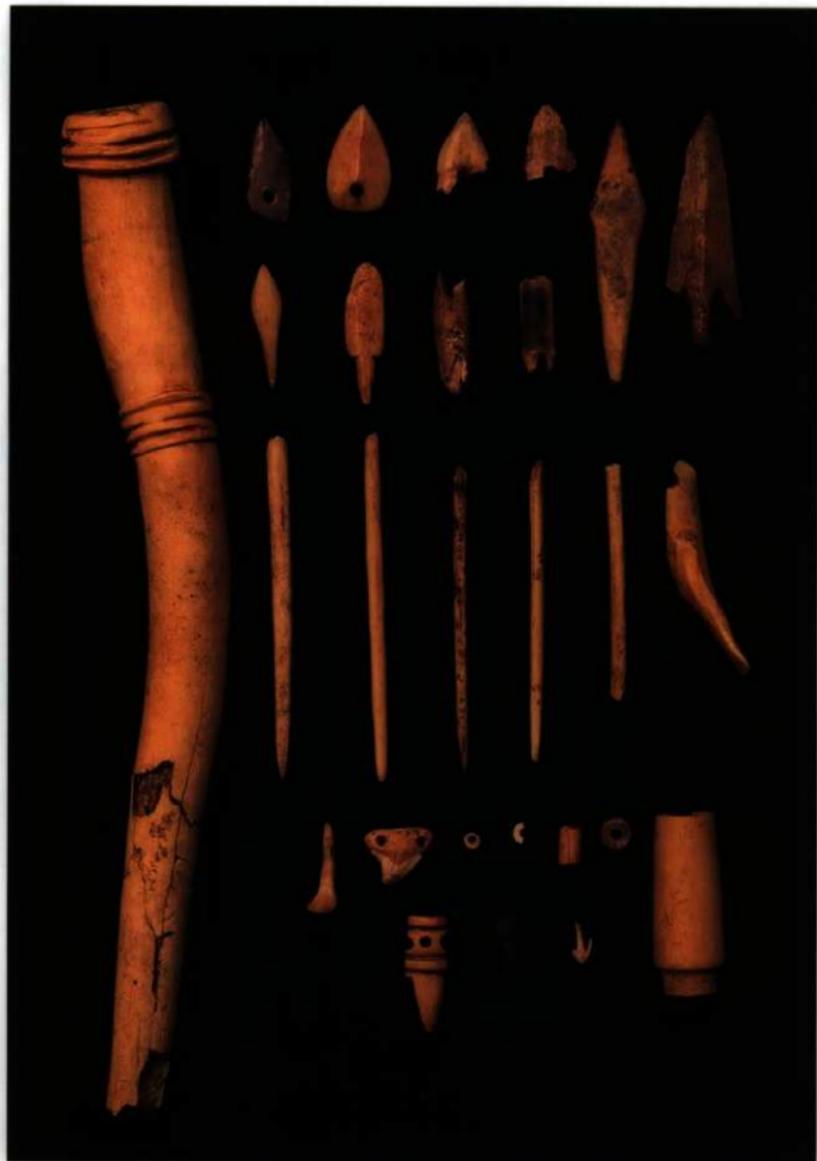
弥生時代の土器



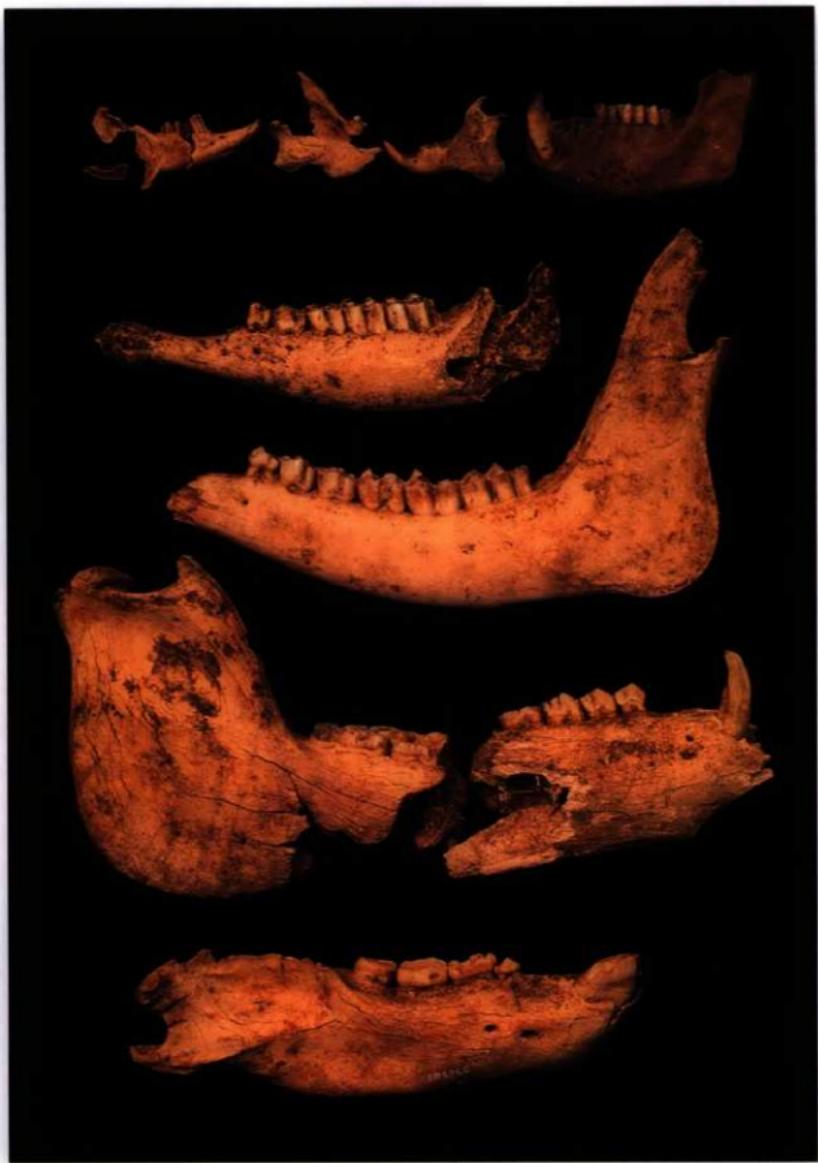
縄文草創期の石器



鉄鏂・石製品・貝製品



骨角器



獸骨（各種下頷骨）

卷頭図版 8



人骨出土状態（1）



人骨出土状態（2）

発刊にあたって

高山村教育委員会教育長 荒井智雄

湯倉洞窟は高山村の最東端、群馬県吾妻郡嬬恋村と境を接する毛無峠の麓にあります。高山村の人里からは遠く離れた山奥に位置しておりますが、一帯の山々は人跡未踏というような所ではなく、早くから小串硫黄鉱山の採掘や营林の山稼ぎなどで、村と深く関わってきました。また、群馬県との交流も行われていたようです。ところが湯倉洞窟の調査によりますと、山とのくらしや関わりはさらに原始・古代の昔までさかのぼることが判ったのです。

湯倉洞窟は昭和45年に発見され、翌年には高山村教育委員会が主催し、前国学院大学教授の永峯光一先生を調査団長に、長野県立歴史館学芸部長の関 孝一先生を副団長にお願いして、第1次学術発掘調査を実施しました。以来、平成7年の最終調査まで、14次にわたる長期の発掘調査を続けてきましたが、平地の発掘と違い山奥の洞窟調査でしたので、調査団のご苦労は如何ばかりであったかと思われます。調査団のみなさんの多大なご協力がなかったら、この長期に及ぶ大事業は完遂しなかったでしょう。心から感謝申し上げる次第です。また、高山村のみなさんにはこの調査に直接あるいは間接にご助力いただきました。自分たちの村のことではありますが、長期にわたりご支援いただきましたことに心から御礼申し上げます。

さて、湯倉洞窟では縄文時代の始まりから現代に至る悠悠1万年に及ぶ間、山のくらしが営まれてきました。発掘された遺物は石器、土器、骨角器、獸骨、魚骨など、量・種類ともに多く出土しています。それらは時代の変遷やくらし、あるいは文物の交流や伝播など、様々な歴史を生きしく物語っています。特に湯倉洞窟を特徴づけているものは原始・古代の遺物で、山岳地帯の狩猟生活を解明する貴重な資料であろうと思います。全国的にみても屈指の洞窟遺跡に数えられるといわれる所以でしょう。この報告書はこうして明らかにされました湯倉洞窟の資料を集大成したものです。執筆者は斯学の一線でご活躍されている永峯光一・関 孝一・大原正義・広瀬昭弘・高橋 誠・田中和之・村松 篤・綿田弘実・太田文雄・望月静雄の諸先生方、及び調査に特別ご参画いただきました金子浩昌・黒住耐二・(故)森本岩太郎・高橋 讓・平田和明の諸先生方です。執筆のご労苦に重ねて感謝申し上げ、この報告書が末永く大勢のみなさんにご活用いただけることを願っています。

なお、高山村には恵まれた自然環境と、湯倉洞窟を初めとする多くの歴史遺産があります。それらを村内外のみなさんに知っていただくため、高山村では歴史民俗資料館と一茶館を設置しております。ちょうど21世紀を迎える今日、高山村では豊かな自然と歴史遺産を基本にした調和のとれた村づくりが進められています。湯倉洞窟はそうした意味で現代の高山村にいろいろな示唆を与えてくれるでしょう。発掘された資料は将来にわたって活用していただくため、高山村歴史民俗資料館に保管し、さらに展示を新たにして一般公開することを検討しているところです。

『かもしかみち』との邂逅

湯倉洞窟調査団長 永峯光一

日本の考古学史をひもといてみると、大森貝塚以降百余年の経過の中に幾つかの大きな「うねり」があり、それを契機として研究が大きく伸展したさまを知ることができる。洞窟・岩陰遺跡の調査も最近における「うねり」の最たるものに数えられるだろう。昭和37年に日本考古学協会が「洞穴遺跡調査特別委員会」を設置し、全国の研究者を結集して、特に縄文文化発生期の解明に多大の成果を上げたことは記憶に新しいところである。このような調査研究の気運が勃興した背景には、昭和30年代の初めから中頃にかけて、山形・日向・新潟・小瀬沢・室谷、そして長崎・福井などの洞窟遺跡で、旧石器文化と縄文文化との接続に係わる時期の様相がかなりはっきりとその姿をみせてきたことがあった（長崎・泉福寺は一足おそい発見である）。それより先、岩宿の発見を端緒に燎原の火のように巻き起こされた旧石器の研究は、10年を出ないうちにほぼ更新世上部における文化変遷の大要を跡づけるまでに成長した。他方、縄文文化の研究は久しく上限を撲糸文系土器の段階に止めたままであった。従って、洞穴・岩陰遺跡の調査によって新しい研究領域としての旧石器文化と、古くから多くの関心を集めてきた縄文文化の始源に関する未知の分野とが、ひと続きの過程とし観察が可能になったのである。当然大きな反響を呼び起し、連鎖反応のように画期的な成果が集中的にもたらされたものと考えられる。

丁度その頃、だいたい同世代に属する私たちの仲間は、主に北・東信の深い山地を舞台とする洞窟・岩陰遺跡の探索に血道をあげていた。それは協会中枢の動きと同じ風潮に棹さすものであったが、組織とは無関係であった。しかし、問題意識では人後に落ちないつもりでいた。そうした一連の活動によって須坂市石小屋洞窟、小県郡真田町菅平の唐沢岩陰・陣の岩岩陰などの遺跡を見つけ、その都度大小の発掘を行い多大の学問的成果をあげることができた。私たちが自力でなし遂げたこととして大いに自負してもよいであろう。

その仲間の一人、関孝一さんはことのほか熱心に洞窟遺跡とその背景にある歴史的な動向を追求していた。丸子実業高等学校に赴任すると、早速に探索を開始し鳥羽山洞窟に遺跡をつきとめ、前後3年にまたがる大きな発掘調査を実施して稀に見る古墳時代曝葬地であることを解明した。実は鳥羽山洞窟では当初縄文草創期の調査が主眼であったのだが、上層に古墳時代の葬送施設が造られていたために、草創期以降の縄文の諸層はごく一部を発掘するに止まつたのである。昭和41年から43年に至る年代であるから、もう30年を越える以前のことになる。

昭和45年4月、関さんは須坂園芸高等学校に転勤した。赴任後間もなく昵懇の間柄であった高山村教育長の故松本利輔さんから、毛無岬近くのとある洞窟から採集した立派な骨鎗を見せられたことが発端となり、翌年7月の第1次湯倉洞窟発掘調査に繋がっていくことになった。幸いにも高山村の全面的なバックアップを得て、発掘調査はここに村の事業として行われることになったのである。私は調査団長として発掘調査に参加したのだったが、当初洞窟にもぐり込み、表層をサッと剝いだだけの堆積土一面に夥しい獸骨が散乱していた光景に、ハッとして息を呑んだ覚えがある。包

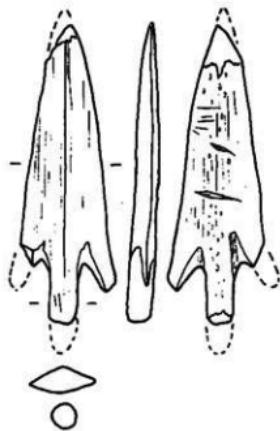
含層は漆黒を呈し、はじめは火山灰に由来するものかと思ったりしたが、発掘が進むにつれ、それがすべて炭と灰であることが明らかになった。洞窟内で写真を撮った時、バックが真っ黒で光線を吸収してしまったものだから、ストロボ1基だけでは全然露出不足で使い物にならなかった苦い経験も懐かしい思い出である。

こうして平成7年の第14次発掘調査に至って到々洞窟の基盤に達し、曲折はあったにしろ嘗々20数年になろうとする発掘作業は終了した。その所見から洞窟の利用をめぐる諸問題を呼び起すであろうが、何といっても縄文草創期の土器相、及び狩猟型の実態と変遷とが二つの大きな問題点として論じられるのではないだろうか。また、看過できないことは獣骨その他の自然遺物の分析であって、とにかくこれほど追年に累積した例を絶えて聞かないから、明らかにされた暁には中部山地、否、列島の自然相その他の基準として重視されるに違いないのである。今、湯倉洞窟の発掘をまとめる時がきて振り返れば、かつて共に歩んだ人たちの名に代わって新しい世代の登場が際立っている。世代交替という自然ではあるが激しい趨勢に直面して、今さらのように感慨を禁じ得ないのである。もっとも、私自身は一足先に引き継ぎを済ませたつもりでいる。このところ積年の収集資料を整理している中で人生の盛りの頃の幾多の資料と再会し、年甲斐もなく思い出にひたつたことであった。そしてその一つの「湯倉調査」と区分された古びた紙袋に、次のような添え書きを見いたした。

「湯倉資料の一切を大原（正義）に渡す。昭和57年7月23日」と。

さて、昭和30年代から40年代の初めにかけて、私たちを洞窟の探索に駆り立てたものは何だったのか。洞窟・岩陰をみつけて、山奥での先史から原史・古代の生活を探り、運がよければ縄文最古の土器に遭遇したいとする使命感。それと『かもしかみち』冒頭のあの詞章に共感し、鼓舞されたのも確かである。そしてそのうちに新しい成果が上るにつれ、着実に他地域との比較や検討を主に考えるようになって行った経過がみられるのだが、ここでさらに年月を遡った経緯についても触れておかねばならない。私事にわたる一面もあって恐縮だがしばらくお耳をかして頂きたいと思う。

私は昭和19年春に国学院大学に入学した。学徒出陣の大きなうねりも一段落して、大学は何か寂寥とした雰囲気に包まれていた。未だ学徒動員は私たちにはふりかかって来ず、僅か半年足らずの間であったが勉学にも従うことができた。私は故樋口清之先生を中心とする「風土記輪講会」に入って講義や教練がない時は考古学資料室に屯し、戦争とは関係のない雰囲気にひたっていることができたのは幸せであった。考古学資料室には標本、資料の他に若干の書籍が置かれていた。その備付けの本の中に『考古学』と『古代文化』が製本されずに並べられ、閲覧は自由にできた。論文にはとっつきにくいものが多いので主に短文や編集記の類を読んだものだが、その中の藤森先生の余韻のある美しい文章は未だ脳裏に蘇ってくる。



発見の端緒になった骨鎌（実大）

そのうちに『かもしかみち』の出版に出会う。未だ敗戦から幾ばくもたたない時で、四六判の本は昭和21年12月5日発行、発行所は革牙書房、発行者は藤森みち子、諫訪市和泉町と奥づけに記されている。それに当時としては珍しくも普通のザラ紙を使っていた。私はその後長いこと本屋の片隅の書棚に並んでいた気がするし、一面焼け野原のその頃、購入したのはどこの本屋かについても記憶を伴わない。藤森先生自身はすごい反響ですぐ手持ちは売り切れ、四国や山形から『かもしかみち』に感動した若者たちが著者に会いにきたと書かれている（復刻本「あとがき」）。さらに昭和22年7月1日付で2刷目が出されたから（戸沢充則さん解説）、私の勘違いだったようだ。ともあれ私はやはり初版初刷の『かもしかみち』が懐かしい。

話は変わるが、昭和25年に私は卒業論文を書かねばならなかった。思案の末「古墳の地域的研究—甲府盆地の場合—」と題した。それはいわすとも明白なように、藤森先生の「考古学上よりしたる古墳墓立地の觀方—信濃諫訪地方古墳の地域的研究」（考古学10-1 昭和14年1月）に範をおいたものである。しかし、同じ盆地といつても甲府と諫訪とでは違うし、そこに花開いた古墳文化もまた大差がある。到底藤森論文には及ぶところではないけれど、それでも私には私なりの矜持が芽生えていた。翌年『国史学』56号に載せられる時「古墳と環境」と改題したが、『国史学』という雑誌の読者層から考えて読んでくれる人は少ないだろうと思っていた。ところが当時京都大学の考古学教室に内地留学をしていた山梨県の山本寿々雄さんが、梅原末治博士から目を通すよういわれたそうである。まことに意外なところから聞こえてきた意外な話であった。

そして昭和32年、故鈴木孝志さんとともに「長野県埴科郡松代町西条地区入組稻葉遺跡調査概報」（信濃9-4 昭和32年）を発表した。かくも長い題名になったのは、故一志茂樹先生の方針による。これは高地性の遺跡の状態を山住みと考えた最初の実践で、クリの一杯つまつた袋状ピットが検出され、縄文ばかりではなく糸切り底の土師器の時期にもピークがあった。同じ年「石小屋洞窟覺書」（信濃9-5 昭和32年）を書く。『かもしかみち』の「古道雜聚」に収められた小論のうち、「かもしかみち」「土器を搬ぶ人」に強い影響を受けてものした石小屋洞窟の予察の小文である。

こうして藤森先生と私とは、ちょうど作家と愛読者に似たような関係が続いて行くのであるが、昭和20年代後半の「日本原始陸耕の諸問題」を契機として、それから30年代を通じ先生は原始農耕に関する一連の論文を発表し、井戸尻などをその実跡とした。そして縄文原始農耕でなければ夜も日も明けないような強い傾斜が一部に起きた。生意気にも「勝坂期をめぐる原始農耕存否問題の検討」（信濃16-3 昭和39年3月）を書いたところ、先生は『古代文化』で反論されるなどいたく不快感を表された。「勝坂期をめぐる云々」は今にして思えば随分と幼稚なものだが、それから原始農耕に言及する際の藤森先生のトーンが落ちたこともまた確かである。ここに藤森先生とは別世界に住むことになるのだけれども、『かもしかみち』の著者として敬愛することに変わりなかつたし、これからもそうであるに違いない。私たちが半生かけてやってきた道は、『かもしかみち』の世界に憧れたことが共通の大きなきっかけとなつたのだが、そこには私たちなりの考えが貫かれているものとひそかに思っている。

石小屋洞窟以来の視点として、私たちは「山住み」の生活に関心を向けてきた。海岸地方に棲む人たちの「浜住み」に対する言葉ではなく、信州という山国の中での「里住み」に対する「山住み」である。ここでいう「山住み」とは、それぞれの時代の「里住み」の人たちが年間の生活サイクル

の中で、一時期山に入つて「山稼ぎ」あるいは「山仕事」をする程度を越えた状況を想定したいのである。

能登健さんは「里棲み集落」「山棲み集落」、そして「サト」「サトヤマ」に対する「オクヤマ」の概念を用い、特に群馬県六合村熊倉遺跡などの「山棲み集落」のあり方を解明する目的で、歴史的な背景と人文地理的な地域性の分析をした。熊倉遺跡などは平安期の集落である（「山棲み集落の出現とその背景—二つの「ヤマ」に関する考古学的分析—」信濃37-4 昭和60年4月）。今後、洞窟利用の住み方を観察していく上で、よい比較材料になるだろう。

私は最近まで「山の考古学」と呼ぶべき考古学の分野が成り立つかどうかを考えていた。日本民俗学の親、柳田国男は「山人」「山民」などの名称で、先住民の子孫—平地人に非ざる民をもって、平地民と区別し意義づけようとしたが、「山人考」「山の人生」を以てその考えを閉じてしまう。でも、『かもしかみち』に書かれている南アルプス槍岳で遭ったリングワングリングによる幻覚と、山案内人長作の死骸の話などは、「山人」に見られる妖怪変化譚の類を彷彿とさせるではないか。また綱野善彦氏は中世史の世界で「山民」「海民」を用い、既成の歴史觀を転換させようとしていることは、重くうけとめよう。

『山の考古学』と名付けた類書も幾つかある。古くは故直良信夫先生の『山の考古学』、これは峠道の信仰的な一面をくくったものである。また、菅谷文則さんにも『山の考古学』という著作があると記憶する。修驗道信仰に基づく登山などをめぐる問題を扱っていたと思う。さらに、『季刊考古学』63号では「山の考古学」を特集している。やはり山岳信仰が主体を占める中で、縄文時代や弥生時代を主題とする論文には「山棲み」「山の民」「平地の民」などの言葉が登場しているけれども、山を舞台とした考古学的事象の記述に止まっている。

「山の考古学」は以上のように何れも山に見出せる遺跡・遺物を取り扱うという意味で「山の」を冠したに過ぎず、そこには山を生活の場とし山という環境のもとで形成された文化の、しかも山以外の他と区別できる指標は見当たらない。従って「山の考古学」というそこに住む人たちのバックグラウンドで、やや厳密に考古学を区分しようとしても、土台無理なことなのである。「山の考古学」とは、山の生活のイメージに対する呼称と考えておこう。

平成11年9月22日

例　　言

- 1 本書は長野県上高井郡高山村大字牧字湯沢滝沢番外に所在する湯倉洞窟の学術発掘調査報告である。
- 2 土地所有者は一市一町一村（須坂市・小布施町・高山村）財産組合。発掘調査は高山村の単独事業として実施され、第14次調査をもって終了した。
- 3 発掘調査の参加者は本文に掲げたとおりで、基礎的な整理も行われた。また、報告書の作成にあたり、遺物の分類・復原・実測、及び作図等の作業は小林伸子、尾沢みづ子、柳沢静子、上野美和子が専従した。
- 4 報告書の挿図、図表、図版等は大原正義が中心となり、各執筆者が協力して作成した。編集は関孝一が中心となり、小林伸子、鬼灯書籍株式会社の協力を頂いた。
- 5 本書の執筆は次のとおり分担し、永峯光一が監修した。

永峯光一	『かもしかみち』との邂逅、第10章	太田文雄	第4章、第6章(第1・2節)
関孝一	第1章、第6章(第3・4節)、あとがき	望月静雄	第5章
大原正義	第2章、第3章(第4節)、第5章(第8節)	金子浩昌	第7章、第8章
広瀬昭弘	第3章(第1節)	黒住耐二	第8章(第1節)
高橋誠	第3章(第1節)	森本岩太郎	第9章(第1・2節)
田中和之	第3章(第2節)	高橋謙	第9章(第1節)
村松篤	第3章(第2節)	平田和明	第9章(第2節)
綿田弘実	第3章(第3節)		

- 6 報告書執筆にあたり、次の方々から御指導いただいた。記して御礼申し上げたい。
飯山市教育委員会・北相木村教育委員会・千葉県史料研究財団・千葉県文化財センター・長野県埋蔵文化財センター・印旛都市文化財センター
青木秀雄・秋山道生・浅岡廉二・安孫子昭二・池谷信之・石井寛・石橋宏克・大塚達朗・小笠原永隆・奥野寅生・小熊博史・可児通宏・金子直道・金子直行・川崎保・小林達雄・小林正子・小宮雷晴・佐藤雅一・設樂博己・下平博之・白石浩之・末次雄一郎・鈴鹿良一・鈴木敏昭・鈴木徳雄・鈴木保彦・砂田佳弘・関根慎二・芹沢清八・館野孝・谷口康浩・谷藤保彦・土屋積・寺崎裕助・徳永哲秀・戸田哲也・土肥孝・中島宏・中村由克・永嶋正春・贊田明・西井幸雄・野澤誠一・巾隆之・馬場保之・原川雄二・原田昌幸・藤沢和枝・藤森英二・細田勝・松山真一・宮崎朝雄・宮崎博・百瀬長秀・山田猛・山崎和己・横山祐平(小林伸子 原稿まとめ)
- 7 発掘された遺物や全ての記録類は高山村歴史民俗資料館に展示・保管されている。

〈執筆者の紹介〉

永峯光一	前国学院大学教授	関孝一	長野県立歴史館学芸部長
大原正義	千葉県立大利根博物館学芸課長	広瀬昭弘	長野県教育委員会指導主事
田中和之	埼玉県蓮田市教育委員会社会教育主任	高橋誠	印旛都市文化財センター調査係長
綿田弘実	長野県立歴史館考古資料課専門主事	村松篤	埼玉県川本町教育委員会主査
太田文雄	国立歴史民俗博物館文部展示課計画係長	望月静雄	飯山市教育委員会生涯学習課主査
高橋謙	前聖マリアンナ医科大学助教授	金子浩昌	早稲田大学講師
森本岩太郎	前聖マリアンナ医科大学教授(平成12年6月逝去)	黒住耐二	千葉県立中央博物館研究員
		平田和明	聖マリアンナ医科大学教授

本文目次

グラビア

- 発刊にあたって 高山村教育委員会教育長 荒井智雄
『かもしかみち』との邂逅 湯倉洞窟調査団長 永峯光一

第1章 調査の経過と洞窟の環境	1
第1節 洞窟の発見と調査の経過	2
1 洞窟発見のいきさつ	2
2 発掘調査の経過	4
第2節 洞窟の環境	10
1 自然環境	10
2 洞窟の状態	13
3 周辺の洞窟・岩陰遺跡	17
第2章 遺構と遺物の出土状態	21
第1節 調査方法	22
第2節 層序	24
第3節 遺構と遺物の出土状態	27
1 縄文時代	27
2 弥生時代から近現代	37
第3章 縄文土器	39
第1節 草創期から早期中葉	40
1 第1群 隆起線文土器	40
2 第2群 円形押圧文土器	41
3 第3群 爪形文土器	43
4 第4群 多縄文系土器	48
5 第5群 回転縄文土器	54
6 第6群 表裏縄文土器	57
7 第7群 擬糸文土器	60
8 第8群 押型文土器	60
9 第9群 貝殻沈線文系土器	63
10 第10群 無文土器	67
11 湯倉洞窟出土の縄文草創期から早期中葉の土器群について	68
第2節 早期後半から中期前半	137
1 第1群 早期後半から末葉の条痕文系土器	137
2 第2群 早期末葉から前期初頭の土器	140
3 第3群 関山式併行期の土器	144

4 第4群 黒浜式併行期の土器	145
5 第5群 諸磯a式土器	147
6 第6群 諸磯b式土器	148
7 第7群 諸磯c式土器	149
8 第8群 十三菩提式土器	150
9 第9群 五領ガ台式併行期の土器	150
10 第10群 中期中葉の土器	151
11 土器群の様相	169
第3節 中期末葉から後期	175
1 第1群 加曾利E III・IV式期の土器	175
2 第2群 称名寺式並行期の土器	175
3 第3群 堀之内1式並行期の土器	176
4 第4群 堀之内2式及び並行期の土器	176
5 第5群 加曾利B1式土器	181
6 第6群 加曾利B2式以降の土器	182
7 第7群 無文土器	182
8 第8群 土器底部	183
9 土器群の編年位置	185
10 後期の土器組成	185
第4節 晩期	202
1 第1群 有文土器	202
2 第2群 無文土器	203
第4章 弥生土器	207
第1節 弥生土器	208
1 第1群 黎明期の土器	208
2 第2群 中期前半の土器	212
3 第3群 中期中葉の土器	214
4 第4群 中期後半の土器	217
5 第5群 後期初頭の土器	219
6 第6群 箱清水式土器	220
第2節 弥生土器の所見	221
第5章 石器	247
第1節 繩文時代の層位と分類	248
1 文化層の設定	248
2 石器の分類と類型	248
第2節 草創期の石器	252
1 第XII層出土の石器	252
2 第XI層出土の石器	254

3 第X層出土の石器	255
第3節 早期の石器	257
1 第IX層出土の石器	257
2 第VII層出土の石器	258
第4節 前期の石器	259
1 第VII層出土の石器	259
第5節 後・晚期の石器	260
1 第VI層出土の石器	260
2 第V層出土の石器	261
第6節 石器の変遷と消長	262
1 主要な石器の変遷	262
2 石鏃の類型別消長	263
3 削器の類型別消長	264
第7節 弥生時代以降の石器	350
1 主要な石器各説	350
第8節 石 製 品	373
 第6章 古代・中世・近現代の遺物	375
第1節 古墳時代の土器	376
(付) 鉄 鋼	379
第2節 奈良・平安時代の土師器・須恵器	390
第3節 中世の遺物	391
第4節 近現代の遺物	394
 第7章 骨角製品と貝製品	397
第1節 骨角製品	398
1 鐘	398
2 根 挟 み	398
3 矢 答	398
4 錐	398
5 垂 飾 品	399
6 刀 器	399
7 シカ尺骨製のへら状骨器	399
8 歯牙の加工品	399
9 棒状角器	400
10 管 玉	400
11 シカ脛骨の加工品	400
12 管状製品	400
13 環状製品	400
14 柱状角器	400

15	釣針	401
16	刺突具	401
17	骨針	401
18	鹿角切断品	401
19	シカの四肢骨の割断、加工品	401
収束		402
第2節	貝製品	413
第8章 軟体動物及び脊椎動物遺体 417		
第1節	軟体動物	418
1	材料及び方法	418
2	結果及び考察	418
第2節	脊椎動物	436
1	魚類	436
2	両生類	438
3	爬虫類	440
4	鳥類	440
5	哺乳類	441
6	イノシシ、ニホンジカにみる幼体遺骸	458
7	動物遺体の出土状況	459
8	弥生、古墳期の獸骨	461
第3節	動物遺体の特徴	464
1	鳥類	464
2	獸類	464
3	あとがき	466
第9章 人骨 467		
第1節	縄文早期の人骨	468
1	はじめに	468
2	人骨の出土状況	468
3	人骨所見	469
4	考察	472
第2節	出土人骨補遺	475
1	はじめに	475
2	追加入骨片について	475
3	若干の考察	477
4	まとめ	478

第10章 「山住み」論序説	479
1 調査の視点	480
2 縄文の軌跡	480
3 「山住み」生活文化の成立	482
4 道具・補遺	482
5 湯倉狩獵記抄	483
6 遠かなる「縄文語」	485
7 「山住み」びとの末裔	486

あとがき

巻頭図版目次

巻頭図版 1 洞窟全景	卷頭図版 5 鉄鋼・石製品・貝製品
巻頭図版 2 縄文草創期の土器	卷頭図版 6 骨角器
巻頭図版 3 縄文後期の土器・弥生時代の土器	卷頭図版 7 獣骨
巻頭図版 4 縄文草創期の石器	卷頭図版 8 人骨出土状態

挿図目次

第1図 湯倉洞窟付近地図	11	第20図 爪形文土器(1)	97
第2図 湯倉洞窟内の気温・湿度	13	第21図 爪形文土器(2)	98
第3図 湯倉洞窟全体測量図	14	第22図 爪形文土器(3)	99
第4図 湯倉洞窟調査開始時平面図	16	第23図 爪形文土器(4)	100
第5図 湯倉洞窟底平面図	17	第24図 爪形文土器(5)	101
第6図 湯倉洞窟周辺の主要な洞窟・岩陰遺跡	19	第25図 爪形文土器(6)	102
第7図 湯倉洞窟平面図及び発掘区設定図	22	第26図 爪形文土器(7)	103
第8図 湯倉洞窟土層断面図(C列西壁)	26	第27図 爪形文土器(8)	104
第9図 1・2号炉跡	27	第28図 多縄文系土器(1)	105
第10図 人骨出土状況	28	第29図 多縄文系土器(2)	106
第11図 草創期～早期前半第3群土器(爪形文土器)の出土状況	30	第30図 多縄文系土器(3)	107
第12図 草創期～早期前半第4群土器(押圧縄文土器)の出土状況	31	第31図 多縄文系土器(4)	108
第13図 草創期～早期前半第5群土器(回転縄文土器)の出土状況	32	第32図 多縄文系土器(5)	109
第14図 草創期～早期前半第6群土器(表裏縄文土器)の出土状況	33	第33図 多縄文系土器(6)	110
第15図 草創期～早期前半第8群土器(押型文土器)の出土状況	34	第34図 多縄文系土器(7)	111
第16図 草創期～早期前半第9群土器(沈線文土器)の出土状況	35	第35図 多縄文系土器(8)	112
第17図 縄文時代後期の敷石	36	第36図 多縄文系土器(9)	113
第18図 弥生時代の敷石	37	第37図 多縄文系土器(10)	114
第19図 隆起縄文土器 円形押圧文土器	96	第38図 多縄文系土器(11)	115
		第39図 回転縄文土器(1)	116
		第40図 回転縄文土器(2)	117
		第41図 回転縄文土器(3)	118
		第42図 回転縄文土器(4)	119
		第43図 回転縄文土器(5)	120
		第44図 回転縄文土器(6)	121

第45図	回転縄文土器(7).....	122
第46図	回転縄文土器(8).....	123
第47図	表裏縄文土器(1).....	124
第48図	表裏縄文土器(2).....	125
第49図	表裏縄文土器(3).....	126
第50図	表裏縄文土器(4) 捨糸文土器.....	127
第51図	押型文土器(1).....	128
第52図	押型文土器(2).....	129
第53図	押型文土器(3).....	130
第54図	押型文土器(4).....	131
第55図	貝殻沈線文系土器(1).....	132
第56図	貝殻沈線文系土器(2).....	133
第57図	貝殻沈線文系土器(3).....	134
第58図	無文土器(1).....	135
第59図	無文土器(2).....	136
第60図	早期後半～末葉の土器(1).....	152
第61図	早期後半～末葉の土器(2).....	153
第62図	早期後半～末葉の土器(3)、前期初頭の土器(1).....	154
第63図	前期初頭の土器(2).....	155
第64図	前期初頭の土器(3).....	156
第65図	前期初頭の土器(4).....	157
第66図	前期初頭の土器(5).....	158
第67図	前期初頭の土器(6).....	159
第68図	前期前半の土器(1).....	160
第69図	前期前半の土器(2).....	161
第70図	前期前半の土器(3)、早期後半の土器(4)、前期初頭の土器(7).....	162
第71図	諸礫a式土器.....	163
第72図	諸礫b式土器(1).....	164
第73図	諸礫b式土器(2).....	165
第74図	諸礫c式土器(1).....	166
第75図	諸礫c式土器(2).....	167
第76図	前期末葉～中期前半の土器.....	168
第77図	縄文時代早期後半～中期前半の編年表(1).....	173
第78図	縄文時代早期後半～中期前半の編年表(2).....	174
第79図	後期縄文土器(1)（中期末葉土器を含む）.....	188
第80図	後期縄文土器(2).....	189
第81図	後期縄文土器(3).....	190
第82図	後期縄文土器(4)（中期末葉土器を含む）.....	191
第83図	後期縄文土器(5).....	192
第84図	後期縄文土器(6).....	193
第85図	後期縄文土器(7).....	194
第86図	後期縄文土器(8).....	195
第87図	後期縄文土器(9).....	196
第88図	後期縄文土器(10).....	197
第89図	後期縄文土器(11).....	198
第90図	後期縄文土器(12).....	199
第91図	後期縄文土器(1).....	200
第92図	長野市村東山手遺跡出土堀之内2式土器.....	201
第93図	縄文晚期の土器(1).....	204
第94図	縄文晚期の土器(2).....	205
第95図	縄文晚期の土器(3).....	206
第96図	弥生土器実測図(1).....	224
第97図	弥生土器実測図(2).....	225
第98図	弥生土器実測図(3).....	226
第99図	弥生土器拓影図(1).....	227
第100図	弥生土器拓影図(2).....	228
第101図	弥生土器拓影図(3).....	229
第102図	弥生土器拓影図(4).....	230
第103図	弥生土器拓影図(5).....	231
第104図	弥生土器拓影図(6).....	232
第105図	弥生土器拓影図(7).....	233
第106図	弥生土器拓影図(8).....	234
第107図	弥生土器拓影図(9).....	235
第108図	弥生土器拓影図(10).....	236
第109図	弥生土器拓影図(11).....	237
第110図	弥生土器拓影図(12).....	238
第111図	弥生土器拓影図(13).....	239
第112図	弥生土器拓影図(14).....	240
第113図	弥生土器拓影図(15).....	241
第114図	弥生土器拓影図(16).....	242
第115図	弥生土器拓影図(17).....	243
第116図	弥生土器拓影図(18).....	244
第117図	弥生土器拓影図(19).....	245
第118図	石器の主要器種分類と類型.....	251
第119図	縄文時代草創期の石器（XII層1）.....	265
第120図	縄文時代草創期の石器（XII層2）.....	266
第121図	縄文時代草創期の石器（XII層3）.....	267
第122図	縄文時代草創期の石器（XII層4）.....	268
第123図	縄文時代草創期の石器（XII層5）.....	269
第124図	縄文時代草創期の石器（XII層6）.....	270
第125図	縄文時代草創期の石器（XII層7）.....	271
第126図	縄文時代草創期の石器（XII層8）.....	272
第127図	縄文時代草創期の石器（XII層9）.....	273
第128図	縄文時代草創期の石器（XII層10）.....	274
第129図	縄文時代草創期の石器（XII層11）.....	275
第130図	縄文時代草創期の石器（XII層12）.....	276
第131図	縄文時代草創期の石器（XII層13）.....	277
第132図	縄文時代草創期の石器（XII層1）.....	278
第133図	縄文時代草創期の石器（XII層2）.....	279
第134図	縄文時代草創期の石器（XII層3）.....	280
第135図	縄文時代草創期の石器（XII層4）.....	281
第136図	縄文時代草創期の石器（XII層5）.....	282
第137図	縄文時代草創期の石器（XII層6）.....	283

第138回	縄文時代草創期の石器 (XI層 7)	284	第168回	弥生時代以降の石器 (IV層 1)	352
第139回	縄文時代草創期の石器 (X層 1)	285	第169回	弥生時代以降の石器 (IV層 2)	353
第140回	縄文時代草創期の石器 (X層 2)	286	第170回	弥生時代以降の石器 (III層 1)	354
第141回	縄文時代草創期の石器 (X層 3)	287	第171回	弥生時代以降の石器 (III層 2)	355
第142回	縄文時代草創期の石器 (X層 4)	288	第172回	弥生時代以降の石器 (III層 3)	356
第143回	縄文時代早期の石器 (IX層 1)	289	第173回	弥生時代以降の石器 (III層 4)	357
第144回	縄文時代早期の石器 (IX層 2)	290	第174回	弥生時代以降の石器 (II層 1)	358
第145回	縄文時代早期の石器 (IX層 3)	291	第175回	弥生時代以降の石器 (II層 2)	359
第146回	縄文時代早期の石器 (IX層 4)	292	第176回	弥生時代以降の石器 (II層 3)	360
第147回	縄文時代早期の石器 (IX層 5)	293	第177回	弥生時代以降の石器 (II層 4)	361
第148回	縄文時代早期の石器 (IX層 6)	294	第178回	弥生時代以降の石器 (II層 5)	362
第149回	縄文時代早期の石器 (IX層 7)	295	第179回	弥生時代以降の石器 (II層 6)	363
第150回	縄文時代早期の石器 (IX層 8)	296	第180回	弥生時代以降の石器 (I層)	364
第151回	縄文時代早期の石器 (VII層 1)	297	第181回	石製品	373
第152回	縄文時代早期の石器 (VII層 2)	298	第182回	鉄鋼実測図	379
第153回	縄文時代早期の石器 (VII層 3)	299	第183回	土師器実測図(1)	386
第154回	縄文時代前期の石器 (VII層 1)	300	第184回	土師器実測図(2)	387
第155回	縄文時代前期の石器 (VII層 2)	301	第185回	土師器実測図(3)	388
第156回	縄文時代前期の石器 (VII層 3)	302	第186回	土師器拓影図	389
第157回	縄文時代前期の石器 (VII層 4)	303	第187回	土師器実測図(4)	389
第158回	縄文時代後・晚期の石器 (VI層 1)	304	第188回	土師器・須恵器実測図	390
第159回	縄文時代後・晚期の石器 (VI層 2)	305	第189回	内耳土器出土状態実測図	392
第160回	縄文時代後・晚期の石器 (VI層 3)	306	第190回	内耳土器実測図	393
第161回	縄文時代後・晚期の石器 (VI層 4)	307	第191回	近現代の遺物実測図	395
第162回	縄文時代後・晚期の石器 (VI層 5)	308	第192回	骨角器(1)	403
第163回	縄文時代後・晚期の石器 (V層 1)	309	第193回	骨角器(2)	404
第164回	縄文時代後・晚期の石器 (V層 2)	310	第194回	骨角器(3)	405
第165回	縄文時代後・晚期の石器 (V層 3)	311	第195回	骨角器(4)	406
第166回	縄文時代後・晚期の石器 (V層 4)	312	第196回	骨角器(5)	407
第167回	縄文時代後・晚期の石器 (V層 5)	313	第197回	貝製品	414

表 目 次

第1表	調査行程	5	第4表	出土土器観察表02	85
第2表	洞窟の面積	14	第4表	出土土器観察表03	86
第3表	湯倉洞窟周辺の主要な洞窟・岩陰遺跡	18	第4表	出土土器観察表04	87
第4表	出土土器観察表(1)	74	第4表	出土土器観察表05	88
第4表	出土土器観察表(2)	75	第4表	出土土器観察表06	89
第4表	出土土器観察表(3)	76	第4表	出土土器観察表07	90
第4表	出土土器観察表(4)	77	第4表	出土土器観察表08	91
第4表	出土土器観察表(5)	78	第4表	出土土器観察表09	92
第4表	出土土器観察表(6)	79	第4表	出土土器観察表10	93
第4表	出土土器観察表(7)	80	第4表	出土土器観察表11	94
第4表	出土土器観察表(8)	81	第4表	出土土器観察表12	95
第4表	出土土器観察表(9)	82	第5表	縄文中期末～後期土器組成表	186
第4表	出土土器観察表00	83	第6表	層序と文化層対比表	248
第4表	出土土器観察表01	84	第7表	主要石器層位別出現数	262

第8表 石器類型別比率	263	第11表 弥生時代石器計測表(5)	369
第9表 繩文時代石器計測表(1)	314	第11表 弥生時代石器計測表(6)	370
第9表 繩文時代石器計測表(2)	315	第11表 弥生時代石器計測表(7)	371
第9表 繩文時代石器計測表(3)	316	第11表 弥生時代石器計測表(8)	372
第9表 繩文時代石器計測表(4)	317	第12表 古墳時代出土土器一覧(1)	383
第9表 繩文時代石器計測表(5)	318	第12表 古墳時代出土土器一覧(2)	384
第9表 繩文時代石器計測表(6)	319	第12表 古墳時代出土土器一覧(3)	385
第9表 繩文時代石器計測表(7)	320	第13表 骨角器一覧(1)	408
第9表 繩文時代石器計測表(8)	321	第13表 骨角器一覧(2)	409
第9表 繩文時代石器計測表(9)	322	第13表 骨角器一覧(3)	410
第9表 繩文時代石器計測表(10)	323	第13表 骨角器一覧(4)	411
第9表 繩文時代石器計測表(11)	324	第13表 骨角器一覧(5)	412
第9表 繩文時代石器計測表(12)	325	第14表 貝製品一覧	415
第9表 繩文時代石器計測表(13)	326	第15表 貝類遺存体一覧(1)	423
第9表 繩文時代石器計測表(14)	327	第15表 貝類遺存体一覧(2)	424
第9表 繩文時代石器計測表(15)	328	第15表 貝類遺存体一覧(3)	425
第9表 繩文時代石器計測表(16)	329	第15表 貝類遺存体一覧(4)	426
第9表 繩文時代石器計測表(17)	330	第15表 貝類遺存体一覧(5)	427
第9表 繩文時代石器計測表(18)	331	第15表 貝類遺存体一覧(6)	428
第9表 繩文時代石器計測表(19)	332	第15表 貝類遺存体一覧(7)	429
第9表 繩文時代石器計測表(20)	333	第15表 貝類遺存体一覧(8)	430
第9表 繩文時代石器計測表(21)	334	第15表 貝類遺存体一覧(9)	431
第9表 繩文時代石器計測表(22)	335	第15表 貝類遺存体一覧(10)	432
第9表 繩文時代石器計測表(23)	336	第15表 貝類遺存体一覧(11)	433
第9表 繩文時代石器計測表(24)	337	第16表 魚骨一覧(1)	437
第9表 繩文時代石器計測表(25)	338	第16表 魚骨一覧(2)	438
第9表 繩文時代石器計測表(26)	339	第17表 カエル類遺存体(1)	438
第9表 繩文時代石器計測表(27)	340	第17表 カエル類遺存体(2)	439
第9表 繩文時代石器計測表(28)	341	第17表 カエル類遺存体(3)	440
第9表 繩文時代石器計測表(29)	342	第18表 ヘビ一覧	440
第9表 繩文時代石器計測表(30)	343	第19表 湯倉洞窟における主要獸種骨角の層位別出土量表(1)	456
第9表 繩文時代石器計測表(31)	344	第19表 湯倉洞窟における主要獸種骨角の層位別出土量表(2)	457
第9表 繩文時代石器計測表(32)	345	第19表 湯倉洞窟における主要獸種骨角の層位別出土量表(3)	458
第9表 繩文時代石器計測表(33)	346	第20表 頭蓋(女性)計測値と示数	469
第9表 繩文時代石器計測表(34)	347	第21表 右鎖骨(女性)計測値と示数	470
第9表 繩文時代石器計測表(35)	348	第22表 右上腕骨(女性)計測値と示数	470
第9表 繩文時代石器計測表(36)	349	第23表 大腿骨(女性)計測値と示数	471
第10表 弥生時代以降の各層石器出土數	350	第24表 脊骨(女性)計測値と示数	472
第11表 弥生時代石器計測表(1)	365	第25表 腰骨(女性)計測値と示数	472
第11表 弥生時代石器計測表(2)	366		
第11表 弥生時代石器計測表(3)	367		
第11表 弥生時代石器計測表(4)	368		

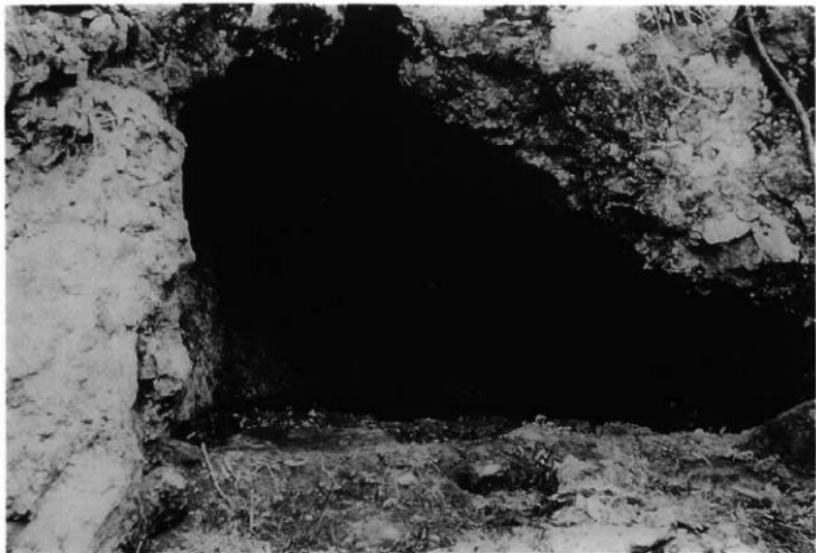
本文写真目次

写真1 踏査の一景(昭和45年)	2	写真3 松本利輔さん	3
写真2 調査前の洞窟	3	写真4 洞窟前方の景観	4

写真5 洞窟テラス	6	写真20 寛骨の内面	471
写真6 テラスの発掘	7	写真21 両側の大腿骨・脛骨・腓骨および右側の膝蓋骨	472
写真7 洞窟内の発掘	8	写真22 両側の足骨	472
写真8 毛無峰と破風岳	10	写真23 縄文時代早期壮年期女性人骨（1-a）の 主要骨片	476
写真9 洞窟前方の岩山	12	写真24 縄文時代早期壮年期女性人骨（1-a）の上顎の 歯（写真左）と下顎の歯（写真右）の磨耗	476
写真10 東側の衝洞窟	15	写真25 縄文時代早期壮年期女性人骨（1-b）の 右上顎第2小白歯の磨耗	476
写真11 西側の小岩陰	15	写真26 縄文時代早期小児人骨（1-c）の主要骨片	477
写真12 秋山マタギ洞窟 入口部の閉鎖（ヤライ）	16	写真27 縄文時代後期～弥生時代の壮年期女性人骨（2- a）の右上顎第2小白歯～第2大臼歯の龋蝕・齒 周症に因る病変（写真左）と、縄文時代後期～弥 生時代小児人骨（2-b）の右下顎第2小白歯の 咬合面（写真右）	477
写真13 もじり網底部圧痕	184		
写真14 頭蓋（壮年期女性）の前面	468		
写真15 頭蓋の左側面	468		
写真16 特異な磨耗のある4本の下顎前歯 （矢印）の唇側面	470		
写真17 下顎骨の左側面	470		
写真18 右側の上腕骨・肩甲骨・鎖骨	470		
写真19 椎骨 左から1列目は頸椎、2～3列目は胸椎、 4列目は腰椎と仙骨	471		

第1章

調査の経過と洞窟の環境



湯倉洞窟近景

第1節 洞窟の発見と調査の経過

1 洞窟発見のいきさつ

1970（昭和45）年5月のことであった。上高井郡高山村教育長の故松本利輔さんが私の勤務する須坂園芸高校へひょっこり訪ねて来られた。赴任早々の年である。須坂市にある上高井教育会に用があり、ついでに立ち寄ったといながら、かばんの中からおもむろに一本の骨鑑と数個の無文土器片を取り出した。見れば骨鑑は長大なもので、内陸の信州ではあまり見かけない。一瞬、どこの貝塚で手に入れたのだろうと疑った。松本さんはいとも簡単に、高山村の山奥の洞窟で発見したと言い、そこはまだ雪が多いそうだから、雪解けを待って発見者に案内してもらいましょうと言い残し、こうもりを片手に飄然と帰って行かれた。私の心はおどった。骨鑑が発見された洞窟、深山の残雪の中で人知れず眠っている洞窟、あれこれ想像するにつけて、じっとしていられず永峯光一さんに連絡をとったりして踏査の日を待った。

松本さんと私の縁は古く、1968（昭和43）年の高山村坪井遺跡の調査以来のお付き合いである。赴任早々、高山村文化財専門委員にも委嘱されていた。私自身は前任の丸子実業高校時代、小県郡丸子町鳥羽山洞窟を三年かかりで発掘したが、両親の看病が急がれ、永峯さんに後のことを預けたまま、実家近くへ転勤したのであった。それなのに、懲りもせぬ洞窟のありかをたずねまわっていた。呪惑にしていただいた松本さんは洞窟にいたく関心を寄せられ、骨鑑が発見された洞窟は聞き流されることなく、私にも伝えられたのである。実に松本さんの御配慮がなかったら、以後の調査はもちろんのこと、湯沢洞窟の存在さえ知らずに過ぎていたであろう。洞窟発見の端緒となつたのは、松本利輔さんその人であった。

1970（昭和45）年6月8日、いよいよ踏査の日がきた。その日は絶好の晴天であった。役場前に一台の中型トラックが止まり、松本利輔教育長、財産区の事務局を預かる久保田久三総務課長、久保田裕司社会教育課主事、山崎正義林務技師、それに私を含めた総勢5人が乗り込んだ。一行を乗せたトラックは高山村の牧集落から福井原の開拓集落を過ぎ、樋沢川の渓谷に沿って新しく開かれた湯沢スーパー林道を約40

分ほど、ガタゴトと登って行った。未開通の手前で車を降り、小串鉱山へ通じる山道をたどつたが、あたりはすでに1,000mを越す深山であった。途中、川の濁みに温泉が湧く所があり、硫黄の臭いが立ち込めていた。どうやらここが通称「湯倉」の語源になった所らしい。周囲の植生はダケカンバに変わり、亜硫酸ガスで立枯れた木々や、山肌に露頭している奇岩、あるいは渓谷を埋めつくす霧が、荒涼とした深山の趣をいやがうえにも



写真1 踏査の一行（昭和45年）

かき立てていた。その一方で、前方には毛無峰がならかなスロープを描き、それに連なって屹立する破風岳の端正な稜線が、見事なコントラストをなして青空に映えたり、何ともいえない山の美しさを見せていた。人間くさを感じたのは尾根に設けられた鉄索で、硫黄を運ぶ滑車の音だけが山の静けさの中に吸い込まれていった。

谷を上りつめるあたりまで来ると、遠くから私たちの姿を見つけたのであろう。小串鉱山技



写真2 調査前の洞窟

師の市川仁夫さんと安保金三郎さんが岩山から足早に降りて来た。気づかなかったが、洞窟は私たちが立っている対岸のすぐ先にひっそりと草木に覆っていた。市川さんは洞窟を発見したいきさつについて話してくれたが、発見の動機はもとをただせば石油公害に由来していた。それは昭和40年代になって、石油精製で排出された亜硫酸ガスが四日市ぜんそくなどを引き起こし、低廉な硫黄の再生産技術が開発されるようになった。長年硫黄の採掘を続けてきた小串鉱山にとっては死活問題である。打開策として目をつけたのが湯倉洞窟の西方にある岩山であった。この岩山は珪石を多く含み、航空機のガラス原料に有望であると言う。早速ボーリングが始まり、ダイナマイトの音が山々に響いた。ここで採掘した珪石は橋沢川で洗浄し、搬出路は新たに開通する湯沢林道に接続させ、トラックで運び出す計画だと言う。背丈ほどもある熊笹を刈り払いながら、搬出路の測量が始まった。測量を進めて来た一行が洞窟の直下へさしかかった時、市川さんが叫んだ。

「オーイ、あんな所にはら穴があるぞ！ 忠治の隠し金が埋まっているかもしれないぞ。」忠治の隠し金、それは上州の国定忠治が信州の善光寺へ逃げて来たとき持っていたという大金のことである。毛無峰への道は上州の大前で大坂道と分岐する間道であった。大坂道ともよばれ、信州側の麓には明治初年頃まで開所跡の竹やらいが残っていたと言う。明治時代以降、高井鉱山や小串鉱山の操業で、硫黄を運ぶ道に変わったが、国定忠治がこの抜け道を通ったという話はかなりの説得力を持っていた。作業に従事していた太田正夫・小林秋栄・千木良玉雄の皆さんと市川さんの4人はばらばらと洞窟へ登って行った。

骨鑑を発見した千木良さんは、忠治の隠し金などは始めから信じなかったが、洞窟へ入ると一面に懸骨

〔洞窟発見の貢献者 松本利輔さん〕 (1905~1992) 高山村に生まれる。須坂農業高校高井分校主任を最後に教職を退き、村教育委員に任す。翌昭和34年から16年間、高山村教育長をつとめ、坪井遺跡の学術調査や村内遺跡の分布調査を実施する。また、高山村文化財保護条例の制定や高山村史談会を設立し、「高山村文化財要覧」の刊行など、文化財保護に尽力した。

昭和46年から始めた湯倉洞窟の学術調査は長期にわたることになったが、村単独の文化財事業として全国から注目されてきた。全国市町村教育長表彰等多くの表彰を受けたが、飘々とした人柄で、村民からの信頼は厚かった。



写真3 松本利輔さん

や土器片が散乱していたので、小林さんと茶碗や土器のかけらを採集し、家に持ち帰った。骨鐵は洞窟の岩棚に置かれていたものである。遺物はしばらく家で保管していたが、長男の千木良文司君が高山中学校へ持つて行き、先生に大事なものだから大切に保管しておきなさいといわれ、また持ち帰っていた。その後、市川技師が借りにきて、山崎林務技師に渡され、松本教育長に届けられたのである。湯倉洞窟の発見は石油公害と国定忠治が動機になっていた。

この踏査でシャベルの幅で深さ30cmほど試掘してみた。炉灰跡に近かったためか、落石らしいもののがなく、遺物もそれほど多くなかった。漆黒の堆積土は火山灰と思っていたほどである。これがすべて灰と炭とであろうとは。これ以上壊すのもはばかられ、最下層まで確認しなかったが、かなり有望な洞窟に違いないと直感した。最下層までの堆積土が2m以上もあり、落石がほとんどない洞窟であることを知ったのは、9次調査の時であった。

踏査から帰って、村役場の一室で今後のことについて打合せが行われた。今になって思えば、所有者の財産区事務局を預かる久保田総務課長が同席していたので、どうも松本教育長は初めから発掘調査を実施する考えていたのではないか。私は鳥羽山洞窟の経験から、発掘調査には3年以上の期間が必要であろうと述べた。まさか、これほど長期になろうとは予測できなかった。また、湯沢林道の開通に伴い硅石の搬出や、心ない人たちに洞窟が荒らされないとといった意見も出され、この際、高山村の事業として学術調査を実施し、湯倉洞窟の解明に踏み切ろうという結論に達した。

かなり荒っぽい計画であったが、誰も異論をはさむ者はいなかった。そして、発掘調査は翌年の1971(昭和46)年夏と決定され、調査団の編成は私に一任されることになった。皮肉なことに、調査の開始と前後して、小串硫黄鉱山は閉山となり、硅石の搬出計画は中止になった。発見者の1人である市川技師にはあれから一度も出合っていない。

2 発掘調査の経過

経過の概要

1971(昭和46)年8月、湯倉洞窟の発掘調査が始まった。当初の計画では発掘調査を3年とし、その後の1年は整理作業を行う方針であった。しかし、3次調査が終わっても、数10cm掘り下げただけで、とう

てい計画どおりにいかないことを思い知らされた。何しろ遺物包含層は底なしのような厚さで、落石や無遺物の間層は全くなく、遺物がぎっしり詰まった状態であったから、調査は運々として捲らなかった。最下層までの堆積状態を確認したくても、次々と出土する貴重な遺物を犠牲にするわけにはいかない。いつ調査が完了するか見通しがたたなかつたのも無理のことであった。調査の行程は第1表のとおりである。



写真4 洞窟前方の景観

第1表 調査行程

調査	調査期間	教育長	事務担当者	調査員数
1次	1971(昭和46)年8月1日～8月8日(8日間)	松本利輔	久保田裕司	13名
2次	1972(昭和47)年7月31日～8月7日(8日間)	松本利輔	久保田裕司	17名
3次	1973(昭和48)年8月1日～8月7日(7日間)	松本利輔	渡辺和雄	14名
4次	1975(昭和50)年7月26日～8月4日(10日間)	片桐喜一	渡辺和雄	17名
5次	1976(昭和51)年8月5日～8月12日(8日間)	片桐喜一	渡辺和雄	13名
6次	1978(昭和53)年7月29日～8月7日(10日間)	片桐喜一	渡辺和雄	17名
7次	1980(昭和55)年8月2日～8月11日(10日間)	田中政義	渡辺和雄	19名
8次	1981(昭和56)年7月22日～7月31日(10日間)	西原正	官崎今朝夫	18名
9次	1983(昭和58)年7月25日～8月6日(13日間)	西原正	井ノ浦公一	18名
10次	1984(昭和59)年7月26日～8月6日(12日間)	西原正	井ノ浦公一	17名
11次	1985(昭和60)年7月29日～8月6日(7日間)	西原正	島田英昭	24名
12次	1986(昭和61)年7月26日～8月11日(17日間)	山岸嘉雄	島田英昭	16名
13次	1987(昭和62)年7月25日～8月9日(16日間)	山岸嘉雄	島田英昭	22名
14次	1995(平成7)年7月26日～8月8日(14日間)	森山忠三 菅原政雄・黒岩浩 小林伸子	菅原政雄・黒岩浩 小林伸子	34名

結果的には14次という長期にわたる発掘調査になってしまったが、高山村当局は最後まで調査を放棄しなかった。その熱意に心から敬意を表したい。むろん、調査費は開発に伴う巨額な費用とは較べようもないが、長期にわたり、総額にすればかなりの支出である。一村の単独事業として、これだけの学術調査を実施する市町村は多くない。

村をあげての大事業は、1次～5次調査が黒岩一実村長時代、6次～13次調査が久保田常吉村長時代、14次調査が小出清村長時代にある。なお、最後の14次調査前に7年間もの中断があった。個人的な嫌がらせによるもので、事務局を預かっていた高山教育委員会の苦衷は察して余りある。

なお、整理作業は昭和49年、52年、56年、63年～平成6年に行われたが、通年の作業ができず、応急的な整理に終始した。通年の専從調査員は1995(平成7)年の最終発掘を契機に採用された。遺物の水洗、注記、接合、分類、図版作成など、膨大な資料の整理に5年を要した。小出・黒岩静男村長時代である。

発掘調査団

湯倉洞窟の調査団は次のとおりである(五十音順、敬称は略す)。

团长・水峯光一、副团长・関孝一、調査主任・中島庄一(1～3次)・大原正義(4～14次)

調査参加者

青木和明・浅野光洋・新井孝雄・有賀功治・安斎正人・石井明憲・石川秀彦・石渡洋行・市川隆之・伊藤慎二・伊藤良枝・今井正文・岩野見司・上松寿明・上野平曜輝・牛沢百合子・宇田敦司・宇田勝宏・大沢昌弘・太田文雄・大谷猛・岡穂稔・岡崎友子・小笠原永隆・小川岳人・小倉和重・小高幸男・笠井洋裕・柏谷崇・加藤里美・加藤直子・金井正三・金井晴美・金子直行・金子浩昌・加茂敦志・河内公夫・木場幸康・桐原健・桐村修司・小林青樹・倉石和彦・黒岩隆・黒岩長造・古池晋禄・小池久男・小泉克夫・小林重義・小林之美・小林理恵・小松学・近藤尚義・齊藤静江・齊藤正昭・酒井秀明・設樂博己・実川順一・柴本芳一・清水春樹・下条幸恵・下津弘・杉山真理・助川朋広・鈴木一郎・芹沢清八・芹沢廣衛・高橋桂・高橋真美・高谷英一・滝沢敬一・竹本実希子・田坂美代子・辰野万里子・田中和之・田中英樹・谷口康浩・田村道男・千浦美智子・塚田淳・塚脇美緒・角田真也・粒良紀夫・外川正子・富岡

清志・富田 武・中島 宏・中野拓大・中野良一・中村亨史・中村 大・中村祥子・中村百合子・中山清隆・西沢隆治・新田康則・野沢則幸・畠田佳代子・八町利佳子・中 隆之・早川 泉・樋泉岳二・樋口喜重子・平岡千恵・平川邦子・広瀬昭弘・藤田国良・福田明美・福田依子・星 龍象・本田達哉・丸山敬一郎・三門 準・水野裕美子・宮城孝之・宮崎 博・宮下健司・村上伸二・村松 篤・望月静雄・森 尚登・森本岩太郎・森本智子・山内利秋・山岸 厚・山岸和人・山田貴久・山本典幸・吉川金利・吉田正亥孝・綿田弘実

調査員は須坂高校郷土部、須坂園芸高校地歴部、須坂東高校社会科クラブ、日本大学・明治大学・立正大学・国学院大学の学生や卒業生の混成で編成され、数年継続して参加する者が多かった。

太田文雄・小林重義・広瀬昭弘・望月静雄・綿田弘実の皆さんは常任調査員の役割をはたしてくれた。また、故森本岩太郎・金子浩昌・故千浦美智子の皆さんには、自然遺物について特別に参画いただき、御指導をお願いした。

調査団は村内の民宿で合宿して調査にあたった。調査の長期化に伴い期間を大幅に延長した年もあった。経験上、洞窟の調査は体力の消耗が激しく、調査期間はせいぜい7日から10日くらいが限度である。期間中に休日を設けたり、調査員を前半と後半に分けてみたが、従う者はなく、全期間休みなしの奮闘ぶりであった。

村教育委員会は発掘調査に何かと気配りをしてくれた。ことに事務担当者は、洞窟と宿舎間の送迎バスを運転したり、昼食に味噌汁やバーベキューのサービスをしたり、山田温泉の露天風呂へ疲れを癒しに連れて行ったり、調査の最終日には心づくしの慰労会を開いたり、大変だったと思う。気配りの趣向は担当者によって様々だが、高山村の涼しい夏とともに、湯倉洞窟調査の忘がたい魅力になっていた。

発掘調査の覚え

調査の事務担当者に、当時の思い出や調査の経過について寄稿していただいた。踏査から2次調査までは久保田裕司さん、3次から7次調査までは渡辺和雄さん、8次調査は宮崎今朝夫さん、9・10次調査は井ノ浦公一さん、11次から13次調査までは島田英昭さん、14次調査から整理作業までは小林伸子さんにお願いした。それぞれに調査団と苦労を共にした語り草には、当事者でなければ語れない湯倉洞窟調査の歴史がある。

踏査から2次調査(久保田裕司)

「毛無峠から下った所に洞窟があって、現地を調査するので一緒に行けや」といわれ、運転手兼写真係として参加した。そこは山深く、急峻な山がそびえ、こんな所に人が住んでいたなんて信じられなかった。探検隊の気分になって、湯倉洞窟と初めて対面した。

翌昭和46年の1次調査は、湯沢林道から洞窟までの道を切り拓くことから始まった。地形に



写真5 洞窟テラス

沿って手さぐりで開けたので、勾配の多い曲がりくねった道になった。この道は最後まで調査にならぬものになった。通路の次は洞窟前の雑木を伐採した。続いて東側にある側洞窟と、本洞窟の西側に隣接する岩陰を試掘したが、側洞窟では遺物が出土しなかった。岩陰の方は灰層と土師器片が若干出土した。また洞窟前にある大落盤の下でも遺物が採集された。落盤と共に遺物が崩落したらしい。本洞窟のグリットが設定され、発掘が始まった。

私の主な仕事は、先生方を宿舎である民宿「宝荘」(山崎惣治郎)から現場まで送迎することだった。当時の教育委員会の職員は教育長を含めて4人だけだったので、発掘の手伝いはあまりできなかった。それでも毎日迎えに行き、その日の成果を見ることができた。現場にいると不思議なもので、洞窟の「いにしえ」に思いを巡らしていた。

あれから30年、私は再び教育委員会で湯倉洞窟の締めくりに関わることになった。不思議な縁で、感慨はひとしおである。発掘を始めた頃の松本教育長も久保田総務課長も、今は故人になってしまった。「湯倉洞窟の発掘は立派に完了しました。すばらしい事業をやり遂げました」と報告したいと思う。

3次から7次調査（渡辺和雄）

おそらく、調査に関わった担当者の中では私が一番長かったと思います。毎年来られる先生方とすかしり顔馴染みになり、湯倉友の会を結成しようと話していたものです。

洞窟の発掘は人数が限られ、同じ姿勢で行う細かな作業でした。何しろ遺物が多いですから、毎回数センチメートル掘るのがやっとでした。掘った土は下の谷川で洗うため、土嚢袋に入れて何度も担いで降りるのですが、足が棒のようになってしまい、一日の作業が終わる頃になると誰も腰が痛くなってきたのを思い出します。ここは下界と違ってあまり汗をかきません。川での土洗いもそうですが、洞窟の中は湿気が多く体が冷えます。そこで、体を温めるため、昼食時に味噌汁を作りました。男の味つけが大変好評で、重いガスボンベを里から運び上げ、時にはバーベキューもやりました。疲れても食欲は旺盛でした。

3・4次調査に先立って洞窟前の大落盤を除く必要がありました。岩はカルメラ状の溶岩で人力では割れないため、地元の黒岩浅人さんに頼んで小ダイナマイトで破碎しました（3次調査では火薬50kg、4次調査では火薬10kgを使用）。爆破のたびに岩の陰に隠れましたが、洞窟前を遮っていた岩が取り除かれると、洞窟の中が急に明るくなり、今までの霧囲気とだいぶ変わってしまいました。洞窟の入口表土から鉄鋼が出土したのは4次調査の時でした。

5次調査の時でしたが、終日雨で、気温が急降下し、側洞窟で焚き火をしたことがあります。はからずも山の厳しさを体験しました。洞窟からは相変わらず多くの獣骨が出土していましたが、カモシカの子どもの骨もあり、調査団の話題になっていました。村では山田温泉の近くで毎年カモシカを観る会が催されていますが、この年、初めてカモシカが洞窟の対岸に姿をみせ



写真6 テラスの発掘

ました。歯骨を担当されている金子先生に頼まれ、以前埋めたカモシカの骨を掘り出しに行ったこともありました。また、文化庁記念物課の小林達雄調査官が視察に来て、公民館で講演していただきこともありました。

村では以前から藤沢潔（明治初年の磁器窯）の調査が懸案になっていました。関先生の手があかず延期してきましたが、7次調査の時、小林重義さんが中心になり、村松・高谷・中野・宮城・下津の皆さん協力で調査してもらうことになりました。皆さんからは何のために来たかわからないとお叱りを受けましたが、これも皆さんと親しくなれたおかげだと感謝しています。

第8次調査（宮崎今朝夫）

発掘に関わったのは四半世紀も昔のことですが、調査にあられた方々の顔が浮かんてきて、本当に懐かしく想い出されます。思えば、発掘に着手して三十有余年を経て、報告書が刊行されると聞き、調査に加わった一員として、先生方のご苦心に心から感謝申しあげます。

私が担当したことでまず想い起すのは、発掘した土を洗う水を確保することでした。洞窟の西側にある沢の水を、上流からビニールホースで1km以上も引いてくるのですが、大変な作業でした。水量はあまり多くなかったけれど、谷川まで運んで水洗する重労働が無くなり、作業が捗ったことは何よりでした。そのホースも、翌年の台風による土砂崩れで流失してしまいました。

発掘で一番感動したのは、7,000年も前の埋葬人骨が発見されたことです。遺物包含層をみきわめるため、洞窟の中央に幅の狭いトレンチを設けて試掘した時、縄文早期層から出土したとうかがっています。その日、私は発掘現場にいたのですが、大原先生の手により頭部の一部が見えてきた時の感動は昨日のことのように思われます。人頭骨は大切に埋め、次回の調査で全体をはっきりさせることになりました。

9・10次調査（井ノ浦公一）

私が担当した昭和58・59年頃は文化財事業の花盛りで、県営は場整備事業に伴う四ツ屋遺跡群の発掘調査、高山村歴史民俗資料館の建設、村内遺跡詳細分布調査、湯倉洞窟調査報告書（『湯倉洞窟Ⅰ』昭和59年3月刊行）等々、学芸員の綿田弘実さんにすいぶん協力してもらった。

湯倉洞窟の9次調査では、前回確認された人骨の発掘が行われた。開始して数日後の夕刻であったが、ほぼ完全な埋葬人骨が1体姿を現した。約7,000年前の熟年女性と推定され、一般公開では報道各社の取材が相次ぎ、全国にも報道された。人骨の鑑定と復原レプリカの作製は聖マリアンナ医科大学の森本岩太郎教授が好意的に引き受けた下さった。人骨を取り上げると、その下層から縄文草創期の遺物が発見され、ようやく最下層の基盤まで確認することができた。

昭和59年9月1日には高山村歴史民俗資料館が開館したが、このレプリカはメイン展示になっている。あれからもう16年になる。調査の完了と共に、歴史民俗資料館の湯倉洞窟展示コーナーがさらに充実される日も近いだろう。



写真7 洞窟内の発掘

11次から13次調査（島田英昭）

3年間、事務を担当しましたが、林道から洞窟への道は毎年荒れてしまうので、調査が始まる前に笹を刈り払い、沢に懸けた橋を修復しておきます。調査団の宿舎は3次調査の時から「民宿黒岩荘」（黒岩伊三郎）でしたが、送迎バスは先生方が運転できるようになり、ずいぶん助かりました。また、洞窟から掘り出した土を洗う作業は手間がかかり苦労してきましたが、大原先生が滑車付きロープで土糞袋を湯沢の谷へ降ろすことを考案し、作業の効率が倍増しました。調査は順調に進み、洞窟の半分は基盤まで達しました。

特に思い出に残っているのは、森本先生の御好意で人骨の保存処理が終了したというので、神奈川県にある聖マリアンナ医科大学病院へ人骨を受け取りに行なったことです。遺物とはいえ人骨ですからあまり気持ちのよいものではありません。現在、村できちんと収蔵保管していますが、レプリカがあるので本物は大学へ寄贈したらどうかという意見もあったくらいです。最近、歴史民俗資料館へ行った時、整理作業を拝見したのですが、こんなに遺物が多かったのかと改めて驚きました。

14次調査から整理作業（小林伸子）

私は結婚を機に長野県へきて、長野県埋蔵文化財センター中野調査事務所にしばらく勤めていた。ある日、所長の関先生から湯倉洞窟遺跡の整理を頼まれ、即答で「ハイ」といっていた。湯倉洞窟がどれほど重要な遺跡であるかすぐ理解できたからだ。調査には各分野の著名な方々が関わっておられた。また、発掘のスナップ写真を見ると、今は立派な肩書きをもつ調査員がまだ少年のような面影を残しており、考古学の道を歩み続けてきた今の姿と重なってくる。

ところで、14次調査は2週間という期間が設定され、主として国学院大学の学生が大挙して応援にかけてくれた。縄文革創期の良好な資料が続出し、最終を飾るのにふさわしいものになった。

また、この年から、通年の専從調査員がおかれた。整理作業が大幅に進んだことはいうまでもない。今まででは発掘に全力投入され、応急的な整理だけであった。そのため、整理作業は出土遺物のホコリを取り除くことから始めたが、二人で半年もかかってしまった。統いて出土遺物のすべてを水洗、乾燥、注記し、台帳作りが行われた。図版の作成も軌道にのってきた。整理調査員は前からの尾沢みづ子さんに加えて、柳沢静子さんと上野美和子さんが増員された。皆さんはよく頑張った。報告書の刊行を目前にして、今は重責をはたした安堵感で一杯であろう。報告書が刊行された後、高山村が誇る湯倉洞窟の膨大な資料をどのように活用していくらよいか、今後の大きな課題であろう。

(関 孝一)

第2節 洞窟の環境

1 自然環境

地 形

今は途絶えている「大前道」は長野県高山村から群馬県嬬恋村へ通じていた。長野県側からの道筋は樋沢川をさかのぼり、洞窟前の湯沢から毛無峠を越え、群馬県側の万座川に沿って大前へ下った。毛無峠は標高1,823m、御飯岳(2,160m)と破風岳(1,999m)の鞍部にある。樹木のない峠の稜線はなだらかな曲線をえがき、端正に屹立する破風岳の山頂へと続いている。美しい姿の反面、樋沢川の渓谷から絶えず霧や風が吹きあげ、荒々しい峠でもある。峠からの眺望は実にすばらしい。荒ぶる毛無峠の眼下には昭和46年に閉山した小串硫黄鉱山が群馬県側に望まれ、その先約15kmの大前への旧道筋は黒々とした樹林に埋没してしまっている。

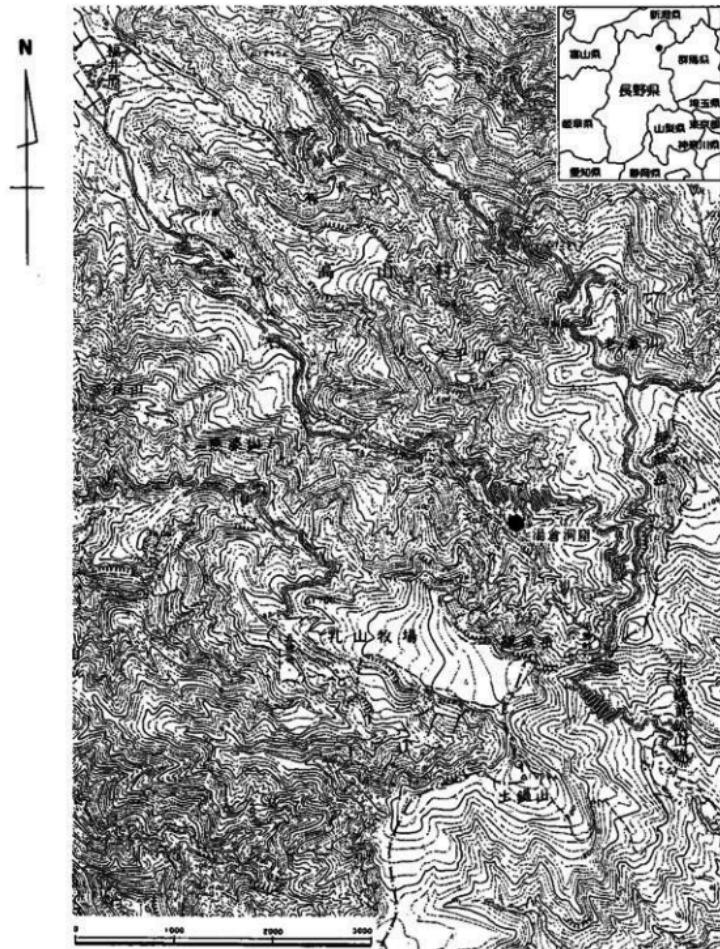
破風岳の頂上に立つとさらに壯觀である。破風岳から足元の湯倉洞窟を展望すると、そこはかつての大爆裂火口跡で、洞窟を開む急峻な岩壁は火口壁であった。特に南側の絶壁は破風岳が爆裂で半分吹き飛ばされてできたものである。湯倉洞窟は北側の火口壁に開口しているが、ここは御飯岳溶岩の押し出しにより、巨岩が部分的に露頭しているに過ぎない。往時の激しい噴気活動は火口跡の所々に見られる赤褐色や灰黄色の珪化した岩石にも見られる。



写真8 毛無峠と破風岳

荒々しい火口跡に対して、周囲の景観は2,000m級の山なみと、吾妻高原や破風高原などのなだらかな溶岩台地が広がっている。破風岳から見た山なみは、北方には御前岳、黒湯山(2,007m)、万座山(1,994m)、本白根山(2,165m)、白根山(2,138m)が、南方には土鍋山(1,999m)、浦倉山(2,091m)、四阿山(2,333m)、浅間山(2,542m)など、那須火山帯に属す山々が連なっている。しかし、2,000m級といっても、ここからの眺望は尾根で結ばれた脊梁のようにみえ、聳える山頂も所々に突出していると表現した方がよいかもしれない。

脊梁をなす山脈を分水嶺として、山々から流れでる沢はあたかも肋骨のように幾筋もの谷を刻んでいる。



第1図 湯倉洞窟付近地図（5万分の1）—国土地理院地図（須坂）使用—



写真9 洞窟前方の岩山

下草にクマザサ（チシマザサ）が覆うという景観が見られる。ダケカンバやオオシラビソは標高1,300m～1,600mに見られる樹木で、植生帯と気温の相関を数量的に表す温量指数では、亜寒帯（亜高山帯）の針葉樹林帯に属している。ブナ、ミズナラ等の冷温帯（山地帯）樹林より標高の高い植物相である。

しかし、この地方の植物相は火山噴火によって乱れていると言われ、一般的な傾向としては北方系の植物によって占められている。ミヤマハンノキ、オオシラビソ、オオカメノキ、ノリウツギ、シャクナゲ、ドウダンツツジ、ガンコウラン、コケモモ、コケ類等、種類はきわめて多い。オオカメノキ、ノリウツギ、コケ類などはカモシカが好んで食べる植物である。

動物については、湯倉洞窟の出土獸骨をみれば一目瞭然である。調査中に出会った動物もかなり多かった。その主なものにカモシカがあげられる。第5次調査で初めて姿を現わし、9次調査では毎日といつても、対岸の岩場に現れた。宿舎との往復途上では、ニホンシカ、ニホンサル、ノウサギ、リス、キジに出会った。ニホンシカは積雪が50cm以上になると行動できないので、越冬移動する。イノシシ、タヌキ、クマはついぞ姿を見せなかつたが、帰り際に残飯を埋めておくと、翌朝は必ず振り散らされていた。タヌキの類ではないかと調査団では話題になつた。山中でクマに襲われたニュースはしばしば聞く。いずれにしても、これらの動物群は湯倉洞窟と深い関係をもつていた。また、松川水系は強酸性水の川であるが、洞窟西側の沢ではサンショウウオが確認され、湯倉洞窟からは魚骨が出土しているので、かつては魚の生息する川であった。

気候

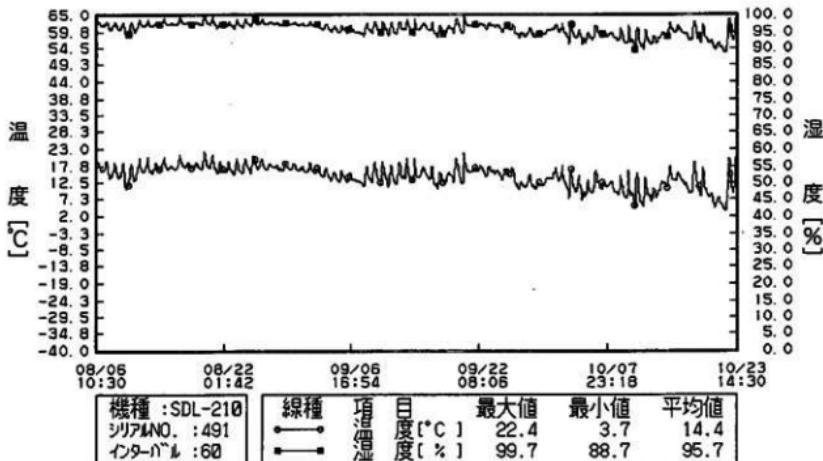
洞窟周辺の気候は亜寒帯多雨夏涼气候に属する。気温は高度100mを増すごとに0.5℃から0.6℃低くなるが、標高1,000m以上の山地に8℃の等温線が通っているので、標高1,500mの洞窟周辺では、年平均気温が8℃以下となる。気温の年較差や日較差はきわめて大きく、内陸性の特徴を示している。積雪は所によって1.5mを超すが、一般的には太平洋側と日本海側の中間型を示し、日本海側の気候がやや卓越している。

発掘調査は気候が安定している7月下旬から8月上旬に計画したが、調査中に気候が激変することもあった。突然の降雨で気温が急激に冷え込み、焚き火をして暖をとったこともあった。降雨がなくても、谷の霧は絶えず毛無峰へ吹きあげ、時には洞窟を包み込むこともあった。毛無峰を突き上げる風速に較べれ

毛無峰の麓から流れる湯沢も、爆裂火口跡に谷を刻み、西流して樋沢川の渓谷となり、松川と合流して須坂市北部に広大な扇状地を形成している。同じく須坂市南部の扇状地も、灰野川と米子川が合流した百々川や、宇原川と仙仁川が合流した鮎川によって形成されたものである。

植生と動物

洞窟周辺に見られる植物は、ツガ、シラカバ、ダケカンバ（ソウシカバ）などの樹木が目立ち、



第2図 湯倉洞窟内の気温・湿度

ば、南面する湯倉洞窟は風のあたらない場所であったといえる。

ちなみに、洞窟内の住環境を調べるために、気温と湿度の計測を行ってみた。計測は8月から10月の期間だけであるが、その結果は第2図のとおりである。室温は最大値が22.4℃、最小値は3.7℃、平均値で14.4℃になる。また、湿気は最大値が99.7%、最小値が88.7%で、平均値は95.7%となり、全般に湿度が高い。ただ、この数値は自然状態の場合で、実際には火を焚いているから、室温や湿気はもっと異なっていたに違いない。これは竪穴住居についても言えることである。実験では火を焚いた状態で、外気温と室温の差は約10℃あった。洞窟は竪穴住居ほど閉塞された状態ではなかったであろうが、いくら大火を焚いても火災の心配がなく、嚴冬期でも十分しのぐことができた筈である。

2 洞窟の状態

湯倉洞窟は毛無峠の西麓にあり、峠から直線距離にして約1.5km下った標高約1,500mの、湯沢の右岸に立地している。河床からの比高は約25m、河岸には段丘状の狭い平坦部があり、洞窟へ行くにはもう一段急な崖を登らなければならない。洞窟は溶結凝灰岩からなる岩壁の基部にあり、南西に向かって開口している。岩壁は東西約20m、高さ約7mにわたって露頭し、南面して弧状に連なっている。洞窟はその中央の東寄りに位置している。

調査前の洞窟の規模は間口約3.5m、奥行き約4m弱あり、高さは間口で約2.5m、奥部で約2m弱を測る。洞窟内の両壁は間口から3mほど平行し、急に収縮する形をとる。天井はドーム状をなし、入口に近い天井には焚き火の煙がしみついていた。床面は平坦で落盤がなく、一面に炭と灰が堆積していて、洞窟の奥まで利用できる状態であった。

洞窟内の面積は底線から計ると約14m²ある。栗島義明さんがまとめた主な洞窟の底面内面積は第2表のとおりである(第2回シンポジウム「洞穴遺跡の諸問題」千葉大学1998)。湯倉洞窟の居住空間は底線のやや外側にある入口閉塞の落盤まで延びるので、実際には約19m²(12畳)ほどになる。他の洞窟に較べ

第2表 洞窟の面積

道 路 名	面積m ²
長野県石小屋洞窟	10
長野県湯倉洞窟	12
新潟県小瀬ヶ沢洞窟	22
長野県柄原岩陰	24
長崎県福井洞窟	32
山形県火船岩洞窟	36
新潟県室谷洞窟	50
山形県日向洞窟	100
長崎県泉福寺洞窟	128
群馬県神庭洞窟	160

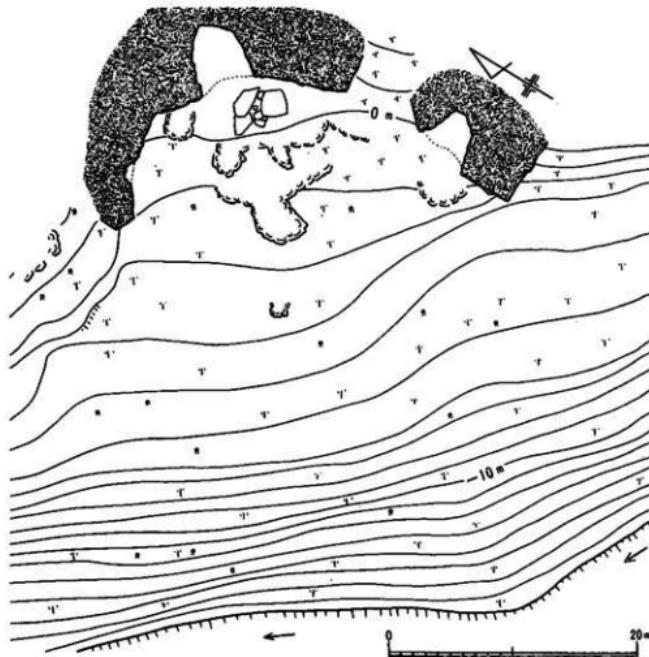
(栗島義明氏による)

ばこじんまりとした洞窟で、居住が可能な人数も5・6人といったところであろう。

洞窟の形状は地層が下部へ進むにつれ多少変化し、最下部では間口約5m、奥行き約5m、高さは間口で5・6m、奥部で4・5mを測る。また、洞窟内の西側、Z-4・A-3・A-4区では岩壁が抉られたように湾入し、側洞状態になっていた。

落盤は洞窟内では全くなかったが、洞窟の前には大小の落石が重なり、幅5mくらいの狭いテラスを形成していた。落石には洞窟の中央に立ちふさがるほどの巨岩があって、洞窟の内部を暗くしていたが、風雪を防ぐ役割もはたしていたと思われる。調査中に小ダイナマイトで爆破した巨岩である。洞窟が利用される以前の大落盤によるもので、テラスの基盤にもなっていた。その先にはテラスと寸断されたもう一つの巨岩が転落状態で傾斜面に止まっており、その下からは弥生土器が採集されている。洞窟の弥生土器が巨岩下に流入したらしい。

このような落盤の状態から、洞窟が利用される以前の当初はかなり奥行きの深い洞窟であったと推測される。その後、縄文後期頃に大きな落盤があったようで、間口東側に堆積した落石の下から縄文後期まで



第3図 湯倉洞窟全体測量図 (1/400)



写真10 東側の個洞窟



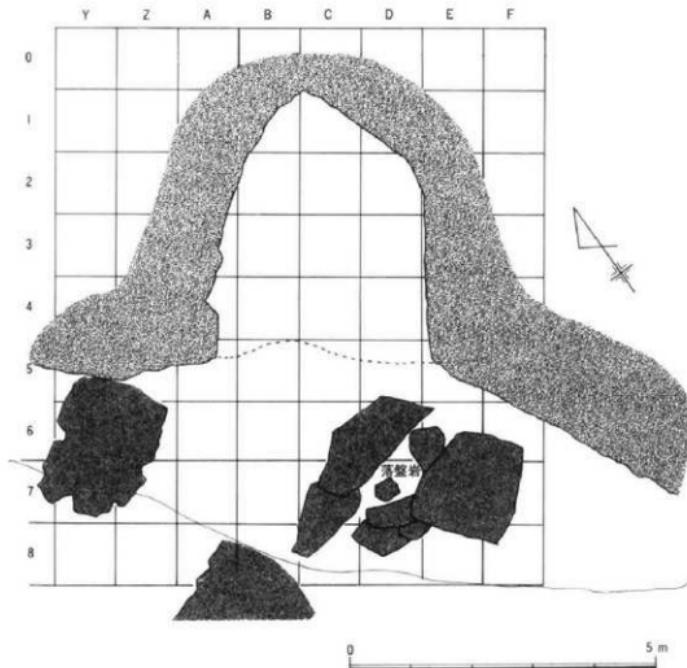
写真11 西側の小岩陰



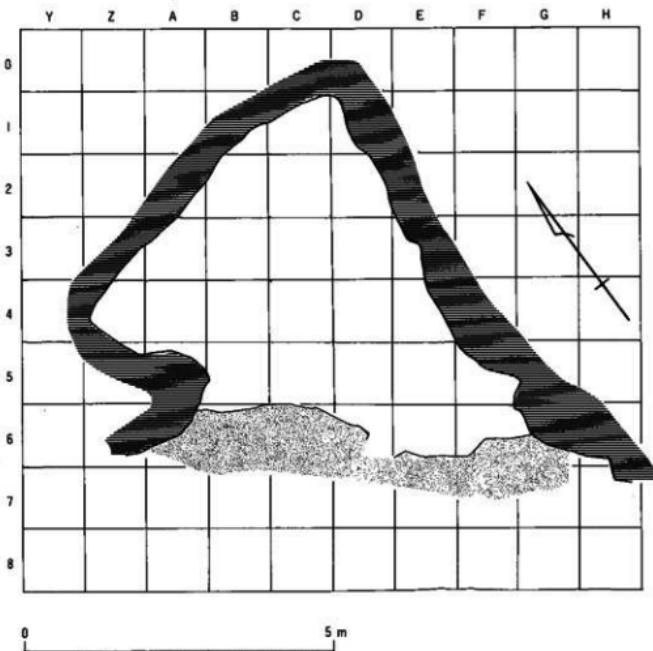
写真12 秋山マタギ洞窟 入口部の閉鎖 (ヤライ)

の遺物が検出されている。それ以降の遺物が認められていないことから、落盤は縄文後期の段階で起こったと言える。現在の洞窟底線はこの落盤以降であって、それ以前の底線は現在よりも1m以上前にせりだしていたと考えられる。

テラスは落石や岩屑の上に浅い腐植土が堆積している程度で、内耳土器の中世を除いてはそれほど利用された場所ではなかった。ただ注目される点は、テラス東側半分の底線近くに高さ



第4図 湯倉洞窟調査開始時平面図



第5図 湯倉洞窟底平面図

1.5mほどの3個の巨岩があり、間口を塞いでいたことである。この閉塞状態は縄文後期頃の落盤で自然にできたものであるが、テラスの巨岩と同じく風雪を防ぐ重要な機能をはたしていたものと思われる。

これと共に通する施設は広島県帝釈名越岩陰遺跡における縄文後期後半の柱穴列に見ることができる。岩陰の底線に沿って小屋かけした跡と推定される。また、下水内郡栄村秋山のマタギ山田長治さんによれば、狩猟で洞窟を利用する時、入口に茅かサワグルミの皮で扉（ヤライ）を作ったと言う。湯倉洞窟では東側の間口が落石で塞がれているため、西側のテラスが出入り口になっていた。鉄錐はこの通路の表土から出土している。中世の内耳土器もここに集中しており、特にテラスを利用していた形跡がある。

この主洞窟の東側にはやや離れた位置に側洞窟がある。下の段丘状平坦面よりや上方に、西に向かって開口している。間口約4m、奥行き約3mの良好な洞窟であるが、出土遺物は確認されなかった。また、主洞窟の西側低位置には小岩陰がある。主洞窟の通路の登り口にあたり、少量の土師器片が出土している。間口約1m、奥行き約1mの小規模なものであるが、主洞窟の落盤はここまで及んでいない。

3 周辺の洞窟・岩陰遺跡

長野・群馬の県境に近い山間部は洞窟・岩陰遺跡の密集地といつてよい。湯倉洞窟もその1つで、周辺の主要な洞窟・岩陰遺跡は第3表のとおりである。

第3表 湯倉洞窟周辺の主要な洞窟・岩陰遺跡

No	洞窟・岩陰名	所在地	遺跡の概要	調査年	文献
1	湯倉洞窟	上高井高山村	縄文草創期～現代、縄文人骨、鉄劍、獸骨	1971-95	1・6
2	石小屋洞窟	須坂市仁礼	縄文草創期～前・後・晚期、弥生中・後期、平安、獸骨	1963	2・6
3	菖蒲沢岩陰	同上	縄文早期～中期、弥生後期、平安、近代	1971	3
4	唐沢岩陰	小県郡真田町	縄文早・前・後・晚期、弥生中・後期、平安、装飾付鹿角、獸骨	1963	4・6
5	陣の岩岩陰	同上	縄文早期～後期、弥生後期、土師器、鉄劍、獸骨	1966	5・6
6	熊四郎洞窟	吾妻郡嬬恋村	弥生後期	1946・72	6
7	とっくり穴洞窟	同上	弥生終末～古墳前期、獸骨	1972	7・8
8	有笠山岩陰	吾妻郡中之条町	1号岩陰：弥生中期、住居状遺構、大型蛤刃石斧、獸骨 (2号洞窟は弥生中期の葬所跡)	1953	8・9
9	細尾岩陰	吾妻郡中之条町	縄文早・前期、石斧、石鎚、スクレイバー、獸骨	1973	9・10
10	石畑I岩陰	吾妻郡長野原町	縄文草創期～前期・後・晚期、獸骨	1978	8・9・11

参考文献

- 高山村教育委員会『湯倉洞窟I』1984・『湯倉洞窟II』1989
- 永峯光一『長野県石小屋洞穴』(『日本の洞穴遺跡』)1967
- 仁札跡刊行会『仁札跡』1973
- 永峯光一・樋口昇一『長野県唐沢岩陰』(『日本の洞穴遺跡』)1967
- 丸山敏一郎『長野県菅平陣の岩陰遺跡調査概報』(信濃III20-5)1968
- 長野県史刊行会『長野県史』考古資料編主要遺跡(北・東信)1982
- 嬬恋村誌編集委員会『嬬恋村誌』1977
- 群馬県『群馬県史』資料編 I 1988
- 上毛新聞社『群馬県遺跡大事典』1999
- 中之条町『中之条町誌』1976
- 長野原町教育委員会『石畑遺跡略報』1978

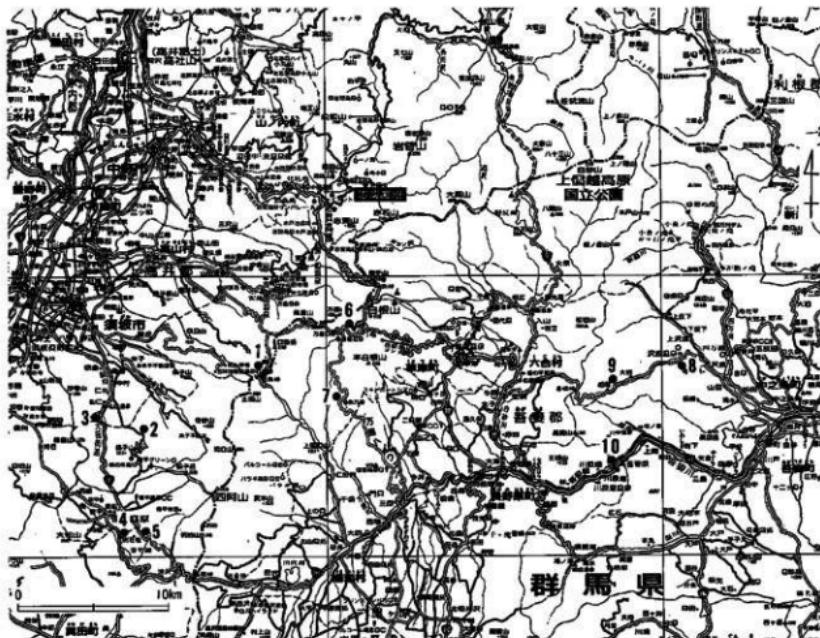
長野県内に所在する洞窟・岩陰遺跡は、中世以降の洞窟を除き、約50カ所を数える。このうち82%は東・北信地方、とりわけ佐久地域や菅平高原に集中している。分布が偏在しているのは洞窟ができやすい地質的要因によるが、自然洞窟が多い上水内郡戸隠村や鬼無里村など、北信地方西部には中世以降の螢場洞窟はあっても、縄文時代以来の洞窟遺跡は荷取洞窟(戸隠村)のみである。洞窟遺跡の立地的要因も分布の偏在に係わっていたと思われる。

洞窟・岩陰遺跡は居住跡と葬所跡に大別できる。柄原岩陰(南佐久郡北相木村)や湯倉洞窟は住居に利された代表例であり、葬所跡では鳥羽山洞窟(小県郡丸子町)があげられる。湯倉洞窟の周辺に所在する居住跡の洞窟は、長野県では特に菅平高原に集中し、約15カ所を数える。このうち発掘調査により生活の様子が明らかな洞窟は、石小屋洞窟、唐沢岩陰、陣の岩岩陰などである。

石小屋洞窟は菅平高原の北側、標高920mの宇原川左岸に立地する。湯倉洞窟からは谷を4つ隔て、直線距離にして約10kmの所にある。縄文草創期～晩期土器、弥生中・後期土器、土師器、石鎌、石匙、利片石器、棹刃状石器、凹石、磨石、獸骨類、鳥骨、貝類などが出土している。石小屋洞窟を特徴づける遺物は微隆起線文土器を始めとする縄文草創期の遺物であるが、群馬県岩櫃山岩陰遺跡を模式とする弥生中期の岩櫃山式類似土器も含まれていることは注目される。

唐沢岩陰は菅平高原の南側、標高1,240mの唐沢池左岸に立地する。湯倉洞窟からは直線距離にして約15kmの所にある。縄文早・前・後・晩期土器、弥生中・後期土器、平安時代土器、石鎌、磨製石鎌、石錐、石匙、スクレイバー、石斧状石器、磨石、礫器、菱形付鹿角、垂飾、骨匕、鎌柄、牙鑓、角鑓、獸骨類、貝類、鳥類などが出土している。縄文草創期は未確認である。唐沢岩陰を特徴づけるものは縄文後・晩期から弥生後期にかけての狩猟であろう。多量の獸骨類にはシカ、イノシシ、クマを主体に13匹分のサルも発見されている。農耕社会における狩猟の在り方に問題を提起した遺跡である。

陣の岩岩陰は唐沢岩陰の東方、約2.7kmの根子岳の裾野にあって、標高1,400mの中之沢とウラナシ沢の中間に立地する。縄文早期～後期土器、弥生後期土器、土師器、石鎌、スクレイバー、磨製石斧、石皿、磨石、骨角器、イモガイ製垂飾、獸骨類、貝、クルミ、銅鏡などが出土している。陣の岩岩陰を特徴づけるものとして弥生後期の銅鏡は特筆されるが、他に数個体分の縄文中期後半土器や石皿がある。石小屋洞



第6図 湯倉洞窟周辺の主要な洞窟・岩陰遺跡一昭文社分県地図使用一

- 1 湯倉洞窟 2 石小屋洞窟 3 莫瀬澤岩陰 4 唐沢岩陰 5 陣の岩岩陰 6 熊四郎洞窟
- 7 とっくり穴洞窟 8 有笠山1号岩陰 9 細尾岩陰 10 石畠工岩陰

窟や唐沢岩陰には出土例がなく、洞窟遺跡の常態と異なっているといえる。

湯倉洞窟から南方の菅平洞窟群までの間は、他に未発見の洞窟が存在する可能性もあるが、現状からすれば、やや離れ過ぎている觀がある。それでは湯倉洞窟以北の長野・新潟県境地方はどうかといえば、自然洞窟はかなりあるが、遺跡はほとんど発見されていない。調査された竜沢第3洞窟（下水内郡栄村）は昭和52年の冬まで使用された秋山マタギの洞窟である。縄文時代までさかのばる洞窟は発見されていない。北信西部の洞窟と同じく、洞窟遺跡の立地的要因が関係しているのかも知れない。

一方、湯倉洞窟の西方は群馬県吾妻郡の広大な高原地帯である。「日本の洞穴遺跡地名表」（麻生優『日本における洞穴遺跡の構造論的研究』1998）では吾妻郡内の洞窟・岩陰が37カ所記載されている。この数は群馬県全体の65%にあたる。

湯倉洞窟の調査員で群馬県在住の巾隆之さんに照会したところ、確認調査があまり進んでいないようで、内容の不明なものが多い。文献等でわかる洞窟・岩陰遺跡は第3表のとおりであるが、岩櫃山岩陰群（鷹ノ巣岩陰・エジ穴洞窟・岩櫃山岩陰・幕岩岩陰）のような葬所跡の遺跡は除いてある。弥生中期を中心とする二次葬洞窟がこの地域で盛んに展開していたことも、きわめて興味深いことである。巾さんの伝えるところによると、最近、吾妻町大戸地区で石造文化財が調査されたが、発見された91体の観音像はほとんど洞窟や岩陰に安置されていたと言う。その中には遺跡として有望なものもあるらしい。また、嬬恋村では毛無峠に通ずる道の調査が行われたが、道筋にはかなりの岩陰があると聞いていると言う。とすれば、吾妻郡内には37カ所どころか、それより大幅に上回る数の洞窟・岩陰が所在すると予想される。湯倉洞窟は峠をはさんでいるが、あるいはこの吾妻洞窟群に属すのではなかろうか。

（関 孝一）

第2章

遺構と遺物の出土状態

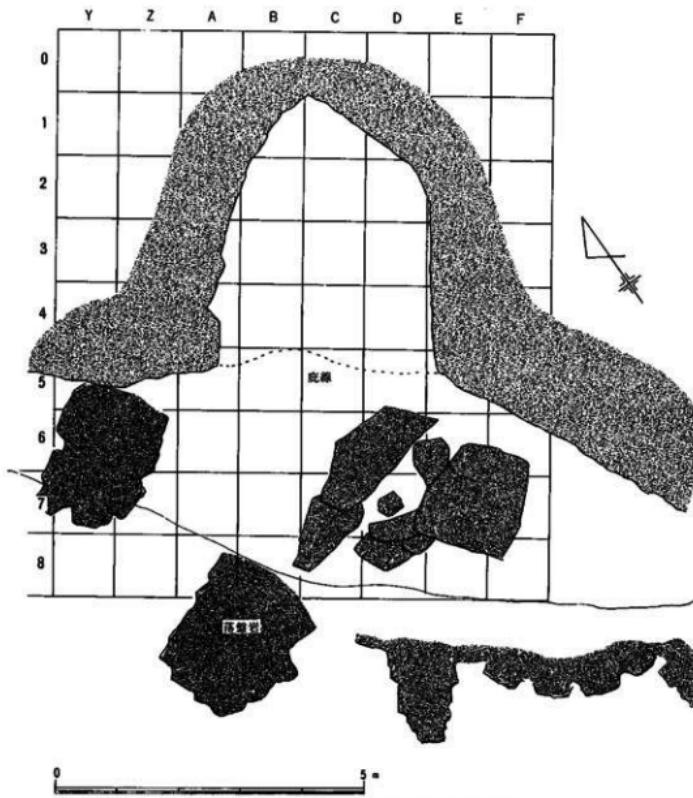


棒状角器の出土状況

第1節 調査方法

発掘調査区は洞窟内とテラスにかけて1m四方の方眼に区分し、西側からA・B・C・D・E・F、奥壁から1・2・3・4・5・6・7・8とし、グリット名をA-1区、B-2区というように呼ぶことにした。また、調査の進展に伴い、Aより西側へ調査範囲が拡大したため、この部分をZ・Y・Xとし、奥壁側への拡大部分を0とした。したがって、洞窟の平面は調査の進行に伴い、例えばC-0区が新設されたり、A列・E列の拡大やD-1区の消滅などがあり、各時期により若干変わっている。しかし、洞窟の居住空間のうえでは基本的に大きな変化はなく、その相似形といった程度である。

層序の把握は、明瞭な識別層がないため、洞窟中央の灰層と黒色土層の互層を基準にしてきた。この互層は、各時期を通じて炉が存在したC-2、C-3、D-2、D-3各区を中心に堆積しており、洞窟の



第7図 潟倉洞窟平面図及び発掘区設定図 (1/80)

壁際ではほとんど確認されず、黒色土のみであった。灰層は最下層まで10層を数えるが、この基準層の厚さとひろがりを手がかりにして、洞窟の壁際へ発掘をひろげていくという方法をとった。もちろん、層位に属す土器は絶えず層位確認の補助的な手がかりになっている。

この方法をとり入れたのは4次調査からであって、1次調査から3次調査までは洞窟中央に十文字のセクション帯を残し、これを詳細に検討する方法をとっていた。しかし、幅30cmのセクション帯は、狭い洞窟内での灰層や遺物のひろがりを把握するのに障害になるため、4次調査以降は層のひろがりを面で把握し、上下のレベルをとるという方法に変えたのである。

8次調査の時、今後の調査計画を策定するため、C-2区とC-3区の東隅を20cmの幅で掘り下げたが、C-3区の縄文早期層で思いかけない人頭骨を確認した。このため、9次調査では人骨の保存を考慮し、C-3区のみ深く掘り下げ、人骨をとりあげるとともに、さらに最下層の縄文草創期をも確認した。この結果、洞窟内には落盤層も無遺物層も存在せず、灰と炭ばかりの堆積土は最下層まで実に約2.5mもあることがわかった。

遺物のとりあげ方は、1次・2次調査においては主要な遺物を実測してとりあげ、多くはグリット単位で層別にとりあげていた。3次調査以降は洞窟前面の落盤を小形ダイナマイトで除去したため、洞窟全体に陽光が入るようになり、土器・石器・骨角器については縮尺20分の1の出土状況図を作成して取り上げることにした。また、大量の獸骨等は大形破片や歯牙等で種別が可能と思われるものは図化し、微細な資料はグリット単位で層別に取り上げることにした。

排土については3次調査以降、すべて水洗することにした。洞窟内の薄暗さに加えて、炭と灰だけの土は漆黒色で湿気を帯びているため、かなり注意深く発掘しても遺物を見落としてしまうのである。水洗にはボリガルを用いたが、検出された遺物は予想外に多かった。特に黒曜石製の石器などは発掘数と同数に近い数が見出された。他に魚骨や小形獸骨のように、発掘ではなかなか見つけにくい資料も検出されている。洞窟内では石器製作が行われており、石器の剝片や碎片も大量に検出されている。

この遺物の水洗は、第3次調査に参加した千浦美智子さんが一部実施し、全排土の水洗が必要だとの結論になり以後は一貫して実施した。水洗は当初沢水を13mmのホースで洞窟脇に引く方法をとったが、水量が少なく排土量を消化できないため、極沢川まで運び降ろして行なった。20mの比高差の急崖を運び降ろすのは困難な作業で、第9次調査からはロープと滑車を使って極沢川まで落す方法を取った。5~10kgの土のう袋で2,000袋近い土壤を水洗することとなった。

したがって遺物は、平面位置とレベルを記録して取り上げたもの、グリッド単位で層別に取り上げたもの、水洗によって検出したものの3種である。いずれもグリット、層は記録されている。

(大原正義)

第2節 層序

洞窟内堆積土は、最終的には2m50cm程度の層厚を測ることとなった。洞窟の洞底部は、大型の落盤岩がいくつもあり、隙間があるような状態で使用が開始されたと思われ、30~50cmの深さの隙間に土壤や遺物が流れ込んだ部分もあり、その部分では3m程の上下差を測ることとなる。洞窟内では、天井や壁から剥落したと思われる洞窟を構成している岩と同質の拳大の礫は散在するものの、洞窟の使用開始以後の大きな落盤の痕跡を認める堆積物は認められない。洞窟内の堆積土は、極めて黒色味が強く、水分を含むと粘着性の強くなる黒色土と、灰、焼土粒から構成され、これに土器・石器・獸骨などが混在する状況であった。黒色土は洗浄すると炭化物の細片を残すもので、洞窟内で焚かれた炭の残滓と、洞窟内に持ち込まれた有機物の土壌化したものと考えられる。洞窟内への外部からの土壤流入の痕跡はなく、これらの洞窟内堆積物は、一貫して洞窟の利用に際して、洞窟内で火を焚くことによって発生する灰と炭、人の活動に伴って持ち込まれた有機物、そして人工遺物によって構成してきたことになる。

洞窟内の遺物出土状態は、調査開始時に清掃するだけですでに遺物が検出されるという状況であり、また洞窟内は入り口東側の落盤岩が光を遮り極めて暗い状態で、I・II層についてはその断面の色調・混在物などを詳細に観察することは困難であった。暗い中で黒色味の強い土壌は識別を困難なものにしていた。3次調査で入り口東側の落盤岩を除去できたため、土層についてもようやく観察が可能となった。土層断面が観察可能になると、黒色土と灰と焼土からなる土層をどう区分するかが課題となった。視覚的に明瞭な灰層は綿状にはほぼ水平な堆積をしており分層の極めて明瞭な指標を示していると思われたが、層厚が薄い一枚の灰層でも1cm未満の薄層が累積して層になっており、C-3区の北壁で最終的にIV層として一括した土層は12層に細分できた。しかし、細分した層は洞窟内全体を把握するには不適切であった。そこで、洞窟の中央部分では黒色土を主体とする層と層厚的には薄いが灰が主体となる層が交互に確認され、土器についてはこの灰層とその上部の黒色土はほぼ同様な内容であるように見え、IV層以下はこれを一つの単位の層として把握することとした。ただし、色調などでこの分層が可能なのは中央部分で、洞窟の壁から50cm以内の壁際や5区から外の雨垂れ線の外は、黒色味の強い土壤で分層は不可能で、遺物については中央部とのレベル比較や遺物の内容で中央部の層名を該当させて遺物を取り上げた。

また、調査は一気に最下層まで及んだものではなく、全体の面積が小さいことから土層断面を一貫して残すこともできなかった。III層以下については部分部分で土層断面を取りながら調査を進めた。図に示したC列西壁の土層断面は、こうした部分部分で記録したものを合成したものである。

以下、洞窟内中央のC-3・2区の西壁を代表として土層の特徴を述べる。

I層 現代～中世

軟質の黒色土層で、締まりは全くない。層厚15~20cm。壁際では枯葉などがまだ土壌化しておらず、清掃した段階で遺物が顕を出す状況であった。

II層 奈良平安～古墳

黒色土に灰の混ざる土層で、締まりはない。層厚20cm前後。遺物の出土量は極めて多く、重なるようにして土器片・獸骨片が出土する部分も多かった。

III層 弥生

黒色土に灰の混ざる土層で、層厚20cm前後。上半はII層とほとんど変化がないが、含まれる灰がやや赤みを帯びており、焼土粒を多く含む。下半部は灰の量が多くなる灰層というべきもので、部分的には綿状

の堆積を確認できる。

IV層 弥生～縄文晚期

上半は黒色味が極めて強く、水分を含むと粘性の強いべたついた土質で、この上半の土層最下部に、落盤礫の平面や川原石で平面を作りだしている部分があり、敷石面として把握した。この面で鹿角棒が出土し、この面及びその直下で弥生初期の土器が出土している。層の下半部は縄状の水平堆積を示す灰層で、色調や炭化物・焼土などの混在状況から細分すると厚さ1～3cmの12層に細分できた。しかし、面的な広がりをこの細分層から追うことは困難で、遺物などをこの細分層で取り上げることは不可能であった。層厚は全体で20cm前後。

V層 縄文後期

黒色土に灰が混在する層で、焼土が2～3cmのブロック状に含まれ、層厚30cm前後。最下部に5cm程の厚さの灰層が含まれる。

VI層 縄文後期

黒色味の強い黒色土を主体とする層で層厚15～20cm。層の上部にD-3・D-4・E-3・E-4区では、落盤礫の平らな面で平面を作りだした敷石面が確認された。下半は赤みを帯びた灰を多く含む土層で、この層の位置に骨層とも言える極めて獸骨の多い層が認められる。

VII層 縄文前期～中期

灰を多く含む黒色土を基本とする層で20～25cmの層厚を持つ。最下部に層厚3～5cmの白色味の強い灰層が延びる。ほぼ純粋な灰層で、乾燥するとブロック状になる。その上に灰の多い土層が10cm程度認められる。上半は黒色が強くなるが灰も含まれる。縄文前期の土器が主体である。

VIII層 縄文早期

灰を主体として黒色土を混ずる土層で20～30cmの層厚を持つ。3枚の灰層が認められ、上2枚は2～3cmの層厚で断続的に広がるが、最下部の灰層は層厚5cm前後で全面に広がる。縄文早期の土器が主体である。

IX層 縄文早期

灰混じりの黒色土層で20～35cmの層厚を持つ。3枚の薄い灰層を挟む。灰層はやや黄色みがかったほぼ純粋な灰が薄層をなすもの、炭を含むためややくすんだものがある。人骨が出土した層でC-3区では人骨がこの層の中に収まって検出された。

X層 縄文草創期

黒色土を主体とし小砾を多く含む土層で、20～30cmの層厚を持つ。ほぼ中間に層厚2～3cmのほぼ純粋な灰層を挟む。灰層はC-3・C-2区ではほぼ水平であるがC-4区画から外では流れ落ちるように傾斜している。

XI層 縄文草創期

赤褐色から赤褐色を呈する土層で、焼土粒を多く含む。層厚は5～10cmと薄いが明瞭に区分できる特徴的な土層である。C-2区では最下部に焼骨の細片を多く含む1～2cmの黒色の薄層を含む。C-2・3区では、赤みの強い層であるが、C-1区やC-4から外側では、ややくすんだ赤褐色を呈する。

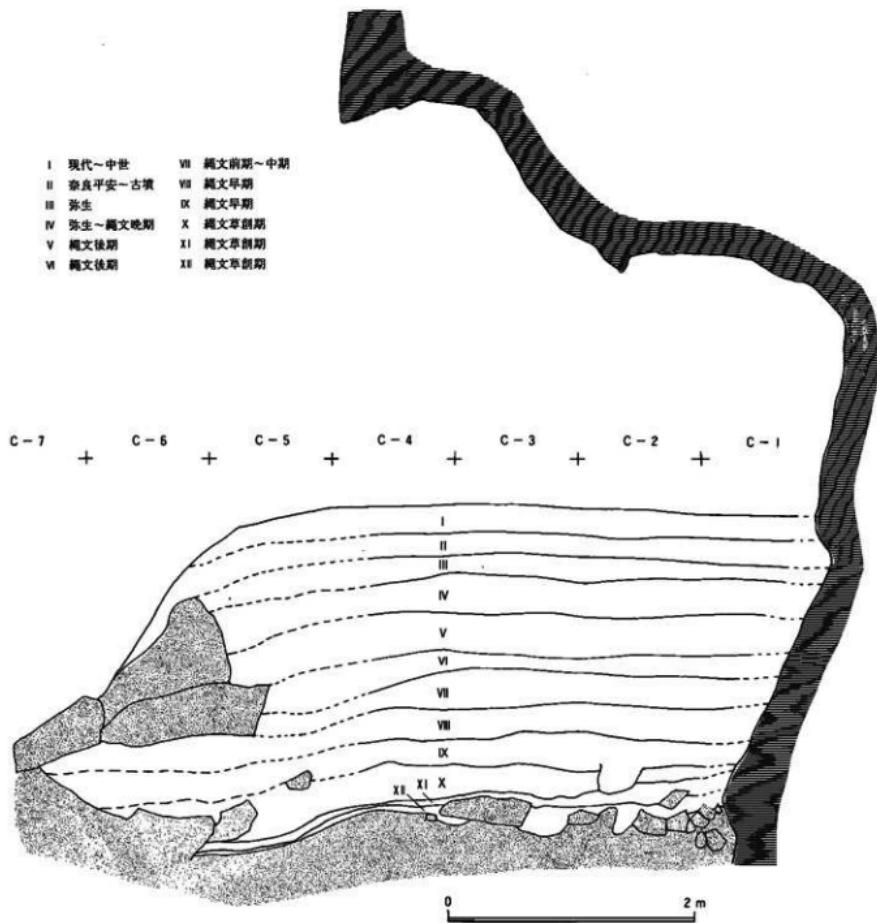
XII層 縄文草創期

著しく黒色味の強い黒色土を主体とするが灰と風化礫が斑状に混在する層で、洞窟内では10～30cm程度の層厚を持つ。灰は部分的にブロックとして確認できる部分もあるが2～3cmの厚さでは10～20cm程度の大きさである。基盤層の落盤礫の風化が著しい部分では、炭の黒色が風化部分に浸透し5cm程度の別層と見られる部分もあったが、遺物は含まれず基盤層の風化層と判断した。また、落盤礫の隙間に本層が流入

しており、A・B・Z列では30~50cm前後の深さで堆積している部分もあり、土器片などの遺物の流入も認められた。

洞窟の基底部は1m前後の大きさで厚さ30~50cm程度の落盤岩が全体に広がり、この間に20から30cmの落盤岩が詰まるという状況であった。落盤岩の狭い隙間にはXII層が流れ込んでいる。落盤岩の表面2~3cmは風化し汚れた黄褐色の強い黄白色の粘土状を呈する。一部落盤岩を割って、その下部を確認したが、洞窟の壁や落盤岩と同様の岩質で堆積物は無いものと判断した。

(大原正義)



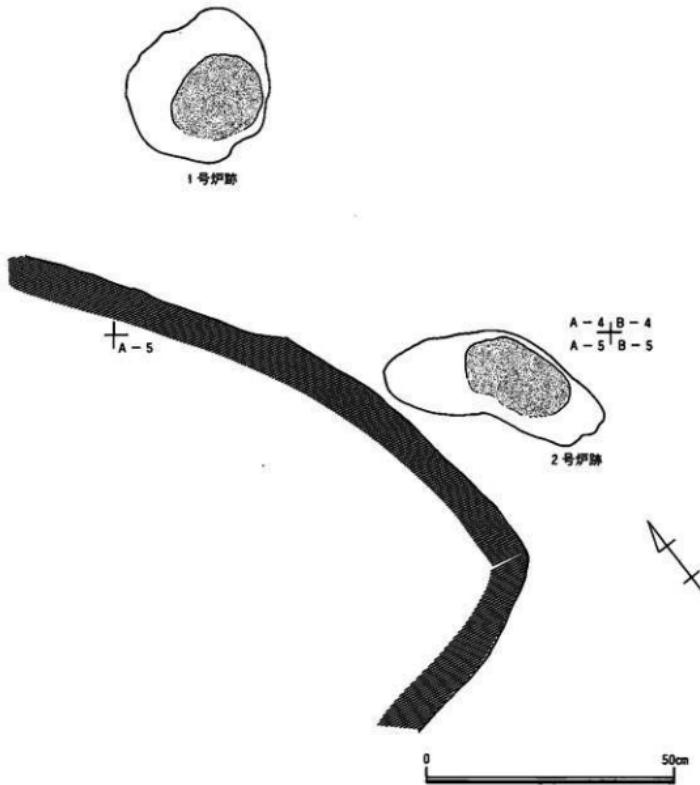
第8図 湯倉洞窟土層断面図（C列西壁）

第3節 遺構と遺物の出土状態

1 縄文時代

草創期の炉跡

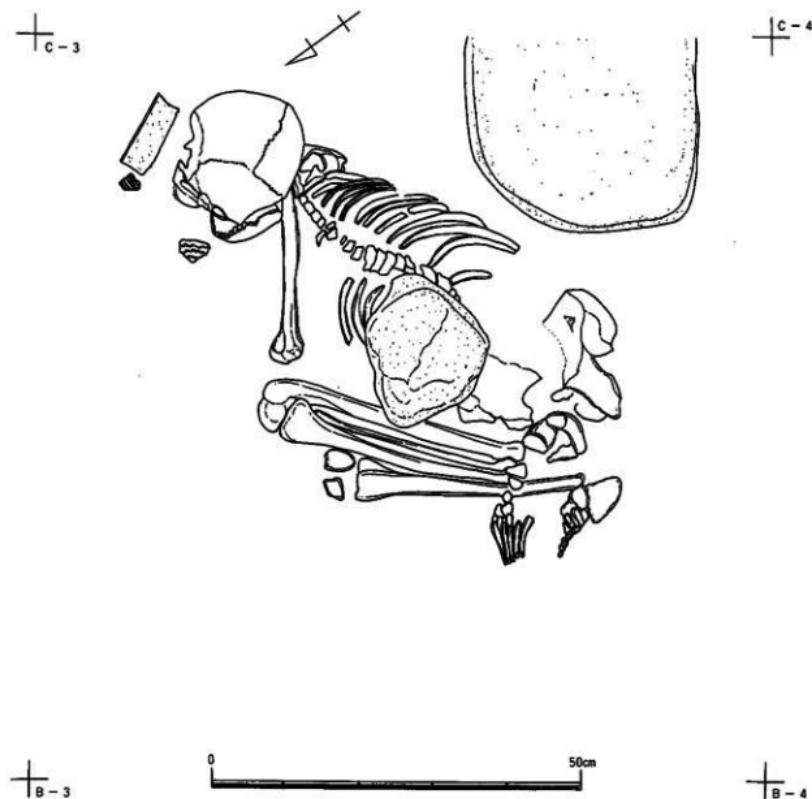
調査の最終段階で炉跡を2基検出することができた。洞窟内の堆積土は、炭と灰を主たる成分とするものであり焚き火は常に営まれてきたものと思われる。焼土や灰の堆積から洞窟中央のC-3区を中心に炉は常に設けられてきたものと思われるが、遺構として明確に認められるものは検出できなかった。調査の最終段階で、洞窟底部を精査したところA-4区とA-5区にそれぞれ1基の炉跡を確認できた。A-4



第9図 1・2号炉跡

区に確認できた1号炉跡は、大型の落盤岩の上面の平坦部分が深さ2~3cm、不正円形の径約30cmの範囲で焼土化しており、その中央部径約15cm範囲に焼けた獸骨の細片が集中的に確認された。A-5区に確認できた2号炉は、平面形が長軸45cm、短軸20cmの不正な楕円形を呈する他は1号炉と同様の状態を示す。中央に焼けた獸骨片が確認されたのも同様である。2基の炉は洞窟の壁に極めて近い場所に営まれて、特に2号炉は壁に接してあり、あたかも壁に面し火を焚き少人数で使用したことを思わせる位置である。また、洞窟の底部ではA-4区からZ-4区が洞窟内の側洞のようになっており、洞窟中央では5m以上の天井高を有する中央部よりこの西隅の場所が使いやすい空間であったことが予測され、洞窟使用の最も初期の段階の炉跡の可能性が高い。

早期の埋葬人骨



第10図 人骨出土状況

第8次の調査の際、調査が長期化し平面的な掘り下げでは最終までの見通しが立たないため、C列の東端に幅20cmのトレンチを設定し、洞窟の堆積土の深さを探る調査を実施した。ちょうどこのトレンチに人骨の頭部がかかり、最低でも頭部の資料が得られる良好な状態の人骨の存在を確認できた。第9次調査ではこの人骨の調査を最優先し、C-3区を平面的に掘り下げたところ、屈葬の全体がちょうどC-3区に収まる形で確認でき取り上げることができた。

人骨は、股関節と膝関節を深く折り曲げ、上体はやや斜めにし腹部を下にした右側屈位で、頭部は頭蓋底が下になり頭骨は頭頂を上にして検出した。右前腕骨と手骨、左の上肢骨が失われていた。頭蓋骨は体幹との繋がりに無理があり、右側面を下にしていたものが、土圧などの影響で起きたものと考えられる。折り曲げられた脊椎と大腿骨の間の上面に約20×17cm、厚さ5cmの平石が検出された。ちょうど背中の部分にあたり、明らかに埋葬に伴い截せられたものである。

頭部周辺から押形文土器2点を検出した。破片であり副葬品ではないので、この人骨の明確な時期を決定できる資料ではないが、人骨はIX層にちょうど収まるよう検出された。墓壙はC-3区のみを掘り下げるという方法を探ったこともあり明確なものとしては確認されなかった。人骨上面にVII層下部のしつかりした灰層は確認され、C-3区の北壁および東壁でもVII層下部の灰層には埋込みは確認されず層の乱れもない。こうしたことからこの人骨はIX層の最終段階で浅い墓壙に埋葬されたものと考えられる。

草創期から早期前半の遺物

純文草創期～早期前半の遺物はXII層からIX層に及んで出土した。一部はVII層に混在するものも認められる。土器のうち第3群～8群については、掲載資料のうち遺物番号を付して取り上げた土器について分布図を作成した。平面については全点を示し、断面図への投影はB・C列のみ投影した。第3群(爪形文土器)については、洞窟内全体から出土し、XII層を主体として一部XI層に及ぶことが窺える。第4群(押压縄文土器)については洞窟内西側にやや偏在し、XII層からXI層・X層そして一部はIX層にまで及んでいる。第5群土器は洞窟中央のC・D列に比較的多く、X層を中心としてIX層・XI層・XII層からの出土もある。第6群(表裏縄文土器)は散在的で、XI層を中心にX層にも及ぶ。第7群土器(沈線文土器)は洞窟内東側に偏在し、XI層を中心とし、X層・IX層に及ぶ。第8群土器(押形文土器)は、洞窟内全体に広がり、IX層を中心とするもののVII層・VIII層・X層にも及ぶ。

石器も各層で多くの資料が検出されているが、この時期の特徴としてはA列の壁際で多くの石器が検出され、石器素材というべき剝片もまとめて検出されている。

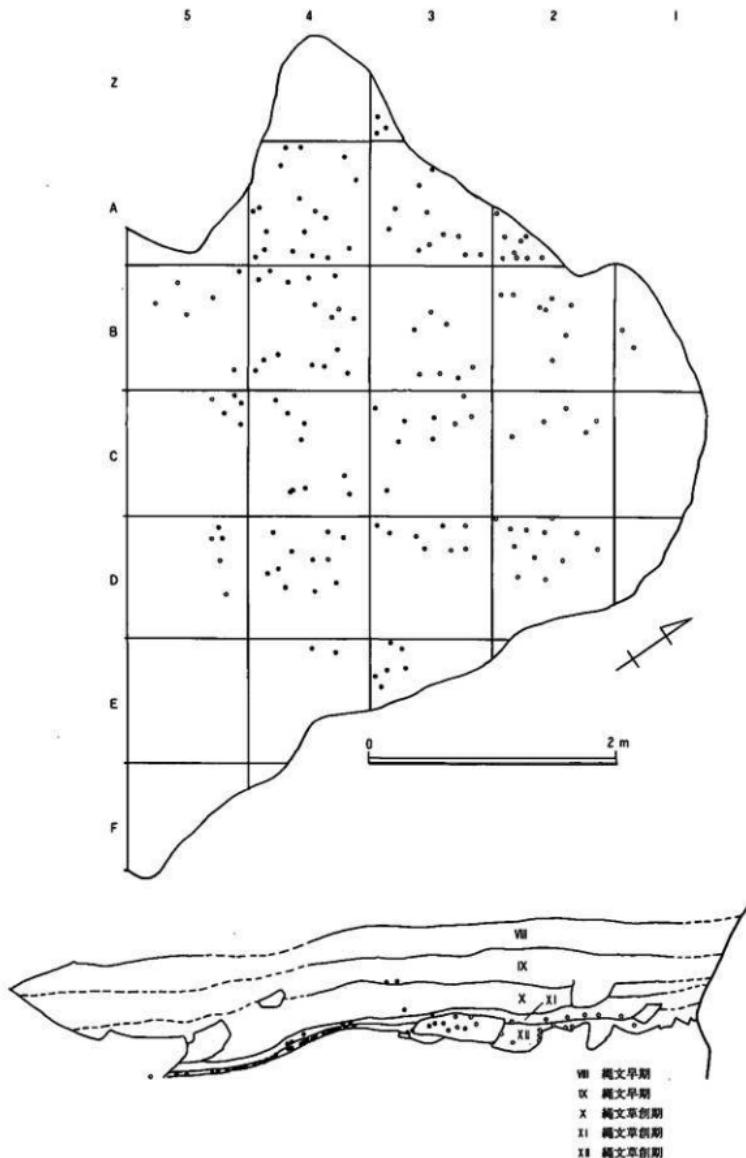
獸骨は、量的には多いものの遺存状態が悪く細片が多くなり、大型の破片は少ない。XII層には焼けた獸骨が多い。

早期後半から中期の遺物

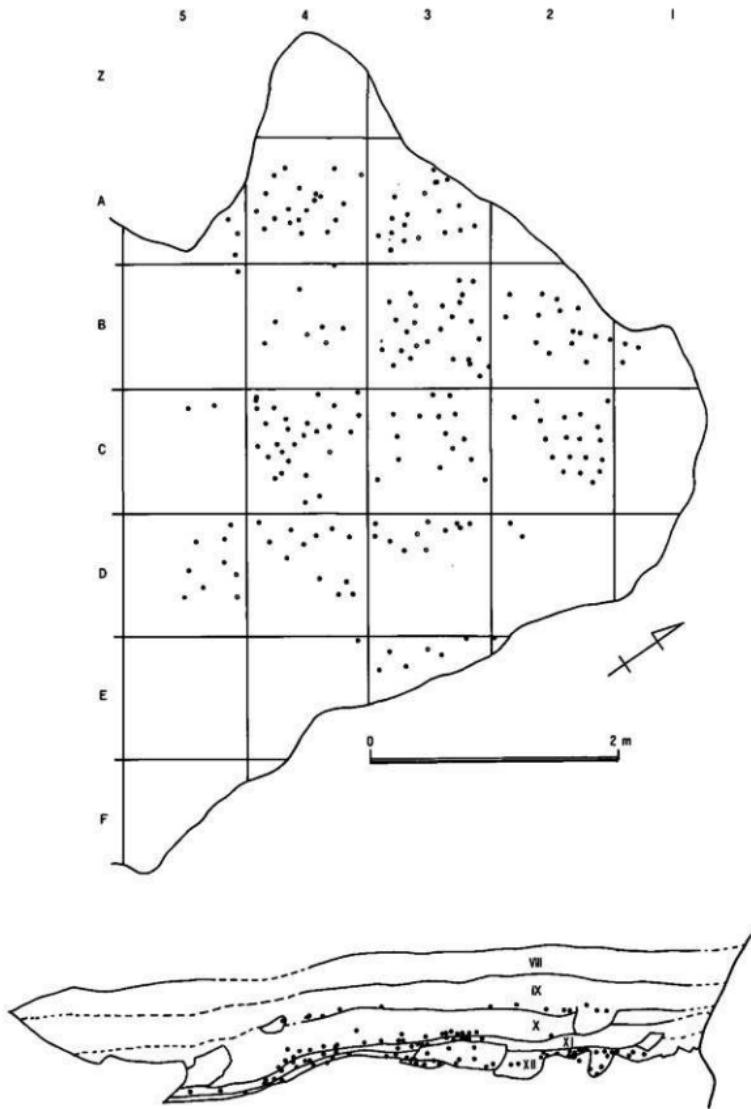
早期後半から前期の資料は、VII層・VIII層と比較的厚い層の中でまとまって出土した土器はなく、壁際では、IX層・X層のレベルまで落ち込んで出土したもの多い。中期の遺物はごく僅かで発掘時にはほとんど注意されていない。獸骨は、各層の下部の灰層で比較的遺存状態が良く出土している。

後期の敷石

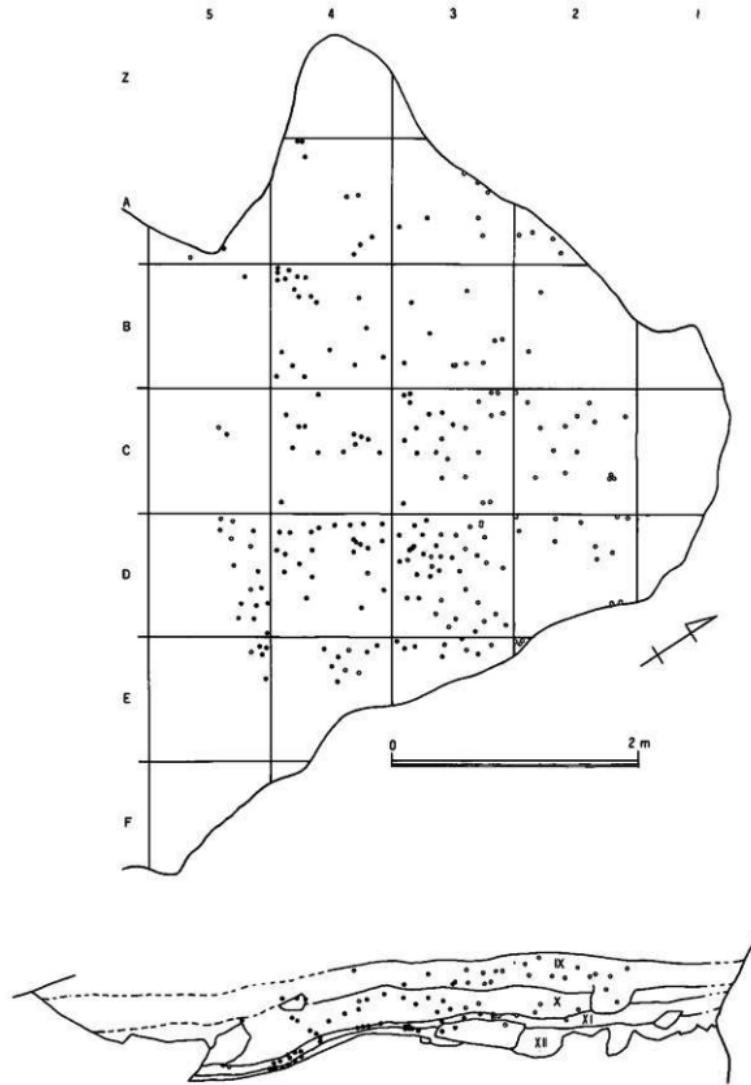
D-3・E-3・C-4・D-4区に認められた。落盤岩の大きさ40～10cm程度で厚さ10cm以内の比較的平らなものを選び平坦面を作りだしている。きれいな平坦面ではないが、一応の広さを持っていることや、一部に川原石も含み明らかに人為的なものと判断し記録した。



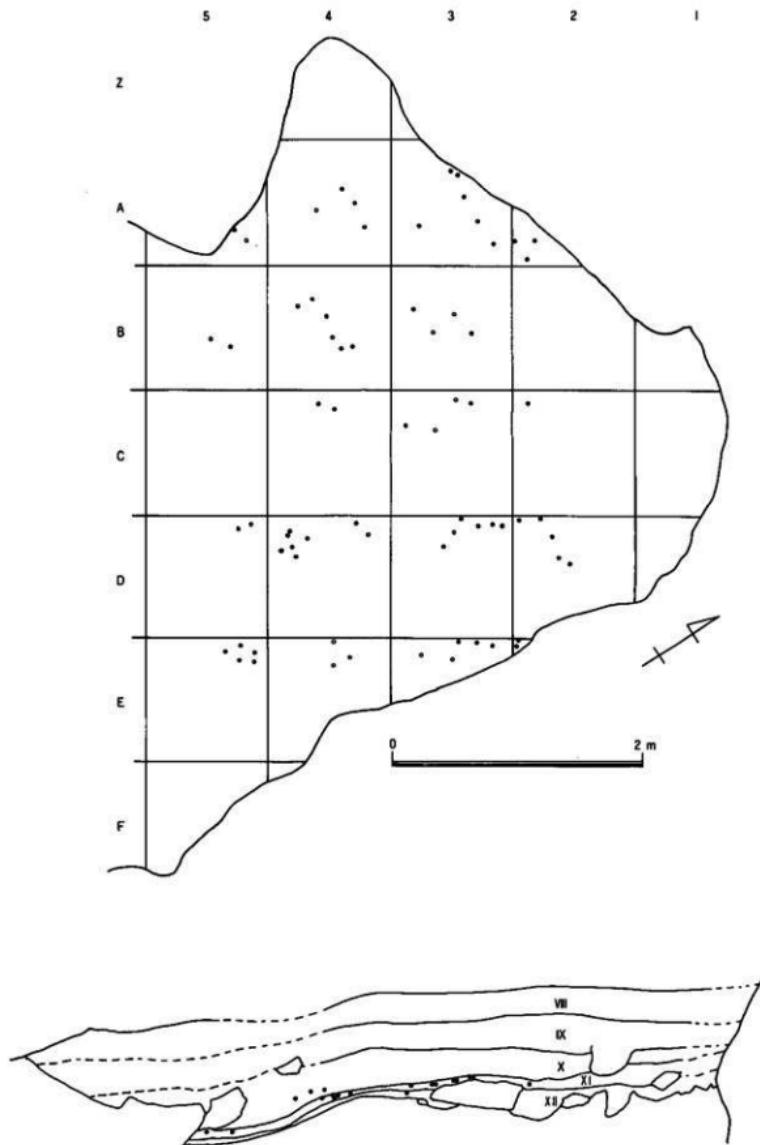
第11図 草創期～早期前半第3群土器（爪形文土器）の出土状況



第12図 草創期～早期前半第4群土器（押圧縄文土器）の出土状況



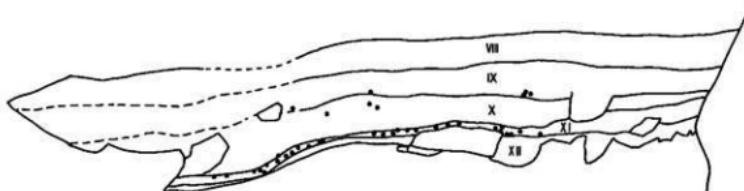
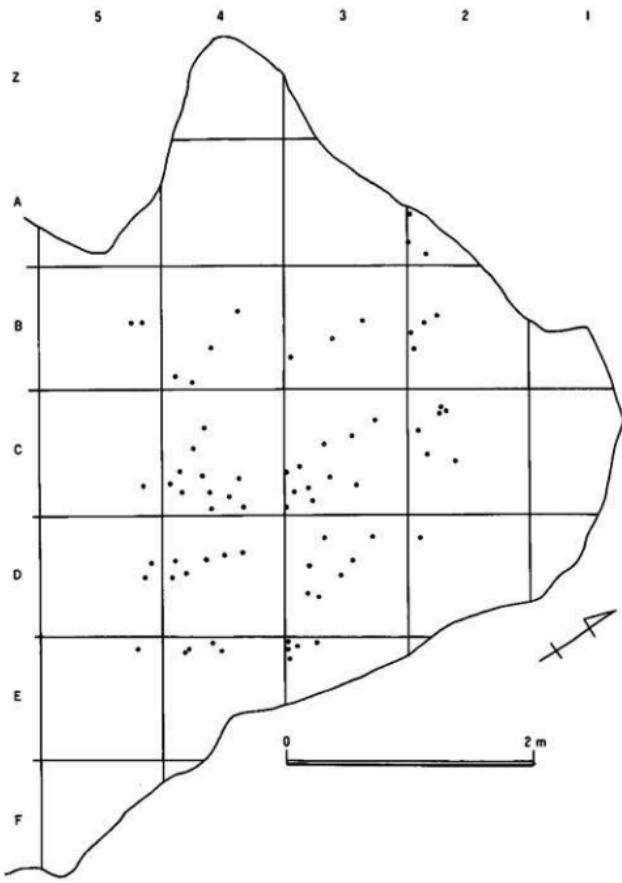
第13図 草創期～早期前半第5群土器（回転繩文土器）の出土状況



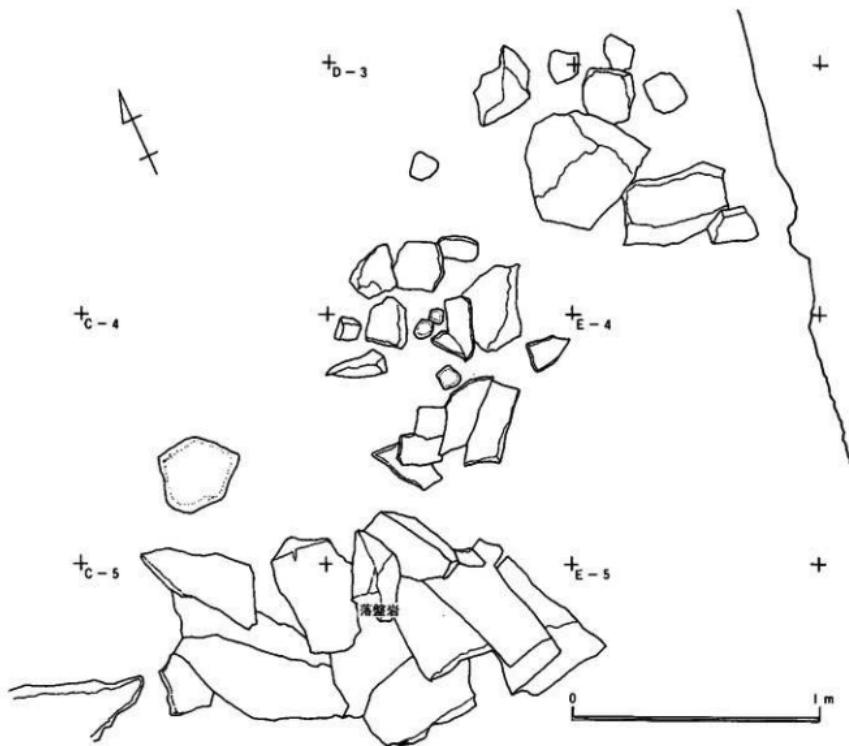
第14図 草創期～早期前半第6群土器（表裏縄文土器）の出土状況



第15図 草創期～早期前半第8群土器（押型文土器）の出土状況



第16図 草創期～早期前半第9群土器（沈縫文土器）の出土状況



第17図 縄文時代後期の敷石

後期の遺物

土器は、何個体かは押し潰されたような状態で出土し、本洞窟の土器の出土状態としては最もまとまった様子が窺えた。また、入り口東側の落盤岩の下には後期の土器が下面に貼りつくように出土し、後期の段階での落盤を認めることができた。

獸骨は、VI層下部の灰層部分で集中的に出土し、D-4区などでは骨層として取り上げた部分もある。

晩期の遺物

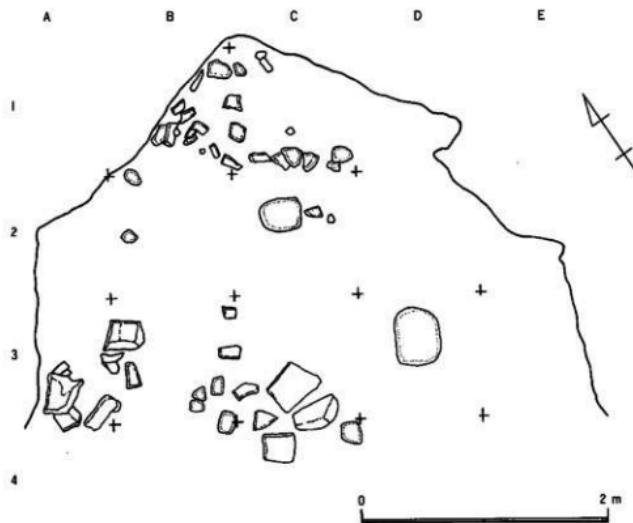
調査時においては、工字文の土器や、無文精製の土器などは晩期の資料と考え、相当量の晩期に属する資料の存在を考えていた。しかし、これらの資料を弥生時代初頭に位置づけて考えると、晩期の資料としてはごく限られたものとなった。三叉文の土器などはIV層の最下部の出土で、後期の土器と混在するようないべで検出している。

2 弥生時代から近現代

弥生時代の敷石

洞窟内の3カ所ほどで、落盤砾や川原石を用いて平坦面を作りだしていると思われる部分が検出され敷石として把握した。きれいに敷き詰められたものではなく作業場的なものかと思われるが、洞窟奥部のB-1・C-1・C-2区にかけてのもの、A-3区のもの、B-3～B-4区にかけてのものである。

D-3の大きめの平坦な川原石の脇からは棒状角器が出土し、この敷石面およびその直下からは弥生時代初期の土器が出土している。C-2の川原石の周辺には石器製作に伴うと思われるチップが大量に認められた。



第18図 弥生時代の敷石

弥生時代の遺物

弥生時代の資料は湯倉洞窟の中心的資料であり、土器・石器・獸骨いずれもその量が多い。III層からIV層に及ぶが、後期資料の一部はII層にも及ぶ。土器は壁際に比較的大型の資料が多く、獸骨はC-3・C-4の中心部に遺存状態の良好な資料も多い。石錐を中心とする石器の量も多い。

古墳時代の遺物

洞窟の壁際に資料が集中し、II層からの出土が中心であるが、土器片が重ねられたような状態で出土する部分も多く見受けられた。

奈良・平安時代の遺物

出土量も少なく、II層の出土で調査時にはあまり注意を惹いていない。

中世の遺物

中世の資料は、内示鍋と炭化米であるがいずれも洞窟内ではなく、洞窟入り口西側のテラス部分で検出されたものでA-5区を中心に出土した。周辺に灰層も確認され洞窟の外で利用されたことを伺わせる。

近現代の遺物

遺物は洞窟内の清掃時に検出された。

(大原正義)

第3章

縄文土器



縄文草創期の土器

第1節 草創期から早期中葉

湯倉洞窟では、縄文時代初頭から近・現代に至るまでの各時代にわたる多量の遺物が検出されている。これは、如何に本洞窟が各時代の人々にとって利用価値が高く、活用され続けてきたかを示している。

その中でも縄文時代初頭の草創期から早期中葉にかけての遺物は量・質ともに豊富であり、本洞窟を特徴付ける一つである。また、当該期は最近の調査事例で増加したとは言え資料的には限られており、本洞窟のまとまった資料は中部地方を代表する資料となるであろう。土器は、バラエティーに富み、草創期では前半の隆起線文系土器から後半の多綱文系土器まで各段階のものが認められ、早期では前半から中葉にかけての押型文系土器・沈線文系土器など多様なものが出土している。

ここでは当該期の土器群を10群に分類して説明する。草創期から早期中葉までと、かなり長い時間幅を有するが、本洞窟における利用の継続性等からここまでを便宜的に一つのまとまりとして捉えた。以下、土器について順次述べていく。

1 第1群 隆起線文土器（第19図1～11）

隆起線文が施された土器群で、出土点数は11点と少ない。出土層位は洞窟最下層のX・XI層を中心とし、分布は洞窟の入口側に多いが、出土点数が限られておりまとまりは捉えられない。いずれも小破片で器形等をうかがい知れるものはない。文様の表出方法により、さらに2類に細分される。

第1類（1～7）

粘土紐を器面に貼付することにより、隆起線文を表出しているものである。直線的で太目の隆起線文を口縁に並行に廻らせる文様構成を基本とする。隆起線文は幅5mm程度の粘土紐を貼りつけたもので、その上に範状工具による刻み等が加えられる。器厚は3～5mm程度で、胎土に鉱物粒等を殆ど含有せず、焼成の良い堅緻な土器が多い。

1は直立する口縁部で、口縁下に低い隆起線文が1本横位に廻る。隆帯上には細く浅い左下がりの刻みがつけられ、口唇部にも同様な右下がりの刻みが加えられている。胎土に少量の纖維を混入している可能性があり、焼成はあまり良くない。

2～5・7は胴上半部と考えられる破片で、1と同様に横走の隆起線文が1本貼付されている。2の隆帯上の刻みは、工具を右方向から斜めに突き刺したもので、D字状の爪形文に類似する。3・4では隆起線文を区切るように工具をあて、さらにそれを右側に起こすようにしている。そのため、3ではまるで円形な粘土紐を貼付したような状態となっている。5は幅広で扁平な隆起線文で、上面から押しつぶすような刻みがつけられている。内面には横位の浅い条痕状の調整痕が見られる。

7は2と類似した隆起線文が1本横位に廻り、以下は無文となり、破片下端付近に2個の小さい円形押圧文が見られる。円形押圧文は直径2～3mmで押圧は浅い。中央部がやや盛り上がり植物の茎等の管状の原体を押圧したものであろう。円形押圧文は、施文位置や深さ、原体の大きさ等の相違点が認められるが、施文手法は第2群の円形押圧文土器と同一のものであり、第1群土器と第2群土器との関係を示唆しているものと言えよう。器表面に極浅い擦痕状の調整痕が認められる点も第2群土器と類似する。内面には指頭圧痕も看取され、粘土帶の接合部はやや厚手となり横方向の浅い沈線状の調整痕が見られる。

色調は黒褐色で、微細な雲母等鉱物粒を含む焼成良好な土器である。

6はやや内彎する口縁形態で、口縁直下より細い隆起線文が垂下する。隆帶上には刻みはなく、両脇をナデている。やや厚手で堅く焼成の良い土器である。器形、文様構成等1~5とは異なる。

第2類(8~11)

器面を範状工具で押し引くことにより微細な隆起線文を表出した土器である。単に器面を押し引くだけでなく、極細い粘土紐を貼りつけたうえでその脇をなぞって表出しているものも含まれる。いわゆる微隆起線文土器で、その微隆起線は幅1mmにも満たないほど細く高さも非常に低いものである。全体の文様構成は不明だが、第1類のように横走させるだけでなく縦位や斜位を組み合わせた構成をとる。

8は直立する口縁で、2本の微隆起線文が口縁直下より1cm程の間隔をあけて垂下する。口縁近くでは殆ど隆起が見られないほど低くなってしまっており、範状工具の押し引きによって表された微隆起線文であろう。器表面及び口唇部は横方向の調整により平滑に仕上げられている。器厚は4mm前後で、口縁に向かい薄手となる。胎土には石英や雲母粒と共に細かい砂礫粒も含まれる。

9も直立する口縁形態で、器厚は2mm程度と非常に薄い。口縁下を僅かにあけて、横走・垂下・斜行する微隆起線文が施される。微隆起線文は極細い粘土紐を張り付けてから工具を押し引いて表出している。各々の微隆起線文間が僅かに開き、つながっていないのは、その表出手法によるものであろう。胎土に微細な纖維を含ませている可能性がある。

10は器面を範状工具で押し引いて描き出したもので、非常に細く低い微隆起線文となっている。文様構成は、横位と斜位の微隆起線文が組み合わされたもので、9の構成と似る。各微隆起線文は5mm前後の間隔で表出されている。斜行する微隆起線文は3本あり、途中で途切れたり、重なり合ったりしている。器面には横方向の擦痕状の整形痕が看取される。器表面に細い纖維状の痕跡が見られ、胎土に微細な纖維を含ませている可能性がある。

11は口縁に近い胴上部の破片と考えられる。5mm程の間隔で6本の微隆起線文が垂下し、下端は横位の微隆起線文で区画され、以下は無文となる。極細い粘土紐を貼り付けてから押し引く手法によっている。胎土には石英や雲母粒等が含有され、少量の纖維も混ぜている可能性がある。器表面は平滑に仕上げられており、内面も浅い指頭圧痕が見られる程度である。文様間隔は異なるが、表出手法や胎土・調整方法等は8に類似する。11の文様構成は、早期後半条痕文系土器群の野島式のモチーフと類似する。しかし、出土層位や器面調整が他の微隆起線文と同様であることから、該期のものと判断した。

本類土器の内、範状工具を押し引いただけで表出した8・10と、細い粘土紐を貼付したうえで押し引いている9・11とは、微隆起線文という共通した文様であったとしてもその表出手法を異にしているものであり、本来別に分類されるべきものと言えよう。しかし、実際にはどちらの手法を採用しているのか明確には区別し難い土器が殆どである。ここでは一括して扱ったが、施文手法と表出される文様との関係も踏まえて検討していく必要がある。

2 第2群 円形押圧文土器(第19図12~28)

口縁下に円形の押圧文を有する土器群で、新潟県壬遺跡でまとまった資料が知られるが、これ以外では僅かな類似資料が見られるだけの土器である。本洞窟でも5点が出土したのみである。壬遺跡には孔が貫通する円孔文土器や、爪形文・格条体圧痕が併用された土器があるが、本洞窟には存在しない。出土層位は洞窟入口部のIX層からX層で、他の草創期土器群と同様である。

12は緩やかに外反する器形で、口端は先細りとなる。胎土に鉱物粒等を殆ど含まない緻密で焼成の良い土器で、器厚は4mm前後。円形押圧文は口縁下1.2~1.5cmの位置に2.5cm前後の間隔をもって横位に一列押圧されており、口縁に沿って一巡するものであろう。押圧文の直径は3mm程度で正円に近く、器面に対しほぼ垂直に押圧している。押圧の深さは2~3mmと深く、そのため押圧部は器内面が瘤状に突出している。押圧文は周縁部が深く、中央部が盛り上がった状態であり、このことより施文原体は植物の茎等の管状のものであることがうかがい知れる。器面には横方向を中心とした擦痕状の調整痕が看取され、表面はナデ整形により平滑に仕上げられる。口縁内面には指頭圧痕もみられる。口端部は指で押さえるようにしており、やや波打つ状態となる。

13は直立する口縁で、口端はやや内削ぎ状となる。円形押圧文は口縁下8mm~1cmに5~9mm間隔で横位に一列押圧される。押圧文の特徴・原体等は12と同一だが、施文間隔が狭いことと押圧がやや下側から上に向かって行われている点が異なる。器表面では縱方向、内面では横方向の調整痕が観察される。胎土は緻密で焼成も良い。

14は先細りとなる口縁下1.3cmに、円形押圧文が一個押圧されている。押圧により土器内面が瘤状に突出する。押圧文は一個のみで、2cm以上の間隔があくこととなる。胎土に細かい砂礫粒を含むが堅緻な土器である。内面には指頭圧痕もみられ、口端はやや波状となる。15は直立し丸頭状の口端となる土器で、口縁下1.5cmに一個の円形押圧文が施される。押圧文の特徴は他のものと同一である。

16は口縁に近い胴上部片と思われ、円形押圧文が横位に二列押圧されている。押圧文は直径が2~3mmと15までと比べ小さく、形状も楕円形と異なる。押圧は1~2mmと浅いが、内面には瘤状の突出が見られる。各々の押圧文間は5~7mmと狭く、上下列間も5mm前後と詰まっている。器面には横方向の調整痕が看取される。

壬遺跡では円孔文・円形押圧文に伴い多数の無文土器の出土があり、本群土器にも無文土器が伴う蓋然性が高い。17~28はこうした無文土器で、胎土や器面調整が円形押圧文が施文された土器と類似する。しかし、本群土器が単独に出土している訳ではないので、確実に円形押圧文と伴うものとは言い切れない。

また、円形押圧文土器は、押圧文が施文される部分以外は無文となるため、ここに提示した以外にも無文部の破片が存在するはずである。

17~21は直立し口端が先細りとなる形態で、12~14の円形押圧文と類似する。17は器面に横位の調整痕が観察され、口端は指頭の押さえにより小波状となる。口縁下2cm程で器厚が厚くなるのは、粘土帯の接合部のためである。内面には煤が付着する。12と同一個体の可能性がある。胎土に鉱物粒等を殆ど含まない堅緻な土器である。18も堅緻な土器で、器表面では細かく不規則な調整痕が僅かにみられ、内面には横位の擦痕状の調整痕が明瞭に残る。器厚は4~5mmで円形押圧文とは同じである。

19~23はやや厚手で、直立または弱く外反する形態を呈する。いずれも内面に擦痕状の調整痕が看取でき、20~21の器表面はナデ整形が行われている。24~28は器表面がナデにより平滑に仕上げられている土器で、17~21程ではないが口端に向かい徐々に薄くなる。内面には擦痕状の調整痕がみられ、24は指頭圧痕も認められる。

円形押圧文は口縁下から胴上半部に文様が集中するため、胴下半部では無文となる。ここでは胎土や調整手法の類似した僅かな資料を提示したのみだが、後述する無文土器の中にも当然円形押圧文土器の無文部分が含まれる公算が強い。

3 第3群 爪形文土器 (第20図~第27図)

爪形文が施された土器群である。出土点数は980点程を数え、第4群の多縄文系土器と並び、本洞窟の縄文草創期土器群を代表するものである。分布範囲は洞窟内全体に及ぶが、特にA・B-2~4のXI~XII層での出土が多く、分布範囲・層位は多縄文系土器と重なる。また、より上層からも一定量の出土は確認され、本洞窟が継続的に利用され続けたことによる、積み重なる擾乱等を受けた結果であろう。このため、調査時から草創期各土器群の明確な層位差は見られず、隆起線文土器や円形押圧文土器との関係も含めて、爪形文土器の位置付けは層位的には明確にできなかった。

爪形文土器には、施文手法や形状、その文様構成等に多様なバラエティーが認められる。ここでは、文様構成等から6類に細分した。

第1類 (1~16)

爪形文を連続的に施した刺痕列が縦走し、その刺痕列間が隆起線状となる土器である。施文手法としては爪形文の刺突であるが、表出される文様は隆起線文的なものとなる。器厚は4~5mm前後で、胎土に微量の雲母粒等を含むのみの堅縁な土器群である。出土数は20点弱と少ない。

1~5は直立または弱く外反する器形で、粗大な爪形文の刺痕列が口縁下より縦位に施文される。爪形文は工具を左方向から器面に対し低い角度で刺し、右側に起こすように刺突しており、幅広で右側が深い逆D字状の刺痕となっている。刺突は口縁から脣部に向かい連続的に行われ、口縁より垂下する刺痕列間があたかも隆起線のようになる。口唇部の外側端にも細い爪形文が施され、口端は小波状となったり、外側に突出したりする。これは器面外側から指で摘むように口唇部の爪形文を施文されたことによるもので、施文原体は人爪の可能性が高い。

1の口縁直下の爪形文は、やや左下がりに傾き、以下の縦位列と軸が若干ずれていて、口縁下の一列を意識しているようにも思われる。1・2は口縁直下より刺痕列が施されるが、3・4では口縁下に狭い無文部を残している。また、3~5はやや湾曲した形状の爪形文となる。雲母等の鉱物粒を微量含むのみで焼成の良い土器である。内面に指頭圧痕が見られるものもある。

6も口縁直下から刺痕列間が隆起した爪形文列が垂下する。爪形文は細く直線的な逆「ハ」の字状で、工具によって表出したものであろう。刺痕列間隆起を中心にみると、右側と左側で傾きを異にした爪形文となる。直立する器形で、口唇部には施文されない。胎土は1~5と比べるとやや脆い感じがする。

7~11は粗大な逆D字状の爪形文が縦走する脣部片で、刺痕列間が縦位の隆起線状となる。11は爪形文の刺痕列が縦位に整っており、刺痕列間の隆起も直線的で明確である。一方、7~10は刺痕が斜位に近く、刺痕列間隆起も列が描わない。8は縦走する刺痕列の上部に左下がり爪形文列が一帯横走する。

12~16は粗大な逆「ハ」の字爪形文を縦位に施して、刺痕列間隆起を表出している。施文手法は6に共通するが、施文される爪形文は粗大な逆D字状と似る。まるで、逆D字状爪形文を施文方向を変え、下端部を重ねるように刺突したような爪形文である。また、右側に起こすように刺突しているため、刺痕が深くなる点も逆D字状爪形文と同じである。施文原体はおそらく、鉛状工具を用いたものであろう。

第2類 (17~39)

斜位の刺痕列が横位の帯状構成をとるもので、爪形文施文部以外は広い無文帶となる。爪形文列が一条のものと二条のものがあるが、二条で1帯が基本のようである。爪形文の傾きは右下がりと左下がりの

両方が見られ、一方に大きく偏るという傾向は見られない。形状には細く直線的な爪形文と、逆C字型に大きく湾曲した爪形文がある。

17~24は右下がりの爪形文列である。無文部を挟んだ二条で一帯を構成しているものが多い。21・22は条間が広く開き、一条二帯の構成と思われる。19・20・22には横列帶状の爪形文以外にも爪形状の圧痕が見られる。23はやや不規則な条となっている。17~23は細く直線的な爪形文で、箆状工具で器面を割むように施文したと考えられる。21・22は施文が浅く、施文手法がやや異なるか。24は逆C字型の湾曲した爪形文である。一条二帯かもしれない。

25~39は左下がりの爪形文列である。右下がり同様二条で一帯とするものが多い。25は口縁下に密で条間の狭い三条の爪形文を施文している。28は一条のみ。35は二帯以上施文される。36も破片下端に爪形文の上端と思われる圧痕が見られ、2帯以上となろう。直線的な爪形文が多いが、30~32のやや湾曲し細い三日月状のものや26・27・34のように施文が深く列点状となるものもある。

37~39は逆C字型の湾曲した爪形文列である。37は内側に屈曲する形態で、口縁直下に1列の爪形文列が巡る。38・39は大形で逆C字型に湾曲した爪形文が1列施文される。一条一帯型か。

器厚は26・32の4mm程度と薄手のものから、23のように9mmと厚手のものまで多様である。内面には整形痕や指頭圧痕が見られる。20・32は疑口縁で、下の粘土帯に上の粘土帯を被せるように接合している。

第3類 (40~164)

斜位横列多段の構成となる土器である。同一方向の傾きとなるものが多いため、同傾複数段に異傾の爪形文列が組み合わさったものや、各段毎に傾きを異にする羽状構成のもの等も存在する。傾きは2類と同様に右下がり・左下がりの両方向があり、右下がりが若干多いものの偏在することはない。爪形文の形状には箆状工具による考えられる直線的なものと、彎曲し三日月形やD字・C字形を呈するもの、細く彎曲した爪形文等がある。

40~103は右下がりの傾きの爪形文列である。ほぼ直立する口縁から胴部に移行し、底部は尖底状になると思定される。口唇部外端に刻み等を加えたもの(40~45・47~49)と、そのままのもの(46・50~54)とがある。40~43は、口唇外側を工具で挟んで摘むように刻んでいる。この手法は石小屋洞穴の微隆起線文土器の口唇部に加えられたものと類似する。口唇直下からは右下がりの爪形文列が多段に施文され、刺痕列間はやや開くが段間は密となっている。爪形文は直線的で刺痕は比較的浅い。44・45も類似した口縁形態であるが、箆状工具による爪形状の刻みで、44は口唇が肥厚する。

46は、口唇直下に指で摘むようにした「ハ」の字爪形文が一列施文され、以下は右下がり横列多段の爪形文列となる。口唇部には刻み等を加えていない。47は口縁下に直線的で深い刺痕の爪形文が二段施文され、口唇上も同一の箆状工具で刻んでいる。また、口唇直下には直線的な「ハ」の字爪形文が1列施文される。48・49は口唇部を斜めに大きく刻んでおり、口端が小波状となる。口縁下の爪形文は直線的大形の刺痕である。同一工具による施文であろう。

50~53はやや彎曲した三日月状の爪形文で、他と同様に同傾で多段に施文される。54は比較的浅い施文で、直線的というより2類の21・22等に似た丸みを帯びた爪形文で、段間がやや開いた状態となる。

55~61は同一個体と想定されるもので、底部近くの胴下半部まで同傾の爪形文列が多段に施文される。刺痕列間・段間とも整った爪形文である。上側が広くて深く、下側が細く浅い爪形文で、箆状工具で器面を割むようにして一々施文したものであろう。器厚は8~10mmと比較的厚手で、内面には指頭圧痕や条痕状の整形痕等が観察される。55・57は粘土帯接合部で割れており、疑口縁を形成し上部の粘土帯が下の粘土帯の上を覆うように接合している。

62~83も右下がりの直線的な爪形文が横列多段に施された土器である。66は段間がややあいている。69は傾きを異にした刺痕も見られ、同傾複数段の爪形文に異傾の爪形文が組み合わさる構成かもしれない。76は横列多段の爪形文列の上部に「ハ」の字爪形文が施されている。

84~88は刺痕列間・段間に密な爪形文で、爪形文が密接するように施文されている。箆状工具による直線的で、刺痕の深い爪形文で、押し引き文的である。

89~103は湾曲して、三日月形やD・C字形を呈する爪形文である。89~95・97・98のように比較的細く彎曲したものはヒト爪によるものかもしれない。それ以外のものは半截状の工具等を用いた爪形文と考えられ、直線的な爪形文と同様な施文原体と言え、形状による爪形文の分類はあまり意味を持たないかもしれない。直線的な爪形文に比べ段間がやや広くなる傾向が見られそうである。100は破片下端に無文部が見られる。94は器厚が3mm程度と薄手である。

104~138は左下がりの爪形文列を有する土器で、文様構成は右下がりのものと同様である。施文される爪形文の形状もほぼ同様であるが、右下がりには見られない細くて湾曲する大形の爪形文が存在する。

104は口縁直下に大形で間隔の開いた「ハ」の字状爪形文が一列巡り、以下に左下がりの爪形文が施される。105は口唇部から内面にかけて箆状工具による刻みが加えられ、口縁直下から大き目の爪形文が施文される。器表面に横位の整形痕が残る。106は先細りとなる直立口縁で、口唇上は刻まれている。口縁下から施される爪形文はやや彎曲する浅い刺痕となる。

107~109は直線的な爪形文が横列多段に施される。110の最下段の爪形列には右下がりの爪形文が交叉するように施文され、切っ先状の細い「ハ」の字爪形文のようになっている。111も同様な構成となる。112は浅く丸みを帯びた刺痕で、一見「ハ」の字爪形文のように見える。刺痕の左側器面が盛り上がる。

113~129は彎曲して三日月状を呈する爪形文で、ヒト爪による施文の可能性が高い。113・114は器面への突き刺しが低い角度でなされた幅広で半月状の爪形文で、弦の部分が比較的直線的となる。115は細く彎曲した爪形文である。116~129は比較的大形で彎曲した三日月状の爪形文である。粘土帶の接合部で割れているものが多く、窓口縁が形成される。116・125は上の粘土帶が下部の粘土帶を覆っている状態が観察できる。胎土に雲母粒を多く含む。

130~138は大きく彎曲した細い爪形文が施文される。直立する器形で、器厚は2~4mmと薄手である。大形で左下がりの刺痕が横位に密接して施文され、上段の刺痕列に一部重なるように下段の刺痕列が施文され、段が明確とならない。横位多段というより斜位多段と表現したほうが良いかもしれない。

139~141は粗大な爪形文で、大きく幅広で浅い爪形文が多段に施文される。刺痕間が狭く、ずれた隆起線文状となる。小瀬が沢洞窟にも類似した爪形文が存在する。

142~158は羽状構成をとるものである。142~150は複数段の同傾刺痕列と傾きの異なる1列の刺痕列が組み合わさったものである。142~144は右下がりの爪形文列が4段以上施文され、これに左下がりの爪形文列が1列組み合わさる。145~147も同様な構成である。148・149は3段の同傾爪形文と各段毎に施文方向を変えた羽状爪形文で構成される。150は右下がりの爪形文列の下部に「ハ」の字爪形文が二段以上施文される。これは後述する「ハ」の字爪形文の類に入れた方が良いかもしれない。

151は左下がりの彎曲した爪形文に、横「ハ」の爪形文または水平方向の爪形文とが組み合わさっている。152も類似した構成で、右下がりの爪形文に一段の水平方向の爪形文が組み合わさる。

153は刺痕間の詰まった左下がりの爪形文間に、小さい右下がりの爪形文列が一段施文されている。154~158は116~129に似た形状の爪形文に、方向を異にした小さい爪形文列が組み合わさっている。雲母を含む胎土の特徴も116等と類似する。

159~164は各段毎に施文方向を異にした羽状構成となる。163は箆状工具による直線的な爪形文で、矢羽

根状な羽状構成となる。

第4類 (165~210)

水平方向の爪形文が施文される土器である。横位多段構成が多いが、無文部をはさんだ帯状構成のものも存在する。爪形文の形状は、一方が丸みを持ち湾曲を持ちながら細くなる滴状のものが多く、他に一見しただけでは沈線文か縄の側面圧痕のように見える細い爪形文も存在する。

165~169は2列1単位の帯状構成をとると考えられる。165は内縁気味の口縁で、無文部の下部に刺突状の左下がりの爪形文列と水平の爪形文列が施されている。爪形文施文部の下部も大きく無文となり、帯状構成をなす。内面には浅い擦痕状の調整痕と指頭圧痕が見られ、調整手法は第2類の円形押圧文に似る。刺痕は浅く直線的である。166~168も類似した土器で、166・168は直線的、167は滴状で浅い刺痕である。169はやや彎曲した爪形文が2列施されている。

170~201は横位多段構成の土器である。170~177は直線的な刺痕で、173は段間が比較的開いているが、それ以外は段間が密となる。刺痕間も密となるものが多い。178・179は水平の爪形文の段間に斜位の爪形文が1列組み合わされている。173は粘土帶接合部で剥落しており、上部の粘土帶が下段の粘土帶を覆うように接合している。

178・179は肥厚気味の口縁で、やや太く不明確な刺突状の爪形文が刺痕間・段間とも密に施文される。182~188は大きめに若干彎曲した刺痕を持つ土器群である。段間が開く傾向が見られ、181は帯状構成かもしだれない。180は縁口縁となっており、上部の粘土帶が剥落した部分の爪形文が看取され、施文が粘土帶を積みながら行っていることが観察される。184~186は斜位の爪形文と組み合わさる。

187~199は滴状の爪形文となるものである。先細りとなる直立口縁で、口唇部には爪形文と同一と考えられる工具による刻み(刺痕)が施されている。文様構成は横位多段で、段間も密となるものが多いが、途中で、無文部を挟む193~199のような構成のものもある。

202~208は非常に細い水平の爪形文を刺痕間を持たずに連続的に施し、あたかも細い沈線文か側面圧痕文が施文されたかのように見える土器である。段間も密である。文様効果という点では第4群8類の161~173の側面圧痕文と類似する。斜位の爪形文により区画され、同傾の爪形文多段に異傾の爪形文列が組み合わさるという点は、3類の構成と同様である。203は口唇部を跨ぐように瘤状の粘土粒が貼り付けられる。この手法は回転縄文の土器や表裏縄文土器等にも見られる手法である。

第5類 (209~243)

「ハ」の字爪形文が施文された土器群である。口縁形態は直立し、先細りとなるものが多い。薄手の一群と厚手のものがある。

209~213は口縁直下に「ハ」の字爪形文を施したものである。209は肥厚気味の直立口縁で、器厚は7mmと厚手である。口縁下に「ハ」の字爪形文と、左下がりの細かい爪形文が施文される。口唇端にも同じ細かい爪形文が加えられる。210は「ハ」の字爪形文と大形の左下がりの爪形文を横位に施している。213は口縁下に低い段帶部を形成し、そこに2列の「ハ」の字爪形文が横位に施文されている。

214は3段の「ハ」の字爪形文が施され、その下部には左下がりの斜位爪形文が多段に施文される。215も同じ文様構成である。216は「ハ」の字爪形文が疎らに横位に展開し、多段に施文される。刺痕間が広く開き、段間も開く。

217~230は「ハ」の字爪形文が横位多段に施文される土器である。施文は浅く、竪状工具等による工具で刻むようにして表出された爪形文であろう。224~229は施文が特に浅く、器面を描んだような爪形文で、

「ハ」の字の中央部に粘土の盛り上がりが認められる。

231~234は「ハ」の字爪形文が縦位に施文されている。231は工具による「ハ」の字爪形文が縦位に1列施される。232~234は複数列施文される。232・234は粘土帯接合部で剥落する。235・236は逆V字状の爪形文が横位多段に施文される。他の「ハ」の字爪形文に比べ細かく、刺痕間も密となる。

237~239は口縁直下に描んだような大形の「ハ」の字爪形文を施したものである。「ハ」の字爪形文は間隔を開けて施され、その下部には左下がりの大形爪形文を1列と、水平方向の爪形文を施している。口縁下の「ハ」の字爪形文は大形で、突起状となっている。240・241も斜位や水平の爪形文が組み合わさる。240は「ハ」の字爪形文を挟み、上部には右下がりの爪形文、下部には水平の爪形文が施される。「ハ」の字爪形文を挟んで文様帶の区画のようになっている。241も同様な構成で、「ハ」の字爪形文の下部に水平方向の爪形文が施される。242・243も同様に水平方向の爪形文を施している。

第6類 (244~260)

爪形文以外の文様を併用しているものである。

244は口縁下で大きく内彎するように屈曲し、受け口状の口縁形態を呈する。屈曲部により上部には右下がりと左下がりの爪形文を重複させ施文しており、格子状の刺突文に近い文様となっている。屈曲部下の頸部には長さ2cm程の斜位沈線文が7~10mm間隔で施文される。この沈線も仔細に観察すると、単に範状工具等で引いたものではなく、3回程度の刺痕からなっており、直線的で大形の爪形文が連続して施文されていると見ることも出来る。この沈線の下部には口縁下と同様な格子状となった爪形文が3段施文されている。尚、口縁下には縄文が施文されている可能性がある。

245~247は同一個体と考えられ、沈線状の直線的で大形の爪形文を併用した土器である。口縁は外側に折り返したように肥厚し、口縁端に左下がりの爪形文が粗く施文される。以下には口縁部より長い沈線状の爪形文が縦位に施文されている。部分的には左下がりや右下がりの部分もあり、羽状構成又は「ハ」の字爪形文のような文様構成をなすのかもしれない。248は左下がりの直線的爪形文の下部に、浅く長い沈線文が右下がりに引かれている。この沈線は爪形文の集合ではなく、範状工具等で器面を浅く引きずったものである。沈線文の間隔は3~6mmと一定でなく、1本ずつ引いている。器厚は7mmと厚手である。

249~258は爪形文と側面圧痕文が併用される土器である。249・250は同一個体と想定され、鋸歯状に施文したRの側面圧痕文間に右下がりの爪形文を充填している。側面圧痕文の間隔は5mm弱を測る。

252は直立する器形で、口縁下と胴部上端に「ハ」の字爪形文を1列横位に配し、その間の頸部にはLの側面圧痕文を10条横位に施文している。「ハ」の字爪形文は工具による摘みと考えられ、中央部が盛り上がり、その間は浅く平坦となる。尚、破片上端は疑口縁の可能性がある。内面には指頭圧痕文が顕著に観察される。253~256も横位の側面圧痕文と「ハ」の字爪形文が併用されたものである。いずれも横位の側面圧痕文の間に「ハ」の字爪形文を組み合わせたもので、文様構成は252と類似するのであろう。文様の区画として「ハ」の字爪形文を用いているとも見られる。253~255は鋸角で逆V字状の「ハ」の字爪形文で、256・257は244の口縁下等に用いられている右下がりと左下がりを重ねて施文した格子状の爪形文である。254は粗い捺りの側面圧痕文の下部に左下がりの爪形文が施文される。側面圧痕文は縦位に施文され、その間を横位の押圧縄文が加えられている。

259は横位多段の左下がり爪形文の下部にLRの回転縄文が施文されている。爪形文の刺痕間にも縄文の痕跡が見られ、先ず縄文を施文した後に爪形文を施文していることが判る。薄手の土器で、胎土には含有物を殆ど含まない堅硬な土器である。内面には指頭圧痕が観察される。260も回転縄文が併用された土器で、粗い左下がりの刺痕の上部にRLの回転縄文が併用されている。破片上端にも「ハ」に字と左下がり

の爪形文が観察でき、爪形文の文様区画として回転繩文が施文されているのかもしれない。薄手で堅緻な土器で、胎土には含有物を殆ど含まない。指頭圧痕が内面に見られる。

4 第4群 多繩文系土器 (第28図-38図)

「繩文」原体を文様表出に用いた土器群である。文様の表出は、撲紐をそのまま用いたり、撲紐を輪に巻きつけた単輪絡条体や自繩自巻等の原体を、器面に押圧することを基本とし、回転手法を併用したもの認められる。施文原体と施文手法の組み合わせにより多種多様な文様が表出され、文様構成もバラエティ一に富む。

本群土器は、1,000点以上の出土点数があり、第3群の爪形文土器と並んで、湯倉洞窟の繩文草創期土器群の主体を占めるものである。A-D-2-4区のXI-XII層に分布が広がり、爪形文土器と層位的・分布的な相違は明確でない。ただし、表裏繩文土器等より下層部に包含の中心があることは調査時の所見としても捉えられた。

表出された文様やその文様構成から細分を行ったが、施文原体や手法が明確にできず、分類根拠が判然としないものもある。

第1類 (1~34)

短い繩文が整然と押圧された土器群で、いわゆる「短繩文」と呼ばれる文様を有するものである。この短繩文の文様表出手法としては、繩文原体を一々押圧する方法や自繩自巻原体を押圧する手法等が想定されよう。本来、施文原体や表出手法が異なるものを一つの類として扱うべきではないかも知れないが、実際の土器観察でも原体や表出手法が明確でないものがあることから等から、1類としてまとめた。

1~3は、口縁下で外反する器形を呈する。無文部の口縁下に一列の押圧繩文を横位に施し、以下には縦位の短繩文が密に施文される。また、口唇部にも繩の押圧が加えられている。施文原体はRである。横位の押圧は長いのに対して、縦位の短繩文は短く、文様が等間隔に表れる点等から自繩自巻原体を用いた絡条体圧痕の可能性も考えられるが、横位の圧痕文と節の状況が類似することから繩の押圧と考えた。口縁内面は横ナデ整形され、頸部以下には斜位の成形痕が看取される。器厚は4~5mmで、胎土には含有物を殆ど含まず、焼成の良い土器である。4はやや外反が弱いが同様な文様構成となっている。

6~7は直立する口縁形態で、口唇部は肥厚している。口縁下より斜位の短繩文が間隔をあけて羽状に施文される。器厚は3~4mmと薄手で、内面には指頭圧痕が目立つ。8も同様に口縁下より羽状に短繩文が施文される。原体は6~7はLRで8はRである。

11は口縁下にやや間隔をあけた縦位の短繩文が施され、その下部には斜位の短繩文が一列押圧される。また、肥厚する口唇部にも同様な押圧が加えられている。全体としては羽状構成となるのであろう。器厚が3mm以下と非常に薄手で、焼成がよく堅緻な土器である。原体はLR。

12~14は同一個体で、肥厚する口唇部外側から口縁下にかけて羽状（口唇部では左下がりの斜位、口縁部は縦位又はやや右下がりの斜位）に短繩文が施され、以下には11と同様に横列の短繩文が一列施文される。施文原体はLR。文様構成は11と類似する。

15~32は胸部破片で、縦位に施文されたものが多い。15は短繩文と短繩文の間に原体の先端刺突が加えられている。15~22は節の太い短繩文で、短繩文の圧痕が規則的に表出されており、自繩自巻B種の押圧による施文かと考えられる。施文原体にはIとTの両者がある。

23~32は節の細かい短繩文で、30~31は羽状構成となっている。32は破片上端にRの側面圧痕文が横位

に施され、その下部にRの短縄文が縦位に施文される。また、その直ぐ横にはRLの回転縄文が浅く施されている。器厚は4~5mm程度と薄手で、精緻な胎土で焼成の良い堅密な土器が多い。特に24は厚さが2mm程度と非常に薄手で、内面に指頭圧痕による凹凸が見られる。

33・34は隆帯状となった部分に短縄文が施文されるもので、33は幅1cm、高さ1cm程の隆帯の上に、上部は右下がり、下部は左下がりの短縄文が施され、羽状構成となっている。34は隆帯状となった口縁部に33と同様な羽状構成の短縄文が施文されている。

第2類 (35~97)

縄文原体を軸に巻きつけて押圧した格条体圧痕文が施文された土器群である。縄自体に巻きつけた自縄自巻原体と、木等の軸に巻きつけた格条体圧痕文がある。

35~47は自縄自巻原体による格条体圧痕文と考えられる土器で、軟軸の格条体圧痕のため圧痕文が弯曲したり、文様の中央部が深く押圧されるのに対して両端が浅い圧痕となっている。

35は口唇部が若干肥厚する直立口縁で、燃りの弱い自縄自巻原体による格条体圧痕を斜位に施文している。胎土には細かい雲母粒を多く含む。原体はRか。36は口縁下で外反する器形で、35と同様に自縄自巻による格条体圧痕文を斜位に施文している。原体は1か。器厚4~5mmを測る。

37~47は同様な文様構成を持つ胴部破片で、自縄自巻原体による斜位の格条体圧痕文が施文されている。施文方向を変えている部分が見られ、全体としては羽状構成となる可能性がある。内面には指頭圧痕による凹凸が顕著に認められ、横位の整形痕も看取できる。器厚は3~6mm程度。

48~66は一般的な単軸格条体による圧痕文と考えられる土器である。48~50は同一個体と考えられ、浅い格条体圧痕文が口縁下より縦位に施文されている。器面調整が丁寧で平滑に仕上げられている。

52~56は横位多段に格条体圧痕文を施文した土器である。53・56は口縁下で外反する。55・56は口縁下に無文部を残しており、56は口唇上にも押圧される。圧痕は明瞭である。

57は器厚が2mm程度と非常に薄手の土器で、口縁直下で内側に屈折する器形を呈する。細かくて短い格条体圧痕文を屈折部の上下に配し、以下には斜位の側面圧痕文が施文されている。胎土には含有物が殆どなく、焼成良好な堅密な土器である。内面には指頭圧痕が看取される。

58~97は胴部破片である。58~82は軸に撲紐を密に巻きつけた格条体を斜位や横位に施文している。圧痕の施文間隔も狭いものが多い。0段の「・」による格条体圧痕であろう。58は破片上部に瘤状の貼付が見られる。83~97は圧痕の間隔が開き、圧痕内に細かい筋が明瞭に確認される土器で、1段のR・Lの格条体圧痕文である。施文原体を横位に押圧したものが多く、押圧された圧痕はやや斜位となる。施文原体が明確にできない資料も多い。

本類として分類した土器には、1類の短縄文とした土器と峻別がつきにくい土器も多く、施文原体及びその施文手法等について詳細な検討を加える必要がある。

第3類 (98~107)

格条体圧痕文と自縄自巻B種の圧痕文で文様構成され、回転縄文も併用される。殆どが同一個体と考えられる破片で、出土点数は少ない。破片には殆ど彎曲が見られず、隅丸方形の器形となる可能性がある。

文様は0段の縄による2列を1単位とする格条体圧痕文を横位に数段施文し、その間に自縄自巻B種の圧痕を押圧している。自縄自巻の圧痕は2つの筋が1単位となって表出されており、自縄自巻原体を縦位またはやや斜位に押圧しているのである。角頭状の口唇部にも押圧縄文が加えられている。また、内面にはRLの回転縄文が浅く施されている。

103は縦条体圧痕文の下部に回転繩文が施文されており、胴上半部の縦条体圧痕文等による文様帶以下は回転繩文が施文されているものと考えられる。一方、内面の繩文施文は口縁部に限られるようで、胴部内面には施文が見られない。胎土に雲母粒を多く含む特徴があり、器厚は5mm前後で器面調整は丁寧である。

第4類 (108~116)

自繩自巻A種の原体を折り曲げて押圧した、俵状の圧痕文が施文された土器である。

108~110は同一個体で、口縁部が内巻気味に立ち上がる形態で、粘土を口縁下に折り返すようにして、断面三角形の有段状肥厚口縁を形成している。自繩自巻の圧痕文は、肥厚部の稜線を挟んで異方向に押圧されており、羽状構成となっている。口縁部破片のみのため胴部以下の文様構成は不明であるが、108の右隅には斜位の側面圧痕が見られる。器厚は3~4mmで焼成の良い堅密な土器である。内面には指頭圧痕による浅い凹部が看取される。

111~114も内巻気味に立ち上がる器形であるが、粘土帶の折り返しによる肥厚口縁は形成されない。口縁部に自繩自巻A種の圧痕文を施文し、頸部以下には回転繩文を施文した土器である。内面には指頭圧痕が顕著に観察される。器厚は4mm程度を測る。

111は口縁直下より自繩自巻A種による縱位の圧痕文を多段に押圧している。圧痕文は各段の施文間隔が密で、上部の押圧に一部重なるように下段の押圧が行われている。113は口縁下に3段の圧痕文を押圧し、以下には回転繩文が羽状に施文されている。圧痕文は最上段の一列を縱位に押圧し、以下は施文方向を変えた羽状構成となっている。114も同様な文様構成で口縁部文様下部にはR LとL Rの2種類に繩文により羽状繩文が施文されている。112も同様な構成となるであろう。何れも内面には押さえたような指頭圧痕が整然と観察される。115・116は細かい自繩自巻の圧痕を施した小破片であるが、同様な構成をとる口縁に近い部位であろう。

有段肥厚口縁となる108~110と、肥厚せず頸部以下に回転繩文を施文する111以降とは類を分けるべきかもしれない。

第5類 (117~143)

横位の側面圧痕文を多段に配し、その間に自繩自巻A種の押圧文を有する土器である。自繩自巻の押圧は段毎に施文方向を変えており、羽状構成となる。また、側面圧痕文に重なるように細い爪形文状の刺突文も加えられている。ほぼ直立する器形で、口端は角頭状となる。121・122・124・134~137は側面圧痕が複数段施文され、文様区画となっている。この側面圧痕は段ごとに原体を異にしており、側面圧痕全体が羽状構成となっている。138は下部の側面圧痕が斜位となる。

139~143は側面圧痕文間の押圧が自繩自巻だけではなく、おそらく同一原体によるであろう先端刺突も併用している。全体の文様構成は前述のものと同様である。117・118は胎土に雲母粒を多く含み、第3類の98等の土器と類似する。器面調整は丁寧で内面には横位の整形痕が観察でき、指頭圧痕は見られず平滑に仕上げられる点も98に類似する。

全体に胎土が精緻で、焼成の良い堅密な土器である。破片には彎曲が殆ど認められず、隅丸方形の器形となる可能性がある。器厚は3~4mm程度のものが主体で、最大でも6mm程である。

第6類 (144~154)

基本的な文様構成は第5類と同様で、自繩自巻の押圧の代わりに先端刺突文を施した土器群である。文様構成は多段の側面圧痕文間に先端刺突を押圧し、側面圧痕文に重なるように細い爪形文状刺突を加えた

もので、構成は第5類と全く同じである。ただし、第5類では口唇部には施文が見られないが、本類は口唇上にも回転繩文と思われる圧痕が見られる。また、側面圧痕間が自繩自巻でなく先端刺突のため、側面圧痕文の間隔が狭いものとなっている。側面圧痕文は殆どがRの圧痕文である。本類の土器も破片に殆ど弯曲が見られず、隅丸方形の器形となる可能性が高い。

144・145は胎土に砂母粒を含み、第5類の117・118に類似する。一方、150は胎土に含有物を殆ど含まない土器で非常に堅緻な土器となっている。胎土や器面調整・器厚等は前類と共通する要素が多い。150～154は内面に指頭圧痕による凹凸が見られる。

第7類 (155～160)

側面圧痕文による工字状の幾何学的な文様帶を構成し、その間に自繩自巻B種の圧痕を押圧した土器群である。長い側面圧痕文により文様の構成を行う点は第5・6類と共通する。

155は直立する口縁部破片で、破片の弯曲が片方に偏り一方が直線的となることから、前2類と同様に隅丸方形の器形となる可能性が高い。文様は口縁下より横位の側面圧痕を多段に押圧し、その間を短い側面圧痕で繋ぎ工字状の文様帶を形成している。また、横位の側面圧痕間には自繩自巻B種の圧痕文も押圧している。更に、胸部や口唇部には回転繩文が施文される。

156も同一個体で同じ文様構成となる。破片は弯曲が殆ど見られず、前述した想定器形を窺わせる。器厚は5～7mmとやや厚手となり、胎土に砂粒を少量含む。器面調整は丁寧で若干の凹凸は見られるものの、おおむね平滑に仕上げられている。157～160は同じ文様構成をもつ小破片。

なお、本類の側面圧痕文は殆どが2段のRLの圧痕文で、第5・6類の1段の繩とは異なる。

第8類 (161～213)

撚紐を長く押圧した側面圧痕文や先端刺突等撚紐の一部を押圧した文様をもつ土器群である。

161～180は長い側面圧痕が横位多段に施文されている。161～169は段毎にRとLの施文原体を代えることにより羽状構成の側面圧痕文となっている。161は粘土帯で剥落した継口縁で、接合部は薄く上方に引き延ばされている。169は器厚が3mm程と薄手で、押圧される側面圧痕も細い原体を使用している。

170～180は1段のRやL、2段のRLやLRを横位多段に押圧したもので、施文間隔は数mmと狭い。174は器厚が10mmと厚手で、胎土も厚いものである。

181～203は側面圧痕を横位や斜位に押圧し、幾何学的な文様構成となるものである。全体の文様構成は明らかでないが、口縁下から數本を1単位とした側面圧痕文を斜位や縦位に押圧しており、羽状又は鋸歯状の構成となるものと思われる。横位の側面圧痕文を有するものもあり、文様帶の区画としているとも考えられる。器厚が3mm程の薄手の土器が多い。

204～213は撚紐の先端等を押圧した土器群である。205～208・210・211は撚紐先端の環状となった部分を押圧したものである。209は先端刺突と共に莖上工具による細い爪形状の刻みと、自繩自巻と思われる圧痕文が併用されている。204は地文に回転繩文が施文されている。指頭圧痕が観察されるものもある。213は2mm程度と非常に薄手で、有段状となる。

第9類 (214～218)

有段の口縁部に幾何学的な文様帶を側面圧痕文や莖状工具により描き、胸部には回転繩文を施文した土器群である。いわゆる室谷第1群土器にあたる。

214は幅4cm程の有段の口縁部文様帶を持つ。口縁部文様帶は上下端を横位の長い側面圧痕文で区画し、

その中と同じ側面圧痕文で鋸歯状に施文している。側面圧痕文は細いRの燃紐の押圧で、口唇部には爪形状の細い刻みが加えられている。段帯下部の胴部にはRの無節縄文が横位に施文される。段帯部内面には指頭圧痕が見られ、器厚は6~7mmとやや厚手である。215~217は同一個体の破片と考えられる。

218はC-3区皿層・C区テラス斜面部で同一個体片がまとまって出土したものである。大形破片があり、湯倉洞窟草創期土器群の中で唯一全体の器形等を伺える資料である。口径28.0cm、底径13.0cm、器高19.2cmの隅丸方形の鉢状の器形が想定される。

低い襟状の段帯となる口縁部文様帶は、幅4mm程の竪状工具による2本1単位の浅い押し引き文を鋸歯状に施し、押し引き文間に同一工具による刺突文を加えている。全体の文様構成は214と類似しよう。段帯下の胴部には回転縄文が底部まで全面に施文される。胴部に施文される縄文は、横位施文を主体とするが、部分的に羽状や菱形状の構成となる部分もある。底部も隅丸方形の平底で、周縁部に縄文原体の押圧がなされて窪み、やや上げ底状となる。この押圧縄文は底部周縁部のみでなく、中央部等にも列状に見られる。胎土には砂粒等を多く含み、器厚は4~5mmを測る。器面調整は丁寧で平滑に仕上げられているが、幅2cm程度の粘土帶積み上げ痕観察できる。第35図は同土器の個別資料である。

第10類(219~223)

胴部の屈折部に絡条体圧痕又は刺突文を施し、回転縄文が施文される土器である。

219は算盤玉状に屈折する胴部破片で、屈折部に數mm間隔で絡条体又は刺突による圧痕文が施され、屈折部より上部には無節Rの回転縄文が施文される。圧痕は幅1mm、長さ2~3mmの細かい方形で、形状のみからは細かい刺突文のように見えるが、圧痕内に弱い擦りのかかった纖維痕かと思われる痕跡も見られ、原体の特定は難しい。屈折部上部の縄文は非常に細い原体の回転で施文も浅い。胎土に雲母片等を少量含むが、焼成の良い堅緻な土器である。内面に指頭圧痕が観察される。220・221・223は219と同一個体と考えられる小破片である。

222は屈折しない胴部片で、219と同様な圧痕を有する。

第11類(224~264)

地文として回転縄文が施文され、その上に押圧縄文を付加した土器である。自縄自巻を含む絡条体圧痕や縄文原体の先端刺突・長い側面圧痕文等を回転縄文の施文後に加えている。

224・225は内縁気味に先細りとなる口縁部の同一個体で、RLの回転縄文を地文とし、口端部に細かい縄文の圧痕が押圧されている。絡条体圧痕又は自縄自巻の押圧と考えられる。

226~229は口縁下に先端刺突を加えている。231~240は胴部に圧痕が加えられたもので、232は絡条体圧痕文が横位に2段押圧されている。他も絡条体圧痕や自縄自巻による圧痕を回転縄文の施文端部に加えている。概して薄手の土器が多い。

241~264は長い側面圧痕を付加している土器である。側面圧痕は殆どが口縁より少し下がった部位に横位に押圧され、二段のLRを押圧したものが多い。地文となる回転縄文もLRが多い。

245は緩やかに外反する器形で、LRの回転縄文が施文される口縁下に1列の長い側面圧痕文が押圧されている。平坦となった口唇部にも回転縄文が施文される。施文原体は回転縄文・側面圧痕文ともLRである。口唇部にも回転縄文が施される。250~251は胴部に側面圧痕が加えられるもので、250では2列の側面圧痕が横位に押圧されている。251は破片上部にLの側面圧痕が施され、以下には細かい原体による羽状縄文が施文される。

第12類 (265~288)

自繩自巻の原体を回転施文した土器である。口縁部には押圧縄文等が加えられるが、おおむね口縁より胴部まで回転方向を変化させながら羽状又は矢羽根状に施文される。器厚は4mm前後のものが多い。

265・266は、口縁下1cm程度で大きく内側し、有段の受け口状の口縁形態を呈する。内湾する口縁部には自繩自巻の横位回転文が施文され、段帯部下端には先端刺突又は自繩自巻A種の圧痕が加えられている。また、口唇部には爪形状の刻みが加えられている。267も同一個体であろう。

268・269は口唇部を欠失した破片と考えられ、直立する形態であろう。自繩自巻の回転文が羽状に施文され、破片上端に押圧縄文が加えられている。

第13類 (289~291)

平底の底部を一括した。平底の底面には回転縄文が施されている。大きさはなかなか揃みにくいが、円形でなく、隅丸方形の器形となる可能性もある。第9類等の底部の可能性がある。

第14類 (292~325)

棒状工具による押し引き文や刺突文を施文した土器群である。出土層位はA・B・XI・XII層を中心で、他の多縄文系土器や爪形文土器と重なる。出土点数は40点程度と少ない。

292~307は棒状工具による押し引き文が施文されている。同一個体と想定される破片が多く、せいぜい数個体分であろう。施文は棒状工具を器面に押しつけてから押し引くように行っており、施文された文様は楔状を呈する。

292・293は同一個体と思われるほぼ直立する口縁部で、口縁直下より縱位に押し引き文が施文される。胎土に細かい鉱物粒を少量含み、他の土器に比べやや砂質な感じとなっている。文様は上部が深く下端は浅く細くなる楔状となっている。

294~307は押し引き文を羽状に施文したものである。いずれも胎土に含有物を殆ど含まない焼成の良い堅緻な土器で、内面には指頭圧痕や浅い横位の条痕状の調整痕が看取される。器厚は5~6mm。押し引き文は工具を器面に押しつけ、僅かに引いた後もう一度器面に押しつけ、それから器面から離すように引いており、途中に節状となる。一回の施文は1~1.5cm程の長さである。文様は押し引き文が縱位の羽状構成となるように多段に施文されている。294は破片上部が無文となる口縁部に近い破片と考えられ、口縁部破片との文様の繋がりは明らかでない。

308~314は前者よりやや細い工具を器面に刺突した土器である。刺突文は前者の押し引き文を短くしたような楔状のものと、細長い横円形を呈し第2群の円形押圧文を斜めに押圧したようなものとがある。いずれも施文は、土器の下方より斜め上に突き刺すように行っている。胎土には砂粒等を含むが焼成の良い土器で、前者程堅緻には感じない。器厚は3~4mmのものが多く前者よりやや薄手で、内面には指頭圧痕が観察される。308の口唇部には刻み状の刺突文が加えられる。

315~325は0段の絡条体圧痕文のような文様が横位や斜位に施文される。一見、半裁状の工具による連続刺突文のように見えるが、圧痕内には纖維痕のような細かい痕跡が見られ、絡条体等の原体を押圧している可能性もある。文様構成は定かでないが、圧痕文を横位多段に施文するか、横位施文を区画とした羽状構成となるものと思われる。317は側面圧痕又は自繩自巻原体の回転文が併用されている。315の口縁部片は、口唇部が肥厚し、押圧縄文が施文されている。

5 第5群 回転繩文土器 (第39図~第46図)

器表面に回転繩文が施文された土器を一括する。施文された繩文は殆どが単節斜繩文で、少量の無節繩文等はあるが、「正反の合」による異条繩文等は存在しない。非常に薄手で胎土に混入物を殆ど含まない堅穀な土器から、厚手で混入物を多く含みやや焼成の弱い土器まで多様な土器が認められる。

時期的にも、草創期の多繩文系土器に属するものから、早期押型文土器等に伴うものまで、かなり幅広い時間幅を持った土器群となろう。本来なら各土器群毎に出土文化層を明確にしたうえで、各時期毎に分類すべきであるが、本洞窟の場合、長期間にわたる継続的な利用活動に起因する包含層の搅乱等により、土器群の層位的な把握は困難な状況である。また、施文された文様も繩文のみという特徴をつかみにくくものであることから、ここでは、とりあえず草創期から早期中頃までの土器群と大きく捉え、施文された繩文の特徴や器面調整・胎土・器厚等の属性の違い等により分類した。しかし、その変化は漸移的であり、明確に峻別することが困難である。

報告にあたっては、分類基準に沿って図示すべきであるが、峻別しがたいものが多数となるため、図版は原体種毎に提示してある点をあらかじめご了承願いたい。

第1類 (1~55・65~134・193~222)

薄手で胎土が精緻な土器である。器厚が4mm以下と特に薄手で、指頭圧痕等による凹凸が器面に顕著に看取される1a類と、器厚が5mm前後で器面調整がやや丁寧となる1b類とがある。施文される繩文には、LRとRLの2種類の原体を用いて羽状構成をとるものと、単節斜繩文のものとがある。単節斜繩文の場合LRが圧倒的に多い。

1a類 (1~25・65~79・93~207)

1~25は2種類の原体を用いた羽状繩文が施文された土器である。器厚が4mm未満と非常に薄手で、堅穀な土器である。胎土は混入物を殆ど含まないか、微量含む程度で精緻である。

1~11は同一個体で、ほぼ直立する深鉢形を呈する。口縁下でやや膨らんでから内壁し、口端は先細りとなる。底部形態は不明。1の大形破片は弯曲の乏しい破片で、隅丸方形の深鉢形となる可能性もある。口縁直下よりLRとRLの2種類の施文原体を用いた羽状繩文が施されており、全体としては大形の菱形構成をなしている。内面には指頭圧痕による凹凸が数多く見られ、そこには指紋状の非常に細い皺が観察される。指頭圧痕は口縁内面部が特に顕著であり、口縁部の形成にあたり、指で押さえながら横位に削り取るように薄く仕上げている工程が想定できる。また、器表面にも内面の指頭圧痕と呼応するように凹凸が認められる。

12~25も同様な土器群である。12は内側する口縁形態で、口縁内面には指頭圧痕と横位のナデ成形痕が看取できる。13はそのまま直立する口縁形態で、口縁内面を押さえて薄くしている。全体の文様構成がうかがえる程の資料はないが、いずれも2種の原体による羽状構成をとっている。1と同じく全体としては菱形の構成となるのであろう。16~18は特に薄手で、器厚は3mm以下となる。器面は平滑で、胎土に微量の石英粒等を含むのみで、堅穀な土器である。指頭圧痕が残る。

65~79はLRの単節斜繩文を施文した土器である。羽状構成の土器のように口縁付近で内壁し、先細りの口唇形態になるのではなく、直立気味で口端に向かい徐々に厚さを減している。65・66はやや内壁気味となり、67~71は若干外反気味の形態となる。いずれも器厚が3~4mm程度と薄手で、胎土に微量又は少量の鉱物粒等を含む。器面は平滑に仕上げられるが、指頭圧痕による整形痕も残る。

193~207はR Lの単節縄文を施した土器である。口縁部は小片のため形態がつかみにくいが、193は先細りとなるが、他は直立意味に立ち上がる形態となる。194・195・197は口縁端を横位にナデ整形される。器厚は、2.5~3.5mm程度と薄手で、細かい鉱物粒を含むものもあるが、全体的としては混入物の少ない堅緻な土器である。器面に指頭圧痕が観察できる資料も多い。

197・199は器厚が若干膨らんだ部分に帯状に施文される。断面観察では明瞭でないが、粘土帯の接合部にあたる。その施文手法は表裏縄文の内面施文に似る。204は施文部上部が無文となり、破片上端に縄文の押圧または回転痕が看取できる。また、内面にも僅かではあるが縄文が施文される。

1 b 類 (26~55・80~134・208~222)

26~55は2種の原体による羽状縄文が施文される土器である。器厚が5mm程度とやや厚手となる点を除けば、1 a 類に類似する。器面には指頭圧痕が観察されたり、器厚に凹凸が見られるのもの存在するが、概して1 a 類より器面調整が丁寧となる。また、胎土に鉱物粒を含むものもあり、1 a 類より胎土がやや粗雑に感じられるものも含まれる。

30は胴部中程で大きく外反する器形となり、横位施文による羽状縄文が整然と施文される。破片上端は自縄自巻A種の押圧かも知れない。内面には押圧に対応するように指頭圧痕が見られる。下端は粘土帯接合部で剝離しており、断面が逆U字状となる。胎土に混入物を殆ど含まない緻密で堅緻な土器である。26・28も押圧縄文が押圧されている可能性がある。

31は稜を形成して屈折する胴部片で、稜を挟んで横位施文による羽状縄文が施文される。胎土には砂粒や鉱物粒を多く含む。32もやや屈曲する破片で、内面は凹凸や横位の条痕状の調整痕等が観察される。

33~55も羽状構成をとる土器で、横位施文による横方向の羽状構成が多いが、44・45は縦方向の羽状構成となっており、1 a 類に見られたように全体としては菱形の文様構成となるのかもしれない。施文される縄文は26・49のように細かいものから、55のように太く撚りの弱いものまでバラエティーがある。

80~134はL Rを施文した土器である。個体差が大きく、多時期のものを一括している可能性もある。80~83は同一個体で、直立する口縁形態である。口縁直下より横位施文され、口唇部にも施文される。81には補修孔が1個穿たれている。若干の凹凸が見られるものの器面調整は丁寧である。胎土に石英等の鉱物粒をやや多く含む。84~93も外反気味のものも含むが概ね直立的に立ち上がる口縁形態である。86・92は135等と同一個体で第2類に入る可能性がある。

94は口縁下、95は口縁直下で外側に屈曲するもので、表裏縄文土器の口縁部形態に類似する。屈曲部周辺には指頭圧痕が見られ、成形方法や色調・胎土等も表裏縄文土器に類似する。96は口縁直下でやや外反する土器で、ナデ調整された口唇直下より縦走する縄文が施文される。一見、関東地方の撚糸文系土器群の縄文施文土器に類似する。

97は屈曲により段帯の口縁部を形成するものであるが、屈曲は弱く、明瞭な段帯とはなっていない。屈曲部を無文とし、他は縄文が施文される。

96~101は同一個体で、口縁下で弱く外側に開く形態となる。大粒の縄文が全面に施文され、口縁直下は縄文原体を押しつけるようにしている。口唇部には施文されない。内面には指頭圧痕による凹凸が見られ、胎土には砂粒や鉱物粒を含む。

102~134は胴部片で、横位施文の斜縄文が多いが、縦走するものも一部見られる。細かい縄文が殆どであるが、132~134のように粗いものも含まれる。また、胎土も精緻で堅緻なものから鉱物粒等を含むもの、器面調整も指頭圧痕が目立つものから平滑に調整されるものまで、多様な土器が存在する。

208~222はR Lを施文した土器である。208~213の口縁部は何れも直立する。213を除き口唇部にも施文される。215・217は堅緻な土器で、1 a 類の1等と同一個体の可能性がある。220~222は細かい縄文が施

文された土器で、胎土に雲母粒を含み器面調整も平滑である。

第2類 (56~64・135~192・223~257)

1類に比べ厚手で、砂粒や鉱物粒を含んだやや粗雑な胎土となる土器である。羽状構成を有するものは少なく、LRの単筋縄文を施文したものが多い。

56~64は羽状構成となる土器である。1類に比して厚手で、器厚は5~7mmを測る。56・57・60を除き胎土に石英や雲母粒等の鉱物粒を含み、赤褐色に近い色調を呈する。1類のように明確な羽状構成ではなく、施文方向が不揃いなものも含まれる。LRとRLの2種類の原体を用いていると考えられるが、原体が不明確なものも存在する。58・62は縦位に施文している。

56は刹落部にも縄文の施文が見られ、縄文施文が成形後一度に行われるのではなく、粘土帶積み上げの成形に伴って実施されていることが分かる。63・64は器内面に凹凸が顕著に看取され、胎土に微量の纖維を混入している可能性がある。

135~192はLRの縄文が施された土器である。135~142は同一個体である。ほぼ直立する口縁形態で、口唇部は丸みを帯びた平坦となり、口唇部にも縄文が施文される。縄文は筋の太いや粗い原体で、口縁直下より横位または斜位に全面施文される。施文方向は一定でなく、条が斜行または横走気味となる部分も見られる。胎土には砂粒や石英粒等を含み、器厚は5~6mm程度である。器面は内外面とも概ね平坦に仕上げられるが、141・142の胴部では若干凹凸があり、また、縄文原体を引きずったような浅い痕跡が見られる。もしかしたら内面にも施文をしていたのかもしれない。136には補修孔が穿たれている。

143は口縁下で外反する器形で、表裏縄文の口縁形態に類似する。胎土は精緻で焼成もよく堅緻な土器である。器面は平滑に仕上げられている。

144~148・157~161・164・165は胎土に混入物を僅かしか含まず、焼成の良い堅緻な土器群で、145・148・164・165は平滑に仕上げられるが、他の土器は内面に凹凸が見られる。

149~156・158~160・162・163・166~169は砂粒や石英・雲母粒等を少量含み、前述の土器に比べやや精緻さに欠ける胎土の土器群である。若干の凹凸が器面内面に見られるが、概ね平滑に仕上げられている。156は胎土に混入物が少ない。斜行縄文が主体であるが、156・157・161・165・166のように縦走気味のものも存在する。

170~192は胎土に砂粒や石英・雲母粒などを比較的多量に含む土器で、胎土はより粗い感じを受ける。器厚は6mm程度が多く、7mm以上のものも存在する。概して器面調整は良好で器面は平滑に仕上げられたものが多いが、内面に指頭圧痕によると思われる凹凸を有するものも見られる。170~172は口縁下で外反する器形で、170はやや外反が強い。173はやや先細りとなる直立口縁で、少量の砂粒等を含むが145等と同じ土器かもしれない。

169・176は1回の施文範囲が狭く、比較的細かい縄文を施文しており、表裏縄文の土器と類似する。223~255はRLを施文した土器である。226~228・230・231・233・234・239・240は胎土に含まれる鉱物粒等が割合と少なく、堅緻な感じの土器である。234はやや内面に指頭圧痕が目立つが、他の土器は概ね平滑に仕上げられている。口縁形態は緩く外反するものが多く、231を除き口唇部には施文されない。

223~225・229・235~238・241は前述の土器よりやや精緻さに欠ける土器群である。238は雲母粒を多量に含むほか、それ以外の土器も胎土に砂粒等を含んでおり、堅緻な土器とはなっていない。器面調整は概ね良好である。

242~257は、更に胎土が粗い土器群で、雲母等の鉱物粒や砂粒等を多く含む。242・243は口縁下で緩く外反する器形を呈し、242は口縁下より縦走する縄文が施文される。

256・257は無節Rの縄文を施した土器で、1回の施文範囲は狭く、重複させながら施文しており縄文の走行も一定しない。

258・259は無節のLを施した土器である。内面は非常に平滑に仕上げられている。時期を違えている可能性もある。

6 第6群 表裏縄文土器（第47図～第50図）

器面の表裏に回転縄文を施した土器群である。出土層位は他の草創期土器群と同様に洞窟下層部のIX～X層に及ぶが、爪形文土器や多縄文系土器より上層に分布する傾向が見られ、IX・X層に出土のピークが見られる。

土器は回転縄文が施文されるのみで、他に装飾的な文様を持たない。施文は表裏面とも同一の原体を用い、横位施文の斜行縄文を主体とし斜位施文による縱走・横走縄文も少量認めらる。縄文原体は単節縄文が殆どで、無節の縄文は見られるが、複節縄文や正反の合のような原体は存在しない。単節縄文ではLRが圧倒的に多い。

器形全体を窺える資料はないものの、大型破片によると口縁からそのまま底部にすばまる形態で、底部は尖底あるいは丸底と想定される。器厚は5～7mm程度で、胎土に石英や雲母・砂粒等を含む。器面は概ね平滑に仕上げられているが、内面に指頭圧痕による浅い凹凸が残るものも認められる。成形の際、粘土帯を上下に長く重ねるように接合し、接合部が厚手となる傾向がうかがえる。このため、余程明瞭でない限り断面に粘土帯を示しなかったが、やや厚手となった部分等が粘土帯接合部と言える。

出土点数は300点弱であるが、内面施文が口縁部のみに限られる土器の胴部片は、元々内面施文を有しない回転縄文土器と峻別できないため第5群土器として一括し、本群土器から除外している。口縁形態と内面の施文部位の差異により細分できる。

第1類（1～25）

直立する器形で、内面施文が胴部内面まで深く入り全面施文される類である。胴部片を含めた出土点数は76点と多いが、同一個体片が多く、実際の個体数は図示した3個体のみである。

1～17は同一個体と想定される。口縁は直立し、口唇部は丸頭状を呈する。推定口径は28cmを測る。表面は口縁直下から無節Rの原体を斜位施文した縱走縄文を全面に施す。一方、内面は横位施文の斜行縄文で口縁部や胴上部では全面に施文されるが、胴下半部では厚手となった粘土帯の接合部に施文され、粘土帯中央部では施文されない部分もある。これは、内面施文が文様効果としてのみでなく、土器成形上の技法的意味合いも含んでいるためであろう。1回の施文範囲は狭く、器面には施文の重複が見られる。そのため縄文の走行も一定せず、斜行したり横走する部分も認められる。器厚は5mmで胎土に石英や砂粒を少量含む。内面には煤の付着が見られ、粘土帯接合部には指頭圧痕による凹凸が認められる。

18～21は直立する口縁形態の同一個体片で、口縁部に向かいやや薄手となり口唇部は先細りの丸頭状となる。施文は、表面では口縁直下よりLRの縄文を横位施文し、内面は口縁直下に無文部を残し、以下には表面と同じくLRの縄文を横位施文している。器厚6～8mmを測り、胎土は微細な砂粒等を少量含むのみで堅硬な土器である。胴部片の5は補修孔が1個穿たれている。

22～25も直立口縁の同一個体片である。口唇部は丸頭状となり、口唇部や口縁内面は横ナデ整形される。表裏両面にLRの縄文が横位施文される。ただし、25は口縁内面を無文としている。器厚5mm前後と薄手で、胎土に混入物を殆ど含まない堅硬な土器である。

第2類 (26~33)

口縁下で「く」の字状に外側に屈曲する形態を呈する。出土点数は10点と少ない。内面施文は口縁部内面のみに限られ、口唇部にも施文される土器が多い。

26は口縁部を摘むようにして外側に屈曲させている。そのため、やや薄手となった屈曲部の上下には、指頭圧痕が認められる。表面はLRの縄文を縦位施文するが、屈曲部では施文が不明瞭となる。内面は屈曲部より上部のみに横位施文している。器厚は5mmと比較的薄手で、胎土に石英・雲母・砂粒等を含む。

27は口縁下1cm程の所で折り曲げるように強く屈曲させ、屈曲部に縄文原体の押圧が加えられる。表面の施文は屈曲部より下部にLRの縄文が横位施文され、口縁から屈曲部までは一部に縄文が看取されるのみである。内面は口縁部2cm程の範囲のみに横位施文され、また薄手で丸頭状の口唇部にも施文される。

28~33は口縁下で強く屈曲する口縁部破片で、いずれもLRの縄文が横位施文される。32は屈曲部より以下がやや縦走気味の走行となり、屈曲部を境に施文方向を変えている可能性がある。口縁直下は横ナデされる。33は屈曲というより大きく外反する形態に近く、屈曲点が明瞭でない。表面の口縁下は施文されない。口唇部が角頭状となる28の他30~32は口唇部にも縄文が施文される。小破片で判然としないが内面施文は口縁部に集中する傾向が強いと思われる。

第3類 (34~49)

口縁が外反する土器で2類のように明確な屈曲点がなく、胴部からそのまま緩やかに外反する形態である。出土点数は26点、39・43・47・49のように外反度が強いものと、外反が弱い36・45等がある。1・2類に比べやや厚手で、器厚6~7mm程の土器が多い。施文される縄文にはLRとRLの両者が見られるが、LRの方が多い。34~44はLR、45~49はRLが施文される。内面施文は2類と同様に、口縁下の範囲に限られるものが多い。口唇部は角頭状と、やや薄手となり丸頭状となるものとがあり、ここにも施文される傾向が強い。

34~37は口縁下と胴部とで縄文の走行が異なっており、「口縁部文様帶」を意識した文様構成となる。34は胴部より緩やかに外反する器形で、表面の口縁下には横位施文の斜行縄文が施文され、以下の頸部は斜位施文の横走縄文となる。胴部ではまた斜行縄文になると想定され、頸部のみ走行を変えることにより口縁部・頸部・胴部とに分けた文様帯を形成しているように見える。内面は、口縁下1.5cm程の範囲に口唇部も入れると横位に三段施文が行われている。

35も同様な文様構成となり、口縁下の斜行縄文は羽状構成となっている可能性がある。口唇部にも施文される。37は口縁下が斜位施文の縦走縄文で、以下は横位施文される。内面は全面に施文されており、口縁内面のみに限定されるのではなく、胴部まで施文が及んでいる可能性がある。

39は口縁下1.5cm程から大きく外反する器形を呈する。表面はLRの縄文が横位施文され、一回の施文範囲は狭く、施文部を重複させながら全面施文している。内面施文は口縁部のみに限られ、LRの縄文を横位に二段施される。胎土に雲母粒を多く含み、器厚は7mmを測る。

41は器厚5mm程と薄手で、表面は縦位施文される。44は表面が無文となり、内面にLRの斜行縄文が施文される。口唇部も施文されない。

45はやや厚手の土器で、口縁下で緩く外反する。表面はRLの横位施文を基調とするが、部分的に条が左下がりとなる部分が見られ、羽状構成をとる可能性がある。角頭状の口唇部及び口縁内面1.5cm程の範囲も施文される。46・48の表面は斜位施文の縦走縄文となる。

第4類 (50~65)

口縁部が直線的に外傾する類であるが、3類と明確に分離し難いものも多い。口唇部は丸頭状または丸みを帯びた角頭状となり、やや厚みを増して肥厚気味となるものもある。一部を除き口唇部にも施文される。内面施文の範囲は小破片が多く明確でないが、口縁部のみに限られるものが多いと思われる。表面の施文は他類と同様横位施文を基本とするが、斜位施文により縱走縄文となるものも存在する。総数39点を数え、本群の中では出土数が多い方である。

50は無節のしの縄を横位施文している。7~9mmと厚手で胎土に少量の纖維を含んでいる可能性がある。ほぼ直立する形態で、内面施文は一部施文方向を変えて羽状構成となる。他の土器と時期が異なる可能性がある。

51~58はLR、59~65はRLの縄文が施文される。いずれも小破片で全体の文様構成等はわかりにくい。

56は、口唇部が膨らみ肥厚気味となる。表面は横位施文の斜行縄文であるが、一部に条の走行が異なる部分も見られ、羽状構成となる可能性もある。内面は横位施文され、口唇部にも縄文が施される。

57~58の表面は斜位施文の縱走縄文となる。57の内面は口縁下が横ナデされ無文となり、それ以下にLRの縄文が横位施文される。59は直立気味に緩やかに開く器形を呈する。口縁端部に薄い粘土粒の盛り上がりが見られるが、これは意識的に瘤状の粘土粒を貼付したものか、口縁部の成形時に外側に粘土を折り返して出来たものか判然としない。やや太目の縄文原体で、内面は破片全面に施文されている。胎土緻密で堅硬な土器である。55~65を除き口唇部にも施文される。55は縄文の施文はないものの、浅い刻みが一つ加えられている。61は口縁下に補修孔が穿たれる。

第5類 (66~105)

表裏に縄文が施文された胴部片を一括した。123点の出土数をみると、1~4類の口縁破片数88点よりやや多い程度の数量である。これは胴下半部まで内面施文される1類のような土器が少なく、内面施文が口縁部に限られる傾向が強いため、胴部片では内面施文が認められない土器となることが多いのであろう。

また、内面施文された本類土器を観察すると、全面施文というより、無文部をはさんで横位帶状に施文される傾向が看取でき、1類の内面施文と同様に粘土帶接合部に施文している可能性が高いものと考えられる。施文されている縄文はLRが大半であるものの、RLや両者を用いた羽状縄文等も存在する。1類土器に無節のR以外にLRの縄文しか認められないこと、同一個体片が多く実際の個体数が少ないと合わせて考えると、本類には2~4類に属する胴部片も含まれるものと言える。ただし、粘土帶接合部に施文されたものがあるとしても、1類のように胴下半部まで施文されたかどうかは明らかでない。

なお、内面施文を持たない2~4類土器の胴部片も当然存在するはずで、これについては最初にも述べたようにここでは扱わず、第5群土器として一括した。

66~99はLR、100~102はRLの縄文が施文される。66~67は比較的大形の胴部片である。雲母を多く含む点など、3類の39と類似する。表面はLRの縄文を横位施文しているが、条が横走気味となる部分も認められる。1回の施文範囲は狭い。内面は2cm程度の無文部を挟んで帶状に施文されており、粘土帶接合部への施文と言えよう。内面には指頭圧痕による浅い凹凸が見られる。

71~73・77・86は粘土帶接合部が凝口縁となる破片で、その内面に縄文が横位施文されている。この他、70・76・80・81・84・87・89~91・93も粘土帶接合部への施文と考えられるものである。これらは断面に明瞭な接合痕が看取できないもの、器厚が厚くなるなどの特徴が認められる。なお、70・71・77・86は接合面が剥落しており、その剥落面にも縄文の施文が観察できる資料である。このことは、縄文の施文が土器全てを成形した後一気に施文するのではなく、数段単位で粘土帶積み上げ→縄文施文→粘土帶積み上

げを繰り返しながら土器成形を行っていたことを証明している。施文は表裏面とも横位施文を基調とするが、横走縄文や縱走縄文となるものも含まれる。

97・98は破片上部が外反気味となっており、口縁に近い胴上半部の破片と推察できる。内面施文は破片上部に僅かに見られるだけで、内面施文が口縁部に集中する2~4類に属するものであろう。

72・83は他に比べ筋が大きい縄文で、一方98は細かい筋の縄文となっている。

103は、表裏両面ともLRとRLの二つの原体を用いた羽状構成となっている。表面は器面を平滑に調整後、浅く施文されている。

104・105は表面は他と同じ回転縄文であるが、内面は回転縄文ではなく縄文原体を用いた格条体条痕が横位に施文されている。表面の縄文は104がRL、105はLRである。

7 第7群 摋糸文土器（第50図）

撋糸文が施文された土器群で、出土点数は30数点と少ない。

1から5は胎土が緻密で器面調整も丁寧で平滑に仕上げられた土器である。1はやや肥厚する口縁形態で、口縁直下より軸に密に巻きつけられたRの撋糸文が縦位に施文される。口縁直下は横ナデ調整が行われ、口唇上部にも撋糸文が施文される。また、口縁内面にも横位に施文された痕跡が見られる。2は1と同一個体と思われ、1と同様に密に巻かれたRの撋糸文が縦位に施文される。3は1・2よりやや厚手で、密な撋糸文しが縦位に施文される。器面調整は丁寧である。4・5はやや斜め方向に撋糸文が施文される。

6は石英粒や細礫粒などを含む厚手の土器である。Rの撋糸文が縦位に施文される。7は縱走する撋糸文が重なり合う不規則な走行となる。胎土に細砂礫や石英粒などを多く含む。図示した以外にも類似した土器がある。中には胎土に纖維を含むものもある。

8は表裏面に撋糸文が施された資料である。口縁下で弱く外反する器形で、口唇部は丸みをおびる。表面では口縁下には右下がり、以下は縱走から斜行する撋糸文が粗く施文され、口縁内面にも右下がりの撋糸文が施文される。撋糸文は撋りが弱く条間が開いた粗い撋糸文である。施文手法は表裏縄文土器群と共通する要素がある。

以上の撋糸文土器の内、1~5は細かい撋糸文が密に施文され、胎土も緻密で器面調整も丁寧な土器で、6・7とは趣を異にする。関東の撋糸文土器群に類似するものと考えられよう。やや肥厚する口縁形態で口唇直下より条間が密な撋糸文が施文され、口唇部にも施文されるありかたから撋糸文系土器群の中でも古い段階に位置付けられるようか。一方、6~7は胎土や器面調整が粗く、押型文土器などに伴う縄文や撋糸文が施文された土器に類似しようか。ただし、この場合、1~3に伴う在地の土器群は何かという問題が生じる。関東の撋糸文土器に平行する中部地域の土器群また、押型文土器などに伴う縄文施文・撋糸文施文の土器群については更に検討が必要である。

8 第8群 押型文土器（第51図~第54図）

押型文が施文された土器群である。出土層位はVII層から最下層のXII層まで及び、その範囲も洞窟全体に広がるが、VIII・IX層で比較的まとまって出土しており、表裏縄文土器より若干上位に分布の中心があるようと思われる。押型文には山形文・楕円文・菱目文・鋸歯状複合文等の種類があり、縦位帯状（密接）構成、異方向帯状、横位帯状・横位密接等の文様構成をとる。ここでは、文様構成により類別を行った。

出土総数は646点と多いが小破片が殆どで、全体の器形等を伺える資料はないが、口縁部が外反するもの

と、そのまま直立的に立ち上がるものがある。器厚は7~8mm程度が多いが、中には1cmを超える厚手の土器も存在する。胎土は草創期土器群に比べると粗く、砂粒等を多く含む。また、少量の纖維を混入しているものもある。器面は平滑に仕上げられる。

第1類 (1~9)

口縁より縦位帯状構成とする類で、口縁内面にも横位帯状に施文される。表出される文様は山形文のみである。出土点数は20点弱と少ない。

1~4は同一個体で、弱く外反する器形で口縁直下より山形文が縦位帯状に施文される。山形文はやや丸みをおび、凸部と凹部が同じ程度の幅を持つ。一周2単位で七条の山形文で、長2cm、太さ4~4.5mm程の原体で、両端は斜に削がれている。文様間の無文部幅は施文範囲より狭く1cm程度である。内面には表面と同一の山形文が横位に2帯施文されるが、表面ほど無文部の意識が強くなく、文様間の無文部は狭くなり、2では殆ど2帯が接するように施文されている。器面は平滑で、胎土に雲母等を含む。破片下端は粘土帯で割れており、一つの粘土帯幅は約2cmとなる。

5は、銳角で直線的な山形文が口縁直下より縦位に施文される。凸部が凹部より広く、五条以上刻まれている。口縁部はやや肥厚して稜を持つ。内面は横ナデにより平滑に仕上げられている。文様間に無文部をはさむか否か不明。6~9も1cm前後の無文部をはさんで縦位帯状に施文されている。凸部と凹部の幅はほぼ同じであるが、9は凸部が広い。6は浅い施文で、1~4と同一かもしれない。

第2類 (10~18)

口縁下を横位施文とし、以下は縦位とする異方向帯状(密接)構成となる類である。文様には山形文と楕円文がある。出土数は10点程と少ない。

10~11は同一個体で、山形文が広い無文部を持ち異方向帯状に施文される。山形文は鈍角で、凸部が凹部より広く、条数は3~4と少ない。原体は長さが1cm程度と推定され短い。器表面は内外面とも丁寧にナデ整形される。施文順位は横位が先で縦位が後である。

12は銳角的な山形文が破片上端では横位に、以下には縦位に施文されている。胎土や山形文の形状等が5とよく類似しており同一個体と考えられる。その場合、口縁直下からは縦位に施文され、頸部に横位施文をはさむ構成となる。無文部を持つかどうかは明らかでない。13も山形文が異方向密接施文されており、無文部が見られない。振幅の大きい一周2単位の山形文で、原体の太さは6mm程となる。

14~17は同一個体で、楕円文が異方向帯状(密接)施文される。楕円文は一周2単位で7条以上の小粒で細長い形状で第4類の小粒楕円文と類似する。原体は長さ2cm以上で、太さは4.5mm程となる。14は横位文様帯の上部に無文部を持つ。施文縦位は躍走する胴部が先で、横位施文が後である。9mm前後と厚手で、胎土に砂粒や褐色粒子等が多量に含まれやや粗雑な土器である。18も小粒な楕円文が異方向密接施文される。これらは、10~11のような山形文が異方向帯状施文される土器とは時期が異なるであろう。

第3類 (19~49)

口縁部から横位帯状の文様構成をとるものである。出土点数は60点余りで1~2類よりは多いが、押型文全体に占める割合は1割程度と低い。施文される文様には山形文・楕円文と菱目文がある。

19~29は山形文が施されたもので、胴部からそのまま直立する器形を呈し、口唇部は角頭状となる。施文される山形文はいずれも条数が少なく、短い原体である。原体の両端は斜に削がれている。

19は口縁直下より一周2単位で二条の山形文を横位帯状に施文している。角頭状の口唇部と口縁内面に

も施文される。太さ5mmで長さ1cmの短い原体を用いている。21は凸部が凹部より広くやや丸みをおびた2単位2条の山形文で、5~8mmの無文部をはさんで横位帯状施文される。原体は長さ1.5cm、太さ4.8mmを測る。25は鋭角で直線的であるのに対し、29は鈍角で流れるような山形文となる。26の器表面は丁寧にナテ整形されている。

30~38は楕円文の横位帯状構成をもつものである。普通の大きさのものと小粒なものとがあり、刻まれる条数は山形文と比較すると多く、長い原体を用いている。器形は37では口縁部が外反する形態となる。

30はやや外反する口縁で、口縁下に2cm弱の無文部を残して以下に横位施文される。31~32では1.5cm程度の無文部をはさみ横位帯状施文している。31は2単位9条で穀粒状の楕円文で、原体の両端は斜に削がれている。原体は山形文に比較すると長く、長さ3.7cm、太さ5.4mmと測れる。

35~36は2単位2条の楕円文が5mm程の無文部をはさんで帯状施文される。丸みのある楕円文が接するように刻まれ、連珠状の楕円文となる。長さ1cm、太さ3.5mmの原体となり、他の楕円文と比べると短い。

37~38は小粒で細長い穀粒状の楕円文で、幅広な無文部を持って横位に施される。条数は20前後と多く、原体の長さは3~3.5cmと長い。

39~49は菱目文を施文した土器で、直立気味に開く器形である。いずれも2条菱目文で、卯ノ木遺跡に見られるような一条菱目文や格子目文等は認められない。施文は39・41・44等のように一帯ごとに狭い無文部をはさんで横位帯状に施文されるものと、二帯を1単位として帯状施文される40・48等がある。菱目文は短い格子目状に刻んだものではなく、二つの大きな山形文を原体二間に2単位刻むことにより表出したもので、原体は長さ1.4cm、太さ4.8mmと短く比較的の太いものである。原体の両端は直線的になり、斜に削がれていない。菱目文の施文された土器は総数で28点あるが、胎土や淡茶褐色の色調から他の押型文と峻別でき、せいぜい数個体分の破片と考えられる。

第4類(50~141)

横位密接構成をとるものである。500点以上の出土数があり、小破片のため3類と分類できなかったものや同一個体片も含まれるとしても、本群土器の圧倒的大多数を占める。文様別では楕円文が8割以上と多く、他に山形文や鋸歯状複合文がある。また、2種の文様を併用した例もある。

50~59は山形文が施文される。山形文の形状には54・55のように鋭角的で直線的なものや、52・53等のように鈍角で波状になるもの等の差異が認められる。一周2単位は他類と同様だが、条数は五条以上と多く、56では長さが3.5cm以上となり、1~3類に比較して長い原体となる。なお、59は一つの山形が振幅・高さとも1.5cm程と大きく、一周1単位の可能性がある。胎土や色調は3類の菱目文に類似する。

60~126は楕円文が施される土器で、本群土器の主体を占め点数としては300点以上となる。ほぼ直立する口縁形態で、口唇部は丸頭状を呈する。口唇直下より横位密接施文され、上下で重複する部分はあるものの、走行が不規則になることはない。楕円文の形状には、やや細長い穀粒状のもの、菱形に近いもの、小粒で細かいもの、大きくて粗大なもの等のバラエティーがある。

60~64・67~85・95~99は細長い穀粒状を呈する楕円文である。一周2単位で十条以上が刻まれ、原体は長さが3cm以上、太さ4~5mm程度と測定でき、本類の山形文と同じく長い原体となる。原体の端部は若干斜に削がれる。石英や砂粒を含みやや脆い感じの胎土で、少量の纖維を混入するものも存在する。

65・66・86~94は菱形状の楕円文で、あたかも格子状の割付に合わせて刻んだように整然とした楕円文である。一周2単位で十条以上刻まれ、原体の長さは3cm以上となる。88は原体端部が直線的となる。

100~116は小粒で細かい穀粒状の楕円文である。形状は3類の37・38に類似するが、3類の土器はかなり広い無文部を持つものに対し、本類では無文部が認められない。一周2単位で15条以上が刻まれ、長さは

4cm程と長い。111には狭い無文部が見られ3類のものか。8~10mmと厚手で、胎土に少量の繊維を混入している。

117~126は粗大な楕円文で、楕円の粒径が8~10mmと他に比べ非常に大きい。一周2単位の楕円文で、6.5mm程度と太い原体となる。120~122は沈線文や刺突文と併用され、押型文土器と沈線文土器との共通性を伺わせる資料である。胎土が砂質に富み、少量の繊維を含むものがある。器厚は1cm前後と厚手である。

120は楕円文の上部に幅数mmの浅い沈線が2本引かれる。121では垂下する沈線とそれに直交するような横U字状の沈線が描かれている。垂下する沈線に沿って刺突文も加えられている。122も沈線間に刺突文が施されたものであろう。

127~137は鋸歯状複合文の押型文を持つもので、この文様単独で器面をおおうのではなく128等のように楕円文と併用されるのである。薄手の130・133等と、127~129等のように1cm前後と厚手で胎土に繊維を少量含む土器がある。

127~129は大きな逆三角形の鋸歯状文を横の平行線で結ぶ構成の押型文で、一周に2単位刻まれている。その原体は、長さが4.5cm以上で太さ1.2cmと長い。130~135は5~10条の平行線を傾きを変えて鋸歯状文を作り出したものである。136・137は垂下する平行線間を斜めの短い平行線で結んでいる。胎土に繊維を含む。

138~141は山形文と楕円文が併用されたもので、139のように楕円文と山形文が交互に施文されると思われる。山形文は直線的で途切れ途切れとなり、凸部より凹部が広い。振幅が大きく一周1単位の可能性がある。

第5類(142~149)

押型文の走行が一定でないもの等を一括した。142は口縁部で外反する器形で、山形文が口縁直下では横位に施文され、以下は右下がりの斜位に施文されている。胎土に白色粒子を多量に含む。143~145は横位の楕円文に斜位の楕円文を重ねて施文したもので、鋸歯状に似た構成となる。穀粒状の楕円文で胎土に微量の繊維を含む。147~149は底部に近い胴部片と想定され、縦位を基本とするが走行が一定しない。

(広瀬昭弘)

9 第9群 貝殻沈線文系土器(第55図~第57図)

沈線文や貝殻復線文を施文した土器群で、関東地方の沈線文系土器群に対比できよう。ただし、一部は早期後半に位置付けられるものも含まれる。

第1類(1)

三戸式に対比できる。口縁部直下に2列の爪形文を施文し、以下には、すべて一本描きで横位沈線を多段に施文した後に、斜位沈線を加えている。

この手法はタイプサイトである三戸遺跡に代表される、三戸式に最も特徴的なもので、関東から東北北部まで分布する。ただし、尖頭状の口唇部形態であることは、通常とは異なる。長野県内を含め、中部地域において類例を探し出すのは難しいが、北信にそう遠くない新潟県湯沢町上林坂遺跡等で良好な資料が見られる。

第2類 (2~25)

田戸下層式に対比できる土器である。田戸下層式に対比できる資料は北信地域には多くないが、山ノ内町上林中道南遺跡の出土資料のうちのいくつかはこれに該当しよう。その他、信濃町塞ノ神遺跡、木島平村三枚原遺跡などに散見される。ただし、それらは器面調整や沈線施文に関する工具類などについては、関東地方における原型を保っていない在地化した様相であり、本遺跡例も同様である。

2a類 (2~10)

細い沈線を主とするものである。2は斜位沈線の重疊による幾何学文のみられる口縁部。3も同様の手法である。これらは三戸式段階まで下げて考えてもよいし、田戸下層式でも最も古い段階の手法である。

4・5は斜格子目文である。6は異方向の斜線が連結して綾杉状となる。7は横位沈線だが、一部に爪形文がみられ、縦位の分帶と考えられる。8は3本一組沈線によるモチーフに貝殻腹縁文が組み合わされている。3本一組沈線によるモチーフ抽出と縦位分帶の堅持は、三戸式以来のより古式の手法を残していると評価できる。

9は沈線間に半截竹管による爪形文を充填する。10は円形竹管による刺突と横位沈線の重疊がみられる。

2b類 (11~21)

太く深い沈線により、幾何学的な文様構成を行う土器で、器壁も厚いものが主である。

11は口唇部に刻み目を施している。文様は縦位区画され、横位沈線と組み合わされている。12の口唇部は刻まれていない。文様は異方向斜線の組み合わせである。13~15は同一個体の胴部破片で、異方向斜線の組み合わせである。

18は口縁部文様帯下端部分である。19は連続爪形文がみられる。20・21の2点は同一個体で、区画内部に列点状の刺突文が充填されている。17はここに含めたが、括れが強く、やや異質である。

2c類 (22~25)

太い沈線を主とするが、曲線も用いるもので、田戸下層式終末段階に対比されよう。

22は、異方向斜線が連結した下向き弧線を用いている。内面は細かい条痕がみられ、外面も同様の整形痕を地文のようにしている。23・24もほぼ同様で、いずれも胎土に雲母を含んでいる。25は小破片で不明瞭であるが、内面は細かい条痕仕上げであり、この類に含められよう。

第3類 (26~46)

田戸上層式前半期に対比できるものである。この段階の中部地方の様相は、資料の増加によって、やや複雑さを増している。しかし、現段階までに抽出されている資料群において、系統的に大きく次の三者に分けて考えることが可能である。すなわち、関東地方の土器と直接的に関係するもの、在地系統の中で生成される部分の強いもの、そして、特に北信地域に多いとみられる、北陸地域と関連するものが挙げられる。そして、将来、それらはさらに時間的、地域的に細分されるであろう。

3a類 (26~30)

直接的に田戸上層式の系譜を引くと考えられるもので、沈線と貝殻腹縁文が組み合わさる。貝殻腹縁文はあくまでもモチーフの外側に充填文として存在する。

26~30は同一個体で、細い横位沈線間に貝殻腹縁文の充填がみられるもの。いずれも頸部以下の破片とみられるため、口縁部文様は明らかでないが、同様の工具による幾何学文が展開すると予想される。沈線が断面V字状の鋭いものであること、貝殻腹縁文を沈線に沿わせていないことなど、細部の手法は田戸上層式と異なるが、全体の文様構成としては直接的に田戸上層式の系譜をひくものである。

3 b類 (31~35)

信州在地の土器で、器形・文様とも大岡村鍋久保遺跡、望月町新水B遺跡等長野県内で古くから知られている資料に代表されるもので、時期的には田戸下層式終末~田戸上層式の古段階である。

それらに共通する型式学的特徴を羅列すると、まず、器形は緩いキャリバー状で、胴部に括れをもつ点が挙げられ、田戸上層式を中心とする時期に通有の仲間といえる。口唇部形態は角頭状に近く、丸棒状工具などで刻みが付けられる。主文様は括れ部以上に施文され、細く浅い沈線と貝殻腹縁文を用いて4単位程度に縦位分割し、区画内を斜位沈線とそれに平行する貝殻腹縁文で充填する。括れ部には文様帶区画をもち、鋸齒状文や貝殻腹縁文を充填する。

これだけでは田戸上層式や先に挙げた1類と殆ど変わらないものとみられるが、ここに挙げたものは、文様帶の区画手法等において、信州在地における模倣過程に発生する規範の逸脱をみることができる。

31~33はほぼ同一個体と認め得るか、少なくとも同一文様をもつ。縦位の分帯は、33のように下部で連結しており、また、縦区画を無視する形で斜位施文が行われている。田戸下層式などにみられるきちんとした区画の在り方から変容したものといえ、望月町新水B遺跡例とは全く同一の手法といってよい。括れ部の文様帶区画には鋸齒状文が2段以上用いられているが、明確な横位沈線による区画ではなく、ここでも文様帶区画にややルーズな面を指摘できる。器壁は薄く、胎土には雲母をはじめ、細粒を多く含んでいる。34は、口唇部を爪でひねり出すように刻みを加えている。

35はこうしたものの括れ部付近の大破片であるが、この場合も、施文順位をみると斜位施文が最優先されており、縦位区画文と括れ部横位区画文は後から付け足されている。さらに、斜位施文は縦位区画に囚われずに方向を変えている部分もあり、より幾何学的な文様である。胴部は無文で、平滑ではあるが、斜位の整形痕を顯著に残している。胎土には砂粒が多く含まれているが、雲母はみられず、若干量の纖維を含んでいるらしい。

3 c類 (36~40)

平行沈線で主文様を描き、間に貝殻腹縁文を充填する。主文様を描く沈線は、一本描きか二本一対か判断がつきかねるが、二本の沈線を一組として用いられている。貝殻腹縁文は、描出された文様の無文部を埋めるように施文されている。主文様の展開は横位に連続すると予想され、田戸上層式の古い段階に必定されよう。ただし、手法上の特徴は、新潟県など北陸地域にみられる常世式類似の土器に対比できよう。

36~37は同一個体で、緩くキャリバー状に内彎する口縁部形態である。38~40によると、胴部に区画文をもたない。施文が全体に深く、繊細な感じを与えない。器壁は薄く、胎土に雲母など砂粒を多く含む。

3 d類 (41~46)

曲線による文様を有し、間際に貝殻腹縁文で充填するものである。文様的には田戸上層式、常世式両者の系譜を引くものとみられる。貝殻腹縁文は、主文様の沈線に対して斜位・縦位に施文する特徴がある。飯山市新晃遺跡・下境大原遺跡といった遺跡に類例を認められ、新潟県などに見られる土器である。

41~44は同一個体で、45~46も同様と考えられる。精製された非常に薄手の小型器種で、主文様の描出は非常に浅く、幅広の沈線が用いられている。モチーフはクランク状のものと推測される。口唇部には貝殻腹縁文が施文されているが、やはり斜位施文である。器形は、43のように明確な括れ部を有している。

第4類 (47~64)

田戸上層式後半期に対比できるもので、信州の独自色が前段階にも増して強まり、やや粗製的な文様施文が主流を占める。

4 a類 (47~52)

貝殻腹縁文を主文様とするもので、やや引きずり気味に施文している。二段以上施文され、縦位鋸歯状となる。鍋久保遺跡、新水B遺跡、御代田町塚田遺跡等の資料に対比できよう。

47~50は、いずれも口唇部を丸棒状工具で刻んでいる。また、器面には擦痕を顕著に残している。51は内側する口縁部で、胎土に雲母を含む。48・50は砂粒を含むが、雲母はみられない。

また、52は上記とは異なり、貝殻腹縁文を横位に施文し、口縁内面に刻み目をついている。内面への刻みは新水B遺跡にみられるが、同例は口縁部直下に刺突列をもち縦位の貝殻腹縁文が施文される、判ノ木山西式とされるものである。のことから、本例も、より新しい段階のものかもしれない。

4 b類 (52~59)

半截竹管により弧状文を描くもので、隆蒂や刻みなどは伴わないが半截竹管をもちいた渦文という点で、御代田町下荒田遺跡の渦文土器に類例を求めるものである。

53は波状口縁で、外削ぎ状の口唇部にヘラ状工具による刻みを有する。口縁部文様は一本描きで、弧状となるようであり、前段階のモチーフを継承している。54もヘラ状工具で口唇部を刻んでいる。口縁部文様は半截竹管により弧状を描くようである。55も半截竹管による施文で、破片上位は横位平行沈線の重疊、下位は格子目である。括れ部であろう。

56~57は同一個体で、やはり口唇部を刻み、口縁部を平行沈線で区画して弧状のモチーフを描いている。58は、渦文状のモチーフを描く。また、59では、渦文が二段以上重疊されていることが判る。

4 c類 (60~61)

半截竹管により文様を描くが、やや乱雑であり、モチーフ不明瞭なものである。上林中道南遺跡などに類例を見出だせる。

4 d類 (62~64)

櫛齒状工具による条痕文をもつもので、上林中道南遺跡に類例を見出だせる。62・63は同一個体で、表面には条痕文が施文されるが内面ではなく、胎土には纖維も含まない64は条痕と連続刺突文を併用する。

第5類 (65~77)

早期後半の子母口式に対比できるもので、前段階に引き続き在地色が強まる。口縁部に刺突文が用いられる点では子母口式と軌を一にし、体部に斜沈線が多用されることは独自の傾向である。特に、半截竹管による平行沈線文の使用は子母口式には認められない要素であり、4 b・4 c類以来の在地色であろう。

5 a類 (65~68)

刺突文を主体とするもの。65・66は同一個体で、ペン先状の工具で口縁部直下に刺突列を一列施文し、体部に同一工具で斜位もしくは交差する刺突列を施文している。口唇部は丸頭状で肥厚するが、文様は加えられていない。補修孔を有する。67・68類も同様の工具による施文である。

5 b類 (69~73)

口縁部直下に刺突または刻みをもつことが多く、半截竹管などによる沈線文を多用するものである。判ノ木山西式として抽出されている一群と符合する。

69は口縁部直下に半截竹管による二列の刺突文をもち、以下に半截竹管により細い沈線が縦位に施文されている。70・71は間隔の開いた二列の刺突文。72は縦位沈線のみ認められる。73は爪形文状の刺突と、斜格子の組み合わせで、器形的には膨らみが大きく、類例は見出だせない。

5 c類 (74~77)

斜格子目沈線文の土器で、岡谷市禪会塚遺跡や、判ノ木山西式の中に類例を求める。

73～76が挙げられる。口唇部は丸頭状で肥厚し、76によれば、縦位沈線もかかわるようであり、本来は縦位に分帯されていたと考えられる。沈線は半截竹管背面を用いたものである。

第6類 (78～85)

相木式に関連すると見られるものだが相木式そのものではなく、押型文も見られないが、文様施文手法上から関連すると予想される。

6a類 (78～80)

刺切文・沈線等により山形文などを描くもの。78は口唇部に刻み目をもち、口縁部には刺切文による山形文を三段以上重疊している。79・80は同一個体である。半截竹管による平行沈線で縦位区画、山形文が施文され、文様帶区画には同一工具による連続刺突文がちいさらされている。

これらは、工具としては半（多）截竹管を用いる点で4・5類に関連する。山形文は、押型文からの置換手法と考えておきたい。

6b類 (81～85)

棒状工具による押し引き文または有節沈線文により文様を描出するもの。柄原岩陰遺跡等で相木式とされるものに酷似する手法がある。

81～85は同一個体で、弧状のモチーフを描く。また、内面には条痕が残されている。田戸上層式の影響範囲にある、3b類のモチーフに関係しよう。

第7類 (86～89)

野島式に対比されると考えられるものである。86・87は横位沈線区画内に異方向斜位沈線を交互に充填して、矢羽根状の文様としている。いずれも、胎土にはわずかに纖維を含んでいる。内外ともに条痕は認められない。

これらをここに位置付けることには、やや抵抗があるが、沈線施文工具の点で貝殻・沈線文系土器とは異なることを重視した。88は沈線により棒状の文様を描いているとみられる。内面には貝殻（？）条痕文が確認できる。89は文様帶下部の破片で、縦位沈線のみみられる。条痕は観察できない。

（高橋 誠）

10 第10群 無文土器（第58図～第59図）

無文土器を一括した。口縁形態や器面調整・胎土・器厚等に差異があり、多様なものを含む。時期的にも草創期から早期中葉までの幅が想定される。出土数は多いが類別が困難なため、代表的なものを提示した。

1～5は比較的薄手の土器群である。胎土は精緻で焼成の良い堅密な土器が多い。1・2は直立する口縁形態で、口唇に向かい先細りとなる。器厚は3～4mmと薄い。1は器面上に浅い指頭圧痕による凹凸が残る。2には補修孔が1個穿かれている。3はやや内湾気味となる形態で、口唇部は笠状工具により斜めに刻まれている。4もやや内湾気味となり、胎土に細かい砂粒等を含みやや脆い感じがする。5は弱く外反する器形で、器表面に横位の擦痕状の整形痕が見られ、平滑となる。堅密な土器である。

6・7は同一個体と想定され、直立する口縁の口端部に2・3個を一単位とする細かい刺突が見られる。内面には縦位の浅い条痕状の整形痕が看取され、焼成の良い堅密な土器である。器厚は6～7mm。

9～13は口縁が肥厚する類で、口縁直下を指で押さえて外側に肥厚させている。12・13は口縁下で強く

外反し、12は粘土を外側に折り返すようにしている。

14は若干外傾する形態で、胎土に石英や雲母粒を多く含む特徴がある。横方向に器面調整されるが、内面には浅い指頭圧痕が残る。口唇部は角頭状となる。15も同様な破片である。器厚は4~7mm。

16~19は緩く外側に開く器形で、口端が角頭状となるものである。器面調整が丁寧で、平滑に仕上げられる。16は口唇上が特に平坦で、口端は稜を持つ。胎土に含有物を殆ど含まず、堅緻な土器である。17~19も16程度ではないが口唇が平坦な角頭状となる。いずれも堅緻な土器である。

20~37は胸部片である。概ね焼成の良い堅緻な土器で、指頭圧痕が器内面に看取されるものもある。21・22は胎土が精緻で堅緻な土器で、内面には指頭圧痕が残る。28は器面に縦位や斜位の浅い擦痕状の整形痕が見られる。

31は器厚が4mmと薄手で、器面は非常に丁寧に整形される。35・36は胎土に石英や雲母粒を含み、14に類似する。

37は平底あるいは丸底の底部に近い破片と考えられる。図示しなかったが、鈍角に開く尖底部破片も出土している。

11 湯倉洞窟出土の縄文草創期から早期中葉の土器群について

湯倉洞窟からは、これまで述べてきたように縄文時代草創期から早期中葉にかけての多種多様な土器群が多量に出土している。県内で該期の土器群がこれほどまとまった遺跡は稀有で、本遺跡出土土器は今後の該期土器研究を進める上で貴重な資料となるであろう。ここでは、湯倉洞窟出土土器を改めて概観し、今後の研究への課題としたい。

先ず、湯倉洞窟の遺跡形成についてみてみると、草創期土器群が隆起線文土器から多縄文系土器まで各段階の土器が途切れることなく連続的に出土していることが大きな特徴として挙げられる。

例えば、草創期の豊富な土器群が出土していることで知られる新潟県小瀬が沢洞窟と室谷洞窟では、主体となる時期を異にして、草創期の各段階を通じて継続して利用されているが、湯倉洞窟では両洞窟を合わせた草創期各段階の遺物がまとまって出土しているのである。従来、県内で草創期各段階の遺物が出土した遺跡としては、本洞窟に近い石小屋洞穴が知られていたが、湯倉洞窟の出土遺物はその多様性・豊富さで圧倒する。これは、湯倉洞窟が長期間にわたりこの地域の拠点的な遺跡として継続的に利用され続けたことを示してよい。

湯倉洞窟は長野・群馬両県を画する三国山脈の脊梁部に立地する。現在でこそ山深く交通の便も悪いところであるが、当時としては多地域との交流などに好地であったのであろう。石小屋洞穴や群馬県石畳岩陰など湯倉洞窟と同時期の遺跡へも尾根ついで移動するとさほどの距離ではない。おそらく脊梁を越し広大な関東平野に下ったり、山脈の山並みをつたい新潟方面や更に遠くの東北地方とも移動や交流が行われたのであろう。

早期土器群は押型文土器と沈線文土器が主体となり、草創期と比べるとやや断続的な利用形態が想定できそうである。但し、出土土器には関東地方の燃糸文土器群や沈線文土器、新潟県地方の押型文土器との関係を窺わせる資料もあり、草創期と同様に広域な交流が続行されていたことを示している。これは、早期以降の各時代についても言えることであり、湯倉洞窟の存在意義を考える上で、この立地環境と生業活動を通した遺跡形成の検討が今後の課題となろう。

さて、湯倉洞窟出土土器を概観するにあたり、各土器群の出土状況について簡単に触れておきたい。第2章及び各土器の報告でも述べている様に、各土器群の明確な層位・分布域の分離は認められない状況で

あった。洞窟遺跡は開地遺跡に比較し、当時の人々の居住・生活域は当然限られたものとなる。焚火による灰や炭は次々と搔きだされたであろうし、大きな落盤などでもない限り常に人為的な営力による擾乱が起こっていた状況が想定される。このことからすれば各土器群が明確に層位や分布域の差として分けられないことも首肯できる。しかし、各土器群の出土層位をみてみると、ある程度のまとまりはみられ、相対的な時間差をとらえることができる。

尚、観察表の出土位置には、出土位置が明確なものとグリット上げのものの両者が存在している。グリット上げの資料は各層位毎に発掘した土壤を水洗篩別したもので、上下層のものを含む可能性がある。

第1群の隆起線文土器は出土点数が少ない。出土層位は1点を除き洞窟下部のⅪ・Ⅻ層で、分布は洞窟中央のB・C-4・5区の他、東側のD・E列からも出土している。

第2群円形押圧文土器も出土数が少なくまとまりという程ではないが、殆どが洞窟中央から西側のA～C列のⅪ・Ⅻ層からの出土である。

第3群爪形文土器と第4群多縄文系土器は本洞窟の草創期で主体となる土器群である。爪形文土器は1,000点弱が出土している。出土層位はⅢ層が圧倒的で、Ⅺ層からもある程度の出土量が認められ、X層以上の出土量は僅かである。分布は洞窟全体に認められるが、A～B・2～4区に集中が見られ、特にB・4区が多い。

多縄文系土器も1,000点以上の出土量をほこる。出土層位はⅩ層・Ⅺ層が主体となるが、爪形文土器と比較するとⅪ層の出土率やX層以上の頻度が高い傾向が伺える。分布域は爪形文土器と重なり、A～B-2～4区での出土が多い。

爪形文土器と多縄文系土器の関係は、出土状況の観察では重なる部分が多く、明確な分離は不可能であるが、相対的にみた場合、多縄文系土器の方が出土層位のピークがより上位にありそうである。但し、これは多縄文系土器全てを含んだものであり、回転縄文を用いた多縄文系土器後半の土器群の存在を考慮する必要がある。いずれにしても、両土器群の更に詳細な出土状態の検討が求められる。

第5群の回転縄文土器は事実報告でも述べたように、草創期多縄文系土器から早期中葉頃までの時間帯を持つ土器群であり出土点数も多い。出土層はIX層から洞窟最下部のⅢ層まで及ぶが、Ⅺ・X層にピークが認められる。尚、Ⅹ層からの出土は少ない上、約半数がグリット上げの土器である。IX層からの出土もかなり認められる。多縄文系土器に伴う縄文施文土器や多縄文系土器の縄文施文部、また表裏縄文土器の内面施文を持たない土器も含まれることに起因しよう。

第6群表裏縄文も回転縄文土器と同様に出土層位はⅪ・X層が主体となり、特にⅪ層から多く出土している。上下層からの出土も見られるが、Ⅹ層出土とされる土器は殆どがグリット上げであり、この点を勘案すると表裏縄文土器の出土層位は爪形文土器や多縄文系土器よりも上位にあると言える。分布域は洞窟全体に広がる。

第7群の撚糸文土器は僅かな出土数で出土層位の傾向などは掴めない。関東系の撚糸文土器とした土器で出土位置が明確なものは、いずれもⅪ層出土である。

第8群の押型文土器は表裏縄文土器より更に上位のⅧ～IX層に出土のピークが認められる。尚、観察表でⅩ層出土と記されたものは全てグリット上げであり、Ⅺ層としたものも殆どがグリット上げのものであり、調査時の紛れ込みと考えられる。分布域は洞窟全体に広がる。

第9群沈線文土器は、出土データーではⅧ～Ⅺ層の各層位がみられ、他の土器群のようなまとまりは掴みにくい。分布が基盤層までの深度が浅い洞窟の東側のD～E列に多いことが関係するのかもしれない。

各土器群の出土状況は以上の通りである。冒頭に述べたように明確な層位差・分布差ではないが、ある程度の傾向は掴めたものと考えたい。

即ち、隆起線文土器・円形押圧文土器・爪形文土器・多縄文系土器は洞窟最下部のⅦ・Ⅺ層から主体的に出土している。草創期土器群については爪形文土器と多縄文系土器の関係など、その変遷観に研究者間の齟齬が存在する。湯倉洞窟では両者の土器を層位的・空間的に明確に分離することはできなかったが、多縄文系土器の方がやや上位に出土のピークがありそうである。爪形文土器と多縄文系土器はいずれも多様な土器群が存在しており、幾つかの段階に細分できよう。爪形文と押圧縄文や回転縄文が併用された土器も存在し、その併行関係は認められるが、更に各段階ごとの詳細な出土状況の検討と共に、地域的・系統的な差などを踏まえた上で両土器群の関係について考えていくたい。

中部高地などに広く分布する表裏縄文土器は、多縄文系土器より上部のⅨ・Ⅹ層にまとまりがあり、時間差を示していると言えよう。表裏縄文土器と撚糸文土器の関係では、撚糸文土器が表裏縄文土器より上部のⅨ層から主に出土している。撚糸文土器の出土数が少なく、これをもって層位差として良いかは問題があるが、出土層位的には若干の差があるようと思われる。

押型文土器は表裏縄文土器より更に上部のⅧ・Ⅸ層から主体的に出土している。沈線文土器の出土データにはばらつきがあり、出土状況からは併行関係を明らかにできないが、土器の様相からは併行関係がとらえられそうである。

次に、各土器群の特徴についてみてみたい。

第1群隆起線文土器には、幅広な粘土紐を貼り付けたものと、竪状工具の引き出しなどによる微隆起線文土器の2種類が存在する。幅広の粘土紐を口縁に並行に貼付した土器は、県内資料としては狐久保遺跡出土と並んで古手に位置付けられよう。一方、微隆起線文土器は縦位や斜位の構成の微隆起線文で、石小屋洞穴例などとも共通しよう。

第2群の円形押圧文土器は、まとまった出土で知られる新潟県壬遺跡では孔の貫通した資料も多いが、本遺跡では貫通した資料は存在せず、壬遺跡との違いを示している。これが本群土器の時間差を示すものか地域性を示すものかは定かでないが、從来限られた資料であったものがその分布を広げて検出された意義は大きいものであろう。今後の資料増加を期待したい。尚、第1群の隆起線文土器の胸部に小さな円形押圧文が併用された土器は、隆起線文土器と円形押圧文土器の時間的近似性を示すものと言え、円形押圧文土器の出自や編年的位置を検討する上で好資料となろう。

第3群爪形文土器は本洞窟の草創期土器群の中でも多縄文系土器と並び主体となる土器である。表出された文様は多くの種類があり、その文様構成も多様である。石小屋洞穴でも帯状や多段に施文された細い爪形文や「ハ」の字爪形文などが出土しているが、本洞窟ほど多彩ではなく、出土量も少ない。

さて、この多様な土器群をどのように捉えたら良いのであろうか。表出された爪形文の多種性、文様構成の多様性、他の文様との併用例などからみて、時間的幅を持った土器群と考えられる。

湯倉洞窟では隆起線文に爪形文が併用された土器はないが、刺痕間が隆起線状となるものは、その表出効果からみて隆起線文土器に近いものと言えよう。また、斜位横列多段構成をとる土器の口唇部にみられる刻みは石小屋洞穴の微隆起線文にみられるものと類似しており、この点も両者が時間的に近い関係にあることを示しているのではないだろうか。

斜位横列多段の土器は湯倉洞窟の中で主体となる文様構成で、小瀬が沢洞窟の爪形文土器と類似する。但し、小瀬が沢洞窟には水平方向に帯状や多段に施文する爪形文は存在しない。水平方向の爪形文は神奈川県深見原山遺跡に存在するが他には類例が乏しい。本洞窟出土の爪形文の形状には滴状のものと、あたかも沈線か縄の圧痕と見まちがうように細いものとがある。口縁形態も先細り気味で、斜位横列多段の厚みのある口縁形態とは異なる。

爪形文と他の文様との併用例も僅かではあるが検出された。口縁直下と胴上部に格子状の爪形文を施文

し、その間の頸部に沈線状の爪形文を配した土器は口縁形態が受け口状となり、多縄文系土器の口縁形態に類似する。また、「ハ」の字爪形文と縄の側面圧痕が併用された土器もあり、爪形文文土器が多縄文系土器と時期的に重なることも示している。尚、回転状文と併用されたものも存在する。

爪形文土器については、その系譜・変遷・編年の位置付けなど検討課題が多い。爪形文土器が多縄文系土器群と時期的に重なることは、その併用例などからみて間違いないところであるが、それ以前に爪形文土器が単独で一時期を形成するか否かについては、解決していない。青森県鶴平遺跡や岩手県大新町遺跡、長野県曾根遺跡など爪形文土器が単独で出土している遺跡も存在しており、各遺跡で出土している草創期土器群をどのような組成として捉えるかにもよるが、現状としては爪形文土器の全てを多縄文系土器に併行すると考えることには躊躇する。他の土器群との関係も含めて更に検討を行いたい。

第4群多縄文系土器も湯倉洞窟の草創期土器群を代表するものである。短縄文・絡条体圧痕文・自縄自巻圧痕文・側面圧痕文など多様な文様がみられ、文様構成もバラエティーに富む土器群である。石小屋洞穴でも短縄文や絡条体圧痕文・側面圧痕文などの押圧縄文土器が多く出土し、湯倉洞窟と時期的に重なる部分がある。

湯倉洞窟では第2類とした絡条体圧痕文土器が比較的まとまって出土した。直立する口縁形態で、口縁直下より絡条体圧痕文を全面に施文し、羽状構成となる可能性が高い。絡条体圧痕文土器は清水柳北遺跡や葛原沢第IV遺跡など静岡県に多くの資料がみられる。県内でも曾根遺跡に近い片羽町A遺跡やお宮の森裏遺跡、原遺跡などに類似がある。いずれも羽状構成を基調としており、湯倉洞窟との類似性が窺える。但し、これらの遺跡では絡条体圧痕文土器以外の押圧縄文土器は殆どなく、短縄文など他の文様を多く持つ他地域と関係について地城性や時間差を考えいかなければならぬ。尚、絡条体圧痕文の原体については、木などの軸に巻きつけた単軸絡条体と自縄自巻原体による絡条体とがある。自縄自巻による押圧縄文は、第1類の短縄文とした土器にも存在し、他にも自縄自巻を押圧した文様表出が多く認められる。押圧縄文土器については表出された文様のみでなく、その施文原体が如何なるものかも含めて検討しないとならない。

絡条体圧痕文と自縄自巻圧痕文が併用されたり、長い側面圧痕文と自縄自巻圧痕文や先端刺突文が併用された第3・5~7類土器も多く出土している。これらの土器は絡条体圧痕や側面圧痕と自縄自巻圧痕や先端刺突文を交互に押圧し、横に広がる文様帯を形成している。また回転縄文を用いているものもある。破片に湾曲が殆どみられず、隅丸方形の器形を呈する可能性が高い。これらは静岡県仲道A遺跡出土土器と類似し、同段階の土器と言える。絡条体圧痕文土器と共に東海地方との関係が窺える資料である。

有段で平底形態となる第9類土器は室谷第I群土器に比定できよう。室谷洞窟では口縁部文様帶に側面圧痕文や短縄文・自縄自巻圧痕文などで幾何学的な文様帯を形成しているが、湯倉洞窟では側面圧痕文や半載状工具による鋸歯状の構成となっていて相違する。室谷第I群土器の類例は、最近青森県柳引遺跡から良好な資料が出土しているが、これも室谷洞窟とは異なる点が多々みられ、室谷第I群段階での地域性が窺える。

このように湯倉洞窟出土からは多くの多縄文系土器が出土しており、谷口氏変遷案（谷口1993）の小瀬が沢3期から小瀬が沢7期までの多縄文系土器各段階のものがそろっているといえよう。今後は、各段階ごとの文様組成や構成を明確にすると共に、他地域との比較検討をはじめ、施文手法や原体といった面での検討が求められる。

第5群の回転縄文土器は草創期から早期までの土器を含んでいる。この内、薄手堅縁で内面に指頭圧痕などによる凹凸が目立つ土器群は草創期多縄文系土器に伴うものであろう。羽状に施文され、全体として菱形を構成するものなどは、室谷第I群土器と共通する要素である。但し、室谷洞窟では「正反の合」に

よる縄文の存在が特徴として挙げられるが、湯倉洞窟には「正反の合」による縄文は1点も存在しない。本洞窟に近い石小屋洞穴では「正反の合」による縄文が存在しており、この有無はいかなる意味を持つのであろうか。「正反の合」による縄文は、室谷洞窟以外では福井県島浜貝殻や栃木県大谷寺洞穴などにみられるが、他地域では類例が乏しく、地域性を視野に入れた検討が必要であろう。

尚、内彌気味の口縁形態で回転縄文が施文される土器は埼玉県宮林遺跡などにも存在する。

第6群表裏縄文土器は、中部高地を中心に東北南部から近畿地方まで広範囲に分布する土器群で、その出自は多縄文系土器に求められる。但し、土器群の終焉に到るまでの変遷観や編年の位置付けについては研究者間に齟齬が見られる。端的には、この土器群が関東地方の撚糸文土器群以降まで併行するか否かという編年の位置付けがある。

さて、湯倉洞窟では器形や内面施文の状況などから5類に細分した。この内、第1類とした直立形態で無節縄文を内面にも全面に施文する資料は、今まで本地域には見られなかった土器である。これらは、從来から知られていた小佐原遺跡や三枚原遺跡などの外反する器形で、口縁内面施文が口縁内面に限られる傾向が強くなる資料に先行するものと考えられる。2類・3類は小佐原遺跡例に近く、3類の口縁下のみ施文方向を変えているものは口縁部文様帶を意識した構成と言えよう。4類の外傾し、平坦となる口唇部に施文を加えた土器は、三枚原遺跡の資料に類似する。湯倉洞窟の表裏縄文土器については、他地域との比較や地域内の変遷等の検討が必要となるが、概ね1類から4類へと変遷するものと考えられる。

本洞窟では、表裏縄文土器との関係が問われる撚糸文土器も若干ではあるが出土している。胎土緻密で器面調整も丁寧な土器は、関東地方の撚糸文土器群に類似するものであろう。肥厚した口唇部への施文等から撚糸文土器群の中でも古手に位置付けることができる。この場合、客体として存在する撚糸文土器に伴なう在地の土器が何であるかが問題となる。中部高地では明確な撚糸文土器群の出土例が殆どなく、確実に表裏縄文土器に伴なうと言える資料はない。一方、関東地方においても撚糸文土器群に表裏縄文土器が明確に伴出する状況は確認できない。表裏縄文土器の最終段階は関東地方の撚糸文土器群に併行する可能性はあるが、その主体は撚糸文土器群の以前に位置付けられると考えられる。本洞窟で出土で関東地方の撚糸文土器に類似する土器はIX層から主に出土しており、表裏縄文土器のXI・X層より上層となる。本洞窟の層位差を時間差と捉えることは困難な事は既に述べたとおりであるが、この出土層位差も何か意味があるのでないだろうか。

早期では押型文土器と沈線文土器が多く出土し、早期中葉が主体となる。

第8群の押型文土器は、異方向帯状構成などを持つ土器は僅かで、精円文の横位密接構成となる押型文土器の中でも新しい段階のものが主体となる。

横位帯状構成の菱目文土器は新潟県の信濃川流域を主体として福島県や群馬県・岐阜県などに分布している。県内では信濃川の上流部となる千曲川流域の飯山盆地周辺や野尻湖周辺の遺跡にみられるのみで、以南の遺跡では出土していない。今回、湯倉洞窟での出土により千曲川流域における分布の広がりが明らかとなった。菱目文土器は無文部を持つ横位帯状構成をとり、同じ文様構成の他土器と共に、横位密接構成となる以前の段階を占めよう。尚、この土器は胎土や色調などが他の土器と大きく異なり、新潟県の信濃川流域から持ち込まれた土器の可能性が高い。湯倉洞窟には、新潟県卯ノ木遺跡などにみられる1条菱目文など他の菱目文が存在せず、これが地域性又は時間差を表しているのかなど検討課題も残る。

湯倉洞窟で主体となる精円文横位密接構成の土器群は、沈線文との併用例などから第9群の沈線文土器群と併行しよう。

第9群の沈線文土器は三戸式段階から早期後半にかかるまでの資料がある。主体は田戸下層式から上層式段階のもので、関東地方の土器に近いものや在地的なものなど多様な土器群となっている。沈線文土器

群自体と共に、早期中葉の主体となる押型文土器との関係などは更なる検討が必要である。

湯倉洞窟出土の草創期・早期土器群を前にして、その多様性に圧倒され、満足できる整理には程遠いものとなってしまった。草創期土器群は最近の開地遺跡での調査例の増加、小瀬が沢洞窟や室谷洞窟といった学史的にも重要な資料の再検討なども行われ、資料が大いに蓄積されつつある。但し、そうは言って各土器群の編年的問題や地域性などを検討していくには、まだ資料不足のところも多い。湯倉洞窟資料がこれから該期研究の進展に寄与することを期待したい。筆者としても、ここで課題とした点について再度検討し稿を改めたいと思う。

(広瀬昭弘)

第4表 出土土器観察表(1) (層位(1)のついたものはすべてグリット上げ、その他はNoで上げた)

検出番号	遺物番号	グリット	層位	土器分類	類	構成
第19回	1	B-5	(1)	1群	隆起線文	1 横位隆起線文
	2	B-5	(1)	#	隆起線文	1 横位隆起線文
	3	C-4	(1)	#	隆起線文	1 横位隆起線文
	4	C-6・7	(鉢面)	#	隆起線文	1 横位隆起線文
	5	B-4・5	(トレンチ)	#	隆起線文	1 横位隆起線文
	6	C-3	直	#	隆起線文	1 横位隆起線文
	7	C-4	直	#	隆起線文	1 横位隆起線文
	8	E-4	直	#	隆起線文	2 横位微隆起線文
	9	E-5	直	#	隆起線文	2 横位・縦位微隆起線文
	10	D-4	直	#	隆起線文	2 横位・縦位微隆起線文
	11	E-4	直	#	隆起線文	2 横位微隆起線文
	12	B-4	(1)	2群	円形押圧	横位1列
	13	D-4	直	#	円形押圧	横位1列
	14	C-4	X	#	円形押圧	横位1列
	15	B-4	(直)	#	円形押圧	横位1列
	16	C-5	(直)	#	円形押圧	横位2列
	17	B-4	(直)	#	無文	無文
	18	B-4	(直)	#	無文	無文
	19	B-4	(直)	#	無文	無文
	20	B-4・5	(トレンチ)	#	無文	無文
	21	B-4	(直)	#	無文	無文
	22	B-4	直	#	無文	無文
	23	B-3	直	#	無文	無文
	24		直	#	無文	無文
	25	C-4	直	#	無文	無文
	26	A-3	直	#	無文	無文
	27	Z-3	直	#	無文	無文
	28	A-3	直	#	無文	無文
第20回	1	A-2	(直)	3群	爪形文	1 刺痕間隆起
	2	B-1	直	#	爪形文	1 刺痕間隆起
	3	B-3	(直)	#	爪形文	1 刺痕間隆起
	4	B-1	直	#	爪形文	1 刺痕間隆起
	5	B-4	(直)	#	爪形文	1 刺痕間隆起
	6	A-4	直	#	爪形文	1 刺痕間隆起
	7	B-2	直	#	爪形文	1 刺痕間隆起
	8	C-5	直	#	爪形文	1 刺痕間隆起+斜位横列
	9	A-3	(直)	#	爪形文	1 刺痕間隆起
	10	B-1	(直)	#	爪形文	1 刺痕間隆起
	11	B-4	(直)	#	爪形文	1 刺痕間隆起
	12	A-4	直	#	爪形文	1 刺痕間隆起
	13	A-4	直	#	爪形文	1 刺痕間隆起
	14	C-4	直	#	爪形文	1 刺痕間隆起
	15	A-4	直	#	爪形文	1 刺痕間隆起
	16	B-2	(直)	#	爪形文	1 刺痕間隆起
	17	A-4	直	#	爪形文	2 斜位横列帯状(R)
	18	D-4	直	#	爪形文	2 斜位横列帯状(R)
	19	Z-3	直	#	爪形文	2 斜位横列帯状(R)
	20	A-4	直	#	爪形文	2 斜位横列帯状(R)
	21	E-3	直	#	爪形文	2 斜位横列帯状(R)
	22	C-4	(直)	#	爪形文	2 斜位横列帯状(R)
	23	B-3	直	#	爪形文	2 斜位横列帯状(R)
	24	D-4	直	#	爪形文	2 斜位横列帯状(R)
	25	D-2	X	#	爪形文	2 斜位横列帯状(L)
	26	D-2	直	#	爪形文	2 斜位横列帯状(L)
	27	B-2	(直)	#	爪形文	2 斜位横列帯状(L)
	28	Z-3	(直)	#	爪形文	2 斜位横列帯状(L)
	29	D-2	直	#	爪形文	2 斜位横列帯状(L)

第4表 出土土器觀察表(2)

探査番号	遺物番号	グリット	層位	土器分類	類	構成
第20回	30	A-3	Ⅲ	3群	爪形文	1 斜位横列帯状(L)
	31	Z-3	(Ⅲ)	"	爪形文	2 斜位横列帯状(L)
	32	C-2	Ⅳ	"	爪形文	2 斜位横列帯状(L)
	33	A-4	Ⅲ	"	爪形文	2 斜位横列帯状(L)
	34	C-3	Ⅳ	"	爪形文	2 斜位横列帯状(L)
	35	D-5	Ⅳ	"	爪形文	2 斜位横列帯状(L)
	36	B-2	(Ⅲ)	"	爪形文	2 斜位横列帯状(L)
	37	D-2	Ⅲ	"	爪形文	2 斜位横列帯状(L)
	38	A-3	Ⅲ	"	爪形文	2 斜位横列帯状(L)
	39	B-4	Ⅲ	"	爪形文	2 斜位横列帯状(L)
第21回	40	B-4・5	(トレンチ)	"	爪形文	3 斜位横列多段(R)
	41	C-4	(Ⅲ)	"	爪形文	3 斜位横列多段(R)
	42	C-4	(Ⅲ)	"	爪形文	3 斜位横列多段(R)
	43	B-4・5	(トレンチ)	"	爪形文	3 斜位横列多段(R)
	44	D-2	Ⅲ	"	爪形文	3 斜位横列多段(R)
	45	C-3	Ⅲ	"	爪形文	3 斜位横列多段(R)
	46	B-3	Ⅲ	"	爪形文	3 「八」+斜位横列多段(R)
	47	B-4	Ⅲ	"	爪形文	3 斜位横列多段(R)
	48	B-4	Ⅲ	"	爪形文	3 斜位横列多段(R)
	49	A-4	Ⅲ	"	爪形文	3 斜位横列多段(R)
	50	C-3	Ⅲ	"	爪形文	3 斜位横列多段(R)
	51	A-4	Ⅲ	"	爪形文	3 斜位横列多段(R)
	52	B-4	(Ⅲ)	"	爪形文	3 斜位横列多段(R)
	53	D-4	Ⅲ	"	爪形文	3 斜位横列多段(R)
	54	E-5・6		"	爪形文	3 斜位横列多段(R)
	55	A-2	Ⅲ	"	爪形文	3 斜位横列多段(R)
	56	A-2	(Ⅲ)	"	爪形文	3 斜位横列多段(R)
	57	A-3	Ⅲ	"	爪形文	3 斜位横列多段(R)
	58	B-5	Ⅲ	"	爪形文	3 斜位横列多段(R)
	59	A-2	(Ⅲ)	"	爪形文	3 斜位横列多段(R)
	60	D-5	Ⅲ	"	爪形文	3 斜位横列多段(R)
	61	B-3	Ⅲ	"	爪形文	3 斜位横列多段(R)
第22回	62	C-3	Ⅲ	"	爪形文	3 斜位横列多段(R)
	63	A-2	Ⅲ	"	爪形文	3 斜位横列多段(R)
	64	B-4	(Ⅲ)	"	爪形文	3 斜位横列多段(R)
	65	C-4	Ⅲ	"	爪形文	3 斜位横列多段(R)
	66	A-4	Ⅲ	"	爪形文	3 斜位横列多段(R)
	67	B-3	(Ⅲ)	"	爪形文	3 斜位横列多段(R)
	68	B-4	(Ⅲ)	"	爪形文	3 斜位横列多段(R)
	69	B-3	(Ⅲ)	"	爪形文	3 斜位横列多段(R)
	70	D-2	X	"	爪形文	3 斜位横列多段(R)
	71	B-4	(Ⅲ)	"	爪形文	3 斜位横列多段(R)
	72	A-3	Ⅲ	"	爪形文	3 斜位横列多段(R)
	73	B-4	(Ⅲ)	"	爪形文	3 斜位横列多段(R)
	74	D-4	X	"	爪形文	3 斜位横列多段(R)
	75	A-2	Ⅲ	"	爪形文	3 斜位横列多段(R)
	76	E-5	(Ⅲ)	"	爪形文	3 斜位横列多段(R)
	77	A-3	Ⅲ	"	爪形文	3 斜位横列多段(R)
	78	B-5	Ⅲ	"	爪形文	3 斜位横列多段(R)
	79	B-3	(Ⅲ)	"	爪形文	3 斜位横列多段(R)
	80	B-2	Ⅲ	"	爪形文	3 斜位横列多段(R)
	81	B-2	(Ⅲ)	"	爪形文	3 斜位横列多段(R)
	82	A-2	(Ⅲ)	"	爪形文	3 斜位横列多段(R)
	83	D-3	X	"	爪形文	3 斜位横列多段(R)
	84	B-4	Ⅲ	"	爪形文	3 斜位横列多段間密(R)
	85	B-3	Ⅲ	"	爪形文	3 斜位横列多段間密(R)
	86	B-5	Ⅲ	"	爪形文	3 斜位横列多段間密(R)

第4表 出出土器観察表(3)

採集番号	遺物番号	グリット	層位	土器分類	種	構成
第22回	87	A-2	XII	3群	爪形文	3 斜位横列多段段間密 (R)
	88	B-2	(III)	#	爪形文	3 斜位横列多段段間密 (R)
	89	B-4	(III)	#	爪形文	3 斜位横列多段 (R)
	90	D-2	XII	#	爪形文	3 斜位横列多段 (R)
	91	E-3	XII	#	爪形文	3 斜位横列多段 (R)
	92	C-3	XII	#	爪形文	3 斜位横列多段 (R)
	93	C-5	XII	#	爪形文	3 斜位横列多段 (R)
	94	C-2	XII	#	爪形文	3 斜位横列多段 (R)
	95	D-4	XII	#	爪形文	3 斜位横列多段 (R)
	96	A-2	(III)	#	爪形文	3 斜位横列多段 (R)
	97	D-3	XII	#	爪形文	3 斜位横列多段 (R)
	98	C-4	XII	#	爪形文	3 斜位横列多段 (R)
	99	B-2	XII	#	爪形文	3 斜位横列多段 (R)
第23回	100	D-3	XII	#	爪形文	3 斜位横列多段 (R)
	101	B-2	(III)	#	爪形文	3 斜位横列多段 (R)
	102	B-2	(III)	#	爪形文	3 斜位横列多段 (R)
	103	B-2	(III)	#	爪形文	3 斜位横列多段 (R)
	104	B-3	(III)	#	爪形文	3 斜位横列多段 (L)
	105	C-2	XII	#	爪形文	3 斜位横列多段 (L)
	106	B-5	(III)	#	爪形文	3 斜位横列多段 (L)
	107	B-4	(III)	#	爪形文	3 斜位横列多段 (L)
	108	C-4	XII	#	爪形文	3 斜位横列多段 (L)
	109	C-4	XII	#	爪形文	3 斜位横列多段 (L)
	110	E-3	XII	#	爪形文	3 斜位横列多段 (L)
	111	D-2	XII	#	爪形文	3 斜位横列多段 (L)
	112	B-3	(III)	#	爪形文	3 斜位横列多段 (L)
	113	A-4	XII	#	爪形文	3 斜位横列多段 (L)
	114	C-5	XII	#	爪形文	3 斜位横列多段 (L)
	115	B-3	(III)	#	爪形文	3 斜位横列多段 (L)
	116	B-2	XII	#	爪形文	3 斜位横列多段 (L)
	117	A-3	XII	#	爪形文	3 斜位横列多段 (L)
	118	B-4・5	(トレンチ)	#	爪形文	3 斜位横列多段 (L)
	119	D-3	XII	#	爪形文	3 斜位横列多段 (L)
	120	A-2	XII	#	爪形文	3 斜位横列多段 (L)
	121	A-3	(III)	#	爪形文	3 斜位横列多段 (L)
	122	A-3	(III)	#	爪形文	3 斜位横列多段 (L)
	123	B-4	XII	#	爪形文	3 斜位横列多段 (L)
	124	B-2	(III)	#	爪形文	3 斜位横列多段 (L)
	125	B-2	XII	#	爪形文	3 斜位横列多段 (L)
	126	B-4・5	(トレンチ)	#	爪形文	3 斜位横列多段 (L)
	127	B-3	(III)	#	爪形文	3 斜位横列多段 (L)
	128	B-2	(III)	#	爪形文	3 斜位横列多段 (L)
	129	A-3	XII	#	爪形文	3 斜位横列多段 (L)
	130	B-4・5	(トレンチ)	#	爪形文	3 斜位横列多段 (L)
	131	A-2	(III)	#	爪形文	3 斜位横列多段 (L)
	132	X	#	爪形文	3 斜位横列多段 (L)	
	132	A-3	XII	#	爪形文	3 斜位横列多段 (L)
	133	A-2	(III)	#	爪形文	3 斜位横列多段 (L)
	134	D-4	XII	#	爪形文	3 斜位横列多段 (L)
	135	A-3	(III)	#	爪形文	3 斜位横列多段 (L)
	136	C-2	XII	#	爪形文	3 斜位横列多段 (L)
	137	C-3	XII	#	爪形文	3 斜位横列多段 (L)
	138	D-2	XII	#	爪形文	3 斜位横列多段 (L)
第24回	139	Z-3	(III)	#	爪形文	3 粗大糸斜位横列多段 (L)
	140	B-4・5	(トレンチ)	#	爪形文	3 粗大糸斜位横列多段 (L)
	141	A-3	XII	#	爪形文	3 粗大糸斜位横列多段 (L)
	142	D-5	XII	#	爪形文	3 羽状 (同傾多段+異方向)

第4表 出土土器觀察表(4)

探査番号	遺物番号	グリット	層位	土器分類	類	構成
第24回	143	D-4	XII	3群	爪形文	3 羽状(同傾多段+異方向)
	144	B-3	(XII)	"	爪形文	3 羽状(同傾多段+異方向)
	145	D-2	XII	"	爪形文	3 羽状(同傾多段+異方向)
	146	Z-3	(XII)	"	爪形文	3 羽状(同傾多段+異方向)
	147	E-4	XII	"	爪形文	3 羽状(同傾多段+異方向)
	148	B-4	(XII)	"	爪形文	3 羽状(同傾多段+異方向)
	149	B-4	XII	"	爪形文	3 羽状(同傾多段+異方向)
	150	B-4	XII	"	爪形文	3 羽状(同傾多段+「八」)
	151	B-2	(XII)	"	爪形文	3 羽状(同傾多段+水平)
	152	B-3	(XII)	"	爪形文	3 羽状(同傾多段+水平)
	153	D-5	XII	"	爪形文	3 羽状(同傾多段+異方向)
	154	A-2	XII	"	爪形文	3 羽状(同傾多段+異方向)
	155	B-4・5	(トレンチ)	"	爪形文	3 羽状(同傾多段+異方向)
	156	B-4	(XII)	"	爪形文	3 羽状(同傾多段+異方向)
	157	Z-3	XII	"	爪形文	3 羽状(同傾多段+異方向)
	158	B-3	(XII)	"	爪形文	3 羽状(同傾多段+異方向)
	159	D-4	XII	"	爪形文	3 羽状(各段異方向)
	160	B-2	(XII)	"	爪形文	3 羽状(横列多段異方向、爪+沈線?)
	161	C-4	XII	"	爪形文	3 羽状(異方向羽状)
	162	C-3	XII	"	爪形文	3 羽状(斜位多段+異方向)
	163	B-3	XII	"	爪形文	3 羽状
	164	A-4	XII	"	爪形文	3 羽状
	165	B-4	(XII)	"	爪形文	4 水平
	166	Z-3	(XII)	"	爪形文	4 水平
	167	B-4・5	(トレンチ)	"	爪形文	4 水平
	168	B-4	(XII)	"	爪形文	4 水平
	169	D-4	XII	"	爪形文	4 水平
	170	E-3	XII	"	爪形文	4 水平
	171	B-5	XII	"	爪形文	4 水平
	172	- A-4	XII	"	爪形文	4 水平
	173	A-4	XII	"	爪形文	4 水平
	174	B-3	XII	"	爪形文	4 水平
	175	A-3	(XII)	"	爪形文	4 水平
	176	A-3	(XII)	"	爪形文	4 水平
	177	D-2	(XII)	"	爪形文	4 水平
第25回	178	B-4	(XII)	"	爪形文	4 水平
	179	B-2	(XII)	"	爪形文	4 水平
	180	B-4	XII	"	爪形文	4 水平
	181	D-5	XII	"	爪形文	4 水平
	182	B-4	XII	"	爪形文	4 水平
	183	B-4	XII	"	爪形文	4 水平
	184	A-2	(XII)	"	爪形文	4 水平
	185	B-3	(XII)	"	爪形文	4 水平
	186	B-5	XII	"	爪形文	4 水平
	187	A-4	XII	"	爪形文	4 水平
	188	B-3	XII	"	爪形文	4 水平
	189	B-5	XII	"	爪形文	4 水平
	190	B-4	(XII)	"	爪形文	4 水平
	191	B-4	XII	"	爪形文	4 水平
	192	8439	XII	"	爪形文	4 水平
	193	B-3	XII	"	爪形文	4 水平
	194	E-5・6	"	"	爪形文	4 水平
	195	D-3	X	"	爪形文	4 水平
	196	B-2	(XII)	"	爪形文	4 水平
	197	B-4	XII	"	爪形文	4 水平
	198	C-2	XII	"	爪形文	4 水平
	199	B-4	(XII)	"	爪形文	4 水平

第4表 出出土器観察表(5)

探査番号	遺物番号	グリット	層位	土器分類	類	構成
第25回	200	A-4	Ⅲ	3群	爪形文	4 水平
	201	A-2	(Ⅲ)	#	爪形文	4 水平
	202	Z-3	Ⅲ	#	爪形文	4 水平
	203	B-4	Ⅲ	#	爪形文	4 水平
	204	Z-3	(Ⅲ)	#	爪形文	4 水平
	205	Z-4	(Ⅲ)	#	爪形文	4 水平
	206	B-4	(Ⅲ)	#	爪形文	4 水平
	207	A-3	(Ⅲ)	#	爪形文	4 水平
	208	A-3	(Ⅲ)	#	爪形文	4 水平
第26回	209	D-4	Ⅱ	#	爪形文	5 「八」
	210	A-4	Ⅲ	#	爪形文	5 「八」
	211	B-5	(Ⅲ)	#	爪形文	5 「八」
	212	C-3	Ⅲ	#	爪形文	5 「八」
	213	B-5	(Ⅲ)	#	爪形文	5 「八」
	214	B-2	Ⅲ	#	爪形文	5 「八」+斜位横列多段
	215	B-4	(Ⅲ)	#	爪形文	5 「八」
	216	A-3	Ⅲ	#	爪形文	5 「八」
	217	D-3	Ⅲ	#	爪形文	5 「八」
	218	B-5	Ⅲ	#	爪形文	5 「八」
	219	C-3	Ⅲ	#	爪形文	5 「八」
	220	B-4	(Ⅲ)	#	爪形文	5 「八」
	221	A-4	Ⅲ	#	爪形文	5 「八」
	222	C-5	Ⅲ	#	爪形文	5 「八」
	223	A-4	Ⅲ	#	爪形文	5 「八」
	224	A-2	Ⅲ	#	爪形文	5 「八」
	225	B-2	Ⅲ	#	爪形文	5 「八」
	226	C-4	Ⅲ	#	爪形文	5 「八」
	227	A-2	Ⅲ	#	爪形文	5 「八」
	228	A-2	Ⅲ	#	爪形文	5 「八」
	229	B-4	(Ⅲ)	#	爪形文	5 「八」
	230	D-2	Ⅲ	#	爪形文	5 「八」
	231	C-5	Ⅲ	#	爪形文	5 「八」
	232	B-4	Ⅲ	#	爪形文	5 「八」
	233	B-3	(Ⅲ)	#	爪形文	5 「八」
	234	A-5	(Ⅲ)	#	爪形文	5 「八」
	235	B-4	(Ⅲ)	#	爪形文	5 「八」
	236	A-3	(Ⅲ)	#	爪形文	5 「八」
	237	E-3	Ⅲ	#	爪形文	5 大形「八」
	238	C-4	(Ⅲ)	#	爪形文	5 大形「八」
	239	E-3	Ⅲ	#	爪形文	5 大形「八」+水平
	240	C-2	(Ⅲ)	#	爪形文	5 「八」+水平
	241	A-3	Ⅲ	#	爪形文	5 「八」+水平
	242	A-4	Ⅲ	#	爪形文	5 「八」+水平
	243	D-2	Ⅲ	#	爪形文	5 「八」+水平
第27回	244	C-4	Ⅲ	#	爪形文	6 併用(斜位+沈縫状爪)
	245	B-3	(Ⅲ)	#	爪形文	6 併用(爪+沈縫状爪)
	246	B-4	(Ⅲ)	#	爪形文	6 併用(爪+沈縫状爪)
	247	B-4	(Ⅲ)	#	爪形文	6 併用(爪+沈縫状爪)
	248	B-4	(Ⅲ)	#	爪形文	6 併用(爪+沈縫)
	249	D-3	Ⅲ	#	爪形文	6 併用(斜位多段+側面压痕)
	250	C-3	Ⅲ	#	爪形文	6 併用(斜位多段+側面压痕)
	251	D-3	Ⅲ	#	爪形文	6 併用(斜位+側面压痕)
	252	A-3	Ⅲ	#	爪形文	6 併用(「八」+側面压痕)
	253	B-2	Ⅲ	#	爪形文	6 併用(「八」+側面压痕)
	254	C-5	(Ⅲ)	#	爪形文	6 併用(「八」+側面压痕)
	255	C-4	Ⅲ	#	爪形文	6 併用(「八」+側面压痕)
	256	B-4	Ⅲ	#	爪形文	6 併用(「八」+側面压痕)

第4表 出土土器観察表(6)

鉢器番号	遺物番号	グリット	肩位	土器分類	類	構成
第27回	257	D-4	Ⅲ	3群	爪形文	6 併用(「ハ」+側面压痕)
	258	D-2	Ⅳ	#	爪形文	併用(斜位+側面压痕)
	259	E-4	Ⅴ	#	爪形文	併用(斜位横列多段+回転網文)
	260	A-4	Ⅵ	#	爪形文	併用(斜位横列多段+回転網文)
第28回	1	B-2	Ⅲ	4群	多網文	1 短網文
	2	A-3	(Ⅲ)	#	多網文	1 短網文
	3	B-4	(Ⅲ)	#	多網文	1 短網文
	4	Z-3	Ⅲ	#	多網文	1 短網文
	5	B-2	Ⅲ	#	多網文	1 短網文
	6	D-4	Ⅲ	#	多網文	1 短網文
	7			#	多網文	1 短網文
	8	C-2	Ⅲ	#	多網文	1 短網文
	9	C-4	Ⅲ	#	多網文	1 短網文
	10	B-4	Ⅲ	#	多網文	1 短網文
	11	A-3	(Ⅲ)	#	多網文	1 短網文
	12	A-3	Ⅲ	#	多網文	1 短網文
	13	C-2	Ⅲ	#	多網文	1 短網文
	14	A-4	Ⅲ	#	多網文	1 短網文
	15	C-4	X	#	多網文	1 短網文
	16	D-4	X	#	多網文	1 短網文
	17	E-3	(Ⅲ)	#	多網文	1 短網文
	18	C-2	Ⅲ	#	多網文	1 短網文
	19	C-4	Ⅲ	#	多網文	1 短網文
	20	B-2	(Ⅲ)	#	多網文	1 短網文
	21	C-4	X	#	多網文	1 短網文
	22	C-2	Ⅲ	#	多網文	1 短網文
	23	B-4	(Ⅲ)	#	多網文	1 短網文
	24	B-5	(Ⅲ)	#	多網文	1 短網文
	25	D-4	Ⅲ	#	多網文	1 短網文
	26	D-4	X	#	多網文	1 短網文
	27	C-3	X	#	多網文	1 短網文
	28	A-3	(Ⅲ)	#	多網文	1 短網文
	29	B-5	Ⅲ	#	多網文	1 短網文
	30	C-2	Ⅲ	#	多網文	1 短網文
	31	A-4	(Ⅲ)	#	多網文	1 短網文
	32	D-3	X	#	多網文	1 短網文
	33	B-1	(Ⅲ)	#	多網文	1 短網文
	34	D-2	(Ⅲ)	#	多網文	1 短網文
第29回	35	B-2	Ⅲ	#	多網文	2 紡条体压痕
	36	D-5	Ⅲ	#	多網文	2 紡条体压痕
	37	C-3	X	#	多網文	2 紡条体压痕
	38	E-5・6		#	多網文	2 紡条体压痕
	39	A-3	Ⅲ	#	多網文	2 紡条体压痕
	40	B-1	Ⅲ	#	多網文	2 紡条体压痕
	41	B-3	Ⅲ	#	多網文	2 紡条体压痕
	42	B-2	Ⅲ	#	多網文	2 紡条体压痕
	43	D-5	(Ⅲ)	#	多網文	2 紡条体压痕
	44	A-3	Ⅲ	#	多網文	2 紡条体压痕
	45	C-2	Ⅲ	#	多網文	2 紡条体压痕
	46	E-3	Ⅲ	#	多網文	2 紡条体压痕
	47	E-3	Ⅲ	#	多網文	2 紡条体压痕
	48	B-3	(Ⅲ)	#	多網文	2 紡条体压痕
	49	B-4・5	(トレンチ)	#	多網文	2 紡条体压痕
	49	A-3	(Ⅲ)	#	多網文	2 紡条体压痕
	50	B-4	Ⅲ	#	多網文	2 紡条体压痕
	51	B-4	(Ⅲ)	#	多網文	2 紡条体压痕
	52	B-4	(Ⅲ)	#	多網文	2 紡条体压痕

第4表 出出土器觀察表(7)

桝番号	遺物番号	グリット	層位	土器分類	類	構成
第29回	53	B-2	(Ⅲ)	4群	多繩文	2 線条体压痕
	54	A-3	(Ⅲ)	#	多繩文	2 線条体压痕
	55	C-5	(Ⅲ)	#	多繩文	2 線条体压痕
	56	B-4・5	(トレンチ)	#	多繩文	2 線条体压痕
	57	D-2	(Ⅲ)	#	多繩文	2 線条体压痕
	58	A-3	(Ⅲ)	#	多繩文	2 線条体压痕
	59	C-2	Ⅲ	#	多繩文	2 線条体压痕
	60	B-2	Ⅲ	#	多繩文	2 線条体压痕
	61	C-2	Ⅲ	#	多繩文	2 線条体压痕
	62	C-4	Ⅲ	#	多繩文	2 線条体压痕
	63	C-2	Ⅲ	#	多繩文	2 線条体压痕
	64	A-3	Ⅲ	#	多繩文	2 線条体压痕
	65	B-4	Ⅲ	#	多繩文	2 線条体压痕
	66	C-5	(Ⅲ)	#	多繩文	2 線条体压痕
	67	A-4	Ⅲ	#	多繩文	2 線条体压痕
	68	Z-2	(段下部)	#	多繩文	2 線条体压痕
	69	C-2	Ⅲ	#	多繩文	2 線条体压痕
	70	B-1	Ⅲ	#	多繩文	2 線条体压痕
	71	C-3		#	多繩文	2 線条体压痕
	72	B-3	Ⅲ	#	多繩文	2 線条体压痕
第30回	73	B-3	Ⅲ	#	多繩文	2 線条体压痕
	74	B-2	Ⅲ	#	多繩文	2 線条体压痕
	75	B-3	Ⅲ	#	多繩文	2 線条体压痕
	76	A-3	(Ⅲ)	#	多繩文	2 線条体压痕
	77	B-4	Ⅲ	#	多繩文	2 線条体压痕
	78	A-3	Ⅲ	#	多繩文	2 線条体压痕
	79	C-3	Ⅲ	#	多繩文	2 線条体压痕
	80	C-2	Ⅲ	#	多繩文	2 線条体压痕
	81	B-2	Ⅲ	#	多繩文	2 線条体压痕
	82	A-3	Ⅲ	#	多繩文	2 線条体压痕
	83	A-3	(Ⅲ)	#	多繩文	2 線条体压痕
	84	A-3	(Ⅲ)	#	多繩文	2 線条体压痕
	85	B-4	(Ⅲ)	#	多繩文	2 線条体压痕
	86	B-3	(Ⅲ)	#	多繩文	2 線条体压痕
	87			#	多繩文	2 線条体压痕
	88	A-3	(Ⅲ)	#	多繩文	2 線条体压痕
	89	D-3	X	#	多繩文	2 線条体压痕
	90	D-3	Ⅲ	#	多繩文	2 線条体压痕
	91	B-3	(Ⅲ)	#	多繩文	2 線条体压痕
	92	B-2	(Ⅲ)	#	多繩文	2 線条体压痕
	93	B-4・5	(トレンチ)	#	多繩文	2 線条体压痕
	94	A-4	(Ⅲ)	#	多繩文	2 線条体压痕
	95	B-3	(Ⅲ)	#	多繩文	2 線条体压痕
	96	B-4	(Ⅲ)	#	多繩文	2 線条体压痕
	97	C-4	Ⅲ	#	多繩文	2 線条体压痕
	98	C-3	X	#	多繩文	3 線条体压痕 + 白繩自巻B種 + 回転繩文
	99	C-2	Ⅲ	#	多繩文	3 線条体压痕 + 白繩自巻B種
	100	D-3	X	#	多繩文	3 線条体压痕 + 白繩自巻B種
	101	B-2	Ⅲ	#	多繩文	3 線条体压痕 + 白繩自巻B種 + 回転繩文
	102	C-4	X	#	多繩文	3 線条体压痕 + 白繩自巻B種 + 回転繩文
	103	C-4	X	#	多繩文	3 線条体压痕 + 白繩自巻B種 + 回転繩文
	104	A-3	Ⅲ	#	多繩文	3 線条体压痕 + 白繩自巻B種
	105	D-5	Ⅲ	#	多繩文	3 線条体压痕 + 白繩自巻B種
	106	E-3	Ⅲ	#	多繩文	3 線条体压痕 + 白繩自巻B種
	107	C-4	X	#	多繩文	3 線条体压痕 + 白繩自巻B種
第31回	108	B-3	Ⅲ	4群	多繩文	4 白繩自巻A種
	109	C-3	X	#	多繩文	4 白繩自巻A種

第4表 出土器観察表(8)

鉢器番号	遺物番号	グリット	肩位	土器分類	類	構成
第31回	110	C-4	(Ⅸ)	4群	多網文	4 自縄自巻A種
	111	C-2	X	"	多網文	4 自縄自巻A種
	112	B-5	(Ⅹ)	"	多網文	4 自縄自巻A種
	113	A-4	Ⅺ	"	多網文	4 自縄自巻A種
	114	A-3	Ⅺ	"	多網文	4 自縄自巻A種
	115	C-2	Ⅺ	"	多網文	4 自縄自巻A種
	116	B-2	Ⅺ	"	多網文	4 自縄自巻A種
	117	E-3	Ⅺ	"	多網文	5 自縄自巻A種+側面圧痕
	118	D-2	X	"	多網文	5 自縄自巻A種+側面圧痕
	119	A-5	(Ⅹ)	"	多網文	5 自縄自巻A種+側面圧痕
	120	D-3	Ⅺ	"	多網文	5 自縄自巻A種+側面圧痕
	121	A-3	Ⅺ	"	多網文	5 自縄自巻A種+側面圧痕
	122	A-3	(Ⅹ)	"	多網文	5 自縄自巻A種+側面圧痕
	123	C-4	X	"	多網文	5 自縄自巻A種+側面圧痕
	124	B-4	Ⅸ	"	多網文	5 自縄自巻A種+側面圧痕
	125	C-4	X	"	多網文	5 自縄自巻A種+側面圧痕
	126	A-4	Ⅸ	"	多網文	5 自縄自巻A種+側面圧痕
	127	A-4	Ⅸ	"	多網文	5 自縄自巻A種+側面圧痕
	128	A-5	Ⅸ	"	多網文	5 自縄自巻A種+側面圧痕
	129	C-3	Ⅺ	"	多網文	5 自縄自巻A種+側面圧痕
	130	A-4	Ⅺ	"	多網文	5 自縄自巻A種+側面圧痕
	131	A-3	Ⅺ	"	多網文	5 自縄自巻A種+側面圧痕
	132	A-3	Ⅸ	"	多網文	5 自縄自巻A種+側面圧痕
	133	C-4	Ⅺ	"	多網文	5 自縄自巻A種+側面圧痕
	134	C-3	Ⅺ	"	多網文	5 自縄自巻A種+側面圧痕
	135	D-4	X	"	多網文	5 自縄自巻A種+側面圧痕
	136	D-4	Ⅺ	"	多網文	5 自縄自巻A種+側面圧痕
	137	B-4	(Ⅹ)	"	多網文	5 自縄自巻A種+側面圧痕
	138	B-3	Ⅺ	"	多網文	5 自縄自巻A種+側面圧痕
	139	B-5	(Ⅹ)	"	多網文	5 自縄自巻A種+側面圧痕
	140	E-3	Ⅺ	"	多網文	5 自縄自巻A種+側面圧痕
	141	C-2	Ⅸ	"	多網文	5 自縄自巻A種+側面圧痕
	142	B-2	Ⅸ	"	多網文	5 自縄自巻A種+側面圧痕
	143	D-3	Ⅺ	"	多網文	5 自縄自巻A種+側面圧痕
第32回	144	B-3	Ⅺ	"	多網文	6 先端斜尖+側面圧痕
	145	B-2	(Ⅹ)	"	多網文	6 先端斜尖+側面圧痕
	146	C-2	Ⅺ	"	多網文	6 先端斜尖+側面圧痕
	147	A-3	Ⅺ	"	多網文	6 先端斜尖+側面圧痕
	148	B-5	(Ⅹ)	"	多網文	6 先端斜尖+側面圧痕
	149	C-3	Ⅺ	"	多網文	6 先端斜尖+側面圧痕
	150	C-2		"	多網文	6 先端斜尖+側面圧痕
	151	B-3	Ⅺ	"	多網文	6 先端斜尖+側面圧痕
	152	A-3	Ⅸ	"	多網文	6 先端斜尖+側面圧痕
	153	C-5	(Ⅹ)	"	多網文	6 先端斜尖+側面圧痕
	154	B-4	(Ⅹ)	"	多網文	6 先端斜尖+側面圧痕
	155	E-4	X	"	多網文	7 側面圧痕+自縄自巻A種+自縄網文
	156	D-4	Ⅺ	"	多網文	7 側面圧痕+自縄自巻A種
	157	B-3	Ⅺ	"	多網文	7 側面圧痕+自縄自巻A種
	158	C-2	Ⅺ	"	多網文	7 側面圧痕+自縄自巻A種
	159	C-3	(Ⅹ)	"	多網文	7 側面圧痕+自縄自巻A種
	160	E-3	Ⅺ	"	多網文	7 側面圧痕+自縄自巻A種
	161	E-2	Ⅺ	"	多網文	8 側面圧痕
	162	D-3	X	"	多網文	8 側面圧痕
	163	D-5	Ⅺ	"	多網文	8 側面圧痕
	164	C-3	Ⅺ	"	多網文	8 側面圧痕
	165	A-4	Ⅸ	"	多網文	8 側面圧痕
	166	A-5	Ⅸ	"	多網文	8 側面圧痕

第4表 出土土器観察表(9)

擇因番号	遺物番号	グリット	層位	土器分類	類	構成
第32団	167	A-3	II	4群	多縄文	8 側面压痕
	168	C-4	II	#	多縄文	8 側面压痕
	169	D-3	II	#	多縄文	8 側面压痕
	170	B-4	(III)	#	多縄文	8 側面压痕
	171	B-4	III	#	多縄文	8 側面压痕
	172	C-3	III	#	多縄文	8 側面压痕
	173	A-5	III	#	多縄文	8 側面压痕
	174	D-4	II	#	多縄文	8 側面压痕
	175	C-2	II	#	多縄文	8 側面压痕
	176	A-4	III	#	多縄文	8 側面压痕
	177	B-3	III	#	多縄文	8 側面压痕
	178	A-4	II	#	多縄文	8 側面压痕
	179	B-3	II	#	多縄文	8 側面压痕
	180	C-4	II	#	多縄文	8 側面压痕
第33団	181	C-3	II	#	多縄文	8 側面压痕
	182	B-3	(III)	#	多縄文	8 側面压痕
	183	A-4	(III)	#	多縄文	8 側面压痕
	184	D-4	II	#	多縄文	8 側面压痕
	185	B-3	(III)	#	多縄文	8 側面压痕
	186	B-4	(III)	#	多縄文	8 側面压痕
	187	B-3	III	#	多縄文	8 側面压痕
	188	B-3	II	#	多縄文	8 側面压痕
	189	B-3	II	#	多縄文	8 側面压痕
	190	A-4	II	#	多縄文	8 側面压痕
	191	D-4	(III)	#	多縄文	8 側面压痕
	192	B-3	(III)	#	多縄文	8 側面压痕
	193	B-4	(III)	#	多縄文	8 側面压痕
	194	A-4	III	#	多縄文	8 側面压痕
	195	B-4	(III)	#	多縄文	8 側面压痕
	196	B-3	III	#	多縄文	8 側面压痕
	197	B-3	III	#	多縄文	8 側面压痕
	198	B-4	(III)	#	多縄文	8 側面压痕
	199	B-4	(III)	#	多縄文	8 側面压痕
	200	B-4	(III)	#	多縄文	8 側面压痕
	201	B-2	II	#	多縄文	8 側面压痕
	202	B-3	II	#	多縄文	8 側面压痕
	203	D-3	II	#	多縄文	8 側面压痕
	204	D-5	II	#	多縄文	8 先端剥突
	205	D-2	(III)	#	多縄文	8 先端剥突
	206	E-4	(III)	#	多縄文	8 先端剥突
	207	A-4	II	#	多縄文	8 先端剥突
	208	C-2	(III)	#	多縄文	8 先端剥突
	209	B-4	II	#	多縄文	8 先端剥突
	210	C-4	(III)	#	多縄文	8 先端剥突
	211	B-3	(III)	#	多縄文	8 先端剥突
	212	E-4	(III)	#	多縄文	8 先端剥突
	213	C-4	II	#	多縄文	8 先端剥突
第34・35団	214	C-6・7	(斜面)	#	多縄文	9 側面压痕+回転縄文
	215	D-5	II	#	多縄文	9 側面压痕+回転縄文
	216	C-5	(III)	#	多縄文	9 側面压痕+回転縄文
	217	C-5	(III)	#	多縄文	9 側面压痕+回転縄文
第34・35団	218	C-3	II	#	多縄文	9 押し引き文+回転縄文
第36団	219	C-4	II	#	多縄文	10 回転縄文+押压縄文
	220	B-2	II	#	多縄文	10 回転縄文+押压縄文
	221	B-3	II	#	多縄文	10 回転縄文+押压縄文
	222	D-4	II	#	多縄文	10 回転縄文+押压縄文
	223	C-3	(人骨下)	#	多縄文	10 回転縄文+押压縄文

第4表 出土土器観察表(II)

桝印番号	遺物番号	グリット	肩位	土器分類	類	構成
第36図	224	D-5	Ⅲ	4群	多純文	11 回転繩文+押圧繩文
	225	C-5	Ⅲ	#	多純文	11 回転繩文+押圧繩文
	226	C-4	Ⅲ	#	多純文	11 回転繩文+先端刺突
	227	B-2	Ⅸ	#	多純文	11 回転繩文+先端刺突
	228	B-1	(Ⅲ)	#	多純文	11 回転繩文+先端刺突
	229	D-4	(Ⅸ)	#	多純文	11 回転繩文+先端刺突
	230	B-3	(Ⅲ)	#	多純文	11 回転繩文+押圧繩文
	231	A-3	(Ⅲ)	#	多純文	11 回転繩文+押圧繩文
	232	B-2	Ⅲ	#	多純文	11 回転繩文+押圧繩文
	233	B-1	Ⅲ	#	多純文	11 回転繩文+押圧繩文
	234	A-3	(Ⅲ)	#	多純文	11 回転繩文+押圧繩文
	235	B-2	Ⅸ	#	多純文	11 回転繩文+押圧繩文
	236	D-5	Ⅲ	#	多純文	11 回転繩文+押圧繩文
	237	B-3	(Ⅲ)	#	多純文	11 回転繩文+押圧繩文
	238	B-2	(Ⅲ)	#	多純文	11 回転繩文+押圧繩文
	239	B-4	(Ⅲ)	#	多純文	11 回転繩文+押圧繩文
	240	A-3	(Ⅸ)	#	多純文	11 回転繩文+押圧繩文
	241	A-4	Ⅸ	#	多純文	11 回転繩文+側面压痕
	242	C-2	Ⅲ	#	多純文	11 回転繩文+側面压痕
	243	C-4	X	#	多純文	11 回転繩文+側面压痕
	244	C-4	X	#	多純文	11 回転繩文+側面压痕
	245	B-2	(Ⅲ)	#	多純文	11 回転繩文+側面压痕
	246	B-3	Ⅹ	#	多純文	11 回転繩文+側面压痕
	247	C-4	X	#	多純文	11 回転繩文+側面压痕
	248			#	多純文	11 回転繩文+側面压痕
	249	C-4	Ⅹ	#	多純文	11 回転繩文+側面压痕
	250	B-2	(Ⅹ)	#	多純文	11 回転繩文+側面压痕
	251	A-4	Ⅹ	#	多純文	11 回転繩文+側面压痕
	252	A-4	(Ⅹ)	#	多純文	11 回転繩文+側面压痕
	253	A-4	Ⅹ	#	多純文	11 回転繩文+側面压痕
第37図	254	C-4	X	#	多純文	11 回転繩文+側面压痕
	255			#	多純文	11 回転繩文+側面压痕
	256	B-4	(Ⅹ)	#	多純文	11 回転繩文+側面压痕
	257	A-4	Ⅹ	#	多純文	11 回転繩文+側面压痕
	258	C-3	Ⅹ	#	多純文	11 回転繩文+側面压痕
	259	C-4	X	#	多純文	11 回転繩文+側面压痕
	260	C-4	X	#	多純文	11 回転繩文+側面压痕
	261	C-4	X	#	多純文	11 回転繩文+側面压痕
	262	A-3	(Ⅹ)	#	多純文	11 回転繩文+側面压痕
	263	D-4	Ⅹ	#	多純文	11 回転繩文+側面压痕
	264	A-4	(Ⅹ)	#	多純文	11 回転繩文+側面压痕
	265	C-3	X	#	多純文	12 自繩自魯B種回転
	266	Z-4	(Ⅹ)	#	多純文	12 自繩自魯D種回転
	267	B-3	Ⅲ	#	多純文	12 自繩自魯B種回転
	268	C-5	(Ⅹ)	#	多純文	12 自繩自魯B種回転
	269	C-4	Ⅲ	#	多純文	12 自繩自魯D種回転
	270	D-5	Ⅲ	#	多純文	12 自繩自魯B種回転
	271	A-3	Ⅲ	#	多純文	12 自繩自魯D種回転
	272	D-5	Ⅲ	#	多純文	12 自繩自魯B種回転
	273	C-6・7		#	多純文	12 自繩自魯B種回転
	274	C-4	Ⅲ	#	多純文	12 自繩自魯B種回転
	275	A-3	Ⅲ	#	多純文	12 自繩自魯B種回転
	276	B-3	Ⅲ	#	多純文	12 自繩自魯D種回転
	277	A-3	Ⅲ	#	多純文	12 自繩自魯B種回転
	278	D-3	Ⅲ	#	多純文	12 自繩自魯B種回転
	279	A-4	Ⅲ	#	多純文	12 自繩自魯B種回転
	280	E-5・6		#	多純文	12 自繩自魯B種回転

第4表 出土土器觀察表(II)

検出番号	遺物番号	グリット	層位	土 器 分 類	類	構 成
第37回	281	B-4	(Ⅲ)	4群	多縄文	12
	282	A-4	Ⅳ	#	多縄文	12
	283	A-4	Ⅴ	#	多縄文	12
	284	B-2	(Ⅲ)	#	多縄文	12
	285	C-2	(X)	#	多縄文	12
	286	B-4・5	(トレンチ)	#	多縄文	12
	287	C-5	Ⅲ	#	多縄文	12
	288	A-4	Ⅲ	#	多縄文	12
	289	B-3	Ⅲ	#	多縄文	13
	290	B-3	Ⅳ	#	多縄文	13
	291	B-3	Ⅲ	#	多縄文	13
第38回	292	A-3	#	多縄文	14	刺突文
	293	A-3	(Ⅲ)	#	多縄文	14
	294	B-3	Ⅲ	#	多縄文	14
	295	Z-4	(Ⅲ)	#	多縄文	14
	296	B-4・5	(トレンチ)	#	多縄文	14
	297	A-3	Ⅲ	#	多縄文	14
	298	A-3	#	多縄文	14	
	299	A-3	(Ⅲ)	#	多縄文	14
	300	B-3	(Ⅲ)	#	多縄文	14
	301	A-3	(Ⅲ)	#	多縄文	14
	302	B-3	Ⅲ	#	多縄文	14
	303	A-3	(Ⅲ)	#	多縄文	14
	304	B-4	(Ⅲ)	#	多縄文	14
	305	A-3	(Ⅲ)	#	多縄文	14
	306	B-2	(Ⅲ)	#	多縄文	14
	307	B-2	(Ⅲ)	#	多縄文	14
	308	E-3	Ⅲ	#	多縄文	14
	309	B-2	(Ⅲ)	#	多縄文	14
	310	D-2	X-Ⅲ	#	多縄文	14
	311	D-4	Ⅲ	#	多縄文	14
	312	D-4	Ⅲ	#	多縄文	14
	313	B-4	(Ⅲ)	#	多縄文	14
	314	土壤サンプル	(Ⅲ)	#	多縄文	14
	315	B-2	(Ⅲ)	#	多縄文	14
	316	A-4	Ⅲ	#	多縄文	14
	317	B-4	Ⅲ	#	多縄文	14
	318	D-3	Ⅲ	#	多縄文	14
	319	Z-2	Ⅲ	#	多縄文	14
	320	A-3	(Ⅲ)	#	多縄文	14
	321	D-2	(Ⅲ)	#	多縄文	14
	322	B-1	(Ⅲ)	#	多縄文	14
	323	C-3	Ⅲ	#	多縄文	14
	324	C-3	(Ⅲ)	#	多縄文	14
	325	B-2	(Ⅲ)	#	多縄文	14
第39回	1	A-3	Ⅲ	5群	圓軸縄文	1a 羽状
	2	C-4	Ⅲ	#	圓軸縄文	1a 羽状
	3	B-4	Ⅲ	#	圓軸縄文	1a 羽状
	4	B-4	X	#	圓軸縄文	1a 羽状
	5	C-3	Ⅲ	#	圓軸縄文	1a 羽状
	6	C-3	Ⅲ	#	圓軸縄文	1a 羽状
	7	C-4	Ⅲ	#	圓軸縄文	1a 羽状
	8	A-3	Ⅲ	#	圓軸縄文	1a 羽状
	9	A-3	Ⅲ	#	圓軸縄文	1a 羽状
	10	A-3	Ⅲ	#	圓軸縄文	1a 羽状
	11	A-3	Ⅲ	#	圓軸縄文	1a 羽状
	12	C-3	X	#	圓軸縄文	1a 羽状

第4表 出土土器観察表

桿団番号	遺物番号	グリット	層位	土器分類	類	構成
第39回	13	D-3	Ⅲ	5群	回転繩文	1a 羽状
	14	B-4	(Ⅲ)	#	回転繩文	1a 羽状
	15	C-2	Ⅲ	#	回転繩文	1a 羽状
	16	D-2	X	#	回転繩文	1a 羽状
	17	D-5	X	#	回転繩文	1a 羽状
	18	E-3	X	#	回転繩文	1a 羽状
	19	A-3	Ⅲ	#	回転繩文	1a 羽状
	20	D-4	X	#	回転繩文	1a 羽状
	21	E-5	X	#	回転繩文	1a 羽状
	22	C-3	X	#	回転繩文	1a 羽状
	23	E-3	X	#	回転繩文	1a 羽状
	24	E-4	(Ⅲ)	#	回転繩文	1a 羽状
	25	C-4	X	#	回転繩文	1a 羽状
	26	C-2	X	#	回転繩文	1b 羽状
	27	B-4	X	#	回転繩文	1b 羽状
	28	B-3	X	#	回転繩文	1b 羽状
	29	A-2	(Ⅲ)	#	回転繩文	1b 羽状
	30	B-4	Ⅲ	#	回転繩文	1b 羽状
	31	A-4	Ⅲ	#	回転繩文	1b 羽状
	32	E-4	Ⅲ	#	回転繩文	1b 羽状
第40回	33	E-4	Ⅲ	#	回転繩文	1b 羽状
	34	E-5・6		#	回転繩文	1b 羽状
	35	B-3	(Ⅲ)	#	回転繩文	1b 羽状
	36	D-3	Ⅲ	#	回転繩文	1b 羽状
	37	D-3	X	#	回転繩文	1b 羽状
	38	D-5	(Ⅲ)	#	回転繩文	1b 羽状
	39	A-4	(Ⅲ)	#	回転繩文	1b 羽状
	40	C-2	Ⅲ	#	回転繩文	1b 羽状
	41	D-2	Ⅲ	#	回転繩文	1b 羽状
	42	C-3	Ⅲ	#	回転繩文	1b 羽状
	43	A-4	(Ⅲ)	#	回転繩文	1b 羽状
	44	D-3	Ⅲ	#	回転繩文	1b 羽状
	45	D-5	X	#	回転繩文	1b 羽状
	46	A-4	(Ⅲ)	#	回転繩文	1b 羽状
	47	D-3	X	#	回転繩文	1b 羽状
	48	A-2	Ⅲ	#	回転繩文	1b 羽状
	49	B-5	(Ⅲ)	#	回転繩文	1b 羽状
	50	B-3	(Ⅲ)	#	回転繩文	1b 羽状
	51	C-4	Ⅲ	#	回転繩文	1b 羽状
	52	D-2	Ⅲ	#	回転繩文	1b 羽状
	53	D-2	X	#	回転繩文	1b 羽状
	54	B-4	X	#	回転繩文	1b 羽状
	55	D-5	X	#	回転繩文	1b 羽状
	56	C-4	Ⅲ	#	回転繩文	2 羽状
	57	A-3		#	回転繩文	2 羽状
	58	C-2	X	#	回転繩文	2 羽状
	59	D-4	Ⅲ	#	回転繩文	2 羽状
	60	B-3	Ⅲ	#	回転繩文	2 羽状
	61	D-4	X	#	回転繩文	2 羽状
	62	D-5	Ⅲ	#	回転繩文	2 羽状
	63	B-4	Ⅲ	#	回転繩文	2 羽状
	64	D-5	X	#	回転繩文	2 羽状
第41回	65	D-3	X	#	回転繩文	1a L.R
	66	C-3	X	#	回転繩文	1a L.R
	67	A-3	(Ⅲ)	#	回転繩文	1a L.R
	68	A-4	(Ⅲ)	#	回転繩文	1a L.R
	69	A-4	Ⅲ	#	回転繩文	1a L.R

第4表 出土土器観察表(2)

博団番号	遺物番号	グリット	層位	土器分類	類	構成
第41図	70	E-2	X	5群	回転縄文	1a LR
	71	E-3	X	#	回転縄文	1a LR
	72	A-2	X	#	回転縄文	1a LR
	73	B-3	X	#	回転縄文	1a LR
	74	B-4	X	#	回転縄文	1a LR
	75	C-5	(X)	#	回転縄文	1a LR
	76	E-3	X	#	回転縄文	1a LR
	77	C-2	X	#	回転縄文	1a LR
	78	E-4	X	#	回転縄文	1a LR
	79	D-5	X	#	回転縄文	1a LR
	80	C-2	X	#	回転縄文	1b LR
	81	D-3	X	#	回転縄文	1b LR
	82	C-2	X	#	回転縄文	1b LR
	83	C-4	(X)	#	回転縄文	1b LR
	84	D-2	X	#	回転縄文	1b LR
	85	B-3	X	#	回転縄文	1b LR
	86	E-2	X	#	回転縄文	1b LR
	87	B-3	X	#	回転縄文	1b LR
	88	D-3	X	#	回転縄文	1b LR
	89	B-4	(X)	#	回転縄文	1b LR
	90	B-3	(X)	#	回転縄文	1b LR
	91	B-4	(X)	#	回転縄文	1b LR
	92	D-3	X	#	回転縄文	1b LR
	93	D-4	X	#	回転縄文	1b LR
	94	D-3	X	#	回転縄文	1b LR
	95	D-5	X	#	回転縄文	1b LR
	96	D-2	X	#	回転縄文	1b LR
	97	C-3	X	#	回転縄文	1b LR
	98	D-3	X	#	回転縄文	1b LR
	99	D-3	X	#	回転縄文	1b LR
	100	C-3	X	#	回転縄文	1b LR
	101	B-4	X	#	回転縄文	1b LR
第42図	102	C-2	X	#	回転縄文	1b LR
	103	C-3	X	#	回転縄文	1b LR
	104	C-3	X	#	回転縄文	1b LR
	105	A-2	X	#	回転縄文	1b LR
	106	A-4	X	#	回転縄文	1b LR
	107	C-3	X	#	回転縄文	1b LR
	108	D-3	X	#	回転縄文	1b LR
	109	B-5	X	#	回転縄文	1b LR
	110	C-2	(X)	#	回転縄文	1b LR
	111	D-3	X	#	回転縄文	1b LR
	112	D-4	X	#	回転縄文	1b LR
	113	E-4	X	#	回転縄文	1b LR
	114	D-3	X	#	回転縄文	1b LR
	115	E-3	X	#	回転縄文	1b LR
	116	C-5	X	#	回転縄文	1b LR
	117	D-3	X	#	回転縄文	1b LR
	118	D-4	X	#	回転縄文	1b LR
	119	D-3	X	#	回転縄文	1b LR
	120	D-3	X	#	回転縄文	1b LR
	121	D-2	X	#	回転縄文	1b LR
	122	C-4	X	#	回転縄文	1b LR
	123	E-5	X	#	回転縄文	1b LR
	124	C-2	X	#	回転縄文	1b LR
	125	D-2	X	#	回転縄文	1b LR
	126	D-3	X	#	回転縄文	1b LR

第4表 出土土器観察表04

件目番号	遺物番号	グリット	層位	土器分類	類	構成
第42回	127	D-5	II	5群	回転繩文	1b LR
	128	A-4	II	#	回転繩文	1b LR
	129	D-3	II	#	回転繩文	1b LR
	130	C-3	II	#	回転繩文	1b LR
	131	D-3	X	#	回転繩文	1b LR
	132	D-5	IX	#	回転繩文	1b LR
	133	D-4	IX	#	回転繩文	1b LR
	134	B-4	(X)	#	回転繩文	1b LR
	135	D-3	X	#	回転繩文	2 LR
	136	D-3	X	#	回転繩文	2 LR
	137	C-3	X	#	回転繩文	2 LR
	138	D-3	II	#	回転繩文	2 LR
	139	E-2	IX	#	回転繩文	2 LR
第43回	140	D-3	X	#	回転繩文	2 LR
	141	C-2	IX	#	回転繩文	2 LR
	142	C-4	IX	#	回転繩文	2 LR
	143	B-3	II	#	回転繩文	2 LR
	144	B-4	X	#	回転繩文	2 LR
	145	B-2	IX	#	回転繩文	2 LR
	146	B-4	II	#	回転繩文	2 LR
	147	C-2	IX	#	回転繩文	2 LR
	148	E-5	II	#	回転繩文	2 LR
	149	C-5	II	#	回転繩文	2 LR
	150	D-3	X	#	回転繩文	2 LR
	151	D-3	IX	#	回転繩文	2 LR
	152	E-5	IX	#	回転繩文	2 LR
	153	B-4	II	#	回転繩文	2 LR
	154	D-4	IX	#	回転繩文	2 LR
	155	E-3	II	#	回転繩文	2 LR
	156	D-2	X	#	回転繩文	2 LR
	157	D-3	II	#	回転繩文	2 LR
	158	B-4	II	#	回転繩文	2 LR
	159	D-5	IX	#	回転繩文	2 LR
	160	E-4	II	#	回転繩文	2 LR
第44回	161	B-3	IX	#	回転繩文	2 LR
	162	C-2	II	#	回転繩文	2 LR
	163	D-3	X	#	回転繩文	2 LR
	164	D-4	IX	#	回転繩文	2 LR
	165	D-4	X	#	回転繩文	2 LR
	166	B-4	IX	#	回転繩文	2 LR
	167	E-4	X	#	回転繩文	2 LR
	168	D-2	II	#	回転繩文	2 LR
	169	D-3	II	#	回転繩文	2 LR
	170	C-4	(II)	#	回転繩文	2 LR
	171	D-5	IX	#	回転繩文	2 LR
	172	D-4	X	#	回転繩文	2 LR
	173	D-2	(II)	#	回転繩文	2 LR
	174	D-2	X	#	回転繩文	2 LR
	175	D-4	X	#	回転繩文	2 LR
	176	C-4	II	#	回転繩文	2 LR
	177	A-4	II	#	回転繩文	2 LR
	178	C-3	IX	#	回転繩文	2 LR
	179	A-2	II	#	回転繩文	2 LR
	180	C-2	IX	#	回転繩文	2 LR
	181	C-3	II	#	回転繩文	2 LR
	182	D-3	II	#	回転繩文	2 LR
	183	Z-4	(II)	#	回転繩文	2 LR

第4表 出土土器観察表(9)

博物番号	遺物番号	グリット	層位	土器分類	類	構成
第44回	184	B-4	X	5群	回転縄文	2 LR
	185	B-4	II	#	回転縄文	2 LR
	186	B-4	III	#	回転縄文	2 LR
	187	E-3	X	#	回転縄文	2 LR
	188	z-4	(II)	#	回転縄文	2 LR
	189	D-3	(II)	#	回転縄文	2 LR
	190	B-4	III	#	回転縄文	2 LR
	191	D-3	II	#	回転縄文	2 LR
	192	C-6.7		#	回転縄文	2 LR
第45回	193	E-4	X	#	回転縄文	1a RL
	194	C-3	II	#	回転縄文	1a RL
	195	C-3	X	#	回転縄文	1a RL
	196	D-2	II	#	回転縄文	1a RL
	197	C-3	X	#	回転縄文	1a RL
	198	E-4	X	#	回転縄文	1a RL
	199	E-5	II	#	回転縄文	1a RL
	200			#	回転縄文	1a RL
	201	C-3	III	#	回転縄文	1a RL
	202	A-4	II	#	回転縄文	1a RL
	203	B-4	X	#	回転縄文	1a RL
	204	C-3	X	#	回転縄文	1a RL
	205	B-4.5	(トレンチ)	#	回転縄文	1a RL
	206	A-3	III	#	回転縄文	1a RL
	207	D-5	X	#	回転縄文	1a RL
	208	D-4	X	#	回転縄文	1b RL
	209	D-4	II	#	回転縄文	1b RL
	210	D-4	II	#	回転縄文	1b RL
	211	C-4	X	#	回転縄文	1b RL
	212	C-3	III	#	回転縄文	1b RL
	213	D-3	II	#	回転縄文	1b RL
	214	B-3	(III)	#	回転縄文	1b RL
	215	A-4	II	#	回転縄文	1b RL
	216			#	回転縄文	1b RL
	217	A-4	II	#	回転縄文	1b RL
	218	B-3	II	#	回転縄文	1b RL
	219	E-4	X	#	回転縄文	1b RL
	220	D-3	II	#	回転縄文	1b RL
	221	B-3	II	#	回転縄文	1b RL
	222	C-4	II	#	回転縄文	1b RL
	223	C-3	II	#	回転縄文	2 RL
	224	D-4	X	#	回転縄文	2 RL
	225	C-2	X	#	回転縄文	2 RL
	226	D-3	III	#	回転縄文	2 RL
	227	A-5	II	#	回転縄文	2 RL
	228	B-2	II	#	回転縄文	2 RL
	229	D-4	II	#	回転縄文	2 RL
	230	A-5	II	#	回転縄文	2 RL
	231	D-4	II	#	回転縄文	2 RL
	232	D-4	X	#	回転縄文	2 RL
	233	B-3	II	#	回転縄文	2 RL
第46回	234	C-3	III	#	回転縄文	2 RL
	235	D-4	II	#	回転縄文	2 RL
	236	E-4	II	#	回転縄文	2 RL
	237	D-3	II	#	回転縄文	2 RL
	238	E-3	II	#	回転縄文	2 RL
	239	B-3	II	#	回転縄文	2 RL
	240	D-3	X	#	回転縄文	2 RL

第4表 出土器物観察表(10)

桝図番号	遺物番号	グリット	層位	土器分類	類	構成
第46図	241	D-3	X	5群	回転繩文	2 RL
	242	B-4	II	#	回転繩文	2 RL
	243	B-4	(III)	#	回転繩文	2 RL
	244	D-4	II	#	回転繩文	2 RL
	245	C-4	II	#	回転繩文	2 RL
	246	D-4	X	#	回転繩文	2 RL
	247	C-2	X	#	回転繩文	2 RL
	248	D-4	II	#	回転繩文	2 RL
	249	B-4	II	#	回転繩文	2 RL
	250	D-5	X	#	回転繩文	2 RL
	251	B-3	II	#	回転繩文	2 RL
	252	C-4	II	#	回転繩文	2 RL
	253	E-3	II	#	回転繩文	2 RL
	254	D-3	II	#	回転繩文	2 RL
	255	B-3	II	#	回転繩文	2 RL
	256	C-5	(III)	#	回転繩文	2 R
	257	C-5	(III)	#	回転繩文	2 R
	258	D-4	X	#	回転繩文	2 L
	259	D-3	X	#	回転繩文	2 L
第47図	1	D-2	X	6群	表裏繩文	1 直立・内面全面施文 (R)
	2	D-4	X	#	表裏繩文	1 直立・内面全面施文 (R)
	3	E-5	II	#	表裏繩文	1 直立・内面全面施文 (R)
	4	E-5	II	#	表裏繩文	1 直立・内面全面施文 (R)
	5	E-2	X	#	表裏繩文	1 直立・内面全面施文 (R)
	6	C-5	(III)	#	表裏繩文	1 直立・内面全面施文 (R)
	7	C-3		#	表裏繩文	1 直立・内面全面施文 (R)
	8	A-3	II	#	表裏繩文	1 直立・内面全面施文 (R)
	9	C-3	II	#	表裏繩文	1 直立・内面全面施文 (R)
	10	A-3	(III)	#	表裏繩文	1 直立・内面全面施文 (R)
	11	C-3	II	#	表裏繩文	1 直立・内面全面施文 (R)
	12	A-4	II	#	表裏繩文	1 直立・内面全面施文 (R)
	13	E-5	II	#	表裏繩文	1 直立・内面全面施文 (R)
	14	B-4	II	#	表裏繩文	1 直立・内面全面施文 (R)
	15	D-3	X	#	表裏繩文	1 直立・内面全面施文 (R)
	16	Z-3	遺	#	表裏繩文	1 直立・内面全面施文 (R)
	17	E-5	II	#	表裏繩文	1 直立・内面全面施文 (R)
第48図	18	E-4	II	#	表裏繩文	1 直立・内面全面施文 (L R)
	19	A-2	II	#	表裏繩文	1 直立・内面全面施文 (L R)
	20	A-3	II	#	表裏繩文	1 直立・内面全面施文 (L R)
	21	A-4	II	#	表裏繩文	1 直立・内面全面施文 (L R)
	22	D-5	X	#	表裏繩文	1 直立・内面全面施文 (L R)
	23	B-3	II	#	表裏繩文	1 直立・内面全面施文 (L R)
	24	D-3	II	#	表裏繩文	1 直立・内面全面施文 (L R)
	25	C-3		#	表裏繩文	1 直立・内面全面施文 (L R)
	26	B-4	X	#	表裏繩文	2 縦曲・口縫内面施文 (L R)
	27	A-2	II	#	表裏繩文	2 扇曲・口縫内面施文 (L R)
	28	C-3		#	表裏繩文	2 扇曲・口縫内面施文 (L R)
	29	C-6	(III)	#	表裏繩文	2 縦曲・口縫内面施文 (L R)
	30	A-4	(III)	#	表裏繩文	2 扇曲・口縫内面施文 (L R)
	31	D-4	II	#	表裏繩文	2 扇曲・口縫内面施文 (L R)
	32	E-4	II	#	表裏繩文	2 扇曲・口縫内面施文 (L R)
	33	B-4	X	#	表裏繩文	2 扇曲・口縫内面施文 (L R)
	34	C-3		#	表裏繩文	3 外反・口縫内面施文 (L R)
	35	D-4	X	#	表裏繩文	3 外反・口縫内面施文 (L R)
	36	B-4	(III)	#	表裏繩文	3 外反・口縫内面施文 (L R)
	37	A-3	II	#	表裏繩文	3 外反・口縫内面施文 (L R)
	38			#	表裏繩文	3 外反・口縫内面施文 (L R)

第4表 出土土器観察表④

検出番号	遺物番号	グリット	層位	土器分類	類	構成
第48区	39	D-4	X	6群 表裏縄文	3	外反・口縁内面施文 (L R)
	40	D-4	X		3	外反・口縁内面施文 (L R)
	41	C-3	(X)		3	外反・口縁内面施文 (L R)
	42	C-3	(X)		3	外反・口縁内面施文 (L R)
	43	D-2	X		3	外反・口縁内面施文 (L R)
	44	D-3	X		3	外反・口縁内面施文 (L R)
	45	B-4	X		3	外反・口縁内面施文 (R L)
	46	C-3			3	外反・口縁内面施文 (R L)
	47	D-4	X		3	外反・口縁内面施文 (R L)
	48	B-3	(X)		3	外反・口縁内面施文 (R L)
第49区	49	A-3	X	表裏縄文	3	外反・口縁内面施文 (R L)
	50	C-4	X		4	外傾・口縁内面施文 (L)
	51	C-4	X		4	外傾・口縁内面施文 (L R)
	52	D-1	(X)		4	外傾・口縁内面施文 (L R)
	53	D-4	X		4	外傾・口縁内面施文 (L R)
	54	B-4	(X)		4	外傾・口縁内面施文 (L R)
	55	E-4	X		4	外傾・口縁内面施文 (L R)
	56	A-3	(X)		4	外傾・口縁内面施文 (L R)
	57	A-4	(X)		4	外傾・口縁内面施文 (L R)
	58	E-3	X		4	外傾・口縁内面施文 (L R)
第50区	59	D-4	X	表裏縄文	4	外傾・口縁内面施文 (R L)
	60	B-2	(X)		4	外傾・口縁内面施文 (R L)
	61	C-3	(X)		4	外傾・口縁内面施文 (R L)
	62	A-3	X		4	外傾・口縁内面施文 (R L)
	63	A-4	X		4	外傾・口縁内面施文 (R L)
	64	D-3	X		4	外傾・口縁内面施文 (R L)
	65	A-4	X		4	外傾・口縁内面施文 (R L)
	66	E-3	X		5	脚部 (L R)
	67	E-3	X		5	脚部 (L R)
	68	D-3	X		5	脚部 (L R)
第51区	69	B-3	(X)	表裏縄文	5	脚部 (L R)
	70	E-3	X		5	脚部 (L R)
	71	B-5	X		5	脚部 (L R)
	72	A-3	X		5	脚部 (L R)
	73	E-3	X		5	脚部 (L R)
	74	A-5	X		5	脚部 (L R)
	75	B-4	X		5	脚部 (L R)
	76	B-3	(X)		5	脚部 (L R)
	77	C-2	X		5	脚部 (L R)
	78	A-2	X		5	脚部 (L R)
第52区	79	C-3	X	表裏縄文	5	脚部 (L R)
	80	B-4	X		5	脚部 (L R)
	81	D-2	X		5	脚部 (L R)
	82	E-3	X		5	脚部 (L R)
	83	C-1	(X)		5	脚部 (L R)
	84	A-3	X		5	脚部 (L R)
	85	E-5	X		5	脚部 (L R)
	86	E-2	X		5	脚部 (L R)
	87	B-3	X		5	脚部 (L R)
	88	C-5	(X)		5	脚部 (L R)
第53区	89	D-5	X	表裏縄文	5	脚部 (L R)
	90	B-3	(X)		5	脚部 (L R)
	91	A-4	(X)		5	脚部 (L R)
	92	A-3	(X)		5	脚部 (L R)
	93	D-4	X		5	脚部 (L R)
	94	C-3	(X)		5	脚部 (L R)
	95				5	脚部 (L R)

第4表 出土土器観察表(3)

押抜番号	遺物番号	グリット	層位	土 器 分 類	類	構 成
第50図	96	B-5	II	6群	表裏範文	5 横部(L R)
	97	C-3	II	#	表裏範文	5 縦部(L R)
	98	D-3	X	#	表裏範文	5 縦部(L R)
	99	B-3	II	#	表裏範文*	5 縦部(L R)
	100	B-4	(III)	#	表裏範文	5 縦部(R L)
	101	B-3	II	#	表裏範文	5 縦部(R L)
	102	D-2	II	#	表裏範文	5 縦部(R L)
	103	A-5	II	#	表裏範文	5 縦部(縦状)
	104	C-2	(III)	#	表裏範文	5 縦部(R L) 内面: 線条体彌痕
	105	D-2	II	#	表裏範文	5 縦部(L R) 内面: 線条体彌痕
1	D-2		7群	燃糸文		R
2	D-2			燃糸文		R
3	A-4			燃糸文		L
4	B-5	(II)		燃糸文		R
5	B-4	(II)		燃糸文		R
6	C-5	(III)		燃糸文		R
7	B-4	(X)		燃糸文		L
8				燃糸文		L?
第51図	1	C-4	VII	8群	押型文	1 表: 縱位帯状、内: 橫位(山形文)
	2	D-4	VII	#	押型文	1 表: 縱位帯状、内: 橫位(山形文)
	3	A-4	IX	#	押型文	1 表: 縱位帯状、内: 橫位(山形文)
	4	C-3	IX	#	押型文	1 表: 縱位帯状、内: 橫位(山形文)
	5	A-3	(III)	#	押型文	1 縱位(山形文)
	6	D-4	VII	#	押型文	1 縱位帯状(山形文)
	7	A-4	(III)	#	押型文	1 縱位帯状(山形文)
	8			#	押型文	1 縱位帯状(山形文)
	9	A-5	(VII)	#	押型文	1 縱位帯状(山形文)
	10	E-3	VII	#	押型文	2 真方向帯状(山形文)
	11	E-3	VII	#	押型文	2 真方向帯状(山形文)
	12	C-3	X	#	押型文	2 真方向(山形文)
	13	C-5	(III)	#	押型文	2 真方向(山形文)
	14	A-4	(III)	#	押型文	2 真方向密接(楕円文)
	15	C-4	X	#	押型文	2 真方向密接(楕円文)
	16	C-3	X	#	押型文	2 真方向密接(楕円文)
	17	C-4	II	#	押型文	2 真方向密接(楕円文)
	18	C-2		#	押型文	2 真方向密接(楕円文)
	19	C-3	VII	#	押型文	3 表: 橫位、内: 橫位(山形文)
	20	C-3	VII	#	押型文	3 橫位帯状(山形文)
	21	D-2	VII	#	押型文	3 橫位帯状(山形文)
	22	C-3	VII	#	押型文	3 橫位帯状(山形文)
	23	D-2	IX	#	押型文	3 橫位帯状(山形文)
	24	B-2	VII	#	押型文	3 橫位帯状(山形文)
	25	E-3	VII	#	押型文	3 橫位帯状(山形文)
	26	C-2	VII	#	押型文	3 橫位帯状(山形文)
	27	E-4	VII	#	押型文	3 橫位帯状(山形文)
	28	D-3	VII	#	押型文	3 橫位帯状(山形文)
	29	D-5	VII	#	押型文	3 橫位帯状(山形文)
	30			#	押型文	3 橫位帯状(楕円文)
	31	E-4	VII	#	押型文	3 橫位帯状(楕円文)
	32	D-4	IX	#	押型文	3 橫位帯状(楕円文)
	33	A-2	X	#	押型文	3 橫位帯状(楕円文)
	34	D-2	(III)	#	押型文	3 橫位帯状(楕円文)
	35			#	押型文	3 橫位帯状(楕円文)
	36	C-4	X	#	押型文	3 橫位帯状(楕円文)
	37			#	押型文	3 橫位帯状(楕円文)
	38	C-5	(III)	#	押型文	3 橫位帯状(楕円文)
第52図	39	B-3	X	#	押型文	3 橫位帯状(菱目文)

第4表 出土土器観察表(2)

標印番号	遺物番号	グリット	層位	土 砂 分 類	類	構 成
第52団	40	Z-4	(X)	8群	押型文	3 横位帯状(要目文)
	41	B-4	X	#	押型文	3 横位帯状(要目文)
	42	Z-4	(Ⅲ)	#	押型文	3 横位帯状(要目文)
	43	Z-4	(Ⅲ)	#	押型文	3 横位帯状(要目文)
	44	Z-4	(Ⅲ)	#	押型文	3 横位帯状(要目文)
	45	B-4	(Ⅲ)	#	押型文	3 横位帯状(要目文)
	46	A-4	(Ⅲ)	#	押型文	3 横位帯状(要目文)
	47	Z-4	(Ⅲ)	#	押型文	3 横位帯状(要目文)
	48	Z-4	(X)	#	押型文	3 横位帯状(要目文)
	49			#	押型文	3 横位帯状(要目文)
	50	B-3	(Ⅲ)	#	押型文	4 横位密接(山形文)
	51			#	押型文	4 横位密接(山形文)
	52	B-3	X	#	押型文	4 横位密接(山形文)
	53	E-4	VII	#	押型文	4 横位密接(山形文)
	54	C-3	Ⅲ	#	押型文	4 横位密接(山形文)
	55			#	押型文	4 横位密接(山形文)
	56	A-4	(Ⅲ)	#	押型文	4 横位密接(山形文)
	57	B-5	(Ⅲ)	#	押型文	4 横位密接(山形文)
	58	C-3	Ⅲ	#	押型文	4 横位密接(山形文)
	59	C-3	X	#	押型文	4 横位密接(山形文)
	60	B-3	X	#	押型文	4 横位密接(横円文)
	61	D-4	Ⅲ	#	押型文	4 横位密接(横円文)
	62	C-5	(Ⅲ)	#	押型文	4 横位密接(横円文)
	63	D-5	VII	#	押型文	4 横位密接(横円文)
	64	C-4	Ⅲ	#	押型文	4 横位密接(横円文)
	65	E-3	Ⅲ	#	押型文	4 横位密接(横円文)
	66	B-2	VII	#	押型文	4 横位密接(横円文)
	67	C-3	VII	#	押型文	4 横位密接(横円文)
	68	B-4	X	#	押型文	4 横位密接(横円文)
	69	D-3	VII	#	押型文	4 横位密接(横円文)
	70	B-3	VII	#	押型文	4 横位密接(横円文)
	71	C-5	VII	#	押型文	4 横位密接(横円文)
	72	E-4	Ⅲ	#	押型文	4 横位密接(横円文)
	73	B-4	VII	#	押型文	4 横位密接(横円文)
	74	C-4	VII	#	押型文	4 横位密接(横円文)
	75	C-2	Ⅲ	#	押型文	4 横位密接(横円文)
	76	C-3	VII	#	押型文	4 横位密接(横円文)
	77	E-4	VII	#	押型文	4 横位密接(横円文)
	78	C-3	Ⅲ	#	押型文	4 横位密接(横円文)
	79	E-5	Ⅲ	#	押型文	4 横位密接(横円文)
第53団	80	E-5	VII	#	押型文	4 横位密接(横円文)
	81	C-3	Ⅲ	#	押型文	4 横位密接(横円文)
	82	E-5	VII	#	押型文	4 横位密接(横円文)
	83	B-4	VII	#	押型文	4 横位密接(横円文)
	84	D-4	Ⅲ	#	押型文	4 横位密接(横円文)
	85	C-3	X	#	押型文	4 横位密接(横円文)
	86	B-2	VII	#	押型文	4 横位密接(横円文)
	87			#	押型文	4 横位密接(横円文)
	88	E-3	VII	#	押型文	4 横位密接(横円文)
	89	C-3	Ⅲ	#	押型文	4 横位密接(横円文)
	90	B-4	VII	#	押型文	4 横位密接(横円文)
	91	B-5	X	#	押型文	4 横位密接(横円文)
	92	Z-3	Ⅲ	#	押型文	4 横位密接(横円文)
	93	E-3	VII	#	押型文	4 横位密接(横円文)
	94	A-3	X	#	押型文	4 横位密接(横円文)
	95	D-3	VII	#	押型文	4 横位密接(横円文)
	96	B-3	X	#	押型文	4 横位密接(横円文)

第4表 出土土器観察表(4)

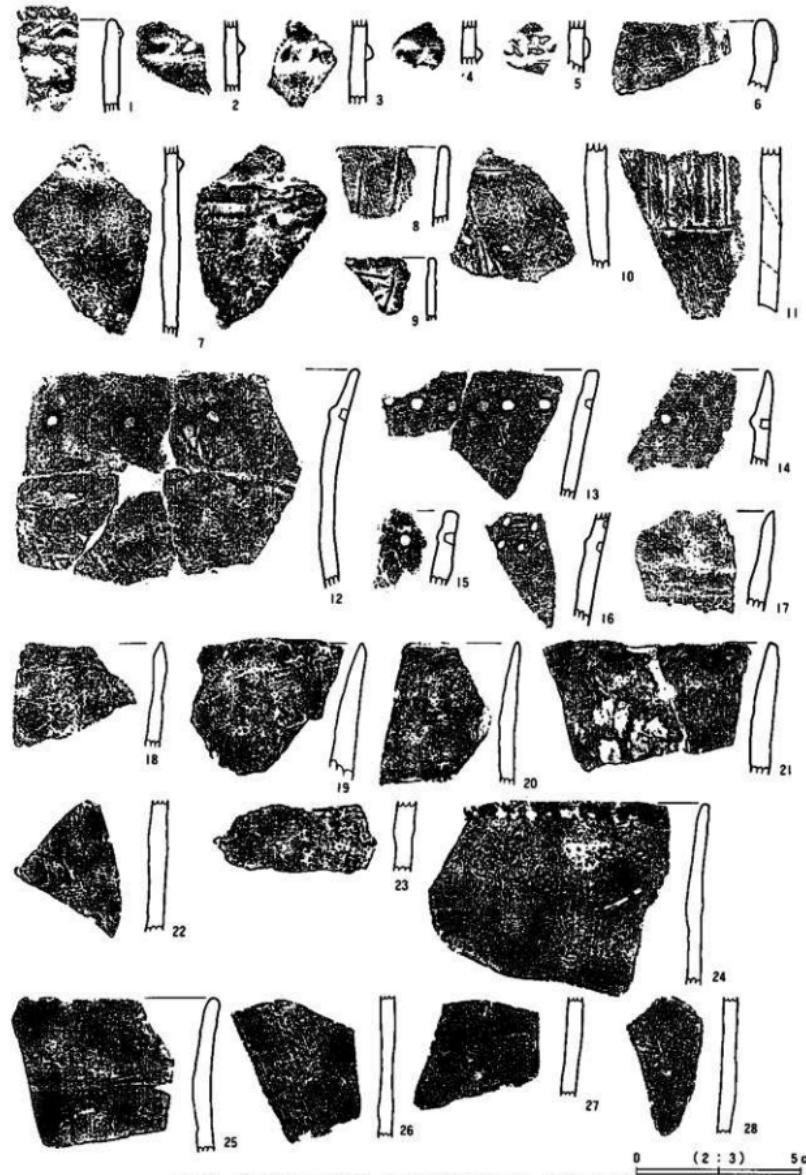
桝印番号	遺物番号	グリット	肩位	土器分類	頸	構成
第53図	97	D-2	VII	8群	押型文	4 横位密接(横円文)
	98	A-3	X	#	押型文	4 横位密接(横円文)
	99	D-3	VII	#	押型文	4 横位密接(横円文)
	100	D-4	VII	#	押型文	4 横位密接(小粒横円文)
	101	D-2	IX	#	押型文	4 横位密接(小粒横円文)
	102	C-4	VII	#	押型文	4 横位密接(小粒横円文)
	103	D-2	VII	#	押型文	4 横位密接(小粒横円文)
	104	B-4	X	#	押型文	4 横位密接(小粒横円文)
	105	C-4	VII	#	押型文	4 横位密接(小粒横円文)
	106	C-3	VII	#	押型文	4 横位密接(小粒横円文)
	107	E-3	VII	#	押型文	4 横位密接(小粒横円文)
	108	D-4	VII	#	押型文	4 横位密接(小粒横円文)
	109	D-3	VII	#	押型文	4 横位密接(小粒横円文)
	110	B-3	IX	#	押型文	4 横位密接(小粒横円文)
	111	C-5	VII	#	押型文	4 横位密接(小粒横円文)
	112	C-3	X	#	押型文	4 横位密接(小粒横円文)
	113	C-4	VII	#	押型文	4 横位密接(小粒横円文)
	114	E-4	IX	#	押型文	4 横位密接(小粒横円文)
	115	E-3	VII	#	押型文	4 横位密接(小粒横円文)
	116	C-3	VII	#	押型文	4 横位密接(小粒横円文)
第54図	117	E-5	VII	#	押型文	4 横位密接(粗大横円文)
	118	B-3	VII	#	押型文	4 横位密接(粗大横円文)
	119	B-4	X	#	押型文	4 横位密接(粗大横円文)
	120	B-3	IX	#	押型文	4 横位密接(粗大横円文)
	121	C-3	VII	#	押型文	4 横位密接(粗大横円文)
	122		IX	#	押型文	4 横位密接(粗大横円文)
	123	C-3	IX	#	押型文	4 横位密接(粗大横円文)
	124		IX	#	押型文	4 横位密接(粗大横円文)
	125	E-3	VII	#	押型文	4 横位密接(粗大横円文)
	126	D-2	IX	#	押型文	4 横位密接(粗大横円文)
	127	D-4	VII	#	押型文	4 横位密接(継曲状文)
	128	E-3	VII	#	押型文	4 横位密接(継曲状文+横円文)
	129	C-4	IX	#	押型文	4 横位密接(継曲状文)
	130	D-3	IX	#	押型文	4 横位密接(継曲状文+横円文)
	131	B-4	(X)	#	押型文	4 横位密接(継曲状文)
	132	D03	IX	#	押型文	4 横位密接(継曲状文+横円文)
	133	E-5	IX	#	押型文	4 横位密接(継曲状文+横円文)
	134	C-4	(VII)	#	押型文	4 横位密接(継曲状文+横円文)
	135	A-2	X	#	押型文	4 横位密接(継曲状文+横円文)
	136	D-3	VII	#	押型文	4 横位密接(継曲状文+横円文)
	137	C-2	VII	#	押型文	4 横位密接(継曲状文+横円文)
	138	D-4	IX	#	押型文	4 横位密接(継曲状文+横円文)
	139	C-2	VII	#	押型文	4 横位密接(継曲状文+横円文)
	140	D-3	IX	#	押型文	4 横位密接(継曲状文+横円文)
	141	C-3	VII	#	押型文	4 横位密接(継曲状文+横円文)
	142	Z-5		#	押型文	5 斜位(山形文)
	143	D-5	VII	#	押型文	5 異方向重板(横円文)
	144	D-4	IX	#	押型文	5 異方向重板(横円文)
	145	D-3	IX	#	押型文	5 異方向重板(横円文)
	146	D-2	VII	#	押型文	5 異方向重板(横円文)
	147	A-3	X	#	押型文	5 縦位(横円文)
	148	D-5	IX	#	押型文	5 縦位(横円文)
	149	B-3	(X)	#	押型文	5 縦位(横円文)
第55図	1	E-3	IX	9群	沈線文	1 横位+斜位維沈線
	2	E-3	IX	#	沈線文	2 斜位維沈線
	3	D-2	VII	#	沈線文	2 斜位維沈線
	4	C-4	X	#	沈線文	2 斜格子位維沈線

第4表 出土土器観察表(4)

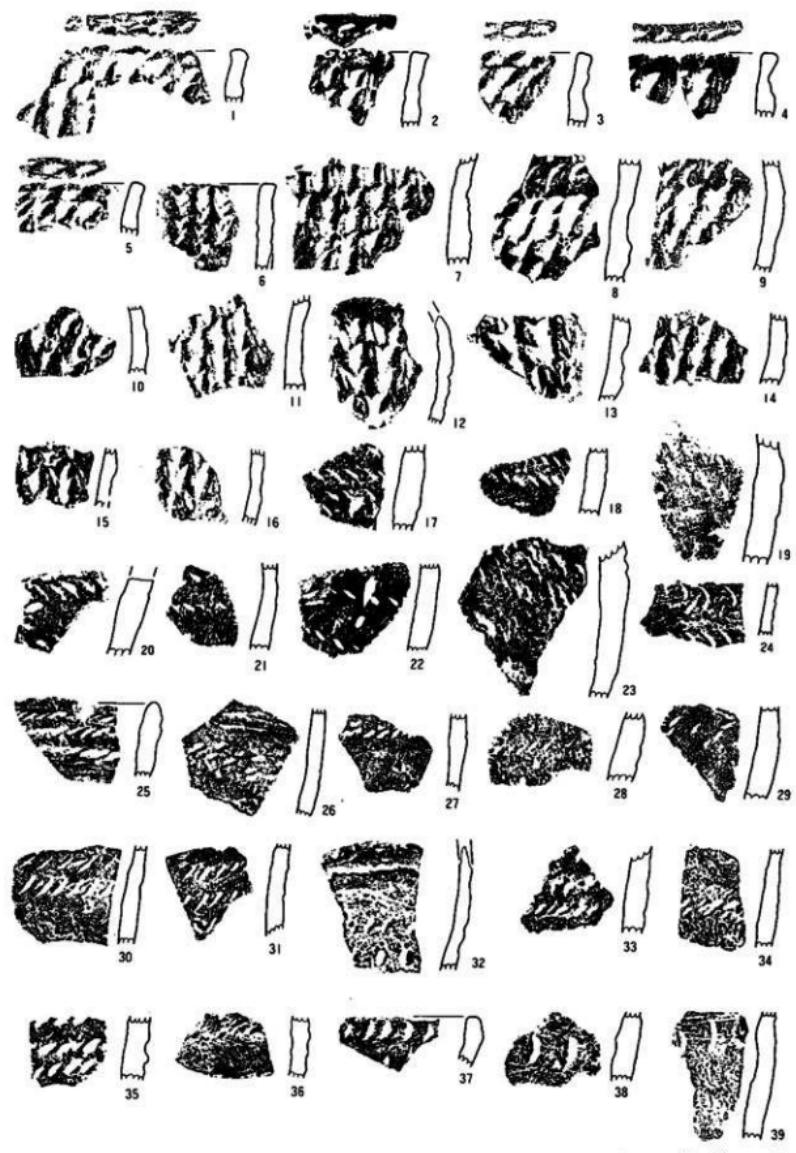
擇団番号	遺物番号	グリット	居位	土器分類	類	構成
第55団	5	C-4	区	9群	沈線文	2 斜格子目細沈線
	6	B-5	II	#	沈線文	2 縱杉状細沈線
	7	B-2	II	#	沈線文	2 横位絆沈線
	8	D-3	II	#	沈線文	2 横位沈線+貝紋腹縁
	9	B-4	II	#	沈線文	2 沈線+爪形
	10	B-2	II	#	沈線文	2 沈線+竹管斜突
	11	E-5	X	#	沈線文	2 異方向太沈線
	12	C-3	II	#	沈線文	2 異方向太沈線
	13	D-3	II	#	沈線文	2 異方向太沈線
	14	C-5	II	#	沈線文	2 異方向太沈線
	15	D-3	II	#	沈線文	2 異方向太沈線
	16	B-4	X	#	沈線文	2 異方向太沈線
	17	B-3	II	#	沈線文	2 斜位太沈線
	18	C-3	III	#	沈線文	2 斜位+横位太沈線
	19	C-4	II	#	沈線文	2 太沈線底位+爪形
	20			#	沈線文	2 太沈線+刺突
	21			#	沈線文	2 太沈線+刺突
	22	C-4	II	#	沈線文	2 弧線太沈線
	23	C-4	II	#	沈線文	2 弧線太沈線、内：条痕
	24	B-2	II	#	沈線文	2 弧線太沈線、内：条痕
	25	A-3	(II)	#	沈線文	2 弧線太沈線、内：条痕
	26	D-3	II	#	沈線文	3 沈線+貝紋腹縁
	27	D-5	X	#	沈線文	3 沈線+貝紋腹縁
	28	C-2	II	#	沈線文	3 沈線+貝紋腹縁
	29	C-2	II	#	沈線文	3 沈線+貝紋腹縁
	30	B-5	(II)	#	沈線文	3 沈線+貝紋腹縁
	31	B-2	II	#	沈線文	3 斜位沈線+貝紋腹縁
	32	C-2	II	#	沈線文	3 斜位沈線+貝紋腹縁
	33	B-4	II	#	沈線文	3 斜位沈線+貝紋腹縁
	34	E-4	X	#	沈線文	3 斜位沈線+貝紋腹縁
第56団	35	E-5	II	#	沈線文	3 斜位沈線+貝紋腹縁
	36	B-3	II	#	沈線文	3 平行沈線+貝紋腹縁
	37	D-4	II	#	沈線文	3 平行沈線+貝紋腹縁
	38	E-4	II	#	沈線文	3 平行沈線+貝紋腹縁
	39	D-3	X	#	沈線文	3 平行沈線+貝紋腹縁
	40	D-3	区	#	沈線文	3 平行沈線+貝紋腹縁
	41	C-3	III	#	沈線文	3 沈線+貝紋腹縁
	42	D-5	II	#	沈線文	3 沈線+貝紋腹縁
	43	C-3	II	#	沈線文	3 沈線+貝紋腹縁
	44	D-4	II	#	沈線文	3 沈線+貝紋腹縁
	45	A-3	(II)	#	沈線文	3 沈線+貝紋腹縁
	46	B-2	(崩落土)	#	沈線文	3 沈線+貝紋腹縁
	47	B-4	II	#	沈線文	3 貝紋腹縁
	48	C-2	II	#	沈線文	4 貝紋腹縁
	49	B-5	(II)	#	沈線文	4 貝紋腹縁
	50	D-3	X	#	沈線文	4 貝紋腹縁
	51	A-4	(II)	#	沈線文	4 貝紋腹縁
	52	B-5	(II)	#	沈線文	4 貝紋腹縁
	53	B-5	(II)	#	沈線文	4 弧状沈線
	54	C-2	II	#	沈線文	4 沈線
	55	B-5	(II)	#	沈線文	4 滴色状沈線
	56	D-4	X	#	沈線文	4 滴色状沈線
	57	E-4	II	#	沈線文	4 滴色状沈線
	58	C-2	区	#	沈線文	4 滴卷状沈線
	59	E-4	II	#	沈線文	4 滴卷状沈線
第57団	60			#	沈線文	4 半纏竹管沈線
	61			#	沈線文	4 牛纏竹管沈線

第4表 出土土器観察表

桝固番号	遺物番号	グリット	層位	土器分類	類	構成	
第57区	62	C-3	XII	沈線文	4	彌曲状工具条痕文	
	63	D-4	X	#	沈線文	4	彌曲状工具条痕文
	64	E-3	XI	#	沈線文	4	彌曲状工具条痕文+刺突文
	65	C-2	XI	#	沈線文	5	刺突文
	66	C-3	X	#	沈線文	5	刺突文
	67	B-3	(XII)	#	沈線文	5	刺突文
	68	C-4	(VII)	#	沈線文	5	刺突文
	69	E-3	XI	#	沈線文	5	半截竹管沈線
	70	C-4	XII	#	沈線文	5	半截竹管沈線
	71	D-4	X	#	沈線文	5	半截竹管沈線
	72	E-3	XI	#	沈線文	5	半截竹管沈線
	73	C-3	XII	#	沈線文	5	爪形状刺突+斜格子目沈線
	74	C-3	XII	#	沈線文	5	斜格子目沈線
	75	C-4	XII	#	沈線文	5	斜格子目沈線
	76	B-4	XII	#	沈線文	5	斜格子目沈線
	77	C-4	XII	#	沈線文	5	斜格子目沈線
	78	B-3	(X)	#	沈線文	6	山形状沈線
	79	D-3	XII	#	沈線文	6	山形状沈線
	80	B-5	XII	#	沈線文	6	山形状沈線
	81	C-3	XII	#	沈線文	6	有筋沈線
	82	C-4	XII	#	沈線文	6	有筋沈線
	83	B-3	XII	#	沈線文	6	有筋沈線
	84	C-3	XII	#	沈線文	6	有筋沈線
	85	C-2	XII	#	沈線文	6	有筋沈線
	86	D-4	X	#	沈線文	7	矢羽根状大沈線
	87	C-4	XII	#	沈線文	7	矢羽根状大沈線
	88	C-4	XII	#	沈線文	7	矢羽根状大沈線
	89	C-3	XII	#	沈線文	7	縱位沈線

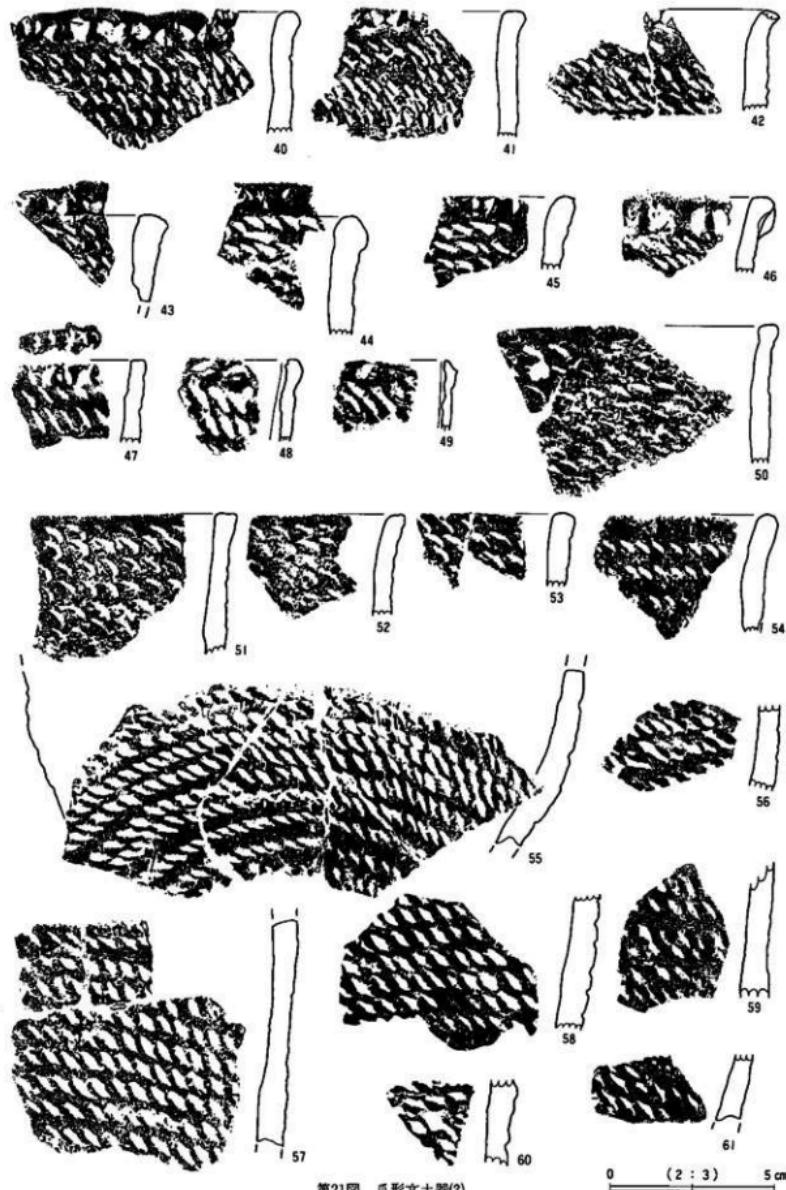


第19図 隆起線文土器 (No.1~No.11) 円形押圧文土器 (No.12~No.28)

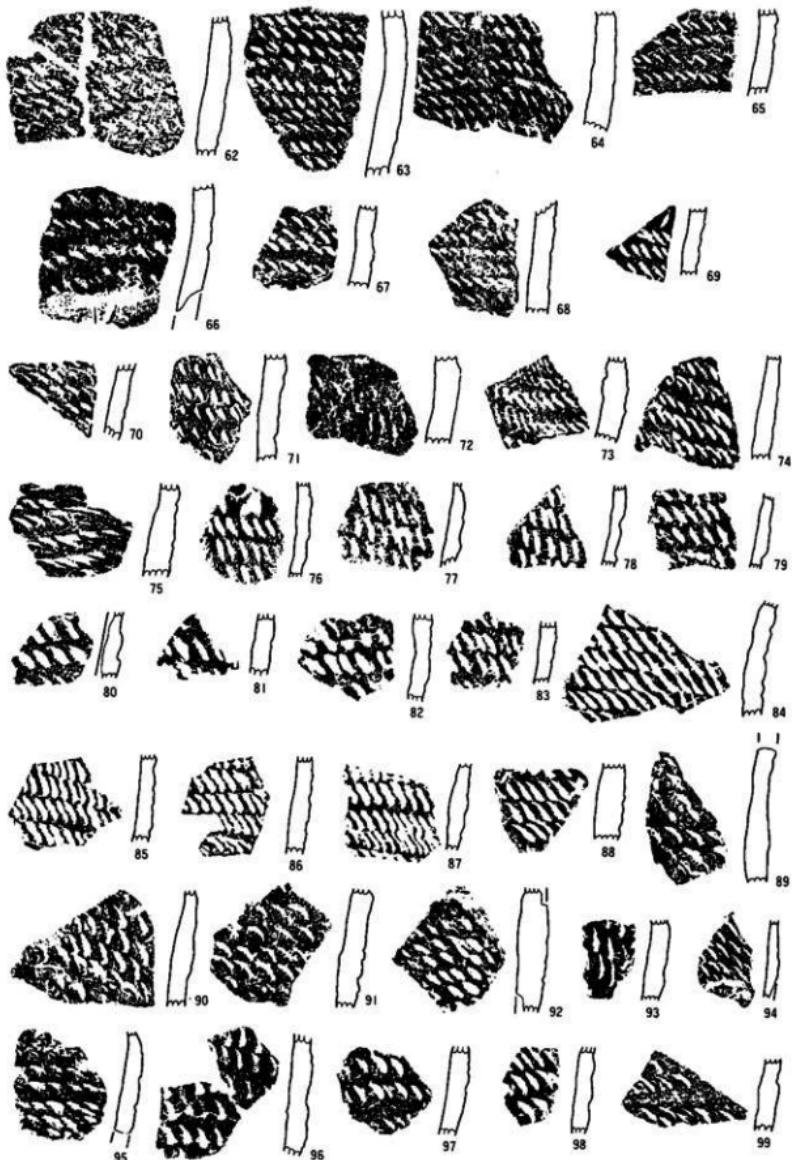


第20図 爪形文土器(1)

0 (2 : 3) 5 cm

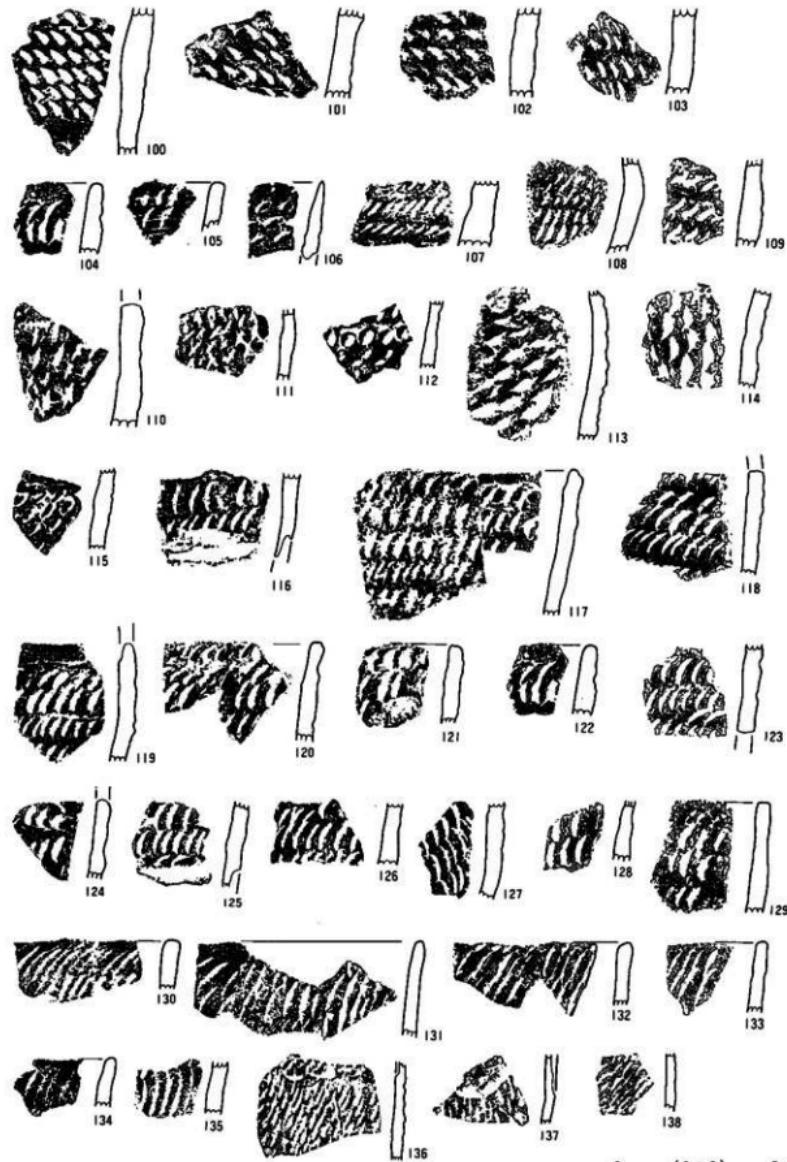


第21図 爪形文土器(2)



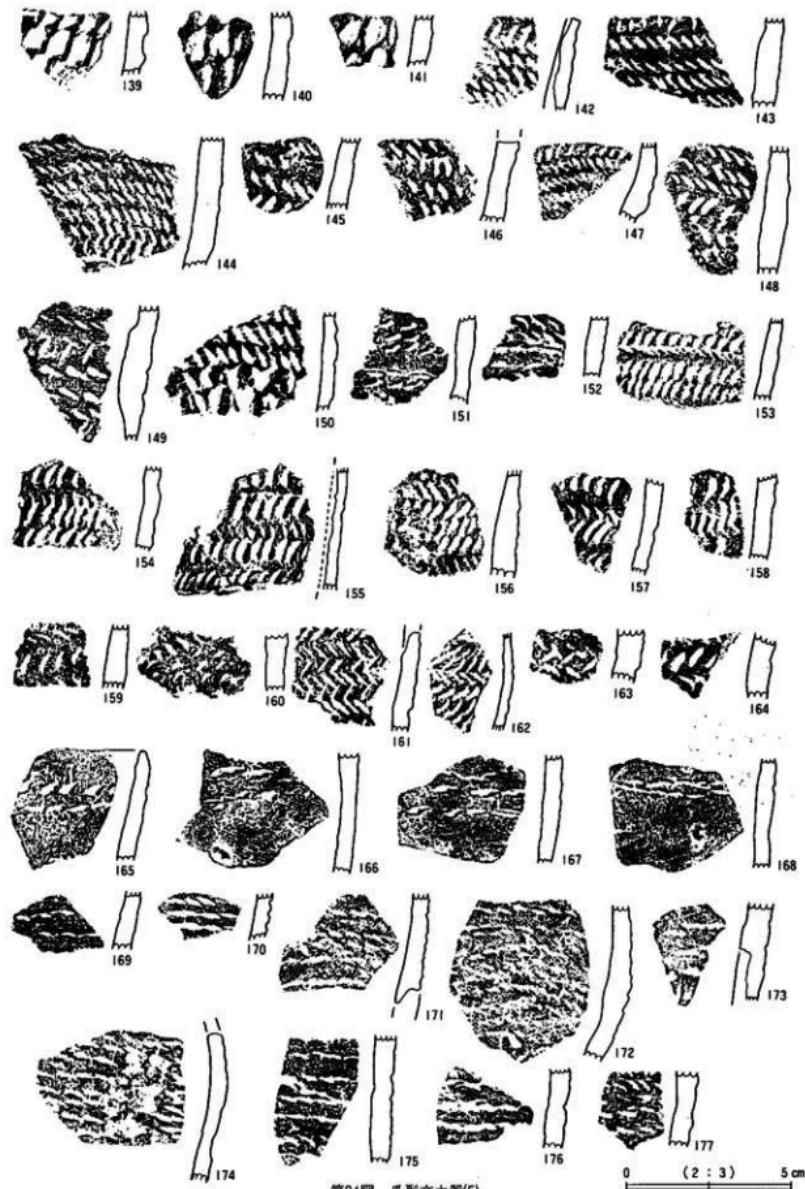
第22図 爪形文土器(3)

0 (2 : 3) 5 cm



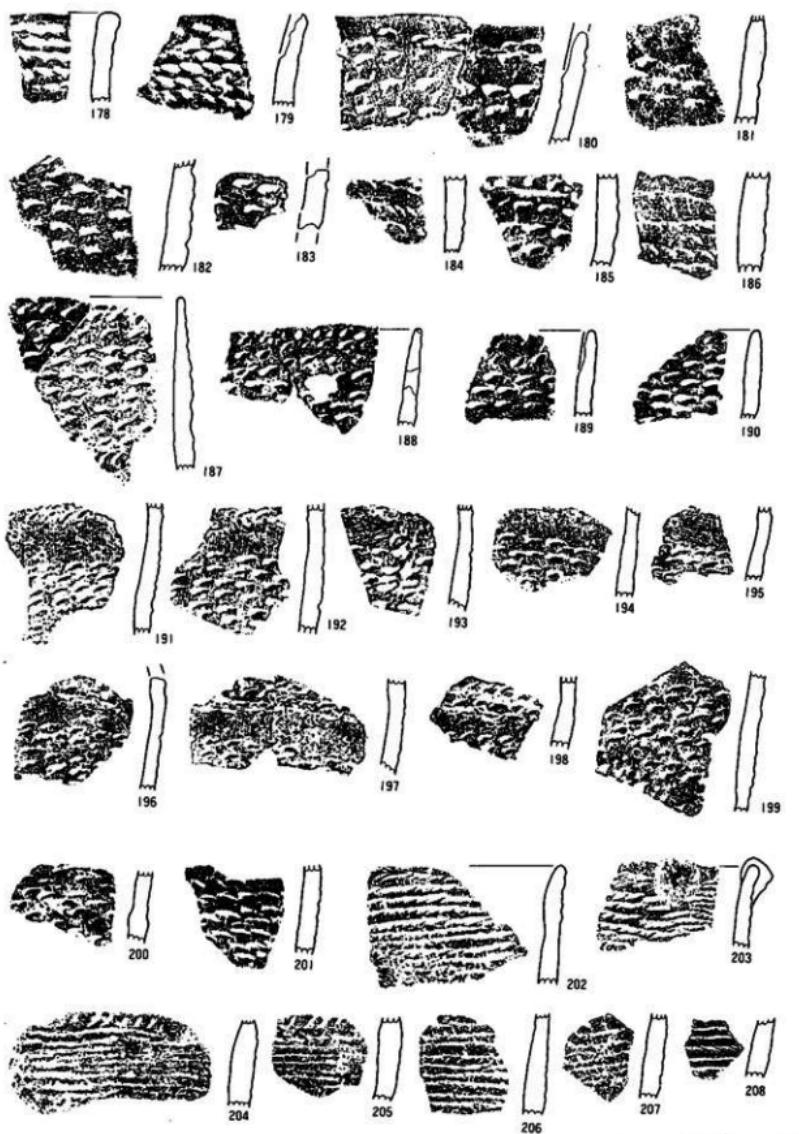
第23図 爪形文土器(4)

0 (2 : 3) 5 cm



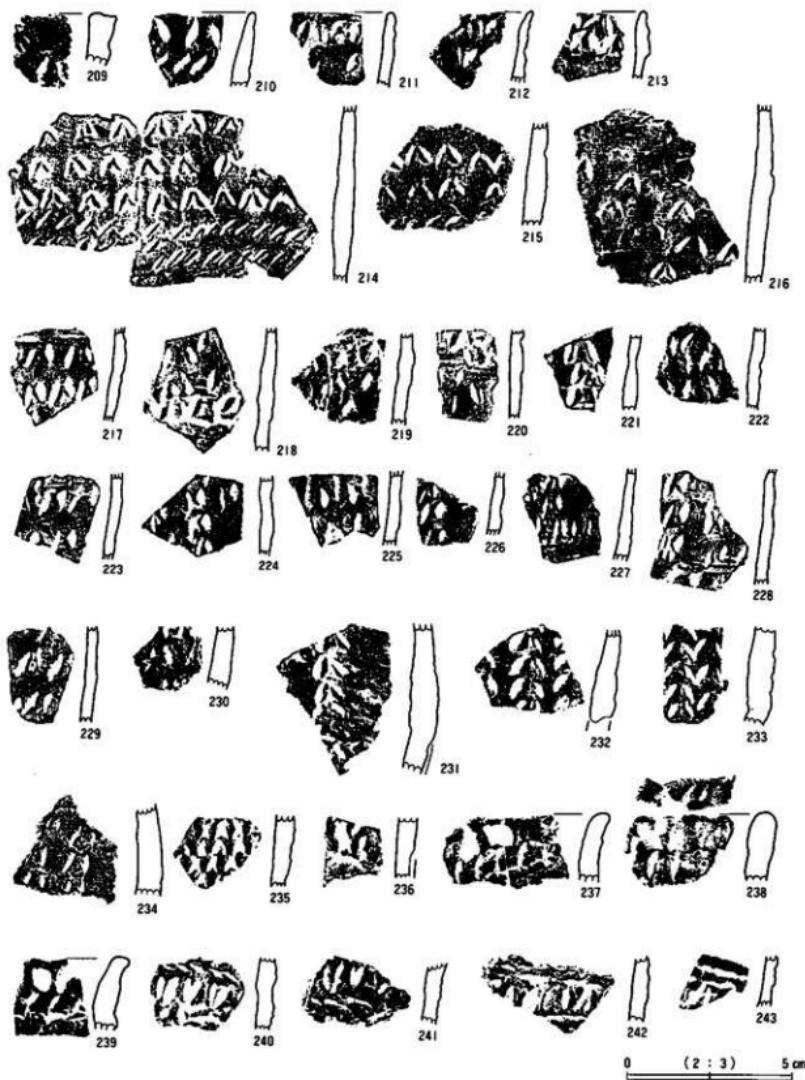
第24図 爪形文土器(5)

0 (2 : 3) 5 cm

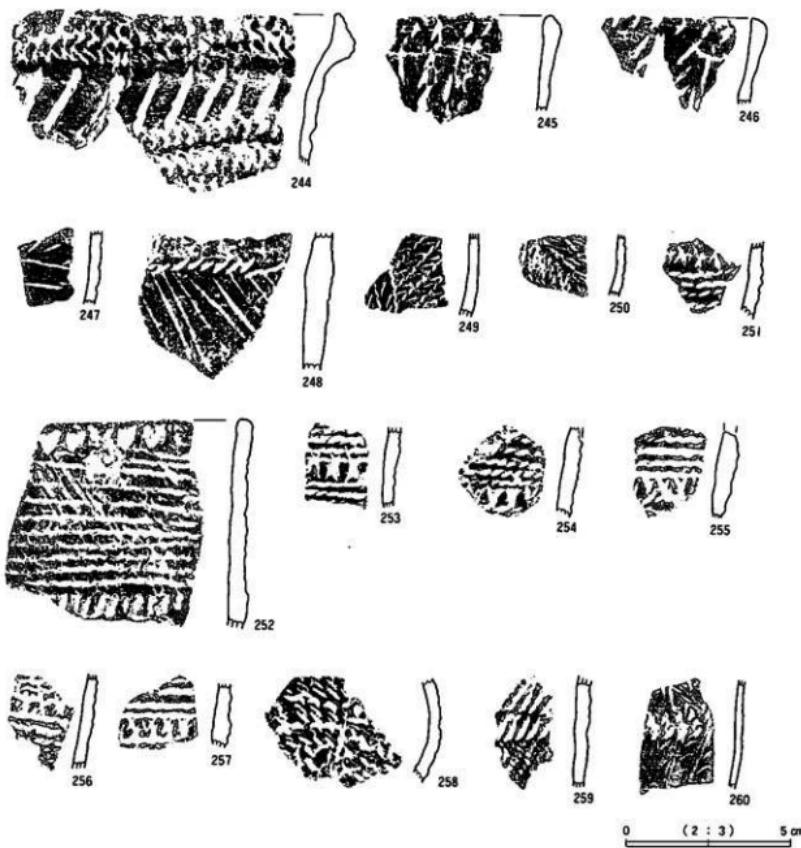


第25図 爪形文土器(6)

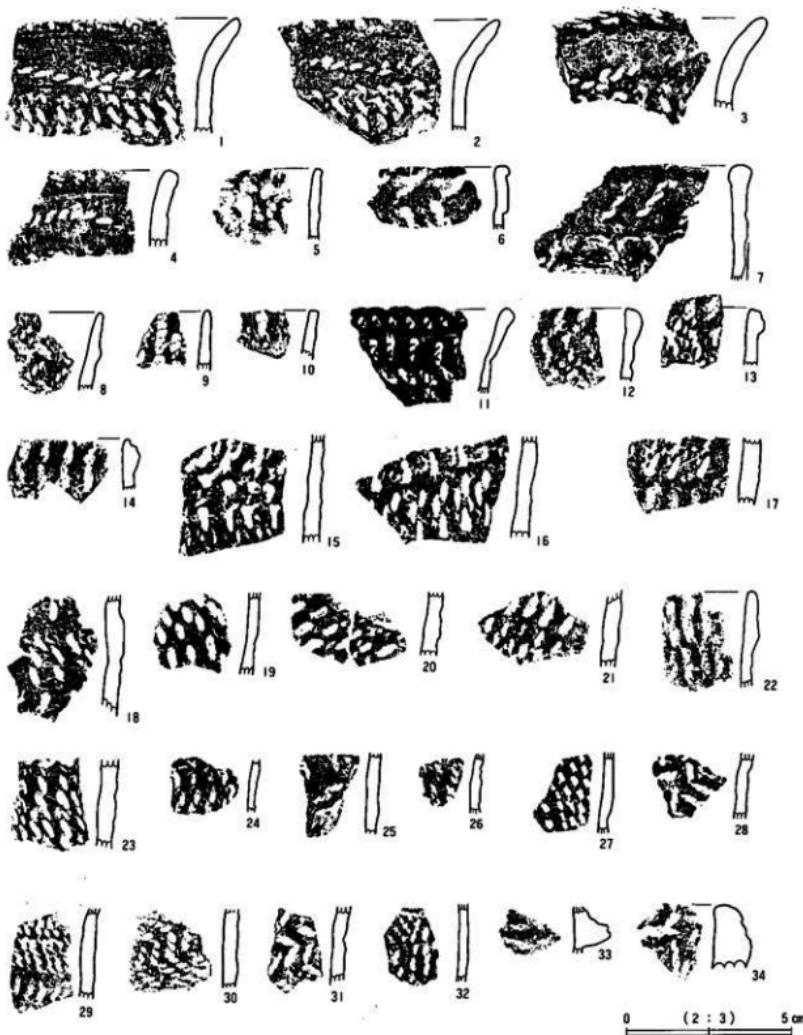
0 (2 : 3) 5 cm



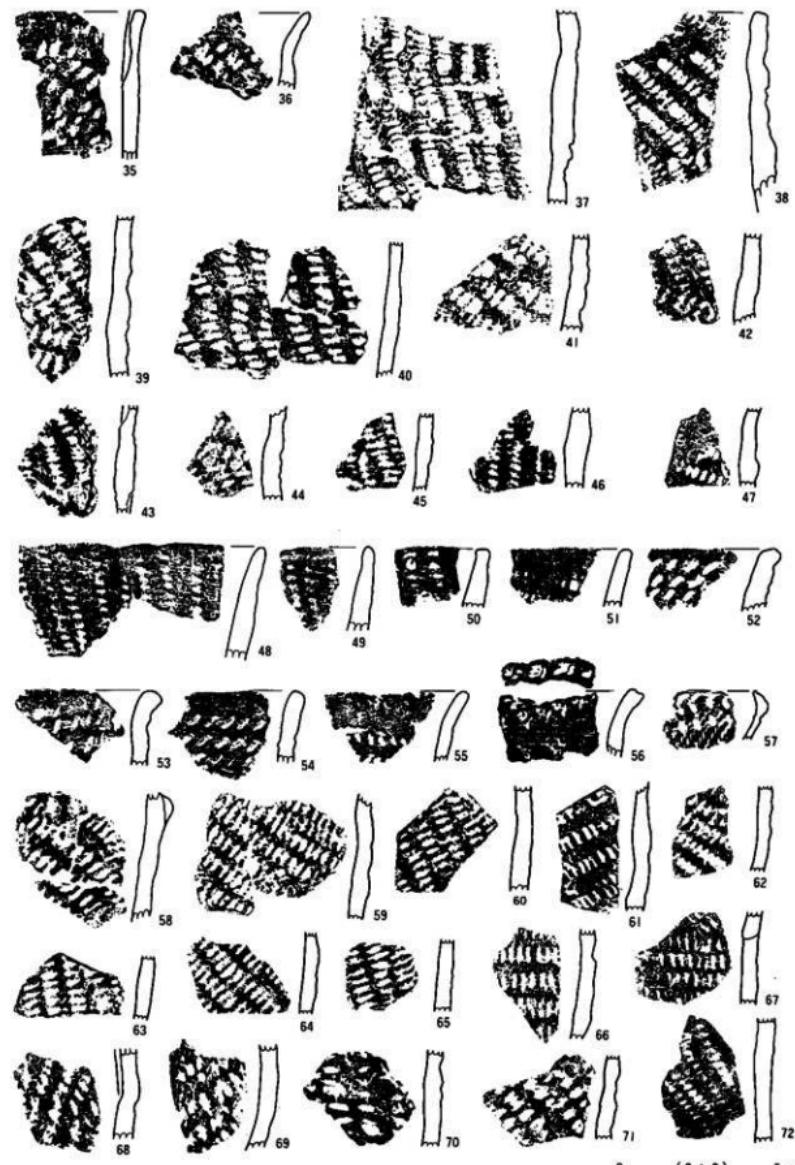
第26図 爪形文土器(7)



第27図 爪形文土器(8)

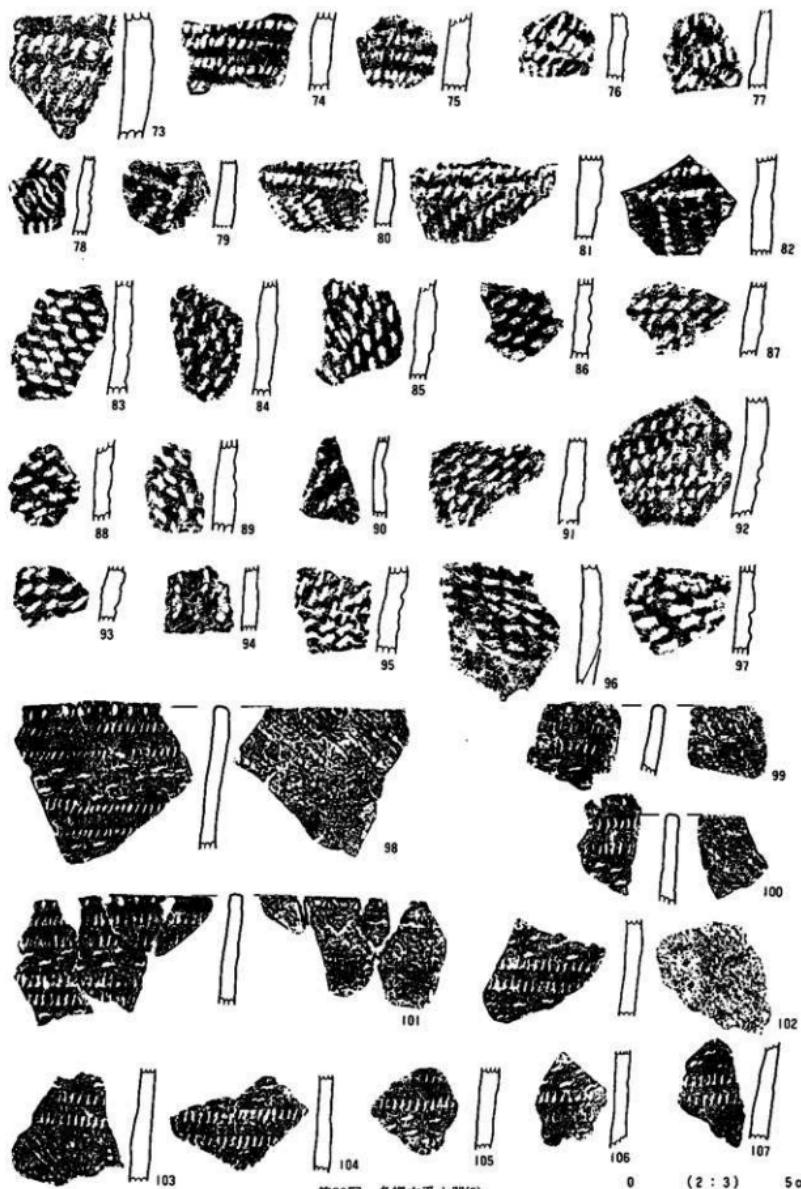


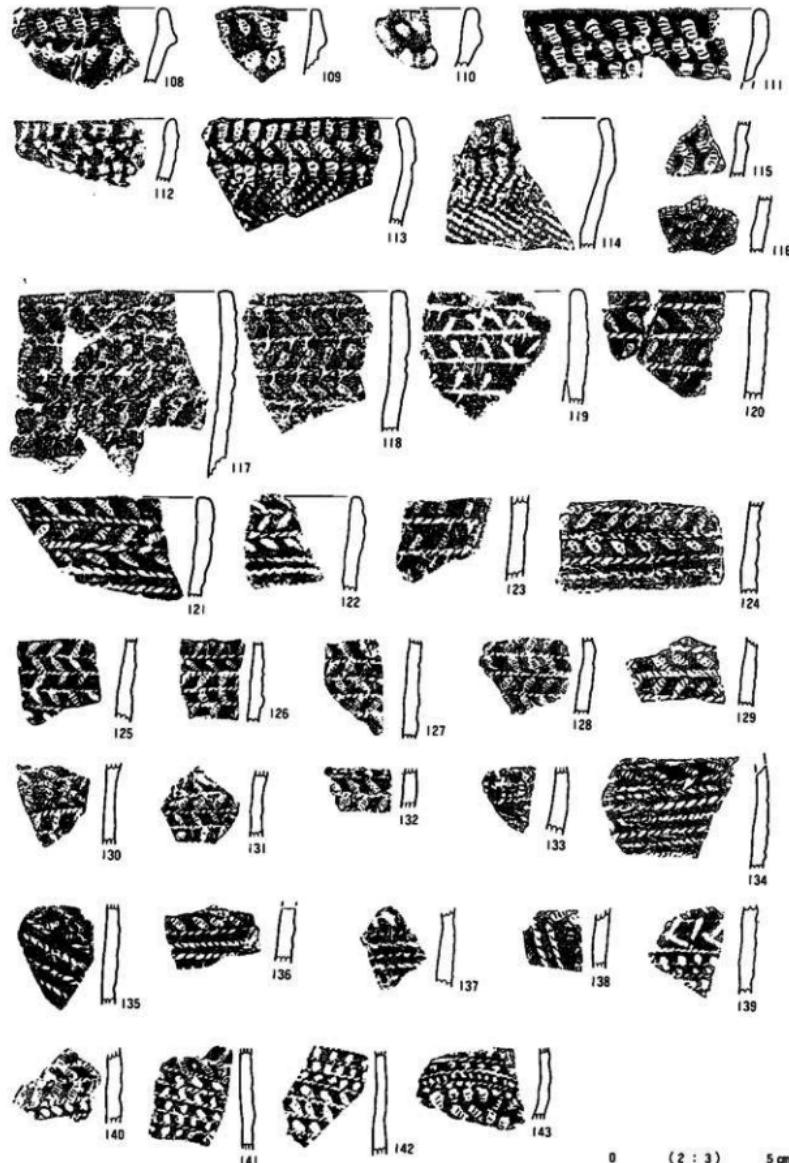
第28図 多綱文系土器(1)



第29図 多繩文系土器(2)

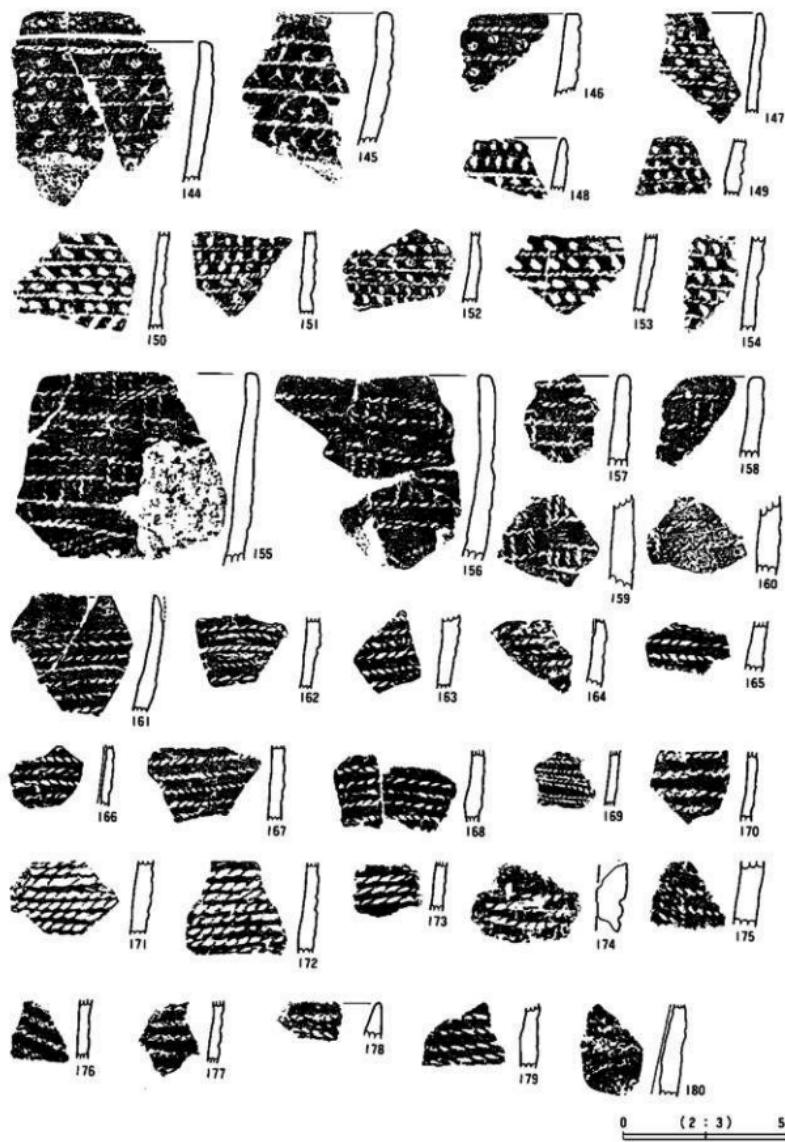
0 (2 : 3) 5 cm





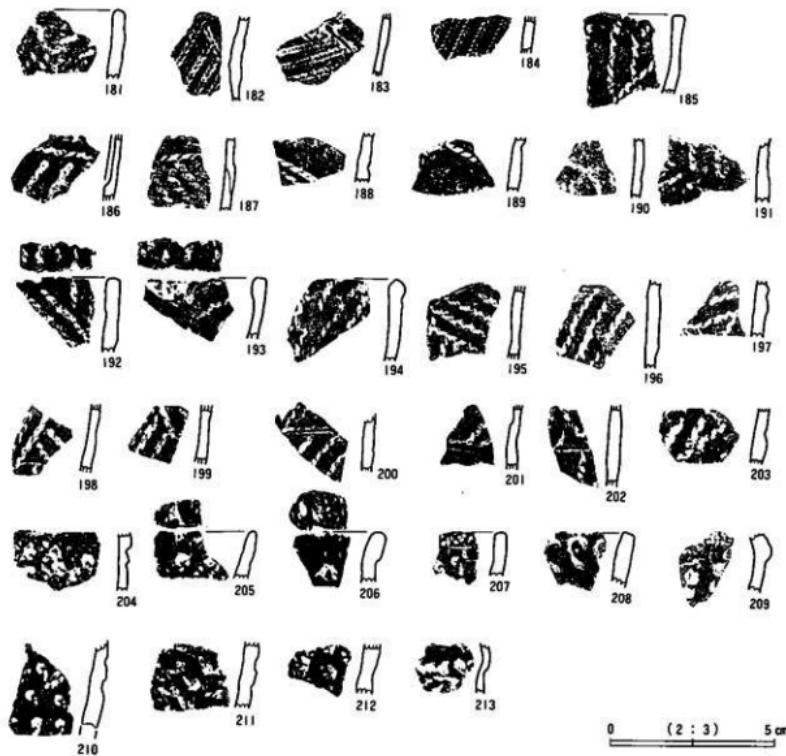
第31図 多縄文系土器(4)

0 (2 : 3) 5 cm

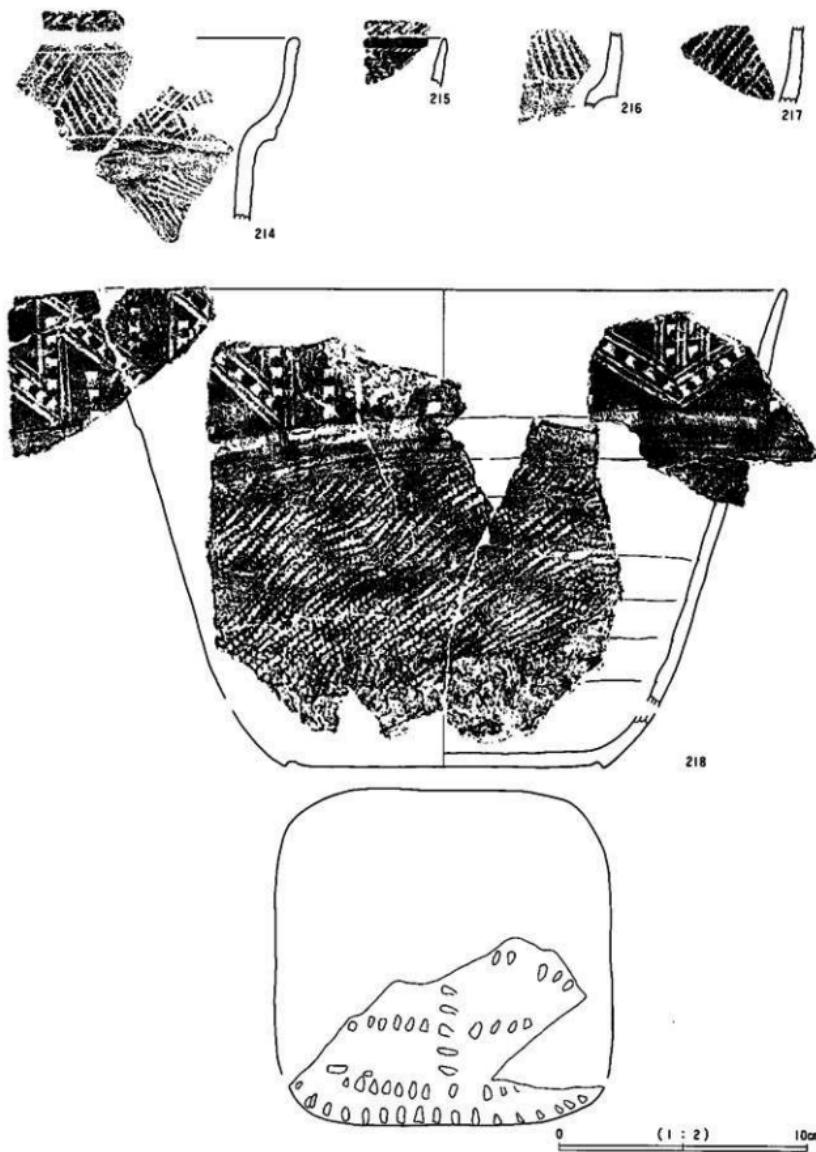


0 (2 : 3) 5 cm

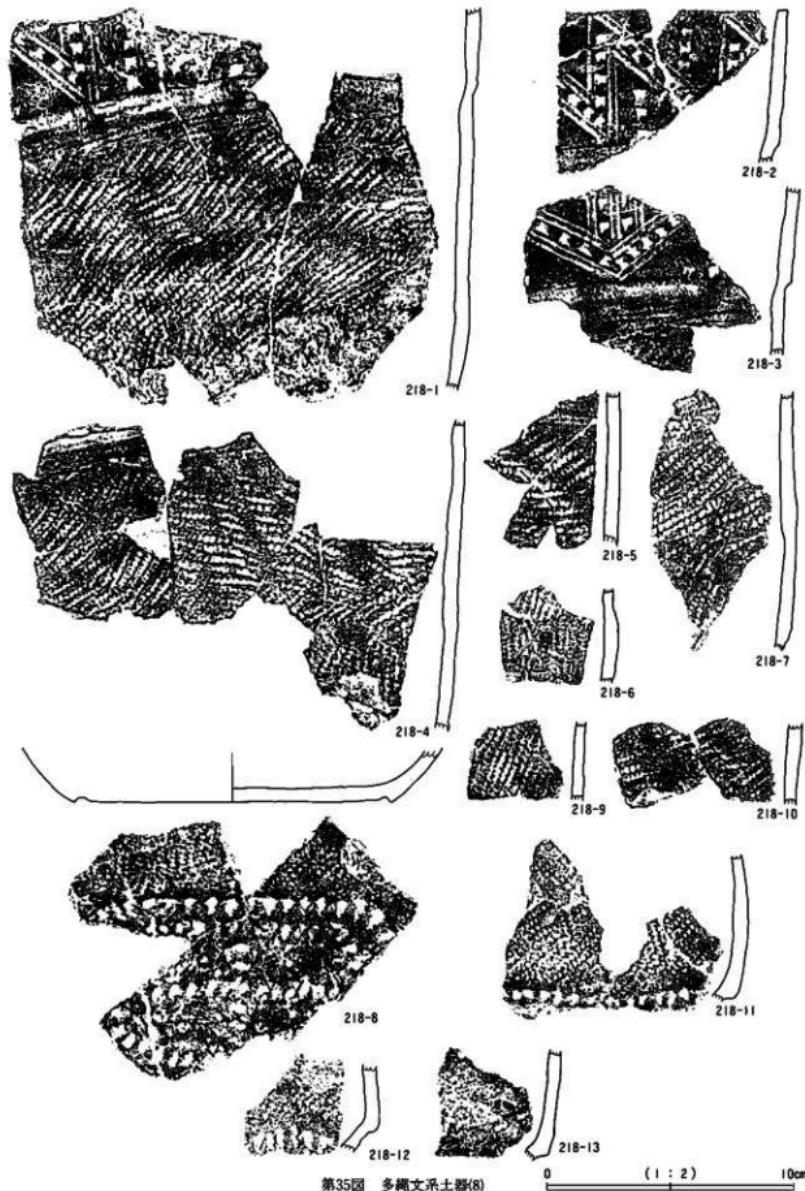
第32図 多綱文系土器(5)



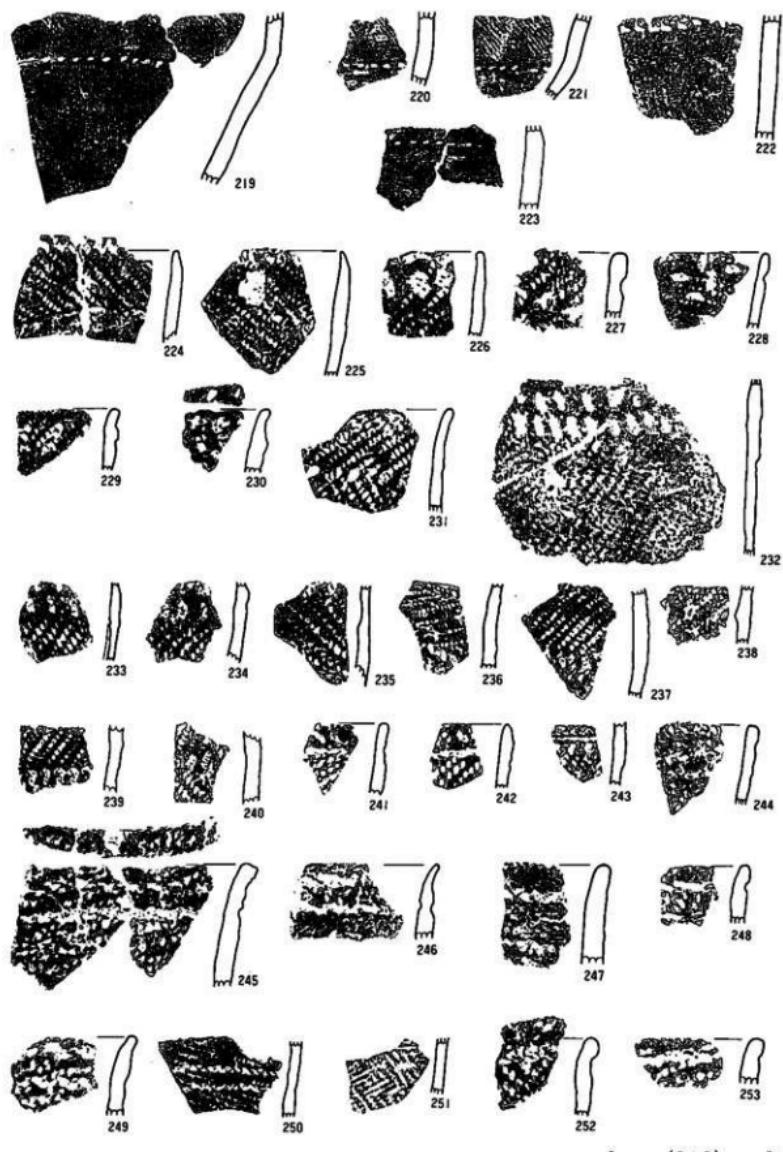
第33図 多綱文系土器(6)



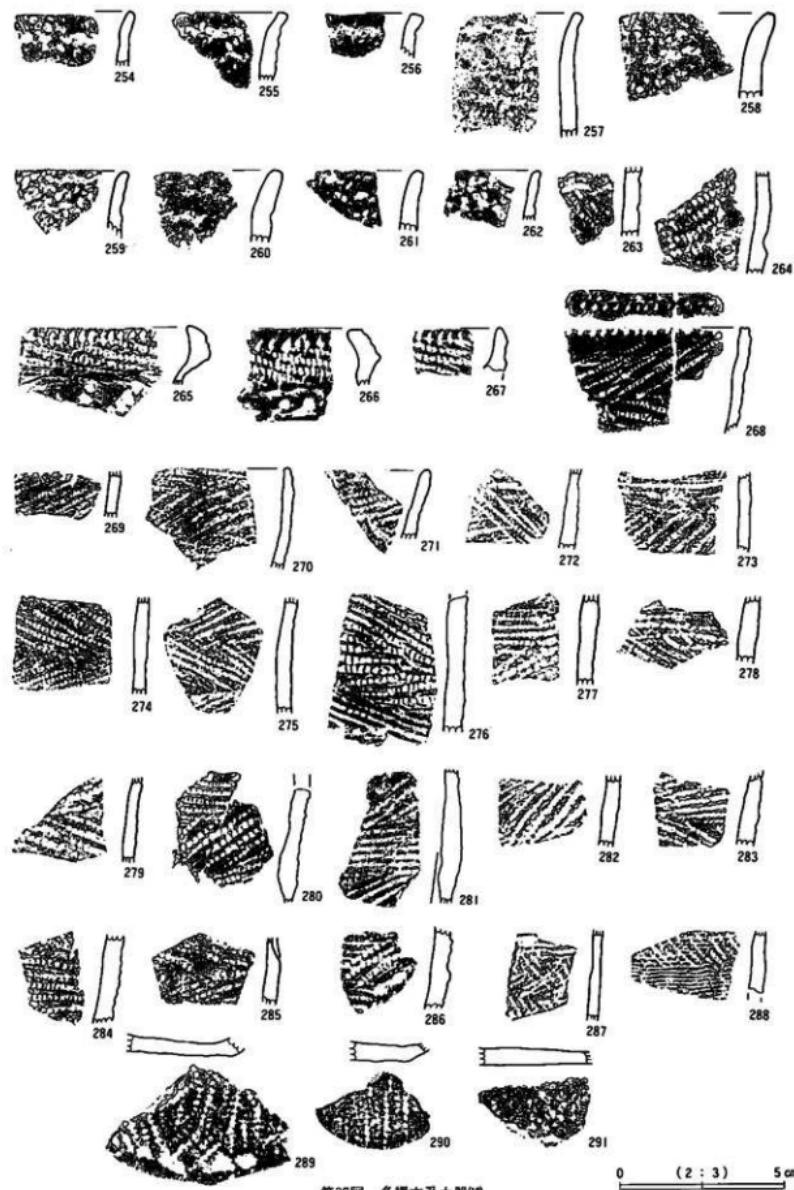
第34図 多網文系土器(7)



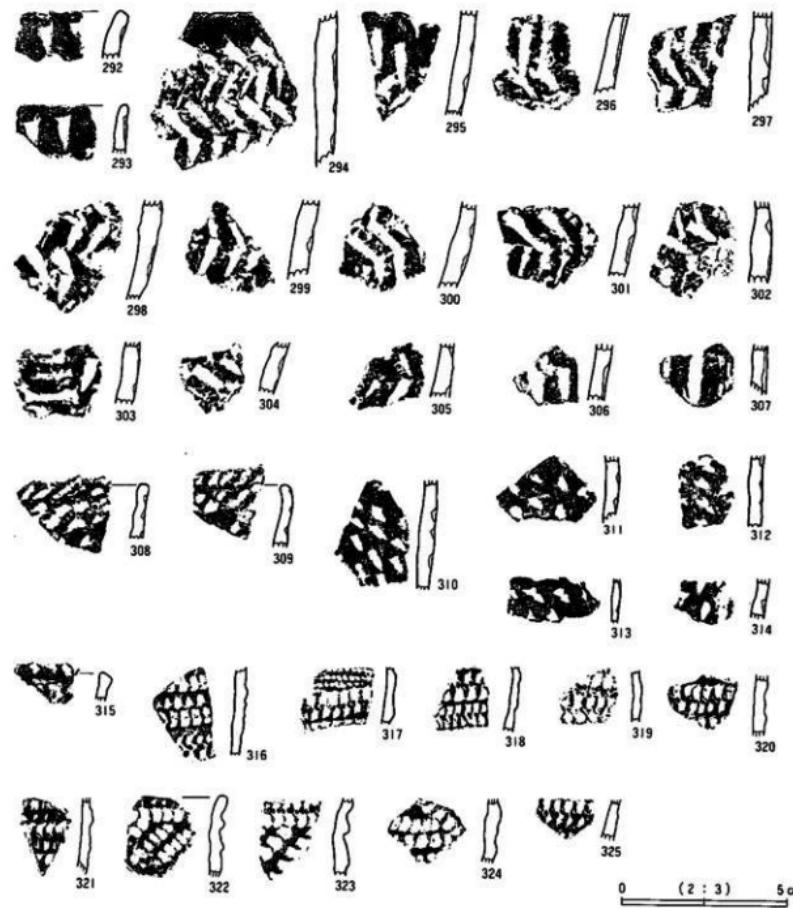
第35図 多繩文系土器(8)



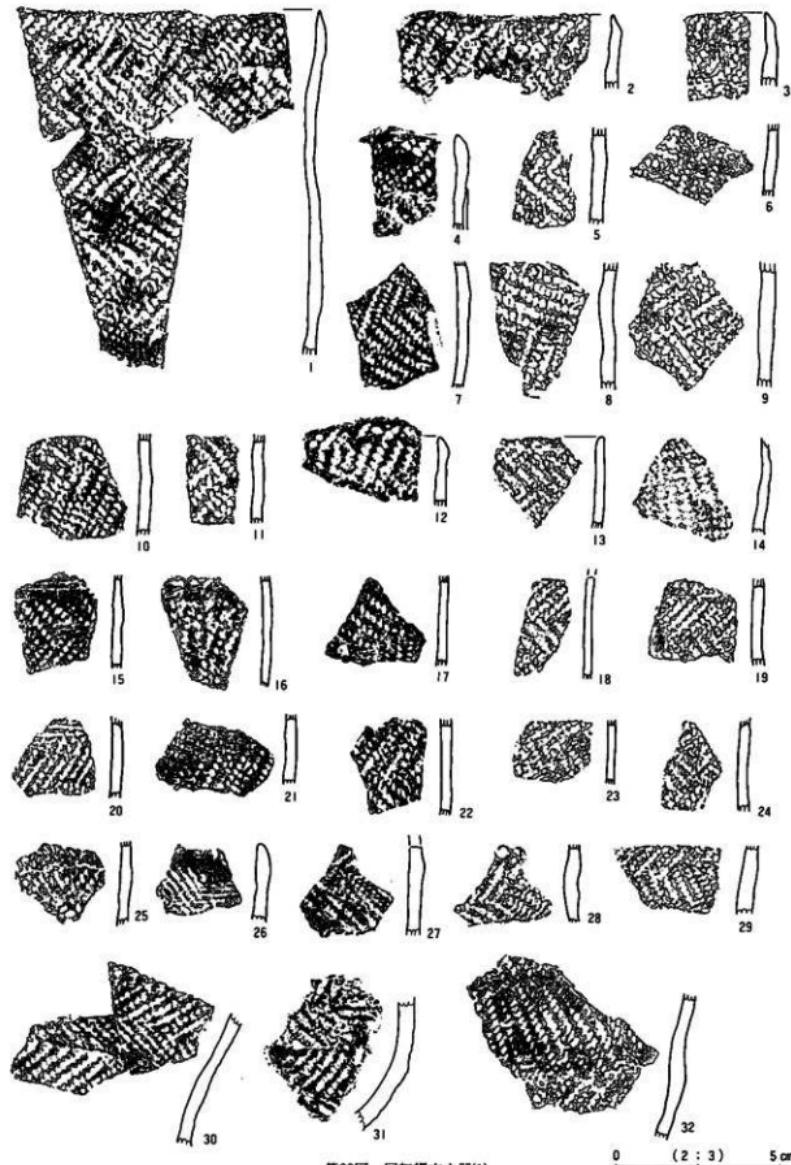
第36図 多網文系土器(9)



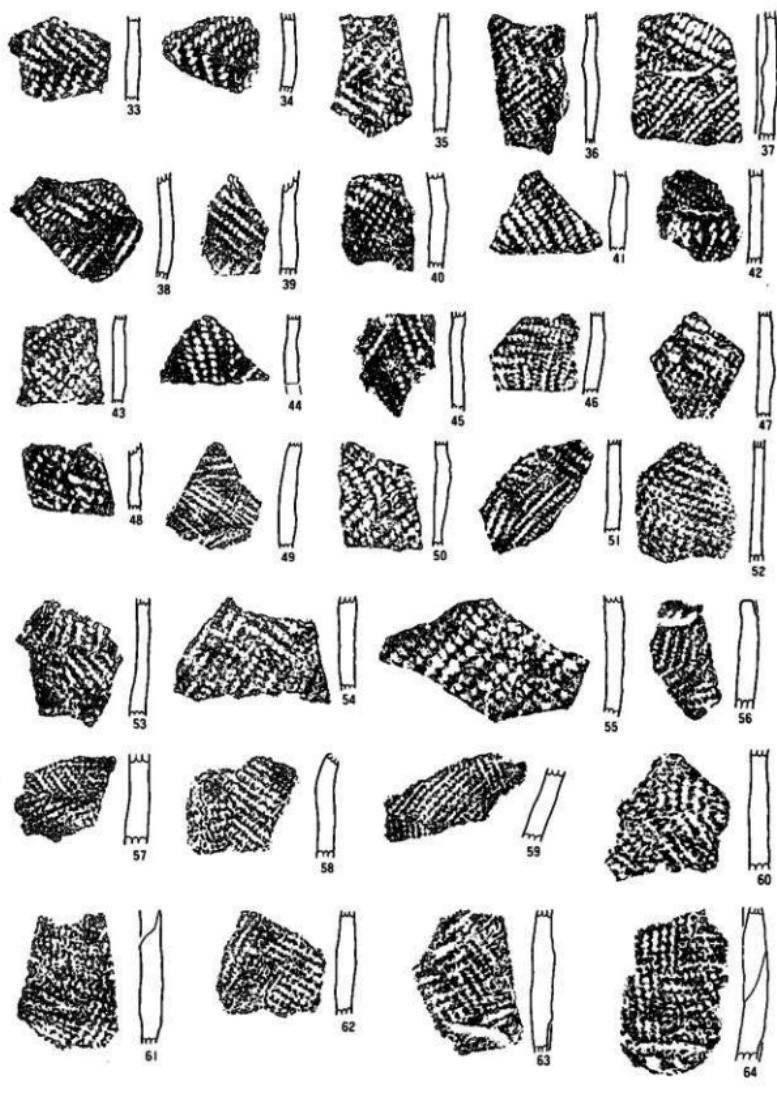
第37図 多繩文系土器



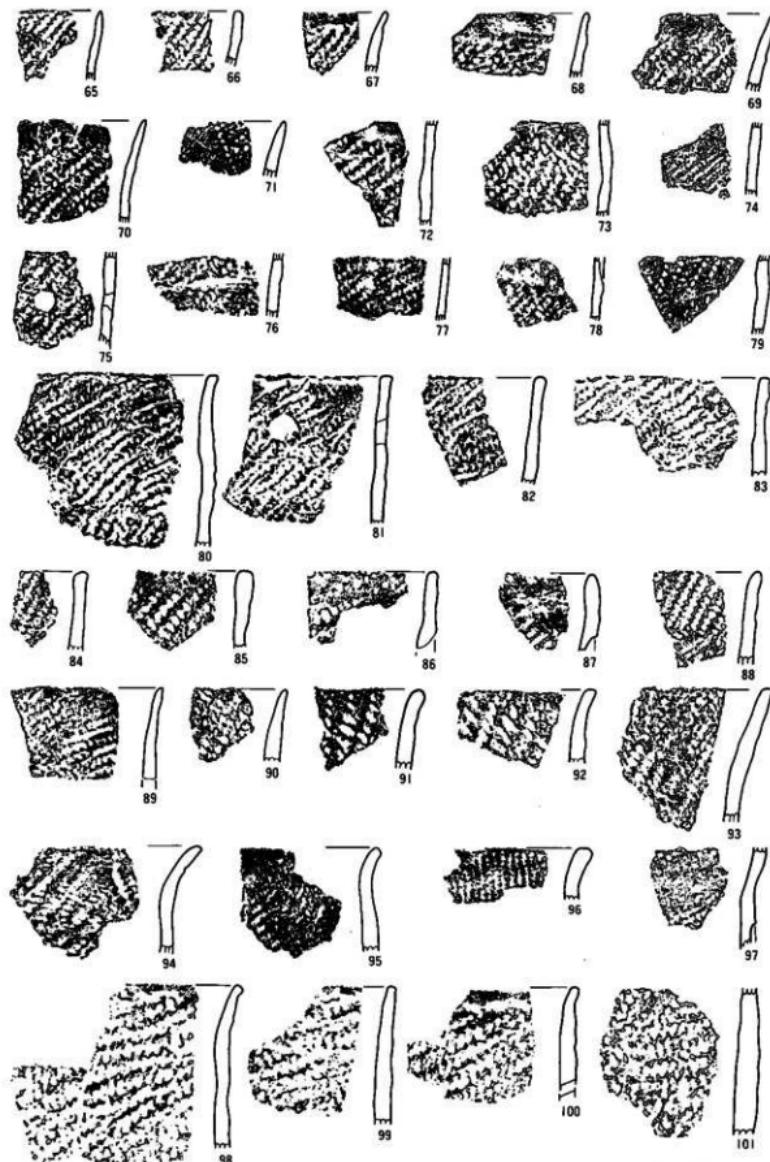
第38図 多縦文系土器01



第39図 回転繩文土器(I)

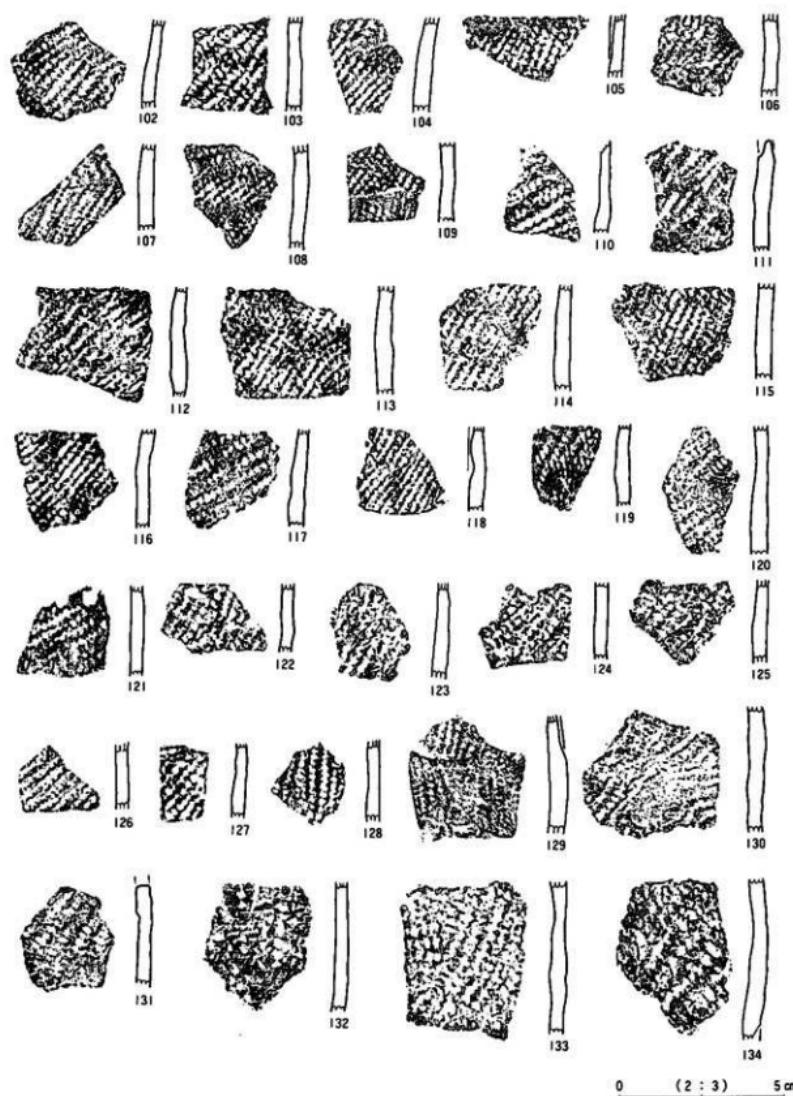


第40図 回転網文土器(2)

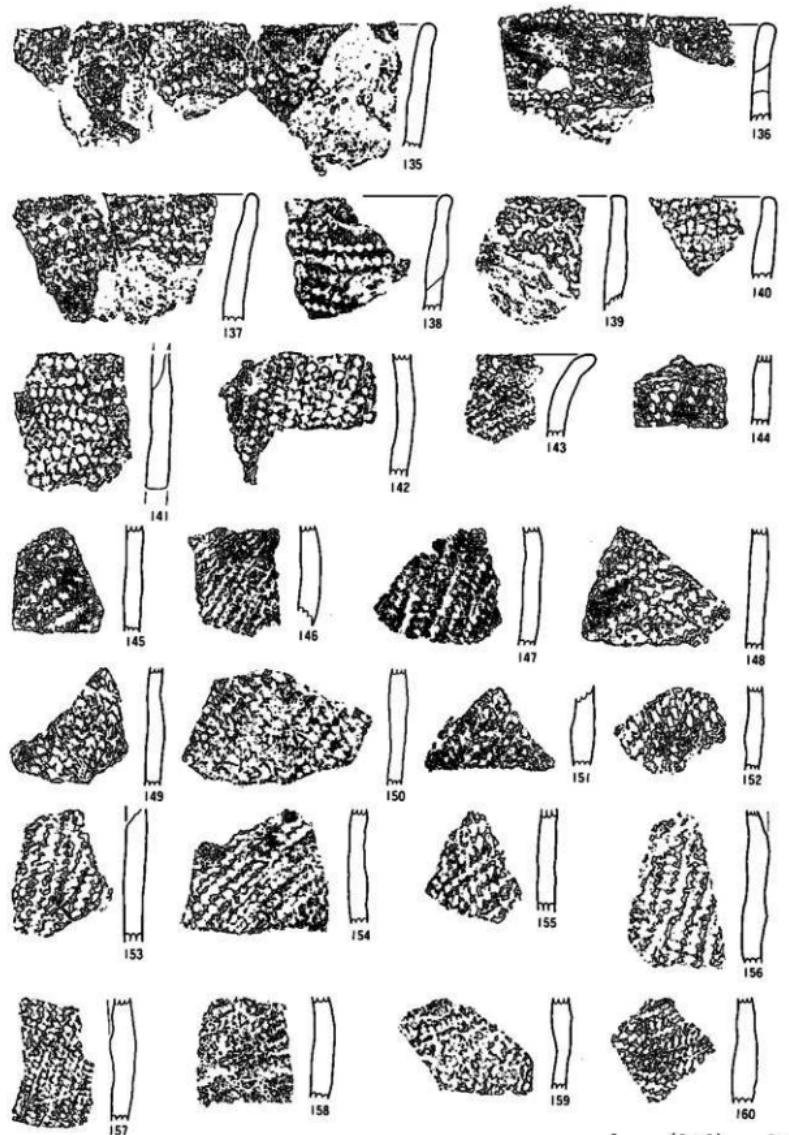


第41図 回転繩文土器(3)

0 (2 : 3) 5 cm

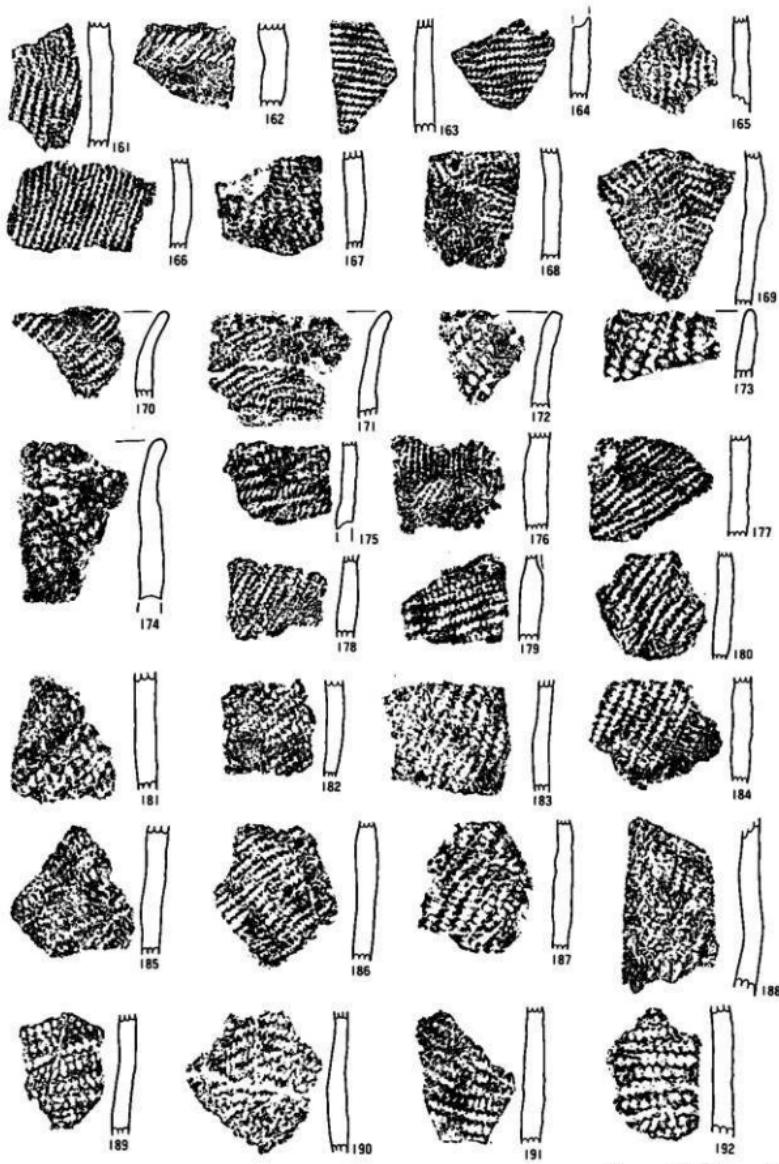


第42図 回転繩文土器(4)



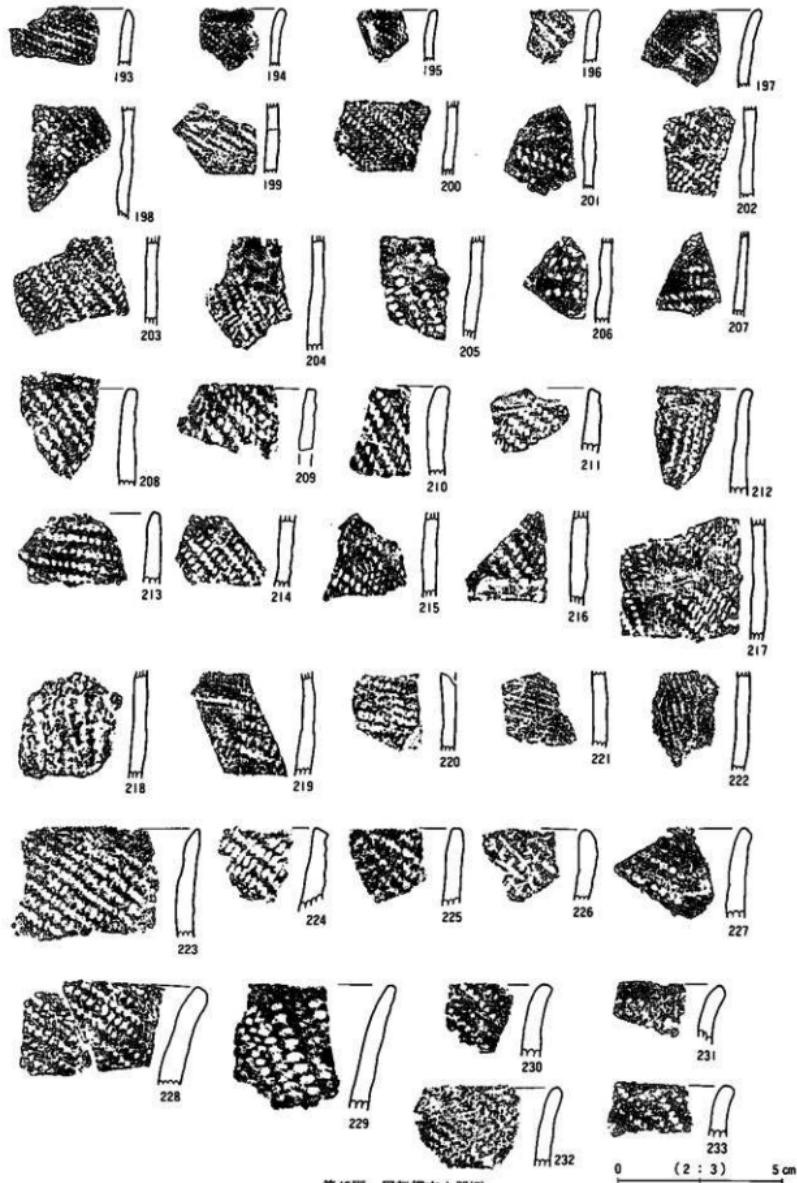
第43図 回転縄文土器(5)

0 (2 : 3) 5 cm

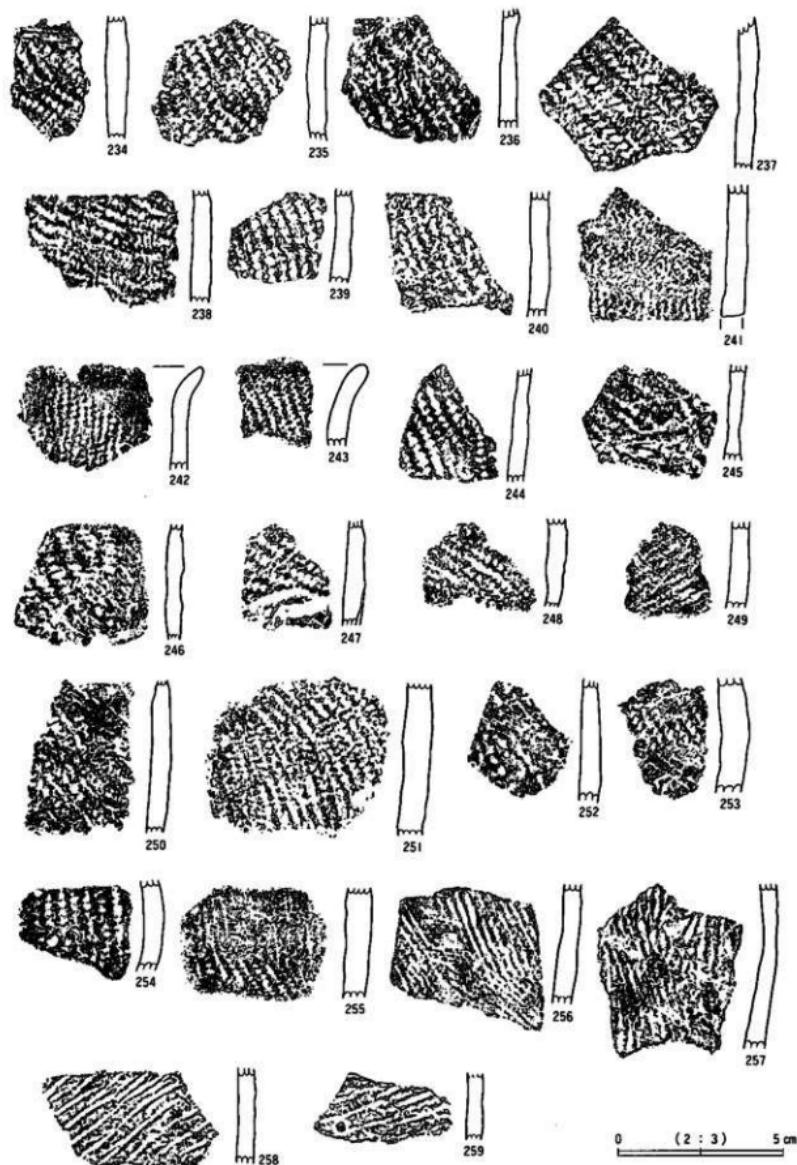


第44図 回転繩文土器(6)

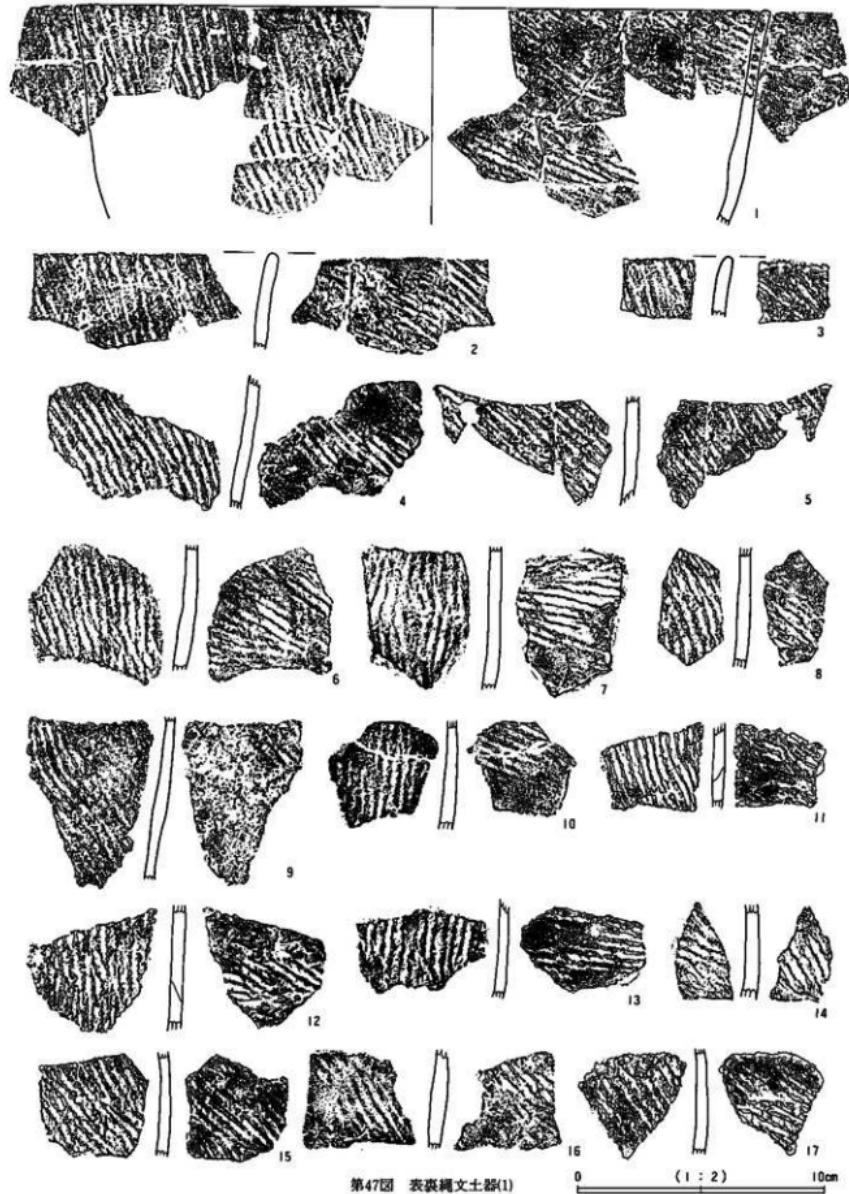
0 (2 : 3) 5 cm



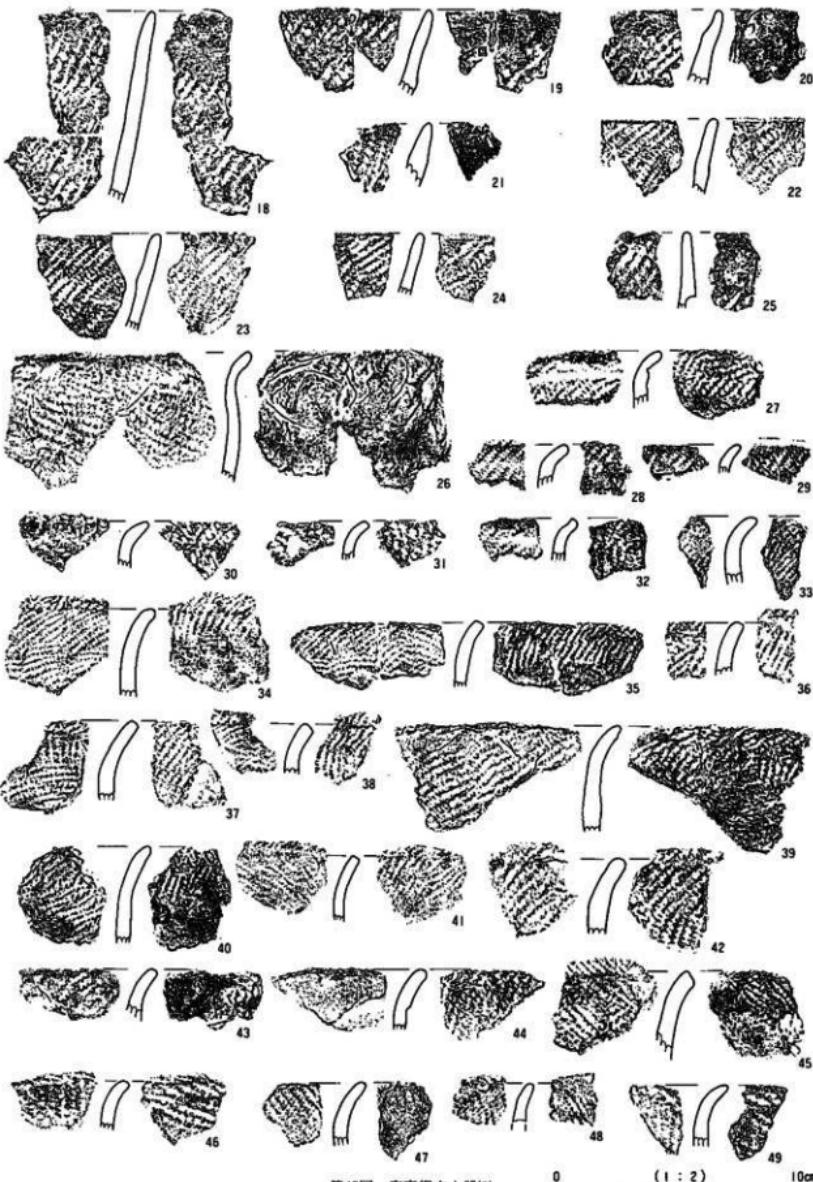
第45図 回転繩文土器(7)



第46図 回転繩文土器(8)

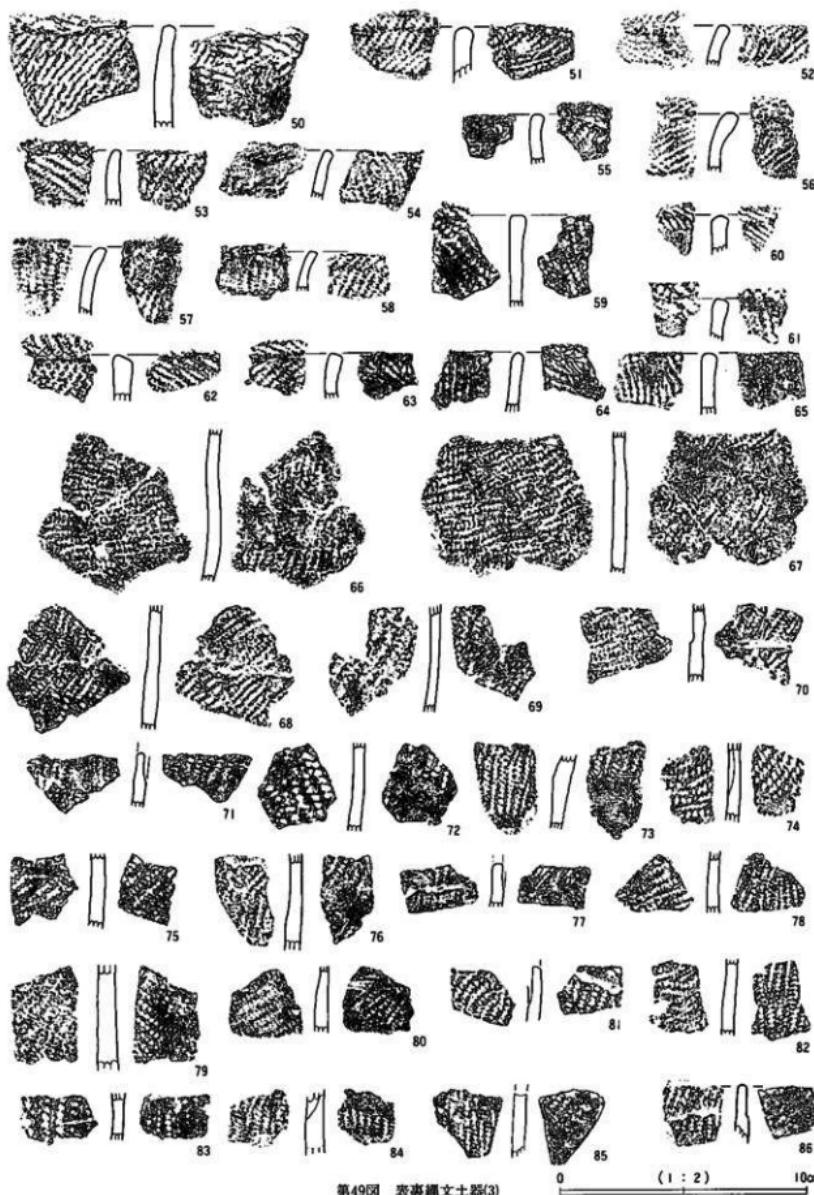


第47図 表裏縄文土器(1)

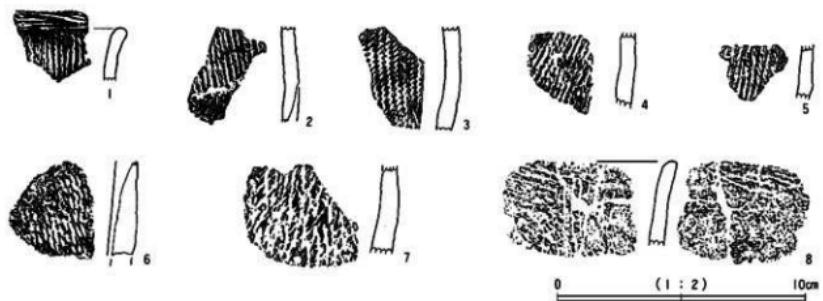
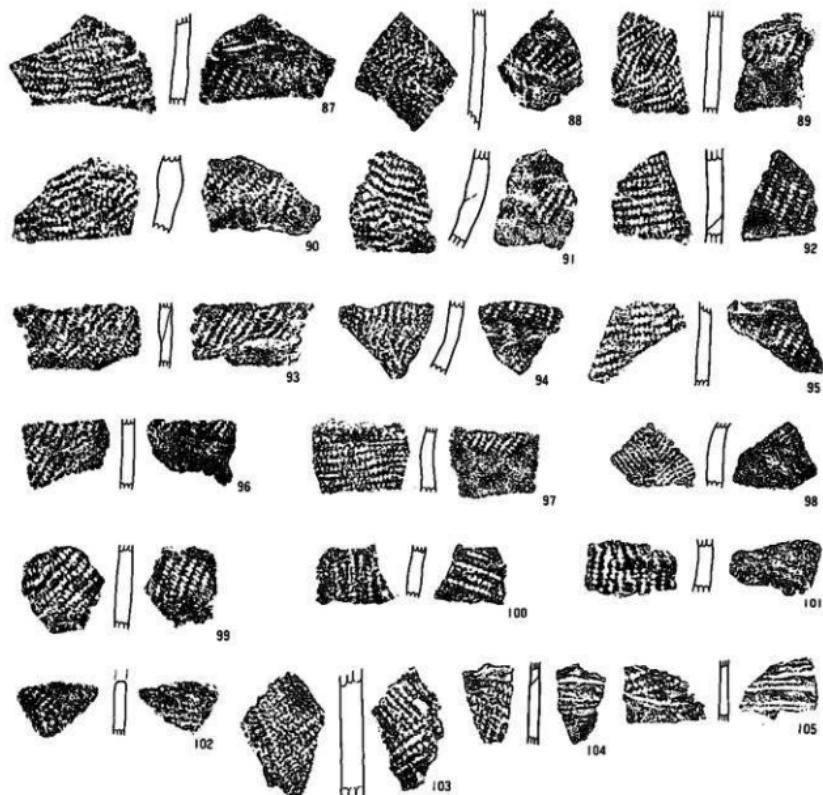


第48図 表裏網文土器(2)

0 (1 : 2) 10cm

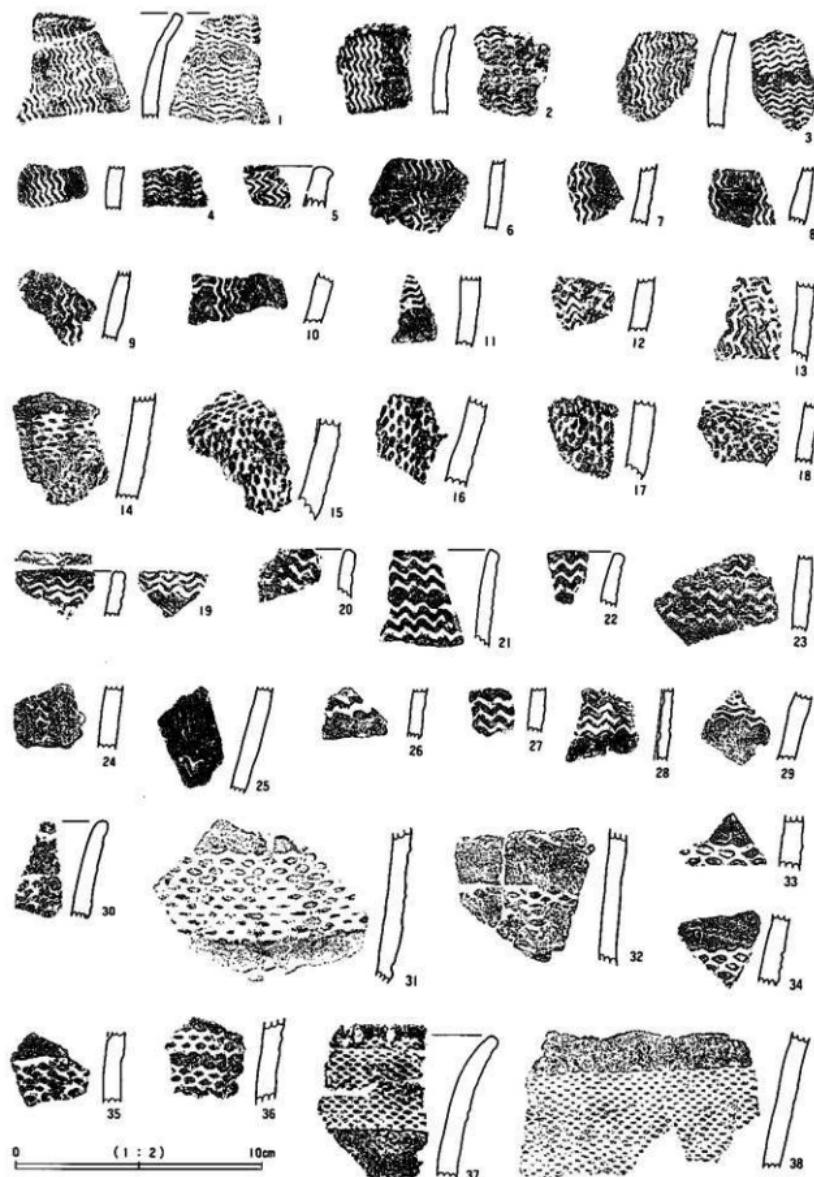


第49図 表裏縄文土器(3)

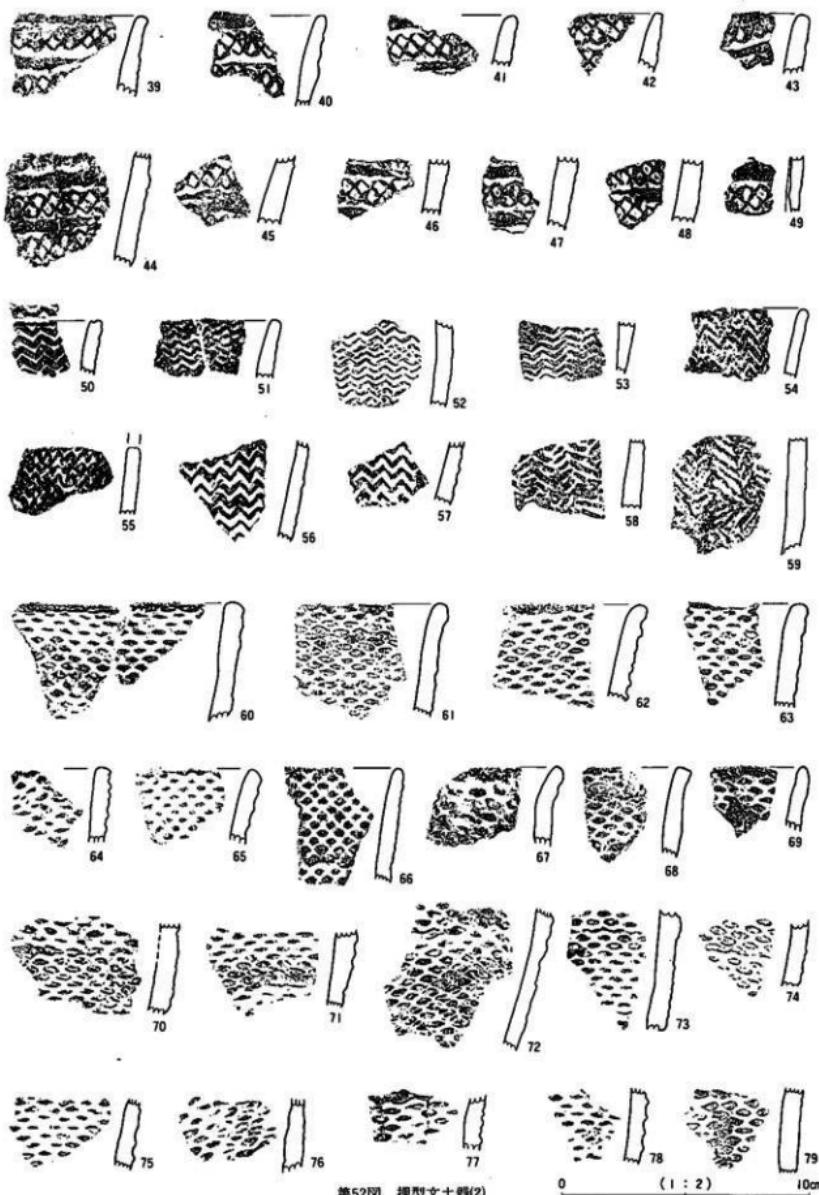


第50図 表裏織文土器(4) (No.87~No.105) 焙糸文土器 (No.1 ~No.8)

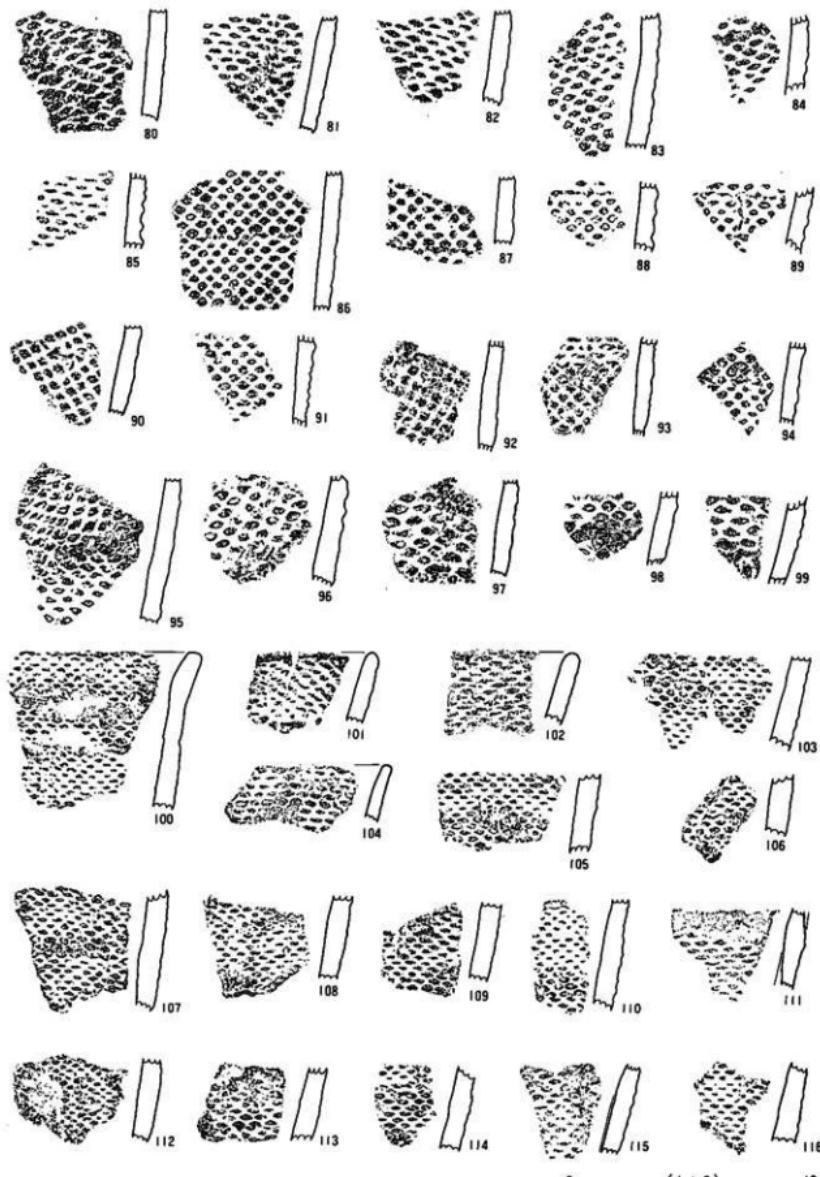
0 (1 : 2) 10cm



第51図 押型文土器(1)

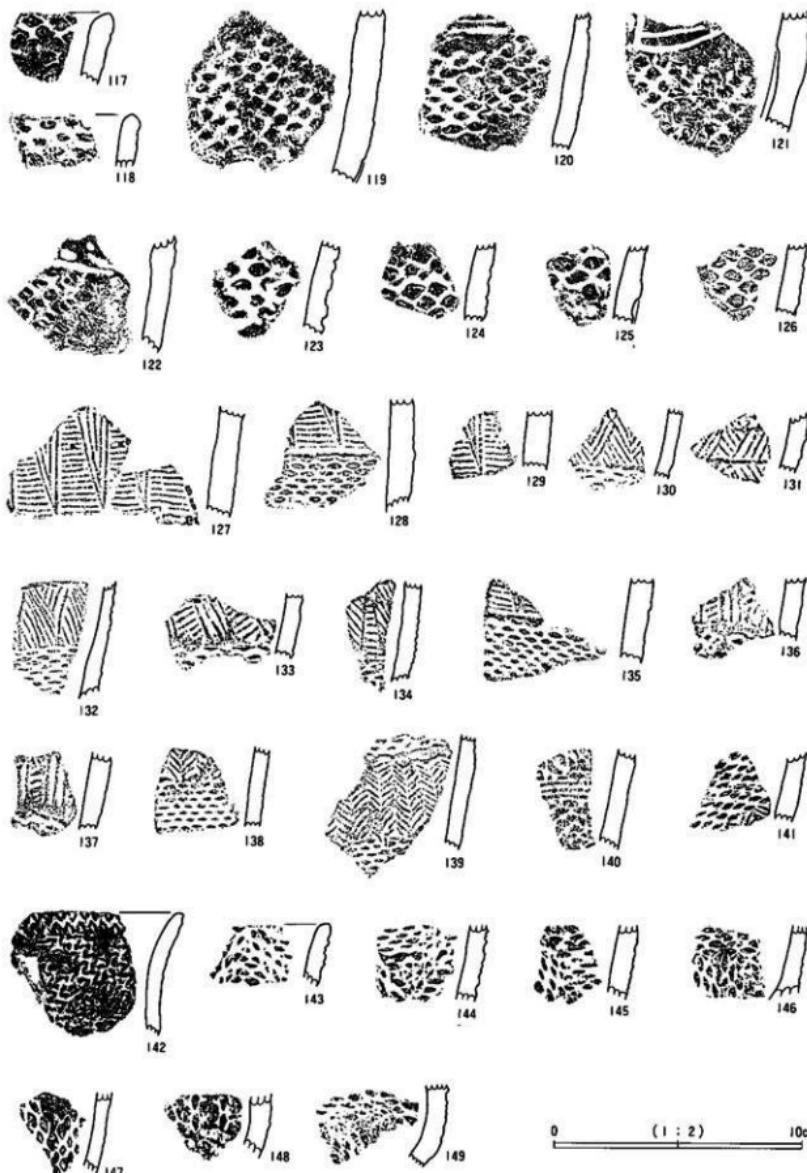


第52図 押型文土器(2)

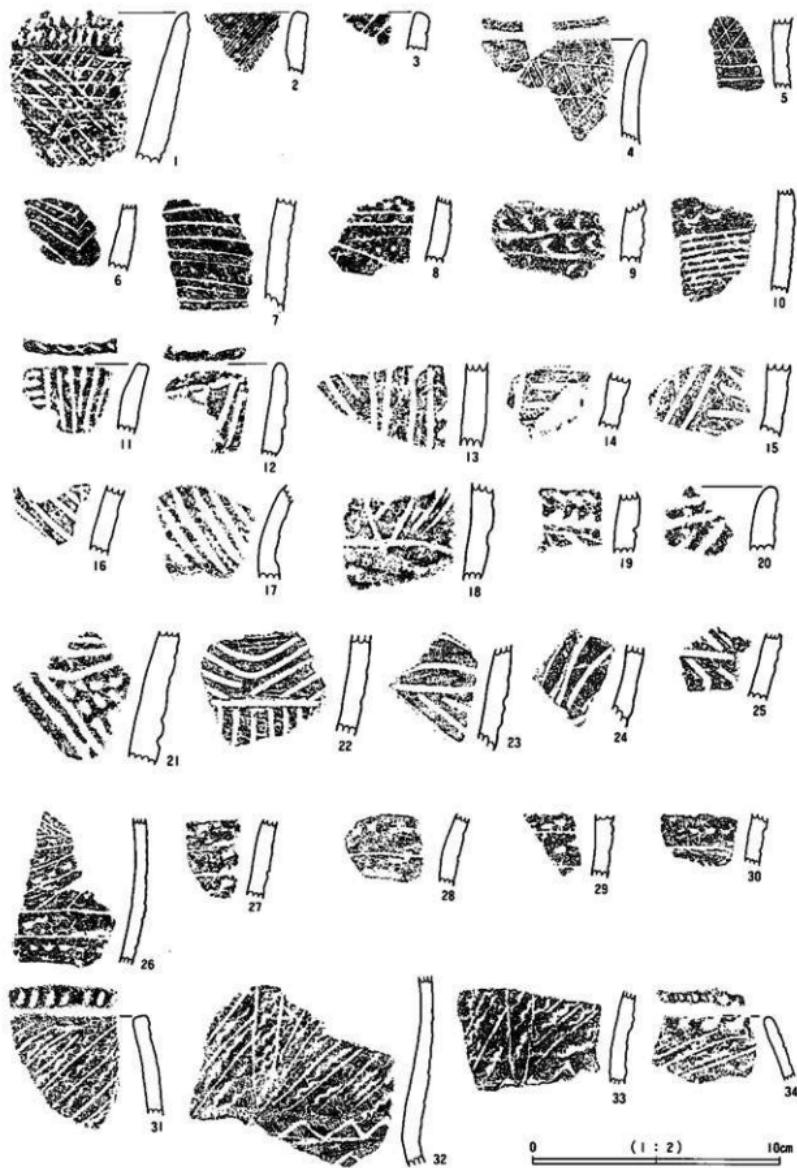


第53図 捺型文土器(3)

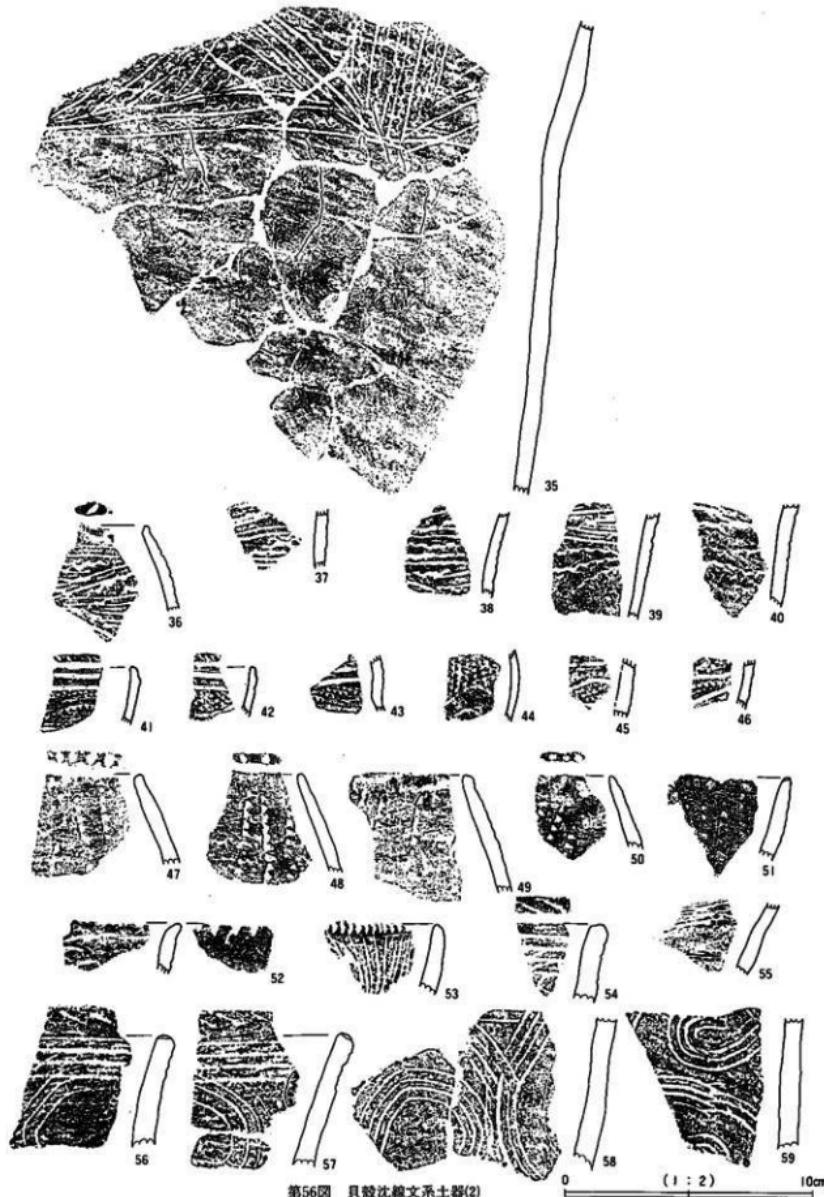
0 (1 : 2) 10cm



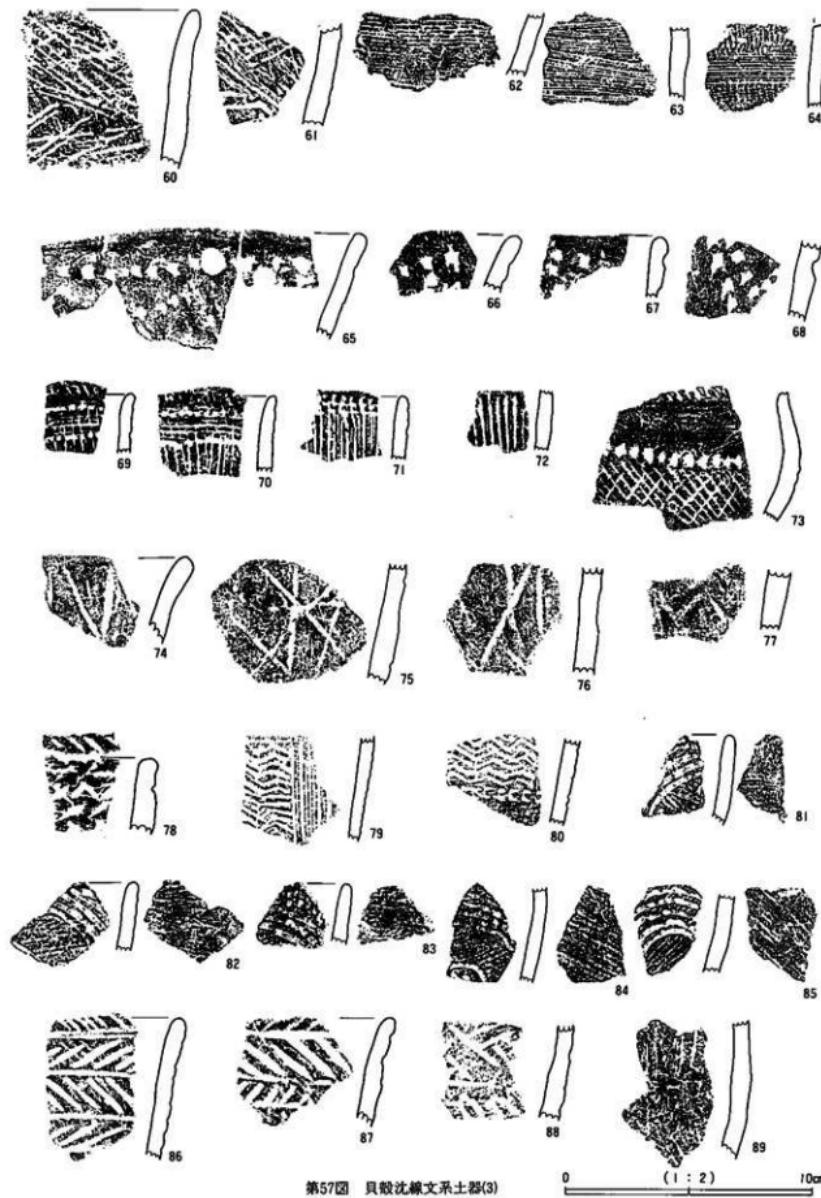
第54図 押型文土器(4)



第55図 貝殻沈線文系土器(1)

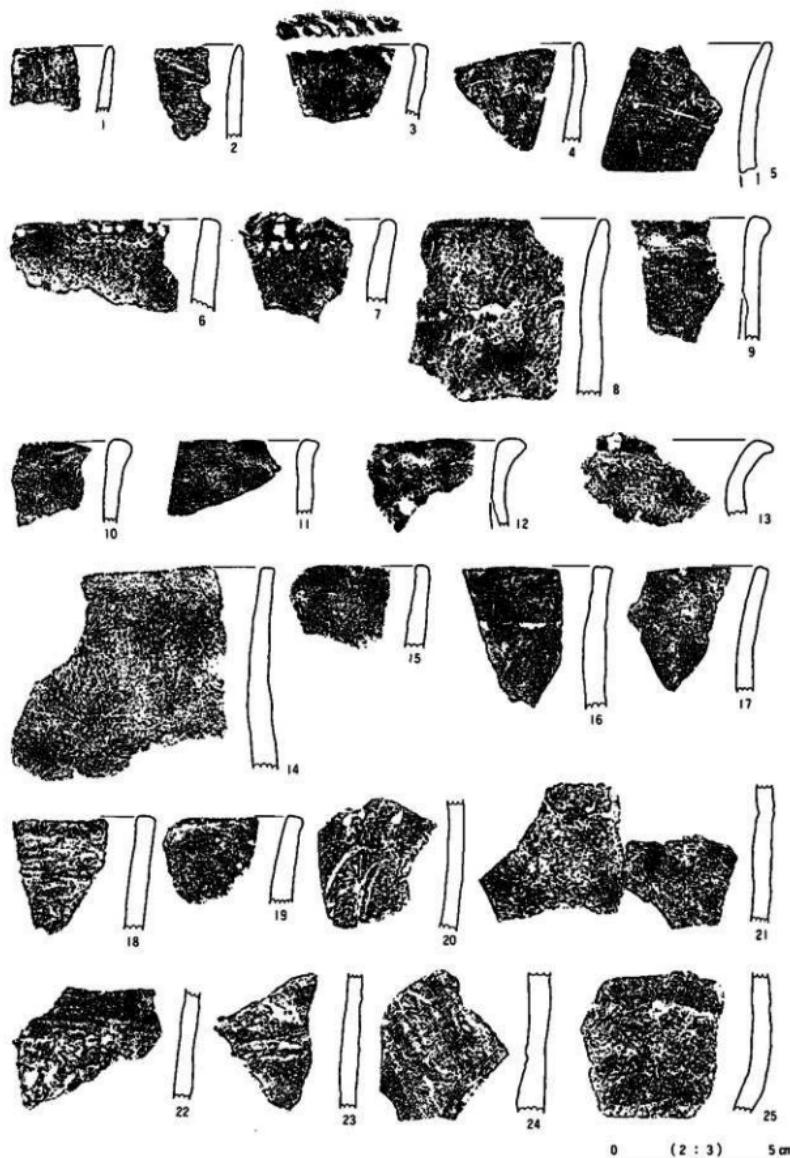


第56図 貝殻沈線文系土器(2)



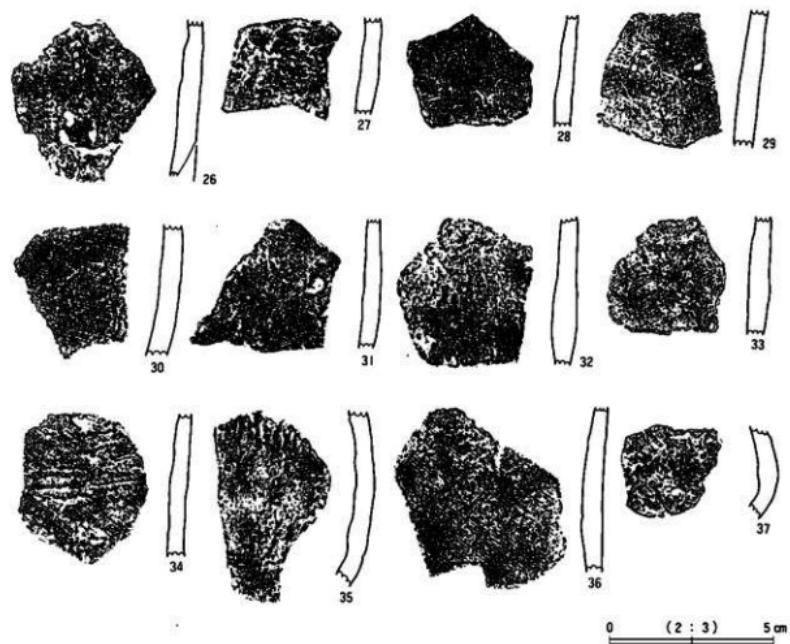
第57図 貝殻沈線文系土器(3)

0 (1 : 2) 10cm



第58図 無文土器(1)

0 (2 : 3) 5 cm



第59図 無文土器(2)

第2節 早期後半から中期前半

本節で取り扱う土器は、早期後半がVII・IX層を、前期～中期初頭の土器はVII・VIII層を中心に出土する。土器型式は連続してとらえられるが、一型式内のバリエーションは乏しいようで、器種的には深鉢が圧倒的に多く、浅鉢類の出土は少ない。各時期の土器は継続するものが多く、便宜的に以下の通り群分類をし、説明を行っていく。

- 第1群 早期後半～末葉の条痕文系土器
- 第2群 早期末葉～前期初頭に位置付けられると思われる土器群
- 第3群 関山併行期の土器
- 第4群 黒浜式併行期と思われる土器
- 第5群 諸磯a式土器
- 第6群 諸磯b式土器
- 第7群 諸磯c式土器
- 第8群 十三菩提式土器
- 第9群 五領ガ台式土器併行期の土器
- 第10群 中期中葉の土器

1 第1群 早期後半から末葉の条痕文系土器

第1類 (第60図1・3～23)

鶴ヶ島台式土器であり、本群の大半を占める。モチーフは沈線により幾何学文が描かれた後有節沈線等が充填され、文様交差部等には円形竹管文等が施されている。

第60図1は方形の器形を呈する小型の土器であり、単位部分は小波状を呈し口唇部には刻みが施されている。文様は半截竹管による平行沈線及び同一工具の背側を用いたと思われる凹線により弧線文が背合わせに2段施文され、弧線内は無文とし他は沈線が充填されている。円形竹管文は文様交差部ではなく単位部分に縦位に施文されている。表裏面には条痕文が認められる。胎土には雲母を多く含む。

3・4は同一個体の口縁部及び頸部破片である。文様は細い单沈線により幾何学文が施文され、棒状工具による刺突文が充填されており、文様交差部等に円形竹管文が施文されている。残存破片では表面のみ条痕文が観察される。5～10は口縁部破片であり、いずれも口唇部には棒状工具による押捺や竪状工具による刻みが施されている。5は有節沈線が斜位に施文されるが、全体のモチーフは判然としない。裏面には横位の粗い条痕文が観察される。6・7は太い凹線状の单沈線により文様が描かれ、6は口縁部直下を1条の沈線により区画され、文様内には刺突文が充填されている。また、表裏面には横位の条痕文が観察される。8・9は胎土・整形等からは同一個体と思われるが、一部文様が異なる。いずれも口唇部には刻みが施され、文様は多截竹管による平行沈線により描かれ、文様交差部には円形竹管文が施される。9では口縁直下にも横位の平行沈線文が施文されている。表面には削痕文が観察される。10は竪状工具による刺突が多段に施文され、破片内では刺突以前に半截竹管による平行沈線文により「J」字状のモチーフが描出されている。

11～23は胴部破片である。11・12は隆帯が縦位に垂下され、隆帯上には11は多截竹管状工具による刺突

が、12は棒状工具による刻みが施される。文様は11が単沈線が斜位に施された後、隆带上と同一工具による刺突が沈線上に施されている。12は斜位の沈線が施されるのみである。13~19は単沈線により描かれたモチーフ内に同一工具による沈線文や刺突文が充填されるものであり、文様交差部が残存する破片ではこの部位に円形竹管文が施されている。15は口縁部文様帯下端部の破片であり、下端に稜を有する。16~18は表裏面に横位の条痕文が、17は裏面に斜位の条痕文が、19は裏面に横位の条痕文が観察される。20は幅広な浅い凹線状の区画により文様帯が2段に区画され、文様帯内は単沈線により斜位及び縦位に施文され、末端には多截竹管状工具による刺突文が施されている。21は残存破片が小さく文様は判然としないが、単沈線により描かれたモチーフ内に棒状工具による刺突文が充填されている。22は半截竹管により描かれたモチーフ内に同一工具による有節沈線文が充填されている。23は下端を隆帶により区画された文様帯内に単沈線により鋸歯状モチーフが描かれ、この中にも沈線が施文されている。表裏面に横位の条痕文が観察される。

第2類（第60図24~28）

茅山下層式~末葉の土器であり、条痕文系土器の中での出土量は少ない。

第60図24~26は同一個体と思われ波状口縁を呈し、扁平に作り出された波頂部及び口唇部には刻みが施される。口縁部直下は2段一对の刺突、下端は同一の刺突が施された低い隆帶により区画され、幅狭な口縁部文様帯が構成される。文様帯内は半截竹管による平行沈線により右下がり→左下がりの順に格子目状モチーフが施文された後、「U」字状のモチーフが付加されている。表裏面にはいずれも横方向の条痕文が観察される。27は文様帯下端部の破片であり、緩やかな稜により文様帯は区画されている。残存部では文様帯内は範状工具により縦位に刻みが施されている。28は半截竹管による平行沈線により縦位及び波状のモチーフが施文されている。27・28とも表裏面には条痕文が観察され、28の裏面は摩滅が激しいがわずかに縦位に観察された。

第3類（第60図29~32・第61図1~23）

早期末葉の絡条体压痕文土器及びその他の有文土器を一括した。後述する前期初頭に位置付けられる土器群中（繩文条痕系等）にも該期に含まれる一群が存在するものと思われる。

29は口唇部に刻みが施される口縁部破片である。文様は範状工具による「ハ」字状文が横位多段に施文されると思われる。また、表裏面には横位の条痕文が観察される。

第60図30~32・第61図1~20は絡条体压痕文が施文されるものである。第60図30~32・第61図1は同一個体であり、口縁直下に縦位施文される絡条体压痕文が横位に1条文様帯上端の区画文状に施文され、下端区画は隆帶及びその上下に施される1条の絡条体により区画されている。文様帯内は縦位に絡条体が施文されるものと思われる。また、口唇部にも同一原体による施文が施されている。表裏面には横位の条痕文が観察される。第61図2~5は口縁部破片である。2は絡条体压痕文が横位及び斜位に施文され、表裏面に条痕文が観察される。3は横位の絡条体压痕文が施文され、口唇部にも絡条体压痕文が施文される。表面は縦位、裏面は横位の条痕文が観察される。4は6~9と同一個体と思われ、絡条体压痕文が横位及び斜位に施文され、口唇部にも絡条体压痕文が施文される。また表面には斜位、裏面には縦位の条痕文が観察される。5は「ハ」字状に現れる絡条体压痕文が施文され、口唇部には刻みが施されている。また表面には僅かに条痕文が観察される。10~11は同一個体であり、絡条体压痕文が横位多段に施文され、文様間は隆帶状を呈する。表裏面に条痕文が観察されるが、繊維の多量な混入と摩滅により判然としない。12~15は同一個体である。絡条体压痕文が縦位多段に施文され、各段交互に施文されるものと思われる。

16~19は同一個体である。絡条体圧痕文が斜位幾何学文状に2段施文されるものと思われ、文様帶の下端区画は1条の絡条体、文様帶の横帯区画は2条の絡条体により区画されている。表面のみ細かい条痕文が観察され、胎土には雲母を含む。

20~23は同一個体であり、波状を呈する口縁部破片である。波頂下には斜位の刻みを有する隆帯が3条縦位区画状に垂下され、口縁部文様帶区画は上下とも同様の斜位の刻みを有する隆帯1条により区画されている。区画内には棒状工具による円形刺突により木葉状文様が描出されている。

第4類（第60図2・第61図24~39・第62図1~3・第70図34~38）

条痕文・擦痕文のみが施文される一群を一括する。

第60図2は推定口径13.2cmを測る非常に小型な土器である。文様は観察されず表裏面に横位の条痕文が認められるのみである。

第61図24~38は条痕文・擦痕文のみが観察される破片である。24は緩やかな波状を呈する口縁部破片である。口唇部には刻みが施され、表面のみ横位の条痕文が観察される。

25~26は胴下半部の推定復元個体である。25は残存推定径15.4cmを測り、表裏面に斜位の条痕文が観察される。26は残存推定径18.6cmを測り、表面に斜位、裏面に横位及び斜位の条痕文が観察される。27~37は表裏面に条痕文が観察されるものであり、縦位・横位・斜位・の条痕文や重複が観察される。38は表面は擦痕文が、裏面は横位の条痕文が観察される。

39は土製円盤状を呈し、最大径約4.8cmを測る。摩滅も著しいが周縁は研磨されている。表裏面には条痕文が観察される。

第62図1~3は口縁部破片であり、表裏面とも擦痕文のみが観察される。

第70図34~38は早期後半~末葉に位置付けられる底部破片と思われ、36は底部付近の破片である。37のみ表裏面に横位の条痕文が観察され、他は擦痕文のみが観察される。34は底部先端が他より尖る。

第5類（第62図4~25）

概ね早期末葉に位置付けられると思われる繩文・条痕系の土器を一括した。

4は唯一の口縁部破片である。表裏面に単節繩文R Lしか施文され、裏面には繩文施文前の条痕文が観察される。

5以降は胴部破片である。5は0段3条のR LとL Rにより菱形状の羽状に施文されるが、裏面には条痕文は観察されない。6は0段3条のL Rのみで菱形状の羽状に施文され、裏面には斜位の条痕文が観察される。7は単節繩文R Lと0段3条のL Rにより崩れた羽状施文され、裏面には横位の条痕文が観察される。8・9は同一個体と思われ、単節繩文R Lと条方向が逆の繩文が施文されているが、摩滅のため原体は判然としないが無節繩文L Rと思われる。裏面には横位の条痕文が観察され、胎土には雲母を含む。10・11は同一個体と思われ0段3条のL Rが施文されており、裏面には横位の条痕文が観察される。12・13は単節繩文R Lしか施文され、表裏面に条痕文が観察される。14は無節繩文L Rが施文され、表面には擦痕文、裏面には斜位の条痕文が羽状に観察される。15は0段3条のL Rが施文されるが、残存破片内では裏面は条痕文等は観察されない。16・20は同一個体と思われ単節繩文L Rが施文され、裏面には横位の条痕文が観察される。胎土には雲母を含む。17~19は0段3条のL Rが施文され、17・18は裏面に条痕文が観察される。21は単節繩文R Lしか施文され、裏面には横位・斜位の条痕文が観察される。22は無節繩文L Rが施文され、裏面には縦位の条痕文が観察される。23は底部付近の破片と思われ、複節繩文L R Lが施文されるものと思われるが、絡条体の可能性も残る。24・25は同一個体と思われ、結束繩文により条の短い

羽状に施文され、結節部も施文されている。裏面には横位の条痕文が観察され、胎土に雲母を含む。

2 第2群 早期末葉から前期初頭の土器

前述したとおり縄文条痕系土器・絡条体圧痕文系土器等を除いた、概ね前期初頭に位置付けられる一群を一括したが、一部絡条体圧痕文が施文されるものでも地文等から該期に位置付けての報告が適當と思われるものも一括して述べる。なお、基本的には該期の土器には撇入品を除き口縁部直下に隆帯が1条横走貼付されるものが多く、縦位に貼付されるものは少ないが、いわゆる「塚田式」土器が主体を占めると思われる。

本土器群の特徴は内面整形に条痕文は観察されず、摩滅等により観察不可能な遺物以外は擦痕文が頗著に観察されることが一つ挙げられる。

第1類（第62図26～32・第63図1～4・第67図4）

主に沈線文により文様が描かれる一群を一括した。いわゆる「上川名II式」系の土器及び文様構成の主体となる施文法が沈線により描かれるものを中心としたが、後述する本群の主体となる文様帶区画隆帯が施される土器群の分類基準と同様の施文法が用いられるものも含まれる。

26～30は同一個体であり、文様は多截竹管による単沈線で幅狭な横帯区画後に斜位の沈線を横帯毎に方向を変えて施文している。裏面には擦痕文が観察され、胎土には雲母を少量含み、器厚は他と比較すると薄手である。31・32は口縁部破片であり、共に口唇部には刻みが施され、31は弧線状の沈線が2条施文され、地文には単節縄文L Rが施文されている。32は2条の沈線が垂下され、残存する左側部位には「V」字状モチーフが施され、盲孔も観察される。地文には単節縄文R Lが施文されると思われるが、摩滅のため判然としない。

第63図1～4は口縁部を欠損する。1・2は同一個体であり、垂下する沈線施文後に1では櫛歯状のモチーフが描かれる。地文には0段3条のL Rが施文され、裏面には一部擦痕文が観察される。3・4は口縁部文様帶下端が刻みを有する隆帯により区画されるもので、文様帶内のモチーフは3が斜位の沈線、4は縦位の沈線により描かれ、地文には単節縄文R Lが施文されている。裏面にはいずれも擦痕文が観察される。

第67図4は推定口径22.0cmを測る平縁土器であり、緩やかに開きながら立ち上がるバケツ状の器形を呈すると思われ、口唇部には後述する第67図1と同様な絡条体圧痕文が施されている。文様は4条一対と思われる櫛歯状工具により緩やかな波状に施され、主に横位展開されるように看取され、残存破片内では横帯間に縦位充填施文される部位が認められる。裏面には擦痕文も一部観察されるが、他と比較して器厚も薄く整形は丁寧である。

第2類（第63図5～7・第66図1・第67図1）

撲糸側面圧痕文や縄文原体圧痕文及び絡条体圧痕文が文様や単位文として施文されるものである。この他に第1類的な施文法や後述する隆帯区画等が用いられるものも一部含むが、図示したもののが全てであり出土量は少ない。

第66図1は推定口径30.8cm、頸部径24.4cmを測り、胴上半部がやや膨らみ頸部から緩やかに開く4単位の波状口縁土器と推測される。段を有する頸部から口縁にかけての幅広な文様帶内には3条一対の原体圧痕による蕨手状モチーフが施文され、空白部には棒状工具による刺突文が充填されている。地文には0段

多条のRLとLRの縄が帯状の羽状に施文されている。胎土には雲母を多量に含んでいる。なお、段直下には指頭圧痕による整形痕が顕著に観察される。本土器以外には撚糸文が施文される土器は検出されていない。

第67図1は推定口径39.4cmを測る平縁土器であり、口唇部には刻みが施される。隆帶上は他と異なり絡条体圧痕文が縦位に施文され、同一施文具により隆帶上下端にも施されている。この隆帶により区画された幅広な文様帶内には、同一施文具により縦位単位的に2条一対で等間隔施文されており、地文にはこの部位を境にして単節縄文RLとLRの縄により整った羽状に施文されている。また内面整形は後述する該期の土器と比較すると丁寧であり、条痕・削痕文等は認められない。

第63図5～7は綱文原体圧痕文が単位的に施文されるものである。5は文様帶下端が刻みを有する隆帶により区画され、口唇部にも同一施文が施されている。単位文には単節縄文LRの先端を縦位に1条区画状に施文し、これを境に単節縄文RLとLRにより羽状施文されている。6・7は同一個体であり、文様帶下端が刻みを有する隆帶により区画され、口唇部には単節縄文LRが施文されている。単位区画には絡条体原体を弧状に湾曲させた部位を縦位に2条押圧し縦位施文されるが、地文の縄文は口唇部と同じく単節縄文LRが施文されるものの、破片内では羽状を呈していない。

第3類（第66図2・3・第63図8～28）

刻みを有する隆帶により文様帶が区画されるものであり、該期の有文系土器の大部分を占める一群である。また、内面整形の観察可能なものは全てに縦位又は横位の擦痕文が観察される。

第66図2は推定口径31.4cmを測り、口唇部に刻みを有する緩やかな波状口縁を呈する土器である。貼付された隆帶は後述する土器群と比較するとやや幅広で隆帶上には棒状工具による縦位の押し引き状の刻みが施され、口唇部にも同様の施文が施されている。地文には撚糸文Rが斜位に施文され、内面には擦痕文や整形時の指頭痕が観察される。同図3は推定口径18.8cmを測り、4単位波状口縁で胴上半部から直線的に立ち上がる砲弾状の器形を呈すると思われる。隆帶は口縁直下に幅狭な間隔で施文され、隆帶上には棒状工具による縦位の押し引き状の刻みが施されている。地文には一部ループ文や自縄結節部も一部施文される単節縄文RLと結節部の施文される付加条縄文RL+Lの縄により崩れた羽状に施文されている。内面には縦位の擦痕文が観察される。

第63図8～20は口縁部破片である。8は刻みを有する隆帶が縦位に単位施文されるものであり、波状縁を呈する。地文には単節縄文LRが施文され、口唇部にも施されている。9は他と比較して文様帶幅が広く、隆帶上の刻みは「ハ」字状に施されている。地文には胴部側は単節縄文RLとLRの縄により羽状に施文され、文様帶内では付加条縄文RL+Rが施文されており、口唇部にも縄文が認められる。裏面には擦痕文等は観察されないが、隆帶部位の内側は凹状を呈し、器厚は他と比較して薄い。10～14は同一個体であり、緩やかな波状口縁を呈する。押し引き状の刻みが施される隆帶により口縁部は幅狭に区画され、地文には一部ループ文も施文される単節縄文RLと一部自縄結節部も施文される付加条縄文RL+Lの縄により羽状に施文されている。内面には横位や縦位の擦痕文が顕著に観察され、13には補修孔が穿れる。15は押し引き状の刻みが施される隆帶により口縁部は幅狭に区画され、地文には単節縄文LRが施文されている。

16は波状口縁を呈すると思われ、口唇部には刻みが施される。押し引き状の刻みが施される隆帶により口縁部は幅狭に区画され、隆帶上下端には貼付時の整形と思われる凹線が観察され、幅狭な口縁部文様帶内にはこの後凹線状の単沈線が口縁に沿うようにもう一度施文されている。地文には0段3条のRL縄文が施文されている。17は波状口縁を呈すると思われ、口唇部には刻みが施される。押し引き状の刻みが施さ

れる隆帯により口縁部は幅狭に区画され、幅狭な口縁部文様帶内には区画後に上端のみ凹線状の単沈線が口縁に沿うように施文される。地文には0段3条のRL繩文が施文されている。18も17と同様の施文が施され、地文には0段3条のRL繩文が施文されている。16~18はいずれも裏面には横位・縦位の擦痕文が顕著に観察される。

19~20は同一個体である。幅狭な口縁部文様帶は同様であるが、前述の一群のような隆帯は施されず、半截竹管状工具の腹部に粘土を充てたものを貼付したような、斜位の短い貼付文が施文されている。地文には0段3条LR斜繩文が施文されている。

21~28は口縁部を欠損する。21は押し引き状の斜位の刻みを有する隆帯により幅広な文様帶が区画されると思われ、地文には単節繩文RLとLRが施文されており、補修孔が穿たれる。裏面には擦痕文が僅かに観察される。22は押し引き状の刻みが2単位以上で異方向に(「へ」字状に)施される隆帯により文様帶が区画され、一部に沈線が観察されることから文様帶内には沈線によりモチーフが描かれる可能性も残る。地文には単節繩文LRが施文されている。23は押し引き状の刻みを有する隆帯により文様帶が区画され、地文には0段3条のRLが施文されており、裏面には擦痕文が僅かに観察される。24は押し引き状の刻みを有する隆帯により文様帶が区画されると思われ、地文には単節繩文LRが施文されている。25は籠状工具による刻みを有する隆帯により文様帶が区画されると思われ、地文には単節繩文LRが施文されている。26は他と異なり繩文原体圧痕が施される隆帯により文様帶が区画されると思われ、地文には結節部も施される単節繩文RLしか施文されると思われる。裏面には擦痕文が僅かに観察され、隆帯部位の内側は凹状を呈し隆帯貼付時の指頭圧痕によるものと思われる。27は斜位の刻みを有する隆帯により文様帶が区画されると思われ、地文には0段3条のLRが施文されている。28は斜位の押し引き状の刻みを有する隆帯により文様帶が区画されると思われ、地文には単節繩文RLと付加条繩文LR+Rにより羽状に施文されている。27~28とも裏面には僅かに擦痕文が観察される。

第4類 (第63図29~31・第64図1~7・第67図2)

口縁部に刻みや繩文等が施される一群であり、前述の一群の中にも一部施されていた手法であるが、本一群ではこれ以外にモチーフ等が施されず、地文の繩文が施されるのみのものを一括した。

第63図29~31・第64図1~3は口唇部に刻み等が施される口縁部破片であり、第64図1・2は同一個体である。29は波状口縁を呈し、補修孔が穿たれる。地文には単節繩文LRが施文され、下半部に単沈線が斜位に施文されている。30は口唇部に爪形状の刻みが施され、地文には自繩結節部も施された単節繩文RLしが逆位に施文されている。31は緩やかな波状口縁を呈し、地文には0段3条のRLとLRの繩により羽状に施文されている。第64図1・2は単節繩文RL及び自繩結節部も施文されている。3は口唇部に爪形状の刻みが施され、地文には単節繩文LRが施文されている。いずれも裏面には横位・縦位等の擦痕文が観察される。

4~7は口唇部に繩文が施されるものである。4は口唇部及び器表面に単節繩文LRが施文されている。5・6も同様に単節繩文RLが施文されている。7は小波状を呈し、口唇部には波頂部を境に繩文の施文が異なり器表面と同じ繩文が施されている。地文には単節繩文RLと付加条繩文LR+Rにより羽状に施文され、付加条側には異繩結節部も施文されている。いずれも内面には削痕文が観察される。

第67図2は推定口径27.6cmを測る平縁土器であり砲弾状の器形を呈するが、口唇部には棒状工具により波状に圧痕が施される。原体が判然としないが、一見0段3条のLRと看取されるが、一部の節が條のように流れ無節繩文RL状に流れている部位も認められ判然としない。裏面には横位の擦痕文が顕著に観察される。

第5類（第64図8～28・第65図1～10・第67図3・第70図39～42）

口唇部装飾等も施されない地文のみが施文されるものであり、胴部破片及び早期末～前期初頭に位置付けられると思われる底部破片も一括する。

第64図8～28・第65図1～10は口縁部破片である。第64図8は小波状を呈し、単節繩文RLと0段3条のLRにより羽状に施文されるが、逆位のループ文や異繩結節部及びRL同志の結束施文等が一部観察される。9は0段3条のRLとLRの縄により羽状に施文されるものである。10・11は無節繩文Lrと単節繩文RLの縄により羽状に施文されているものである。12は0段3条のRLと無節繩文Lrの縄により羽状に施文されるものである。13は単節繩文RLとLRの縄により羽状に施文されている。いずれも裏面には横位・縦位等の擦痕文が観察される。

第64図14～28・第65図1～8は斜繩文のみが観察されるものである。14～17は無節繩文が施文されるもので、14は無節繩文Rlが、15以降は無節繩文Lrが施文されている。いずれも裏面には横位・縦位等の擦痕文が観察される。18～20は同一個体と思われ、0段3条のRLが施文され、一部ループ文も施されている。裏面には擦痕文が顕著に観察される。21は波状縁を呈し、0段3条のRLが施文されている。22～27は単節繩文RLが施文されるものである。28・第65図1は0段3条のLRが施文されている。第65図2～6は単節繩文RLが施文されるものである。なお、4は補修孔が穿たれ、胎土等は第63図29に近似するが、口唇部装飾・沈線の有無は認められない。いずれも裏面には横位・縦位等の擦痕文が観察される。7・8は同一個体であり、地文には付加条繩文Lr+Lが施文されており、裏面には擦痕文が顕著に観察される。

第65図9～13は同一個体である。非常に細かな撚糸文rが斜位に施文されている。裏面には縦位の擦痕文が観察される。

14以降は胴部破片である。扱った時期の中で該期の破片は多量に出土しているが、縄のバラエティーを提示するに留める。14～20・23は各種の縄により羽状繩文が施文されるものである。14・16は単節繩文RLとLRの自繩結節部も施文されるものである。15は0段3条RLの一部自繩結節部も施文される縄と単節繩文LRが施文されている。17は付加条繩文RL+RとLR+Lにより羽状施文され、RL側は自繩結節部も施文されている。18・19は単節繩文RLと付加条繩文LR+Lにより羽状に施文され、18のRLは自繩結節部も施文されている。20は付加条繩文Rl+LとLr+Rにより羽状施文され、付加縄は一部ループ文も施文されている。23は単節繩文RLと付加条繩文LR+Rにより羽状施文され、付加縄は一部ループ文も施文されている。21は無節繩文Lrの自繩結節部も施文されている。22は付加条繩文RL+Lが施文され、一部ループ文も施文されると思われる。24は0段3条LRの足の長いループ文が施文されている。25は単節繩文RLが施され、自繩結節部及びループ文も一部施されている。26はループ部が向かい合わせとなるように逆位に0段3条のRLが2段毎に施文されるものと思われ、一部結節部も認められ自縄の撚りの1本で結節されている。27・28は単節繩文RL及び結節部が施文され、27は異繩結節が、28は自繩結節が施文されている。いずれも裏面には横位・縦位等の擦痕文が観察される。

第67図3は胴下部の推定復元可能であった土器であり、砲弾状の器形を呈すると思われる。残存胴部推定径20.2cmを測り、胴上半部から直線的に立ち上がる器形と思われる。地文には単節繩文RLと付加条繩文LR+Lにより羽状に施文され、いずれもループ部も施文されている。裏面には縦位の擦痕文が観察される。

第70図39～42は底部破片であり、いずれも尖底状の底部形態を呈する。39は単節繩文RLが施文されている。41は単節繩文LRが施文されている。40・42も僅かに縄文が認められるが、磨耗が著しく判然としない。

3 第3群 関山式併行期の土器

図示した破片がほぼ全體的な出土量であるが、前期前半の出土土器中では初頭に次ぐ出土量である。

第1類（第69図1～5・11～15）

平行沈線文や梯子状沈線文によりモチーフが描かれた後に、円形貼付文が施される一群を一括したが、円形貼付文が施されないものも本類中に掲載した。

第69図1は波状口縁を呈し、口唇断面形は内削ぎ状を呈する。文様は半截竹管による平行沈線により蕨手状モチーフが描かれた後に貼付文が施されている。2～4は同一個体である。大型な波状口縁であり、波頂部は双頭状を呈する。文様は梯子状沈線により蕨手状モチーフが描かれた後に一方を軸にして回転させた円形モチーフが施されている上やその他の部位にボタン状の貼付が施される。いずれも地文は認められない。

13は胴部破片であるが、梯子状沈線により鋸歯状モチーフが描かれた後に貼付文が施されるが、下端への区画文の施文は認められない。地文には0段多条RLのループ文が多段に施文され、胴上半部の接合部と思われる部位にはコンバス文が施文されている。

5は波状口縁を呈し、半截竹管による平行沈線により区画された文様帶内に鋸歯状モチーフが施されるものと思われる。地文は認められない。11・12はループ文により鋸歯状あるいは菱形状に描かれたモチーフに沿って半截竹管による平行沈線文により文様が強調施文されている。地文は11が0段多条の繩のループ文が、12は無節繩文LRのループ文が多段に施文されている。

14・15はコンバス文が施文されるもので、14は僅かに輪積み痕の観察される追加整形部にコンバス文が施文され、地文には足の短い単節繩文LRと0段多条のRLのループ文が交互に横帯で羽状構成を探るよう施文されている。15は足の短い0段多条のRLのループ文が施文されている。

第2類（第68図2～6・第69図6～10・16～28・第70図44～47）

地文の繩文のみが認められるものであり、ループ文が施文される一群が主体をなす。関山期の主体となる土器群であり、関山II式期の土器破片である。

第68図2は推定口径24.8cmを測り、4単位の緩やかな波状口縁を呈すると思われる。地文は口縁部直下が足の短い無節繩文LRのループ文が6段施文され、この下は同一原体の足の長いループ文が施文されている。なお、口縁部直下の幅狭な部位には地文は施文されず無文帶としている。3は推定口径18.0cmを測る平縁土器である。地文には足の短い0段3条のRLとLRのループ文が交互に羽状施文されている。4は推定口径21.4cmを測り、4単位の緩やかな波状口縁を呈する。地文は胴上部が足の短い0段3条のRLとLRのループ文が交互に羽状施文され、胴下半部は2段の繩の組紐が施されていると思われ、繩文原体の変換部はいわゆる追加成形部である。5は推定口径19.4cmを測る平縁土器である。地文には0段3条のRLとLRが結束された繩が羽状施文され、一部異繩結節部も施文されている。6は胴部推定径19.6cmを測り、原体は5と同一の繩文が施文されており胎土等からも同一個体と思われる。

第69図6～9は口縁部破片である。6・7は同一個体であり、口縁部にいわゆる臼齒状突起が単位文的に施されている。地文にはループ文が多段に施文されるが、摩滅が著しく原体は判然としない。8は波状口縁を呈し、足の短い無節繩文LRのループ文が多段に施文されている。9は片口部の破片であり、片口部を挟んで0段3条のRLとLRにより羽状に施文されるものと思われ、ループ文は6段施文され、下端

は足長状に施文されている。

10・16~27は胴部破片である。10は胴部破片で唯一復元可能であった個体である。摩滅が激しく地文の縄文も判然としないが、単節縄文RLとLRにより横帯幅の比較的短い羽状に施文されるものと思われ、胎土や裏面の整形は擦痕は観察されないものの、前期初頭の一群に近似している。

16~26はループ文のみが施文されるものである。16・17・21は0段多条のRLとLRの縄により、足の長いループ文は矢羽状の羽状に、足の短いループ文は横帯羽状に施文されている。18・19は足の短い0段多条のRLとLRの縄により2段一対で横帯羽状に施文されている。20は足の短い0段多条のRLとLRの縄により多段に横帯羽状施文されている。22・23は同一個体であり、足の短い0段3条のRLとLRの縄により交互に横帯羽状施文されている。なお、本個体は原体、胎土等から第68図3と同一個体とも思われる。また、胎土は他とは異なり纖維の含有量も少ない。24は0段多条のRLのループ文が多段に施文されている。25は足の長い0段多条のRLとLRの縄により横帯羽状施文されている。26は足の短い0段多条のRLとLRの縄により横帯羽状施文されており、LR側の条が若干長く施文されている。

27・28は同一個体と思われ、いわゆる正反の合の縄LR・Lと単節縄文RLにより羽状に施文されているものである。

第70図44~47は底部破片である。44・45は復元不可能であったが、44は0段多条のRLが、45は0段3条のLRが施文されており、44は上げ底状を呈する。46は推定底径7.4cmを測り、摩滅が著しく原体は判然としないが、左下がりの正反の縄が施文されていると思われる。47は推定底径8.0cmを測り、地文には無節縄文RLが施文されており、いずれも上げ底状を呈する。

第3類（第68図1・第69図29・第70図43）

該期に並行すると思われる土器を一括する。

第68図1は富山県南太閤山I遺跡にみられるような爪形文によりモチーフが施文されるものであり、1個体分の破片が検出されているが残存量は少量であった。推定では胴上半部がやや張り頸部から直線的に立ち上がる4単位の波状口縁と思われ、口唇部は小波状を呈するように造り出されている。口縁部は2~3条、胴部は3条の爪形文により区画され、口縁部の3条目は小波状部のみに施文されるものと思われる。胴部区画の爪形文上部1条と2段目の間は若干隆帶状に造り出され、口縁部文様帶の区画文とされている。文様帶内は2条一対の爪形文により波状縁も利用した2段の菱形状モチーフが描かれると推測され、菱形内にも2条一対の爪形文が横位に施文されている。また、波頂下の単位部分及び下段の大型な菱形文内では下部の逆三角形中央に1ヶ所上部では両端に2ヶ所、上段の菱形文では横位の角に円形モチーフが施文されるものと思われる。地文には0段多条のRLとLRの縄が帯状の羽状に施文されている。器厚は他の該期の一群と比較して非常に薄い。

第69図29は唯一の神ノ木式と思われる土器破片である。口縁部文様帶区画文と思われる隆帶が横位に貼付され、隆帶上には櫛齒状工具による刺突が施され単位的に一部小突起状を呈する部位が観察される。地文には0段3条のRLが施文されている。

第70図43は推定底径8.6cmを測り、爪形文が横位に2条施文されている。また、内面周囲には指頭圧痕が観察され、この部位は凹んでいる。

4 第4群 黒浜式併行期の土器

図示した破片がほぼ全體的な出土量であり出土量は少ない。

第1類（第69図30～33・第70図1～23）

コンパス文、平行沈線文、爪形文等が施文され、地文がモチーフ内に施文されない一群を一括した。

第69図30～33・第70図1～5は上記の施文法が多段に横位展開施文されるものである。第69図30は口縁部破片であり、半截竹管による平行沈線文と波状文が交互に施文されている。31は唯一復元可能であった個体であり、頭部推定径28.4cmを測る。文様は3条のコンパス文と2条の爪形文が交互に施文されると思われ、爪形文に鋸齒状を呈する部位が観察されることから口縁部が波状を呈することが推測される。32は縦位区画も施文され、平行沈線文とコンパス文が施文されているが右上がりであり、口縁部が波状を呈することが推測される。33はコンパス文と平行沈線文が施文されている。第70図1は爪形文と平行沈線文が施文され、爪形文は僅かに鋸齒状を呈することから口縁部が波状を呈することが推測される。2はコンパス文と2条の押し引き状有節沈線文が施文され、有節沈線文は鋸齒状を呈し、口縁部が波状を呈することが推測される。3～5は破片内ではコンパス文のみが施文されている。いずれも地文は認められない。

6～14は主に爪形文により文様が描かれるものである。6～10は口縁部破片である。6・7は波状口縁を呈する。6は押し引き状文が多段に施文され、口縁部寄りの2条は口縁に沿うように波状に施文されている。7は波状口縁を呈し、口縁部直下に横位に1条爪形文が施文され、波長下には円形竹管文が縦位に施文されている。8・9は同一個体であり、口縁部直下に爪形文2条が区画的に施文され、9では破片下部に僅かに沈線が看取される。10～13は施文法、胎土等から同一個体と思われ、口縁部は施文方向の異なる爪形文2条が施文され、胴部では縦位区画状に凹線状の沈線1条施文された後、爪形文が横位や斜位に施文されている。本個体のみ胎土の纖維含有量は他と比較して少ない。14は爪形文が縦位に施文されている。

15～17は平行沈線文により、肋骨文、轡菱形文が施文されるものである。15・16は肋骨文が施文されるものと思われ、15は縦位1条の平行沈線文施文後に斜位の平行沈線文が施文されている。16は斜位の平行沈線文のみ観察される。17は平行沈線文により轡菱形文状モチーフが描かれているが、縦位区画文のみ単沈線で施文されている。

18～23は胎土、繩文原体から同一個体と思われる。18は本個体唯一の口縁部破片であり、口唇部は内屈する。文様は口縁部直下のみ爪形文1条が施文され、他の横帶区画文は平行沈線文1条により区画されている。地文には節の粗い単節繩文R LとL Rが羽状に施文されるが崩れている。口唇部形態、繩文施文法、繩文原体等は非常に諸磯a式に近似する要素を有し、胎土への纖維の含有量も非常に少ない。

第2類（第70図24～33・48～54）

地文に繩文が施文される一群を一括するが、モチーフが施文されるものは僅かであり、胴部の繩文のみが施文されるものも併せて報告した。

24は胴部破片であり、地文には単節繩文R LとL Rにより羽状繩文が施文されているが、焼成後に器表面側から孔が穿たれ、この下にも盲孔が施されており、一見単位文的である。

25～33は胴部破片であり、繩文のみが施文されている。25・26は付加条繩文R L + RとL R + Lにより羽状に施文され、いずれもR L側は先端部も一部施文されている。また、25は菱形羽状に施文される。27は無節繩文R ℓとL ℓにより羽状に施文されている。28は付加条繩文R L + Rの縦方向施文と軸繩の現れない+しが横方向に施文されている。29・31は単節繩文が施文されるもので、29は単節繩文R ℓが、31は単節繩文L ℓが施文されている。32は付加条繩文2種R ℓ + Lの自綱結節部も施文されており、小破片で判然としないが、縦位及び横位に施文されているものと思われる。33は付加条繩文L R + Rが施文されて

いる。30は摩滅が著しいが、いわゆる網目状撚糸文が施文されると思われ、唯一1片のみの出土である。48~54は底部破片である。48は推定底径11.8cmを測り、地文には単節縄文RLしが施文されている。49は推定底径15.0cmを測り、地文には無節縄文RLしが施文されている。50は推定底径7.8cmを測り、地文は摩滅が著しく判然としない。51は推定底径9.0cmを測り、地文には単節縄文RLしが施文されている。52は推定底径10.4cmを測り、地文には無節縄文RLしが多方向に施文されている。53・54は復元不可能であったが、地文には53は単節縄文RLとLRが羽状に、54は単節縄文RLしが施文されている。

(田中和之)

5 第5群 諸磯a式土器

第1類 (第71図1~21・53)

木ノ葉文による入り組み文を基調とする深鉢。

1・53は、外反して立ち上がり、口縁下に一条の竹管刺突列を施し、53は角頭を呈する。無文帯を挟み胴上半には竹管刺突による木ノ葉状、幾何学状に縄文帯を区画する。地文はRLの縄文を施す。橙褐色を呈し、胎土に多量の金雲母を含む。2・14は同一個体で、内傾して立ちあがり、焼成良好である。4は大振りな竹管文が施される。3・5~21は同一個体で刺突文を木ノ葉状、幾何学状に区画し、区画内にはLRの縄文を施し周囲は磨消す。二個一対の円形刺突を区画間に配する。黒褐色を呈し、焼成は弱く砂質である。

第2類 (第71図22~37)

口縁下に連続刺突列を施す深鉢。

22は割みを有する口縁部で口縁下に斜行する沈線が施される。23は内湾する口縁部で上端に粗く連続刺突文が施される。24は口縁下に角頭状の刺突文が巡らされる。25は外反する口縁で、三段に角頭刺突文が巡らされる。26は内傾して立ち上がる口縁で口縁端が外反する。細かな刺突列が施された下に梢円形に区画された刺突文が配される。黒褐色を呈し、器壁は薄手で焼成は良好である。27は口縁下に無文帯を残し平行沈線文を巡らした後に、縄文を施す。28は集合沈線文が施された後、爪形文が施される。29~31は器面に指頭痕による凹凸を残し、まばらな竹管列を施す。31は胴部で二条の沈線が巡らされる。32は内湾する口縁で円形刺突を縱位に施す。33~36は胴中位に連続刺突列を施し、地文に縄文を施す。37はくの字状に屈曲するソロバン型の鉢の胴部破片で屈曲部に竹管刺突列を巡らす。

第3類 (第71図38~45)

平行沈線が格子状、矢羽状に施される深鉢。

38・39は、口縁下に数条の平行沈線を巡らし、以下斜行沈線を施す。40~42はやや外反して開く、口縁下に平行沈線を巡らし、縱位に平行沈線文を垂下させる。胴部上半に格子状に平行沈線文を施す。区画線の交点に縱位に円形竹管文が垂下する。黒褐色を呈し、焼成は良好。43は平行沈線で縱位区画し、区画間は横位の集合沈線が施される。44は平行沈線文による縱位区画間に矢羽状に平行沈線文が施され、区画線には円形刺突文が縱位に施される。胴部下半は二条の平行沈線で区画され、以下RLの縄文が施される。器壁は厚く、黒褐色を呈す。45は波状口縁の波頂部で頂部から円形刺突文が垂下する。波状口縁に平行する矢羽状沈線文が施される。

第4類 (第71図46・52)

肋骨文を主文様とする深鉢。

52は、縦位の円形竹管刺突列が垂下し、刺突列をつなぐように平行沈線による弧線を巡らせる。黄褐色を呈し、焼成は良好である。細かく破碎され同一個体は多いが、接合はほとんどしない。46は竹管刺突列が巡らされ、細い弧線文が配される。

第5類 (第71図48~51)

格子状区画を施す深鉢。

48・49は平行沈線による磨り消し帯による菱形区画を主文様とするもので、地文はLRの縄文である。焼成は良好で、しまり良好である。50・51も同様な平行沈線文により菱形区画をする。

6 第6群 諸磯b式土器

第1類 (第72図1~6・10・13・14)

連続竹管文により曲線的な主文様が構成される深鉢。

13はラッパ状に口縁が大きく開き、口縁下及び胴部中位に二条の連続刺突列を施し、その間に幾何的な竹管刺突文が施される。赤褐色を呈し赤色スコリヤを胎土に含む。14は胴が樽状にやや張り口縁が開く。竹管文により渦巻状や幾何学的に文様が施され、所々に円形刺突文が施される。地文は縄文である。黒褐色を呈し、しまりの良い部分と悪い部分がある。10は胴部中位に連続竹管文が巡る。

第2類 (第72図11)

波状口縁を呈し、沈線により格子状に施す深鉢。

11は波状口縁が外反して開き、胴部中位がくびれる。口縁下に竹管刺突列による区画文を施し、胴上半には半截竹管による平行沈線文が施され、胴下半は縄文が施される。

第3類 (第72図9・12)

幅広な連続爪形文が器面に施される深鉢。

12は波状口縁を呈し、口縁下から幅広な竹管による連続刺突列が数段横走する。口唇上にも竹管文が施される。赤褐色を呈し、胎土中に赤色スコリヤを含む。9は幅広な竹管刺突が施される。焼成が良く、しまり良好である。

第4類 (第72図7・8)

斜行する集合沈線文が交互に施される深鉢。

7・8は斜行する沈線が交互に粗く施される。口唇には浅く、不規則な刻みが施される。

第5類 (第73図34~37)

細かい浮線文により弧線文が施される深鉢。

34~37は同一個体で渦巻き状に二単位の刻みを有する浮線文が施されるもので、胴部上半でくの字状に屈曲する。灰褐色を呈し、薄手でしまりがよい。細かく破碎しており接合は困難であった。

第6類（第73図15～20・38）

浮線文を有するキャリバー形深鉢。

38は波状口縁となり頂部には、いわゆる獸面把手が配される。胴部には平行する刻みを有する浮線文が数段施される。地文は縄文で、黒褐色を呈し、焼成は良くない。15～20の口唇部には刻みが施される。19の浮線文上には縄文が施される。

第7類（第73図39～53）

縄文施文の深鉢。

前期後半の縄文施文の土器である。39は全形が推定されるもので、やや外反する口縁で全面にRLの縄文が施される。黒褐色を呈し、焼成は良く薄手てしまっている。40は波状口縁を呈し、頂部に貼付文が剥落した後がある。41～50は口縁部破片で43に補修孔が観察される。51～53は底部破片である。

7 第7群 諸磯C式土器

第1類（第74図1・4）

口縁部に棒状貼付文を配する深鉢。

1は外傾して開く口縁を呈し、口縁下に横位の集合沈線を施し、その上に棒状貼付文を垂下させる。器面は良く磨かれており、沈線が一部磨り消される。内面上半には短い隆帯が施され、円形貼付文を外面の貼付文に対応させて交互に配する。内面は良く磨かれ、焼成は良好で、胎土中に輝石を含む。橙褐色を呈するが内外面とも煤けて黒色化する。4は胴部中位で屈曲し、口縁部は欠損する。胴上半には棒状貼付文が配され、胴中位に耳たぶ状突起が配される。地文は横走する沈線が口縁下に、胴部下半は屈曲する沈線が縦位に施され、円形貼付文が施される。焼成は軟質で、黒褐色を呈する。

第2類（第74図2・3・7・8）

耳たぶ状貼付文を口縁部に配する深鉢。

2は緩やかに外反して立ち上がり、口縁部はくの字状に内屈する。口縁部に一対の耳たぶ状貼付文が四単位配され、矢羽状沈線を地文とし、竹管刺突を有す貼付文と二段の円形貼付文が交互に配される。胴部上半は平行沈線が施され、以下格子状に沈線が施される。丁寧な作りの土器で焼成良好、輝石を少量含む。3は胴中位で一段張るS字状を呈し、口縁部が内湾して立ち上がる。口縁部には耳たぶ状貼付文が円形貼付文と交互に配され、胴部中位の膨らみに耳たぶ状貼付文が一段配される。地文の沈線は粗く、口縁下は斜行、中位は横走、以下縦位に施される。胎土には砂礫粒を多量含み、輝石を少量含み、焼成は悪い。7・8は口縁部破片で、内面に貼付文を有するか外面は摩滅が著しく不明である。

第3類（第74図5・6・9～12）

集合沈線が施される深鉢。

5は胴下半が張り、屈曲部に平行沈線二条が巡らされる。胴部上半と下半には弧線文が施される。茶褐色を呈し、焼成は悪い。6は胴下半がすぼまるもので胴部には集合沈線が鋸歯状に施され、胴部下半の屈曲部には平行沈線が巡らされ以下無文となる。橙褐色を呈し、焼成は良好で、胎土に小礫を含む。9は波状口縁の頂部破片で三角形状を呈し口縁に沿って集合沈線が施される。10は胴部下半の同一個体で鋸歯状に沈線が施される。11は細い集合沈線が施されるもので縦横に施される。12は屈曲する胴部中位に四条の

沈線が巡らされ、以下左右対称の集合沈線文が施される。灰褐色を呈し、焼成は良好である。

第4類（第75図13）

波状口縁を呈し集合沈線により主文様が構成される深鉢。

1は大きな波状を呈する口縁部で、波頂部にはネコ耳状の突起が配される。また三角状に集合沈線区画が配され、一对の円形貼付文が配される。口縁下には平行沈線文が巡らされ、胴部には眼鏡状に弧線が配される。胴部下半部は数条の沈線により区画し底部にかけて、斜行沈線が格子状に配される。粘土紐の接合部に斜行する刻み目を施し、成形時に粘土が馴染むように工夫をする。焼成は良好なしまった胎土で、長石や白色粒を含み、やや赤みを有する黄褐色を呈する。

8 第8群 十三菩提式土器

第1類（第76図1～4・8）

結節浮線文により文様が施される深鉢。

8は口縁部を欠損し、胴上半に弧状の結節浮線文を配し、胴中位の二条巡る結節浮線文で区画する。以下縦位の結節浮線文を垂下させ、随所に二個単位の円形貼付文が配される。1は内外面に結節浮線文が施され、口唇には竹管刺突文が施される。胎土に金雲母が多量含まれる。2は斜行する結節浮線文が密に施される。3・4は結節浮線文が密に施される。

第2類（第76図5～7）

縄文地文に一条の結節浮線文が施される深鉢。

5・6はRしの縄文地文に横位、7は縦位に結節浮線文が施される。

9 第9群 五領ガ台式併行期の土器

第1類（第76図9～13）

口縁下に三角形の透かし彫りが施される深鉢。

9・10はやや内傾して立ち上がり口縁下に縄文が施される。11から13はほぼ直立して立ち上がる。

第2類（第76図14・15・25）

口縁下に交互刺突による透かし彫りを施す深鉢。

14は口縁が小突起状になりわざかな無文帯の下に交互刺突による文様帶を巡らし、胴部には横走する沈線文が配される。15は口縁下に縄文帯を有し、交互刺突による文様帶を巡らす。25は胴部破片で二段の交互刺突文が施される。

第3類（第76図16～20・31）

細沈線による半円形の透かし彫りを施す深鉢。

16・17はやや外反して立ち上がり口縁下に二段施す。18は一段巡らし以下無文とされる。19・20は胴部破片で鋸歯状の沈線区画内に施す。31は縦位に結節縄文が施される。

第4類 (第76図29・30・32~36)

連続刺突による結節沈線を有する深鉢。

29・30は連続角押し文が施され、金雲母を含む。32~36は同一個体で、胴部に平行沈線を挟むように二条の結節沈線文が垂下する。32は口縁部で外反する口唇下に結節沈線文が横走する。地文はL Rの網文である。35は底部破片で底部際に3条の沈線が巡る。地文はL Rの網文が施される。胎土に石英粒を多量含み、橙褐色を呈する。

第5類 (第76図21~23・37)

格子目の集合沈線により文様を構成する深鉢。

37は直線的に立ち上がる胴部から脣上半が大きく外反し立ち上がる。横走する集合沈線により三段に区画された文様帯を格子目の沈線文で充填する。胴部下半は鋸歯状となる沈線を地文に平行沈線文がくの字に垂下する。茶褐色を呈し、焼成は良好である。21~23は胴部上半の破片で区画する沈線の下に鋸歯状に沈線が施される。22は金雲母を多量含む。

第6類 (第76図28・38~44)

平行沈線文が施文された深鉢。

28は平行沈線文が斜行に格子状に施される。金雲母を多量含む。38~40は同一個体の胴下半の破片で、38は不規則に弧線状に配され、39・40は屈折して垂下する。石英を多量含み、焼成は良好ではない。42は斜行する平行沈線が施され、雲母を多量含む。43は縦位の平行沈線文区画間に矢羽状沈線を施す底部よりの破片である。41は胴部破片で横位に浅いハの字状の刺突が施される。44は底部破片で、底面がやや張る。雲母片を多量含む。

第7類 (第76図26)

口縁部に櫛齒状工具により連続刺突を行う深鉢。

26は肥厚する口縁部に櫛齒状工具による刺突が連続して施される。焼成は良好である。

第8類 (第76図27)

隆帶区画が施される深鉢。

27は刻みを有する隆帶が方形区画をする。金雲母を多量含む。

第9類 (第76図45)

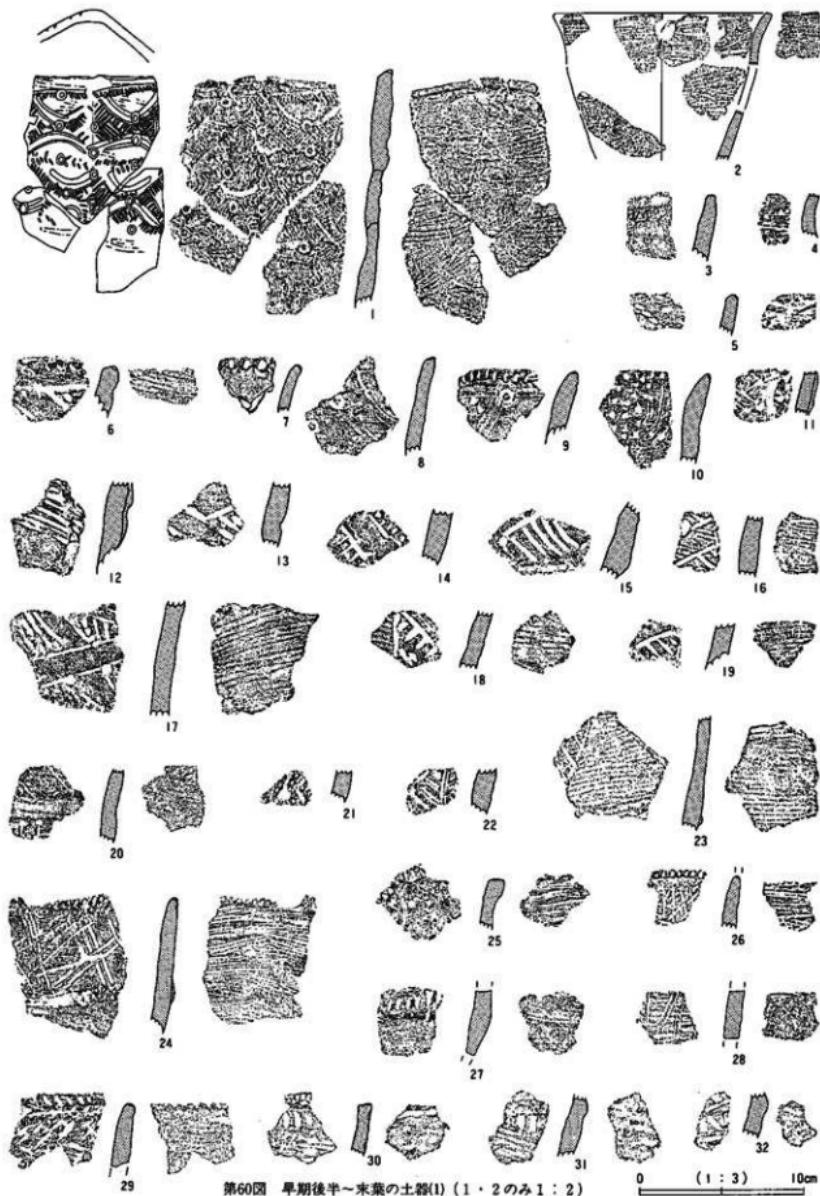
浅鉢。

45は複合口縁を有するもので、内面が有段となり外反して立ち上がる。雲母片を多量含む。

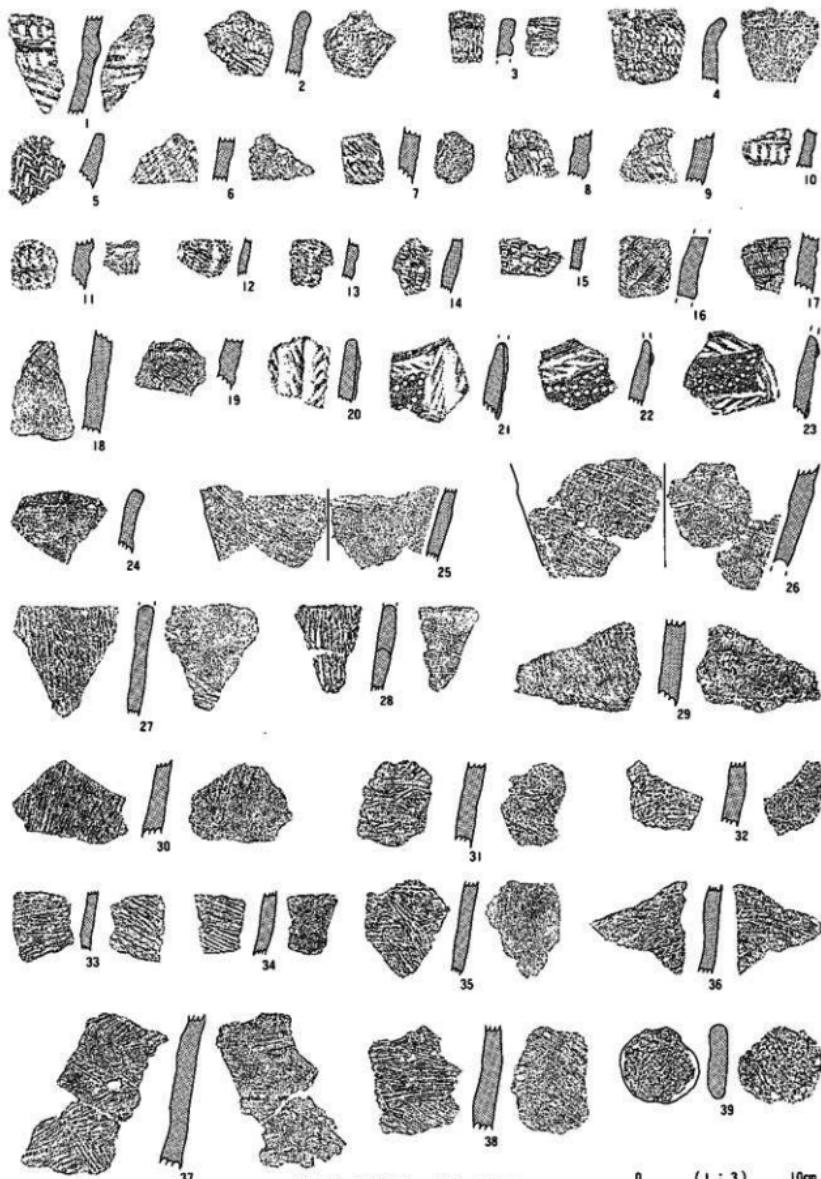
10 第10群 中期中葉の土器 (第76図46)

中期前半の深鉢が1個体出土した。小破片からの復元実測で、緩やかに外反して立ち上がる口縁に大きな渦巻き状の立体的な突起を有し、平縁を呈する。口縁はくの字状に内屈しており、沈線が二段巡らされる。胴部には隆帶が曲線的に配され、隆帶による区画内は沈線により渦巻き文が施される。焼成は良好で橙褐色を呈する。いわゆる焼町式土器に比定される。

(村松 篤)

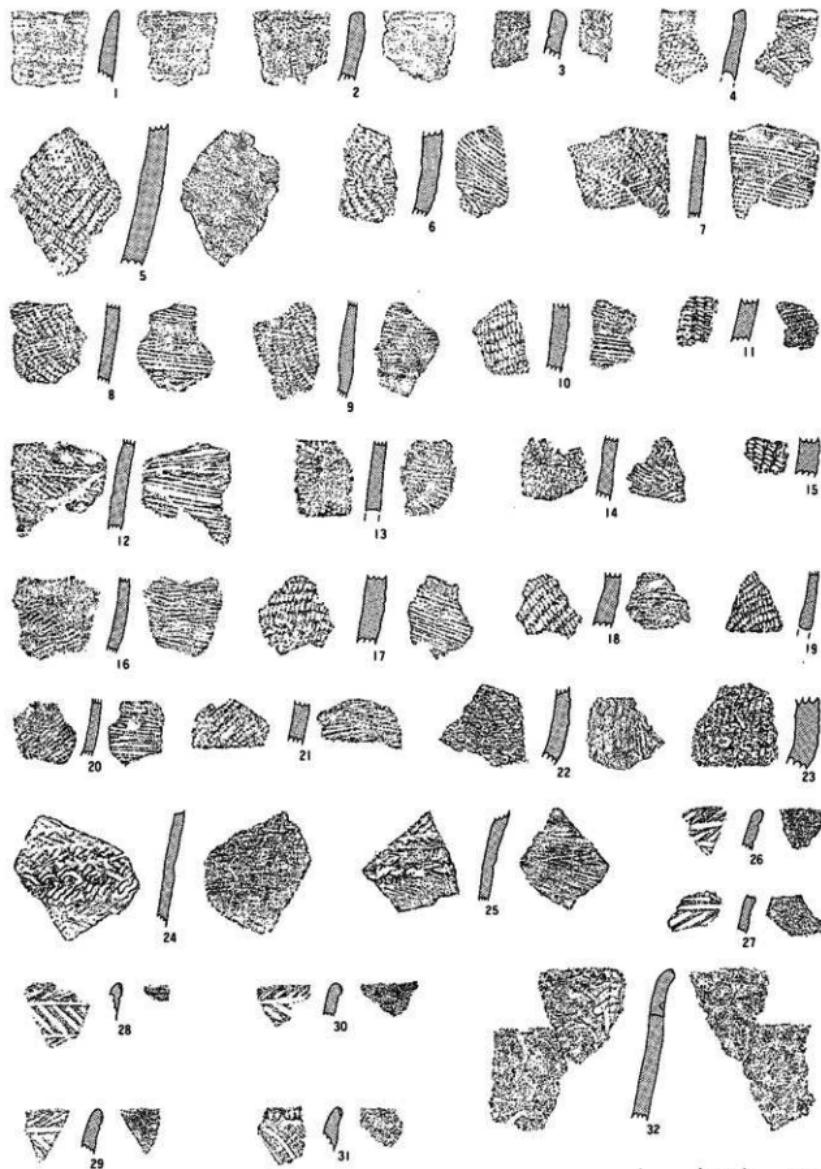


第60図 早期後半～末葉の土器(I) (1・2のみ1:2)



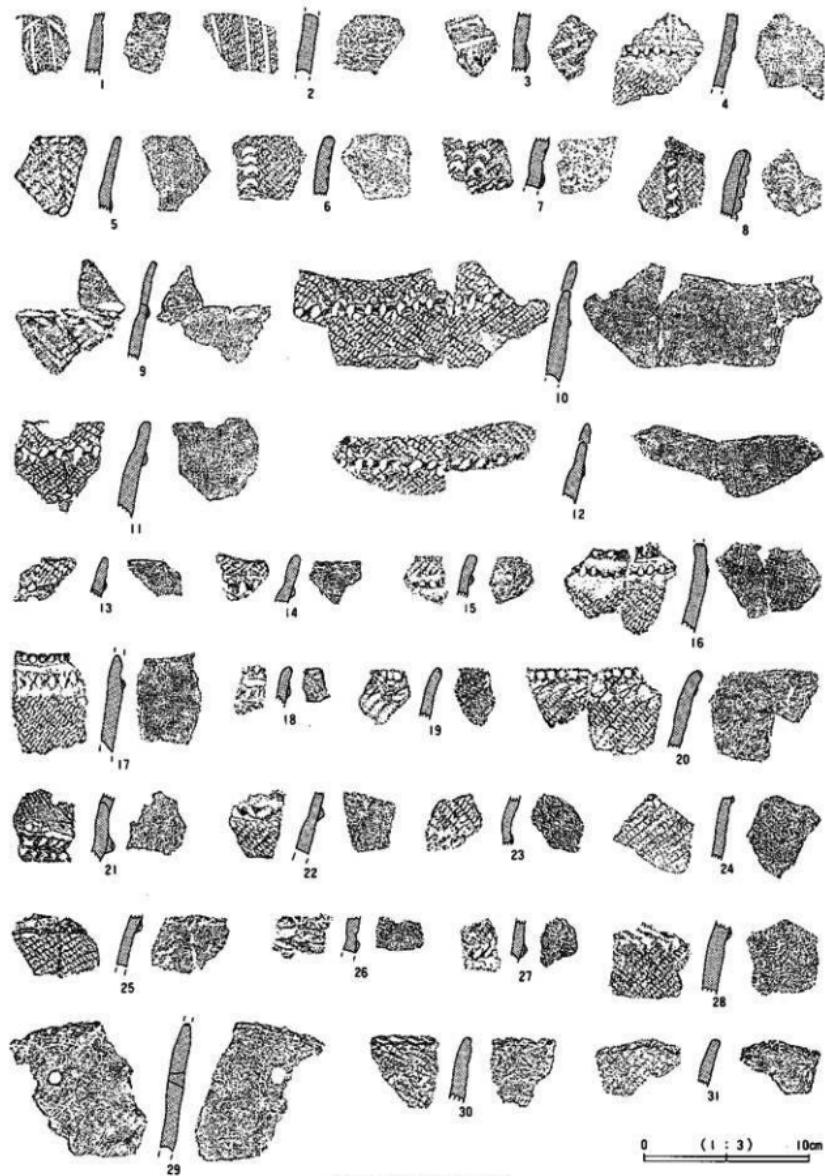
第61図 早期後半～末葉の土器(2)

0 (1 : 3) 10cm

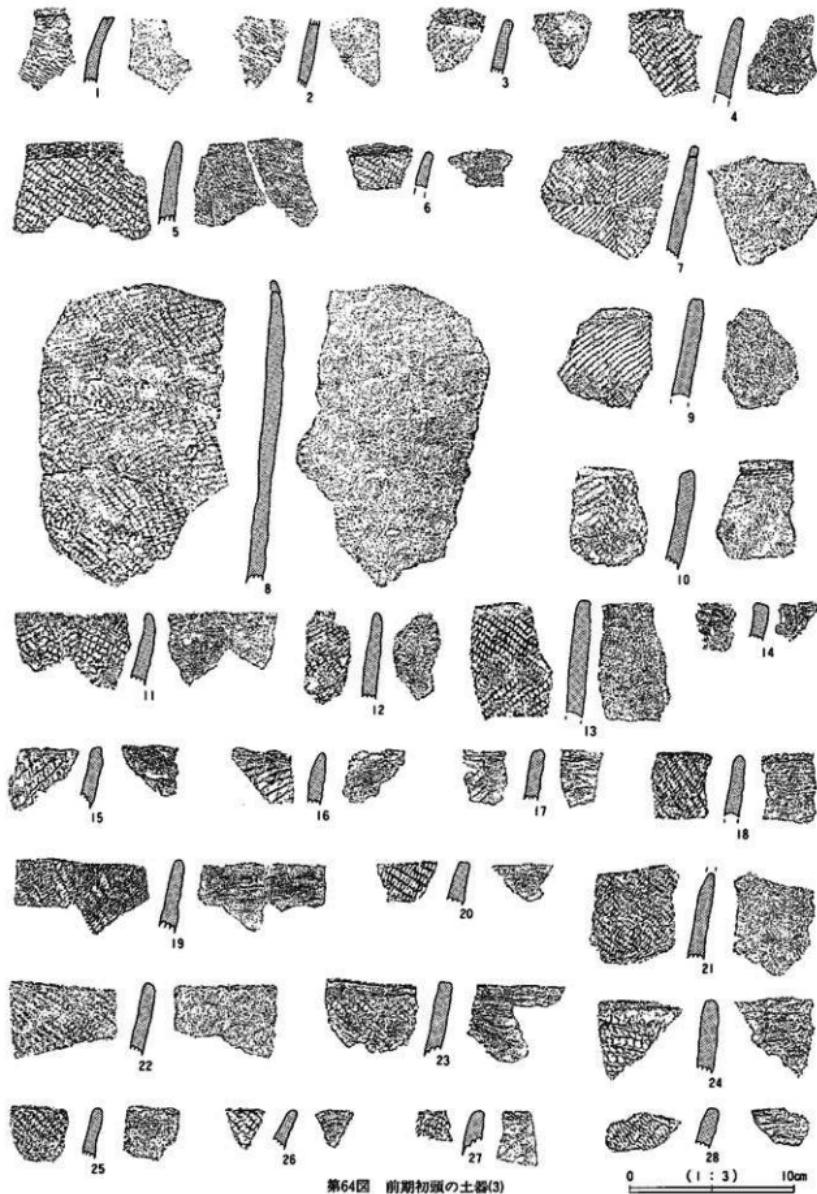


第62図 早期後半～末葉の土器(3)、前期初頭の土器(1)

0 (1 : 3) 10cm

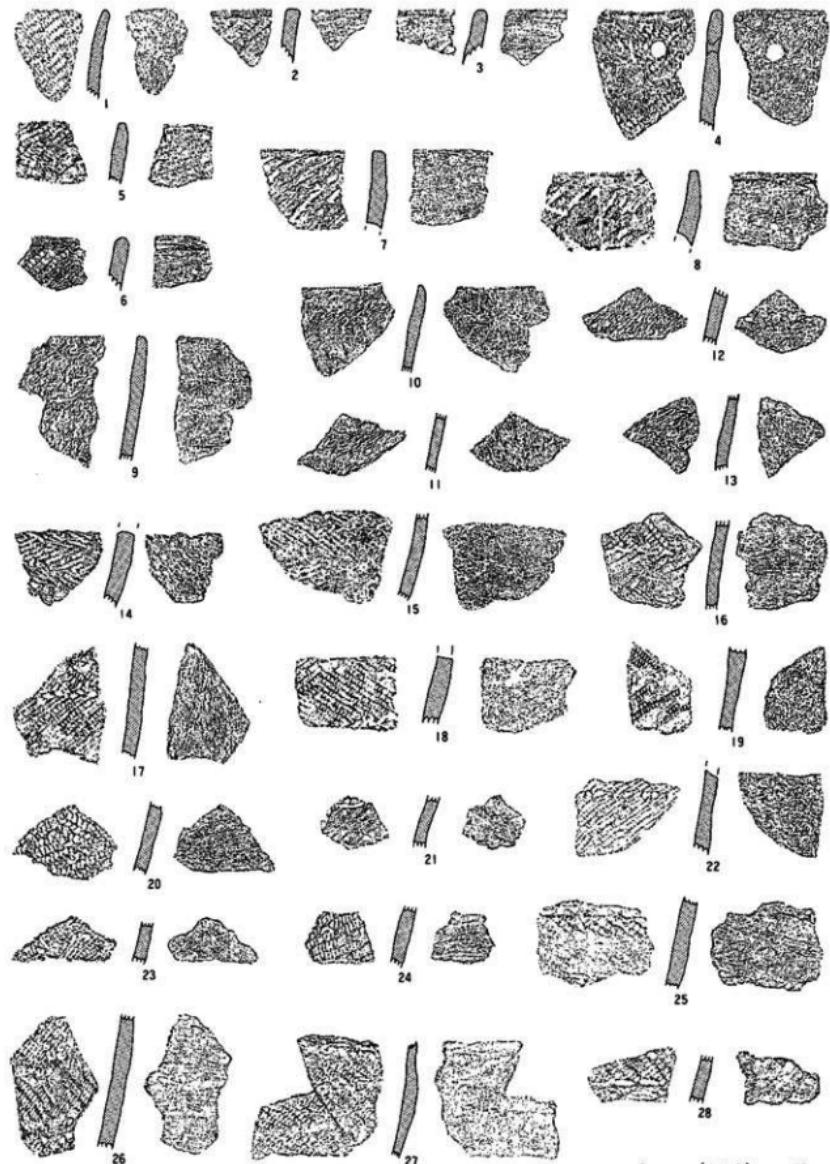


第63図 前期初頭の土器(2)



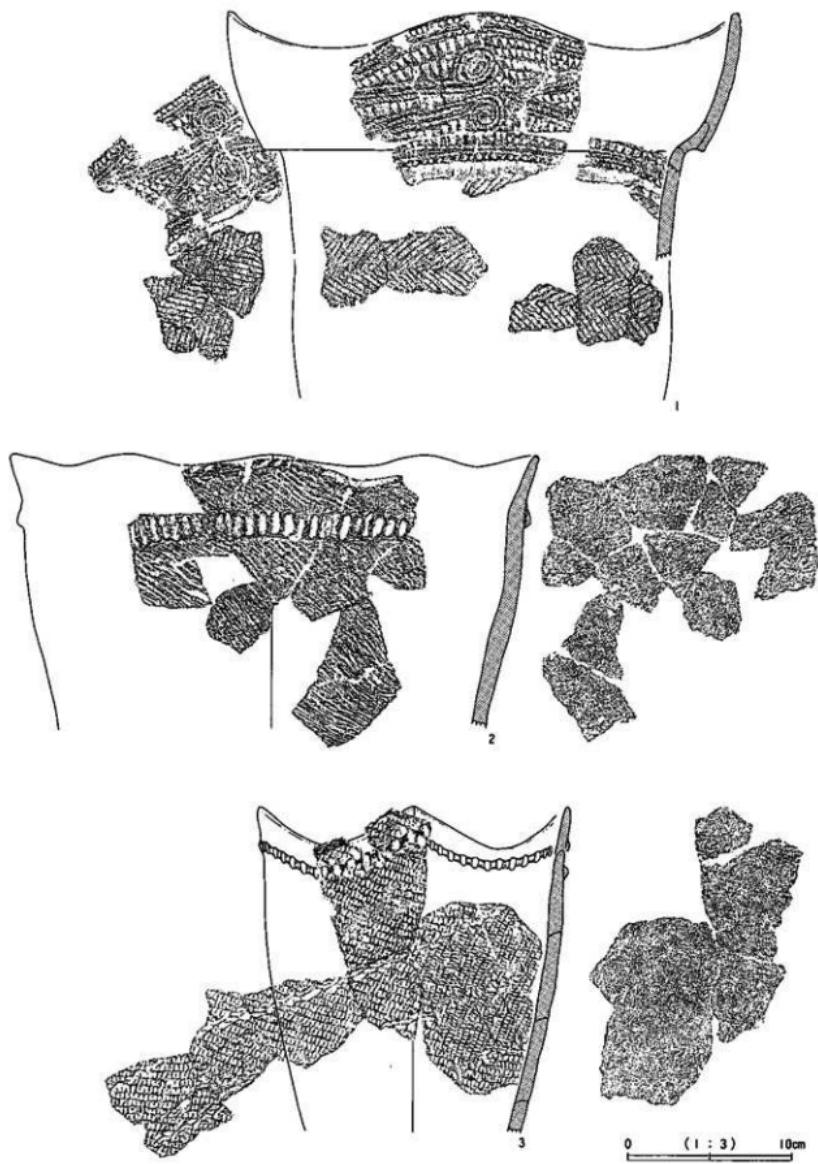
第64図 前期初頭の土器(3)

0 (1 : 3) 10cm

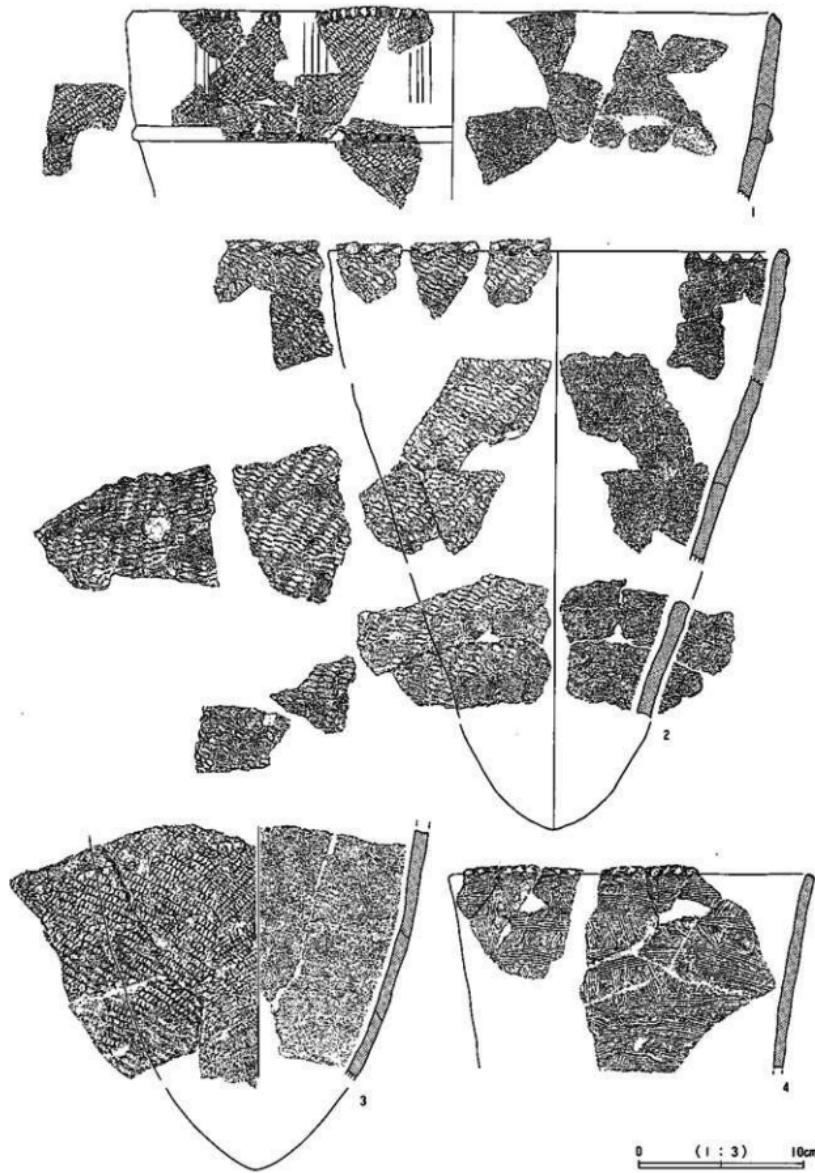


第65図 前期初頭の土器(4)

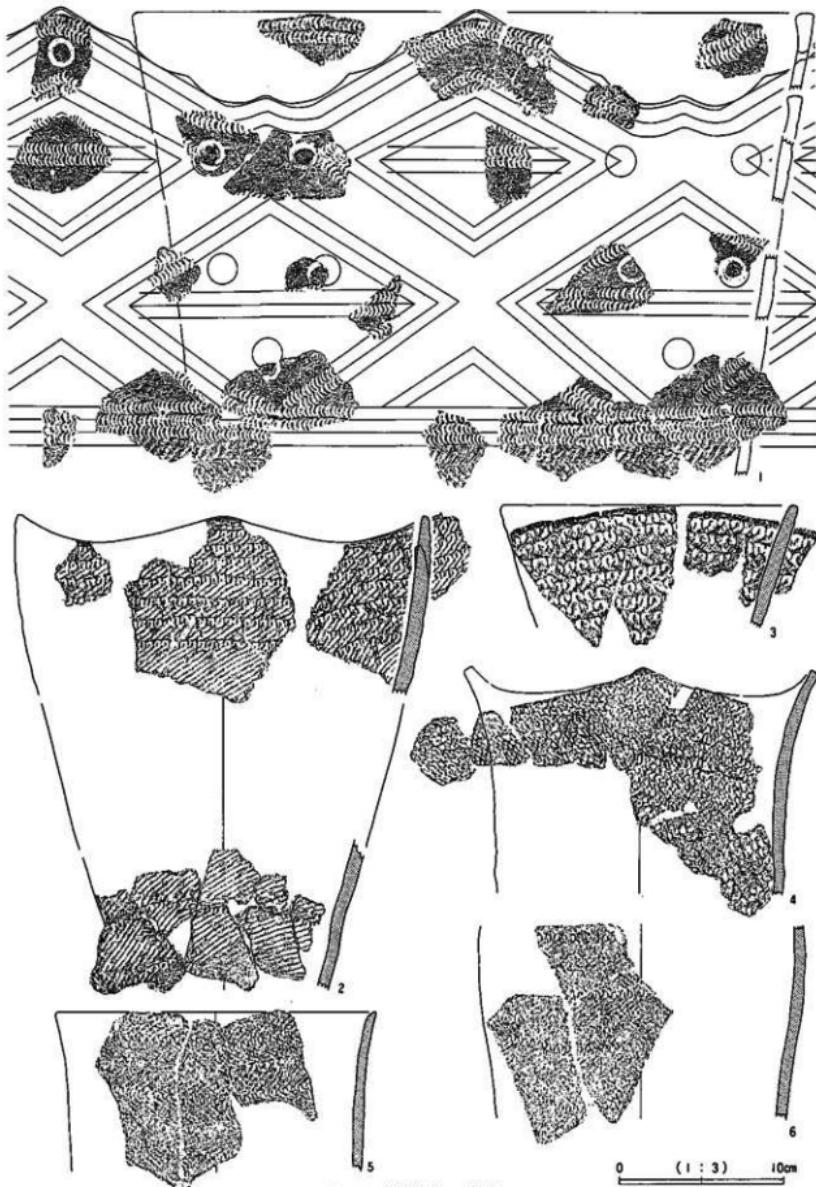
0 (1 : 3) 10cm



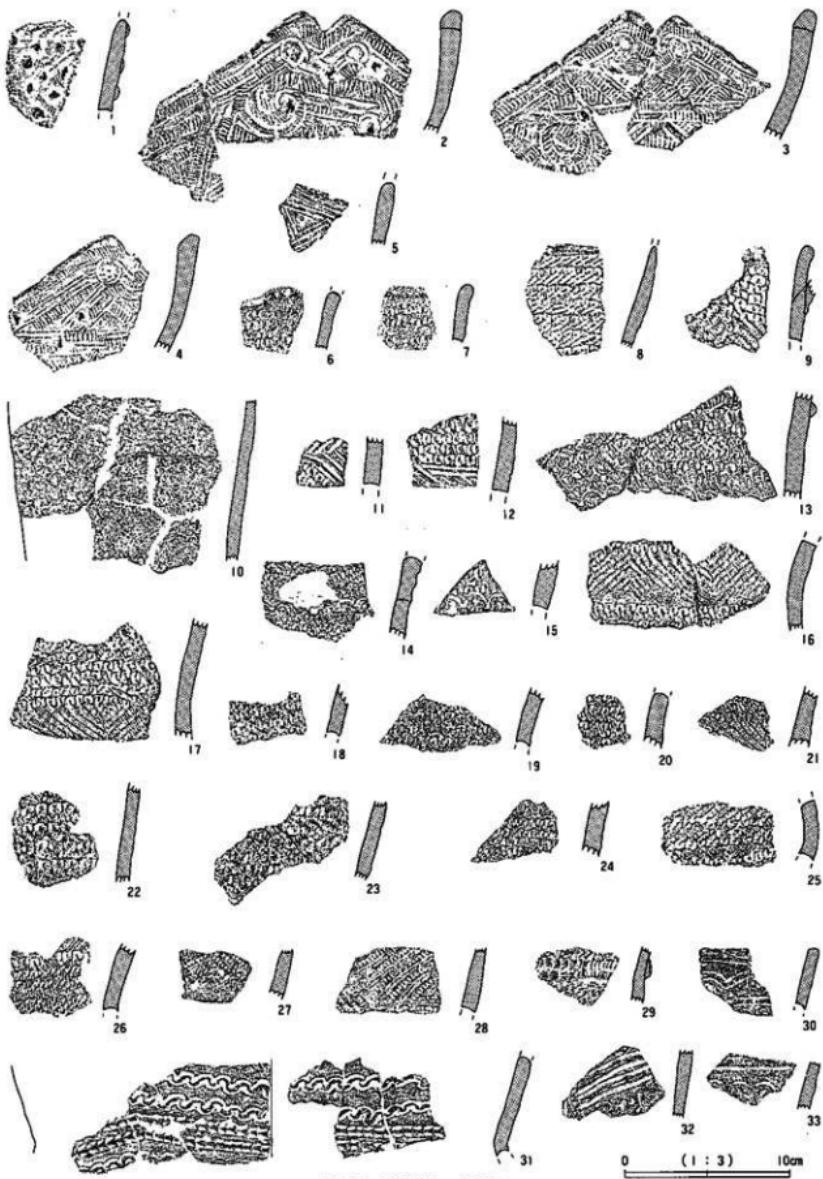
第66図 前期初頭の土器(5)



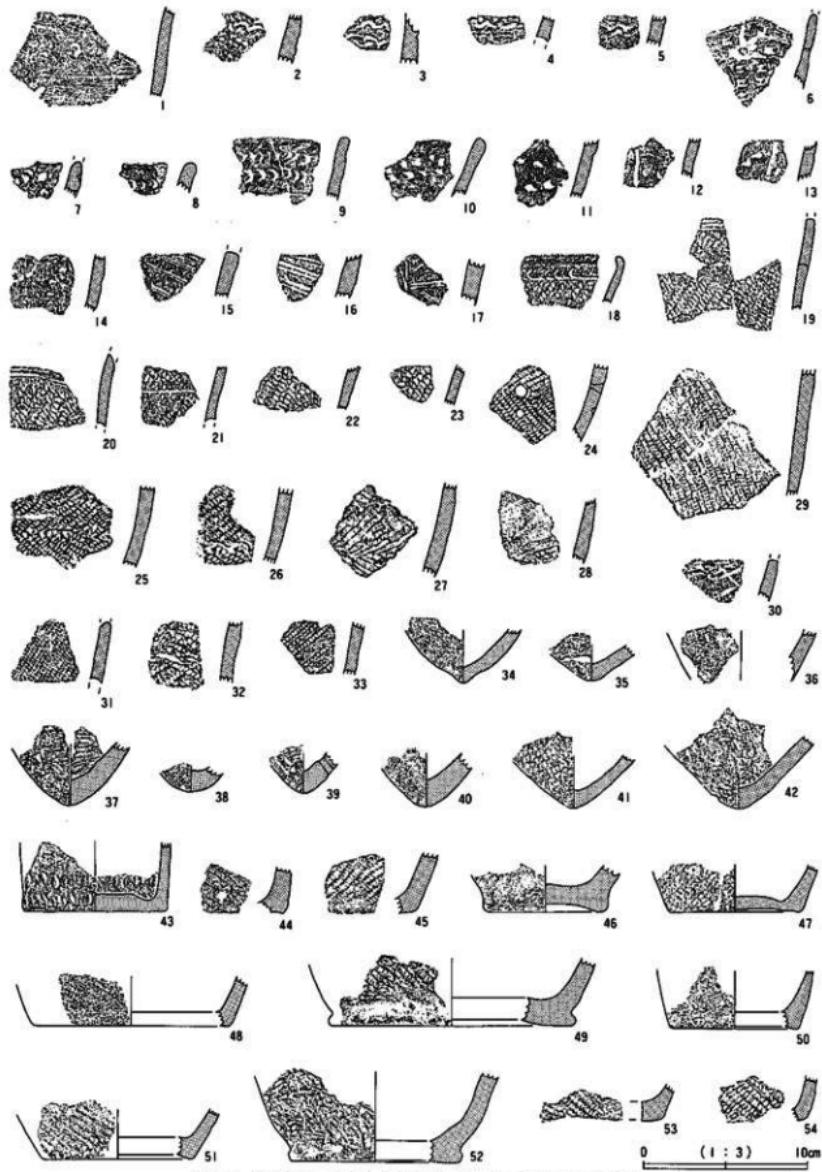
第67図 前期初頭の土器(6)



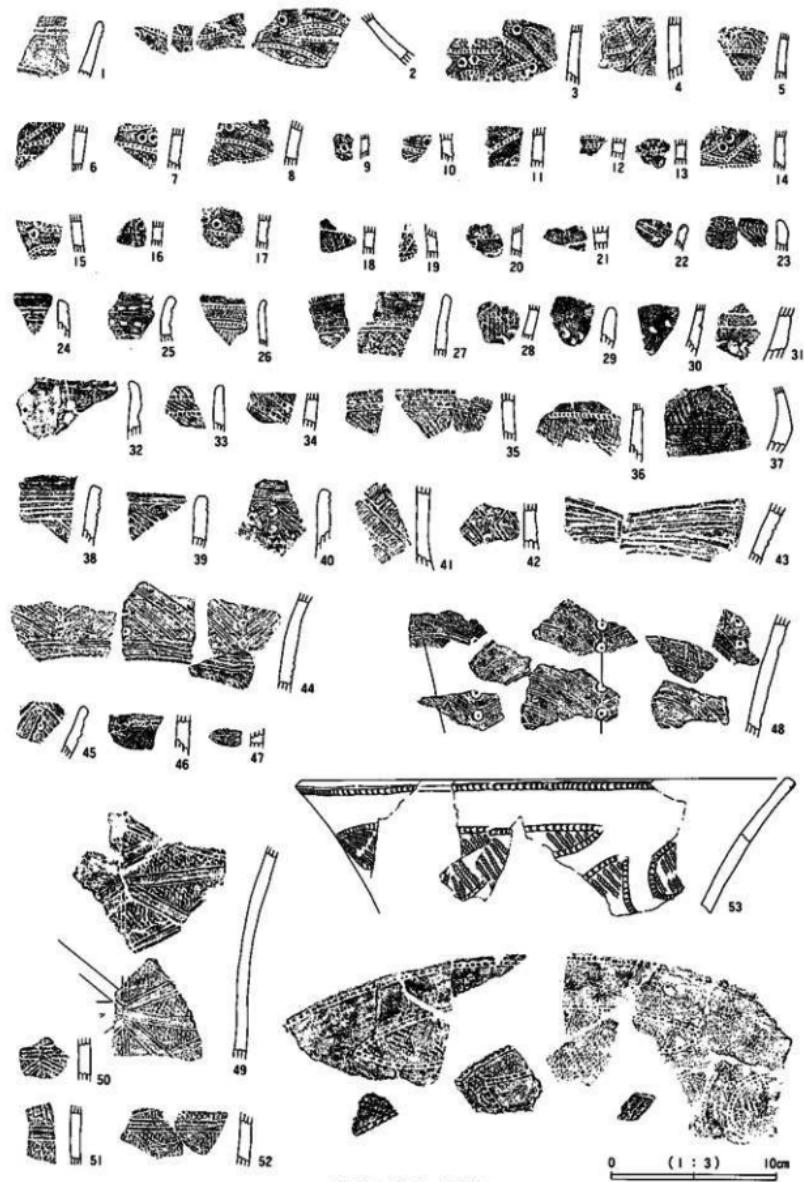
第68図 前期前半の土器(1)



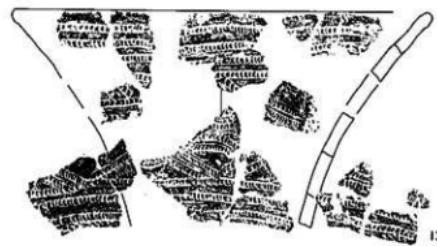
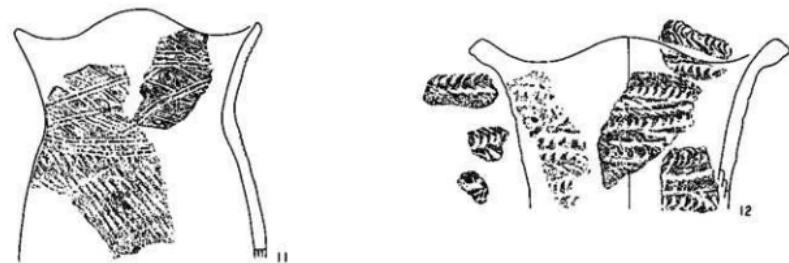
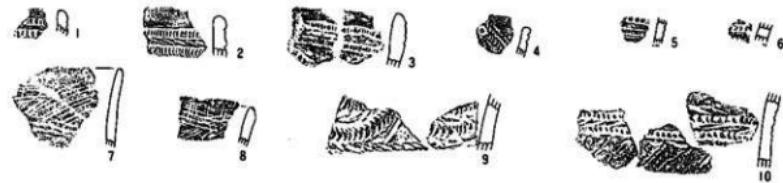
第69図 前期前半の土器(2)



第70図 前期前半の土器(3)、早期後半の土器(4)、前期初頭の土器(7)



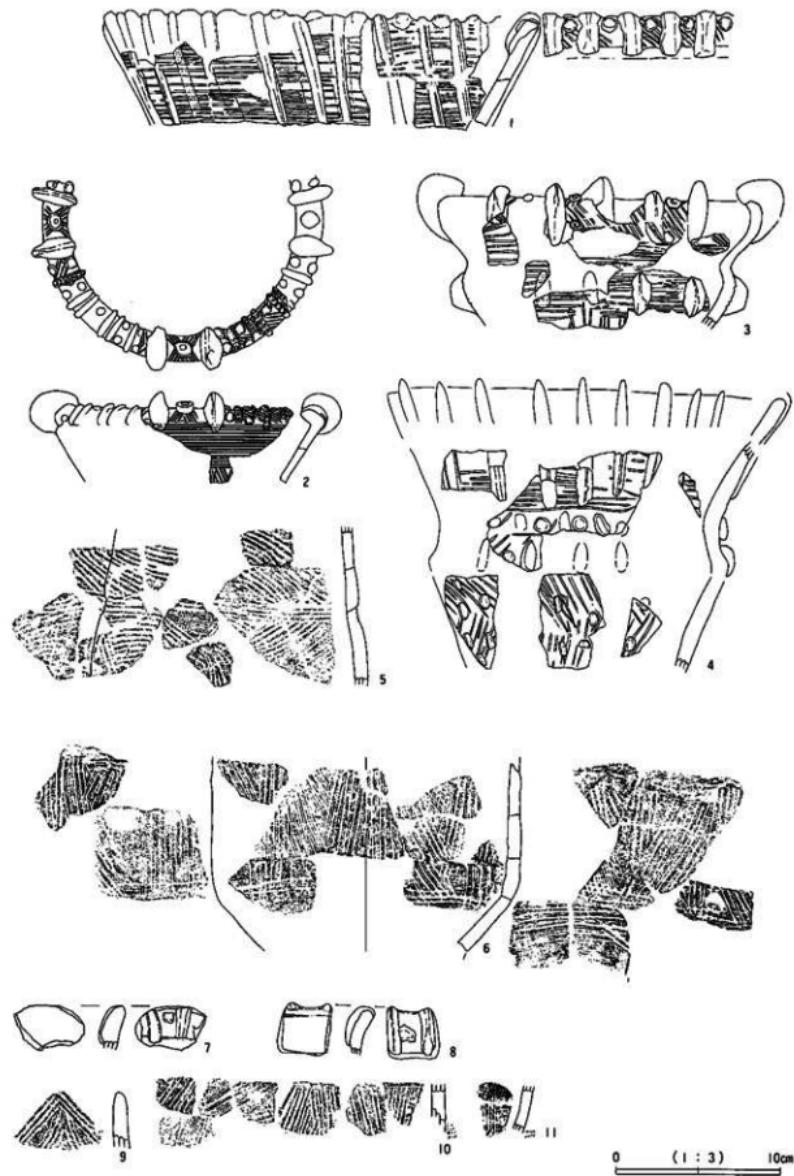
第71図 跡礎a式土器



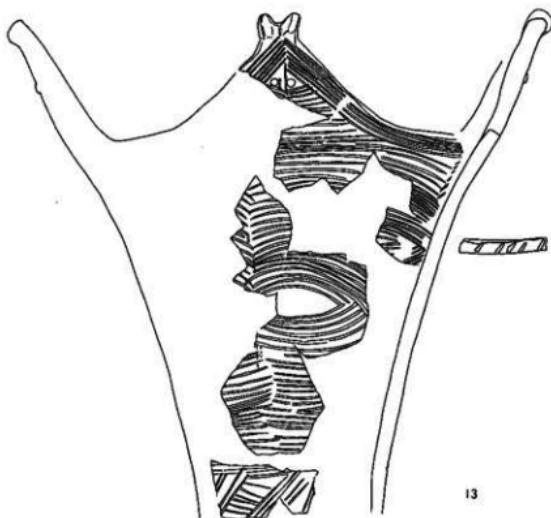
第72図 諸磚b式土器(1)



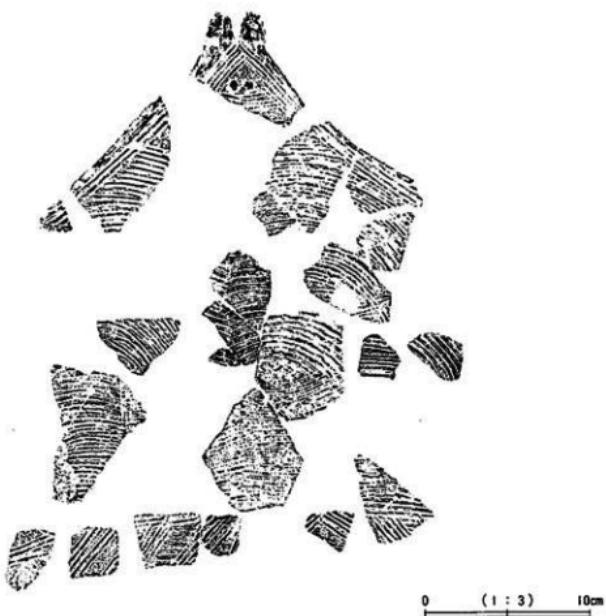
第73図 諸磚 b式土器(2)



第74図 路磯C式土器(1)



13



0 (1 : 3) 10cm

第75図 諸磯c式土器(2)



第76図 前期末葉～中期前半の土器

11 土器群の様相（第77・78図 編年表参照）

湯倉洞窟の早期後半から中期前半の出土資料は平箱にして約50箱弱程出土している。破片数が少ない時期や空白期はあるものの、本時期にも生活の足跡を垣間見ることができる。

早期後半では子母口式～野島式期の遺物は検出されていないが、次段階の鶴ヶ島式期には出土量は少ないながらもまとまった出土状況を示している。1はその中でも良好な資料であり、方形状を呈する器形だけでなく、文様も刻みを有する稜状の横帯により2帯構成を探り、対弧状の平行沈線により描出された菱形状部位には沈線が充填され、文様交差部等には円形竹管文が施されるものである。他の破片も同様の構成を探るものであり、鶴ヶ島式期でも新しい段階に比定されよう。これ以外は小破片であり個体数の確定はできないが、数個体分の出土はあるものと思われる。

次段階の資料では茅山下層式期の資料3が僅かながら出土しているが、該期は破片数も少なく有文土器では2個体程と非常に数少ない。本段階に位置付けられる土器では、いわゆる「佐波・極楽寺」タイプの北陸系土器4が僅かに検出されるのみであるが、絆条体圧痕文土器の一部も本段階となる可能性も残る。^{註1}

この後早期末葉～前期初頭の段階には、当該期の中でも出土量は飛躍的に増加する傾向が把握出来る。後述する絆条体圧痕文系土器に問題となる土器が出土しており、本来であれば2時期に区分しての報告が妥当であろうが本文中では一括しての報告とした。明らかに早期末葉に位置付けられるであろう土器群(絆文系絆条体圧痕文土器・繩文条痕文系土器・その他)を除くと前期初頭に位置付けられる土器群が多いことは、個体復元可能な土器が概ね前期初頭に位置付けられるであろう口縁部直下に隆帯を巡らす土器群が主体を占めることからも問題ないものと考える。また、前期初頭に位置付けられる段階では、明確に在地系土器と他地域の(搬入系)土器の区別が可能となり、在地系土器では前期初頭に位置付けられているいわゆる「塚田式土器」に比定されると思われる系統の土器の出土が特に顕著である。

塚田式土器は長野県御代田町塚田遺跡出土土器を標式^{註2}とするものであることは言うまでもないが、本遺跡出土資料は塚田遺跡出土資料とは若干様相を異にする。塚田遺跡で見られた「T」字状隆帯が貼付されるものは僅か(第63図8のみ)であり、また隆帯により区画された幅狭な口縁部文様帶内への下吉井式系モチーフが描出されるものに至っては皆無であり、塚田式の有文土器では口縁に沿って隆帯を巡らす土器群では隆帯上には縄文ではなく刻みが施される土器が主体を占め、地文の繩文も塚田遺跡と比較するとバラエティーに富んだ内容を有している。

また、一般的には早期末葉に位置付けられるであろう絆条体圧痕文系土器の中にも5・12など注目すべき資料が出土している。中でも5は口唇部には刻みを施し、口縁部文様帶下端区画は絆条体を施した隆帯及びその上下の絆条体により区画され、文様帶内には2条一対となる絆条体が縦位に単位状施文され、地文には整った羽状縄文が施されている。10・11も施文法・原体等は異なるものの縄文原体の先端部の折り曲げた部位を同様に2条一対で縦位に施文するものであり、施文技法・描出法等は同一段階の資料として差し支えないものであろう。また、12は多条の条線により崩れてはいるものの横帯多段構成を探ると思われるが、口唇部には絆条体が圧痕されており、胎土・整形技法から今回は本段階に位置付けておきたい。これらの土器群の内特に5は現状での編年観に従えば、早期末葉に位置付けなければならない資料であり、5の土器に比較的類似した資料は現時点では新潟県千溝遺跡出土例1点のみであろう。本土器との類似点・相違点を観察すると何れも絆条体圧痕文が施される土器群中では僅かな地文に縄文が施される例であり、本土器は異原体による羽状構成が採られるのに対し、千溝例は同一原体異方向施文による羽状構成であり千溝例がより早期末葉的ではあるが、原体施文域は該期に見られる施文域の長い構成であり共通する。

口縁部文様帯では湯倉例はⅠ帯構成であるのに対し、千溝例はⅡ帯構成を採るものと思われ異なるが、口縁部文様帯の施文域はほぼ同様の部位に占められている。この口縁部文様帯内の施文法では、千溝例は区画文だけでなく充填文も絡条体圧痕文により施されるのに対し、湯倉例は横・縦位の区画文は絡条体により施されるが、羽状構成施文された地文境界部に横位・縦位とも絡条体が施文されており地文繩文施文時からの意識が看取される点が異なる。また絡条体圧痕文土器群中には隆帯とその両端の圧痕により区画が施される土器だけでなく、この隆帯部分が省略される土器も多く見られ、湯倉例の縦位区画も当該要素とも看取される。この場合梨久保遺跡23号住居例の隆帯施文土器との類似性も視野に入り、絡条体施文と刻みを有する隆帯という差異はあるものの、口縁部文様帯施文域の共通性や羽状構成等共通点も認められるが、梨久保例の絡条体圧痕文土器は出土状態に問題点もあり、本個体の非常に折衷的な特徴から周辺出土例との比較検討だけでは本土器の位置付けをすることはできない状況にある。

本土器に伴う可能性がある土器としては、同様な施文技法を有する10・11の他に9・12等も挙げられ、7の土器についても本文中では力量不足で触れられなかつたが、原体は絡条体圧痕文と一部回転施文された可能性もあり、絡条体圧痕文土器であれば併存する1点となり、条痕文系土器の神ノ木台式の影響下にあると思われる第61図20~23とも併存関係となることが推測される。

これに対し、明らかに塚田式の範疇で理解されるであろう8や第63図10~14等を概観すると口縁部文様帯の施文域は前例とは異なり幅狭化しており、8の地文では繩文原体の幅狭化も看取される。10~14では隆帯施文以前に地文の繩文は隆帯貼付位置を意識したように繩文が施文され、幅狭な口縁部文様帯内に原体を代えると共に、本文中では細かく触れなかつたがこの隆帯の上端側には結節部が施されており、5の隆帶上端の絡条体施文部に近い施文効果とも看取される。

本遺跡絡条体圧痕文土器5を千溝例・梨久保例・本遺跡塚田式例と比較するとそれぞれに共通点と相違点があり、どの段階に位置付けることが適當であるかは現時点では判断できないが、早期末葉の要素も多分に残しつつも異原体横位回転羽状構成や地文施文時の単位文意識等早期末葉に位置付けるよりは前期初頭に近い要素も多く採用されている。また本遺跡塚田式例第63図10~14での繩文施文法と比較すると絡条体施文法との類似性も認められる結節施文部も認められるものの全体的には後出の要素が強く、現状での全体的なセット関係でのバランスを考慮すると、前期的な要素の萌芽が多く認められるものの梨久保遺跡23号住居階として捉え、早期最終末段階に位置付けることが妥当と考える。千溝例とは若干の時間差も看取されるが、ほぼ同一段階として把握しておきたい。以上のようにこれら的一群は近接した時期と思われるが、前述した2段階となる場合に5は、7・9~12と同段階、これ以外の大部分が塚田式段階として理解されるものと思われる。^{#3}

上記の問題点以外にも明らかに搬入品6と思われる花積下層式土器は、胎土に雲母を多量に含んだ焼成も他と比較して良好なものである。本土器の施文法・モチーフ（の多段構成）等からは花積下層式でも新しい段階として捉えることが妥当と思われ、前期初頭で主体を占める塚田式段階とは併存関係は成立せず、早期末~前期初頭段階が3段階存在することとなる。在地系土器群中には信州繩年で次段階とされる中道式土器の特徴である口唇部が肥厚する土器の出土は皆無であり、現状では単体での出土と解釈するか、若しくは口唇部に刻みや繩文が施される一群の一部が本土器に併行する土器群となるものと思われるが、出土位置との検討も含めて今後の課題とさせていただきたい。^{#4}

前期初頭に位置付けた土器群の地文として施文される繩文のバラエティーでは、0段多条の横帯羽状構成を採る土器が多いが、この他に撚糸文9、結束繩文（羽状構成と斜繩文構成）、（異繩）結節繩文、ループ文（正位のものと逆位のもの）、付加条繩文など前期前半の羽状繩文系土器群に見られる様々な繩文がほとんど見られることも特徴的である。また、前述した隆帯区画される土器群には、施文手法からは段階差

とも看取されるような技法（第63図19・20）も認められ、隆帯の施文法も塚田遺跡等の塚田式を実測図から解説すると、地文の縄文施文後に隆帯が施文されるものと隆帯施文後に隆帯上も含めて地文の縄文が施文されるものが存在するのに対し、本遺跡では全て地文の縄文施文後に隆帯が貼付された後、隆帯上には刻み（継位・斜位・鋸歯状）、縄文等が施されるのが特徴であるが、塚田式の中にも口縁部を地文施文時には無文とし隆帯を縄文の直上や先端部付近に貼付するものも多く認められ、より顕著に施文技法の特徴が現れたものと考えられる。これ以外にも塚田遺跡等で見られたが、口唇部への刻み・縄文等が施されるものは前述の通り多く認められるが、この中でも個体資料8例や梨久保遺跡75号住上層例にも施文されていることから、結節縄文や付加条縄文は塚田式段階に存在することは明らかとなったが、今後は背合わせに施文される縄文等非常に特徴的な地文の施文法や様々な縄文原体が、どの段階に伴うものか検討していく必要性が残るが課題としたい。何れにせよ早期末葉～前期初頭段階には好資料が出土し多くの足跡を残している。

関山式期ではⅠ式段階の資料は非常に少なく、ほぼⅡ式段階の一括資料と思われる。この段階の資料は特徴的であり、前段階と比較して本段階の在地系土器である神ノ木式土器は19の1点のみで他の出土は皆無であり、器形復元された関山式土器に見られるようにループ文によりモチーフが描かれる一群が主体であり、関山Ⅱ式期の中でもより新しい段階に位置付けられるものであろう。ただし、胎土・成形等からループ文が施文される一群の中にも在地で制作された土器16・17も存在しており前段階とは様相を異なる。

また、関山式以外の他地域の土器としては、南太閤山Ⅰ遺跡例に類似した18の土器が挙げられる。出土破片数が少なく復元には若干無理もあったが、南太閤山Ⅰ遺跡と同様なモチーフを探りながらも、地文は0段3条の縄による横帯羽状構成を採るものと思われ、南太閤山Ⅰ遺跡のものが地文が組紐文であるのとは異なるが、併存するであろう関山式土器の位置付けや櫛歯状工具により同様のモチーフが施される宮田村中越遺跡例神ノ木式との併存事例等からも大差ない時期に比定できる資料であろう。

黒浜式期の資料は前段階までと比較すると大幅に減少する傾向にあり、最古段階である黒浜Ⅰ式土器段階の資料の出土はない。復元したコンバス文と平行沈線文が横位展開構成される土器からもほぼ黒浜Ⅱ式期に比定でようが、本段階でも並行する在地系土器である有尾式土器の資料の出土は1点もなく、より特徴的な状況を示している。なお、小破片ではあるが網目状撲糸文が施文される大木系土器が1点のみ出土している。

諸磯a式期も若干の空白期があるものの、入り組み状木葉文系土器27の出土例が若干新しい傾向ではあるが、肋骨文系の2点28・29、巻菱形文系土器30及び繊維を含む爪形文土器等25・26の存在からも中段階程度までの段階と考えてよいものだろう。

次段階の諸磯b式期は、いわゆる「諸磯bⅠ式土器」の幅広な爪形文が施文される段階の土器群が比較的まとまって出土している。2単位大波状口縁を呈する土器の出土はないが、口縁部に幅広な文様帶を有するもの33、胴部上半までの部位に文様帶が多段構成を採るもの34、及び爪形文と爪形文間の斜位の刺突の交互施文のみで構成されるもの35などが出土している。

また、b式段階には次の浮線文により文様が描出される段階の土器も僅かながら出土しており、36はこの中で唯一復元可能であったものであり、獸面状の突起が施されておりb式でも比較的古い段階であろう。上信越地域を中心に出土する口縁部文様帶内に平行沈線文により格子目状モチーフが描出される土器32は、近年の研究により存続時期幅が比較的長いことが確認されており、b式段階のどちらかに併存するものと考えられる。

これ以降の諸磯bⅡ新～3式期の遺物の出土は皆無に近く、僅かにbⅢ式期の口縁部が「く」字状に内屈する破片37が出土しているが、諸磯c式期の土器群と近接した時期であることからも該期に足跡があつ

たと考えるよりも、次段階に關係した資料と考えられる。この次段階の諸磯C式期の資料も比較的まとまっており、なおかつ個体復元可能な資料が多く認められた。出土している資料は湯倉洞窟の立地にふさわしく、群馬系の土器群だけでなく信州系の土器群も併せており、洞窟遺跡という特殊な環境を考慮すれば良好な一括資料である。

諸磯C式期でもb式期同様に新しい段階の資料はなく、前期末葉～中期初頭の土器群が僅かに検出されるのみである。検出されている資料は少ないが、口縁部直下に印刻が入る十三菩提式土器46、結節浮線文によりモチーフが描出される十三菩提式土器44、及びこれに伴うと思われる扁平タイプの土器45が出土している。

この前期末葉の土器群の検出を持って、早期後半から前期末葉までの湯倉洞窟への足跡は終了し、中期前半に位置付けられる焼町類型の土器48が僅かに1点のみではあるが出土しており、中期段階でも僅かながらも湯倉洞窟に縄文人が生活の足跡を残していたことを伺い知ることができる。

註1 条痕文系土器群については、今回出土層位等からの検討ができなかったため、草創期に属する条痕文系土器の有無を検討等ができなかった。機会があれば出土層位と他の草創期土器群との層位関係から上る一群が存在する可能性もあり今後の検証課題となる面も存在すると思われる。

註2 墓田式の設定に関しては以下の報告に詳しい。

下平博行他「塙田遺跡」長野県御代田町教育委員会 1994

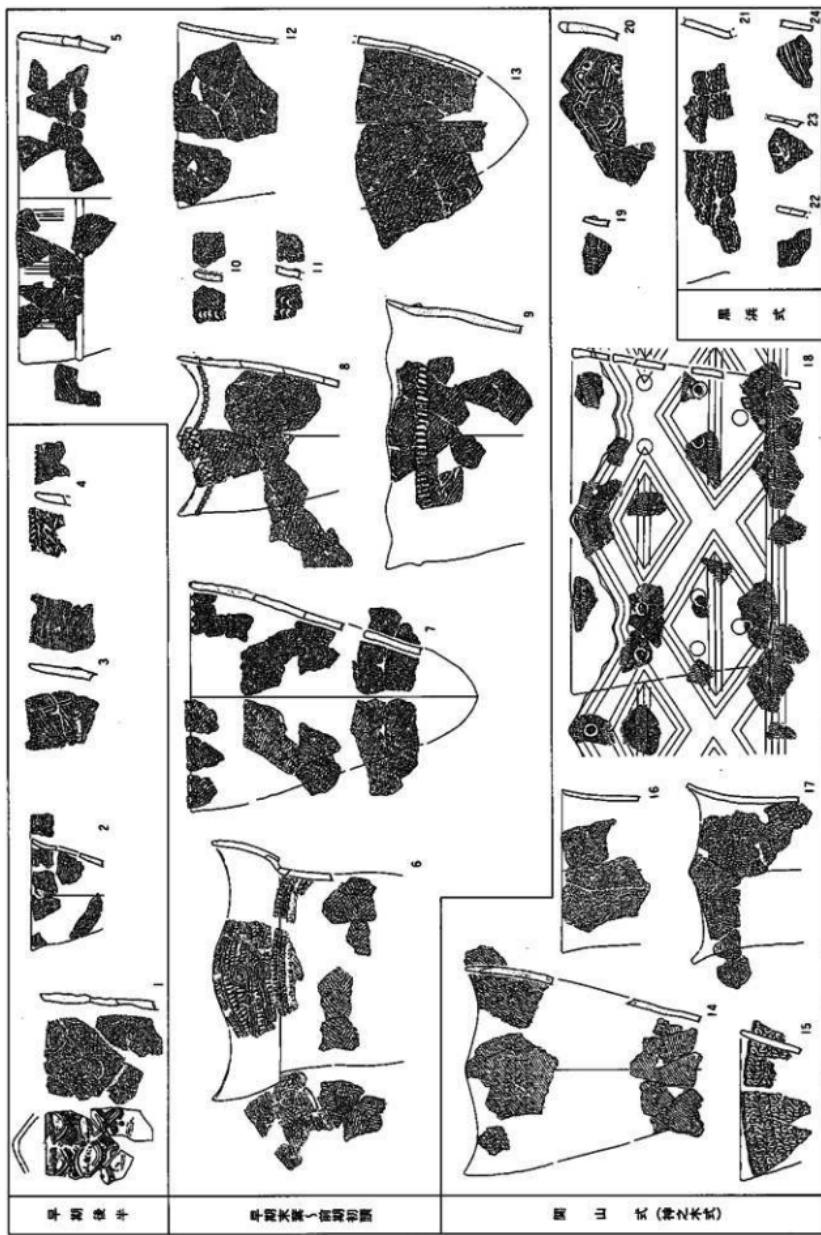
菅田 明他「下弥堂」長野県御代田町教育委員会 1994

註3 この時期を研究をされている先学諸氏の方々には異論があると思われるが、前述のようにその施文法、文様帶の分割法及びその区画文、その他土器の胎土・成形技法等からも、今回は敢えてこの段階に位置付けさせて頂いた。

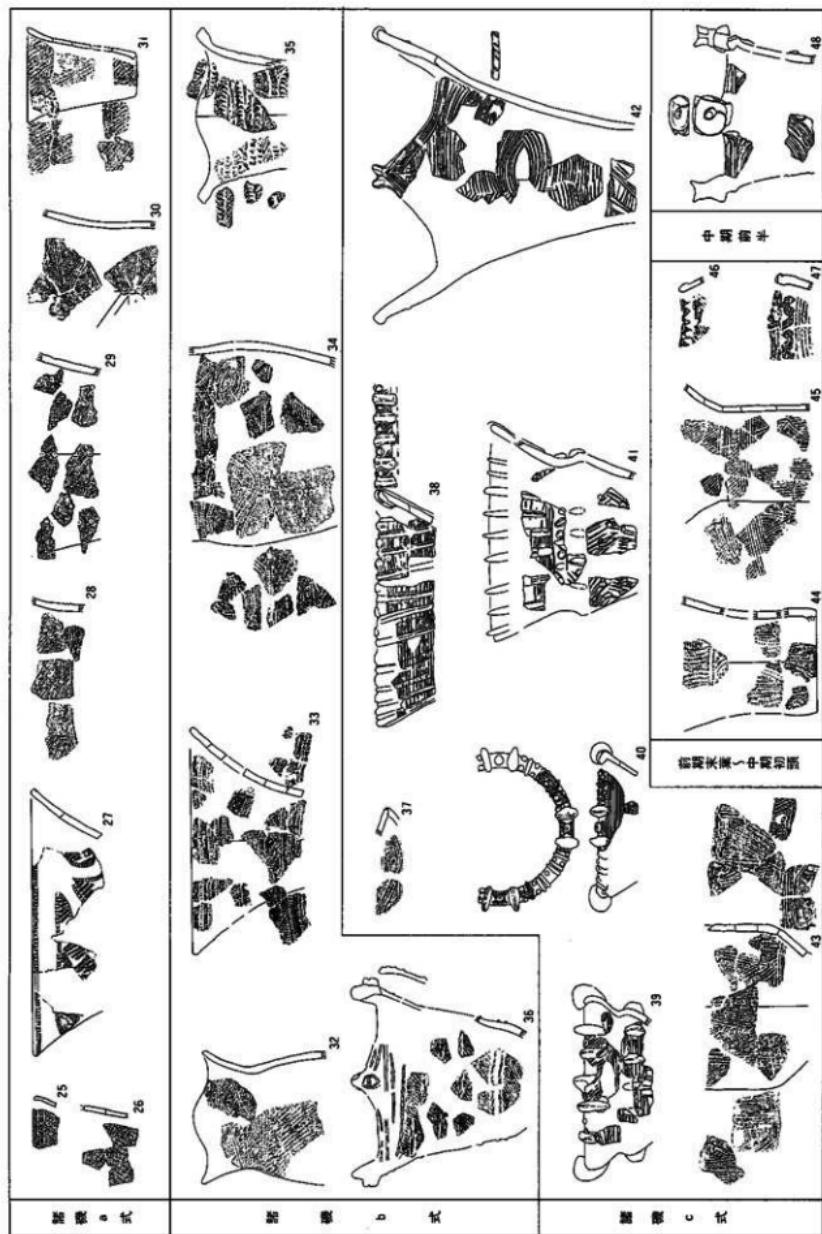
註4 口唇部に縄文や刻みが施されるものは周辺地域を概観すると、胎土・成形技法などからは少なくとも前期初頭から黒浜段階前後までは存続が推測される一群もあり、非常に息の長い土器群と思われる。この土器群も在地系土器群と思われるが分布域は中部地方にまで広がるものと思われるものであるが、いまだ推測の域を越えるものではなく、遺構単位での良好な資料の出土が望まれるところであり、周辺地域の資料集成の後存続時期等を含めて検討をする必要性があろう。

(田中和之)

第77図 桶文時代早期後半～中期前半の織年表(1)



第78図 縄文時代早期後半～中期前半の縄平表2



第3節 中期末葉から後期

本節で報告する標記の土器群は、破片の状態で浅いコンテナに重ねず敷いた場合、およそ50数箱分程度の出土量である。総重量約48kg、復原・接合資料も破片数で数えれば4,300点に上る（第5表）。このうち、破片数で約3分の1、重量でおよそ半分を図示した。無文土器と底部には縄文晚期以降の資料が含まれている可能性があり、逆に時期決定できずに除外した無文の小破片若干量がある。縄文晚期の土器量と比較すれば圧倒的に後期の土器が多いため、そうした不確定要素は比較的少ないと思われる。

以下のとおり8群に分類し、型式・器種と文様の種別によって細分し説明する。確実に識別できる第1～6群までの有文土器の85%以上を、第4群の壠之内2式が占めている。他の群は図上復原できる程度の資料を含んでも個体数は少ない。節末では山岳洞窟という特殊な本遺跡の第4群土器と、長野盆地の平野部に立地する長野市村東山手遺跡の壠之内2式土器の、精製・粗製土器と器種の構成を比較してみることとする。

第1群：中期末葉の土器

第2群：称名寺式及び並行期の土器

第3群：壠之内1式並行期の土器

第4群：壠之内2式及び並行期の土器

第5群：加曾利B1式土器

第6群：加曾利B2式以降の土器

第7群：無文土器

第8群：底部

1 第1群 加曾利E III・IV式期の土器（第79図1・第82図32・33・38）

1は胴部中位から強く外反する小形の深鉢で、口縁部を失し現存高18.8cm、最大径は21cm以上と推定される。微隆起帯で上下に対向するU字状文を描き、くびれ部で端部を連結する。隆帯の内側に沿って沈線が併走し、縄文LRを充填後ナゾリを施している。外面は無文部を縦ナナ、内面を横ナナでしている。胎土に粗粒砂を含み、赤褐色からよい黄褐色を呈する器壁が薄い土器である。加曾利E III式の新段階に位置する。33は深鉢の口縁部から立ち上がる把手の上部である。側面に孔を有し、頂部は円形でくぼんでいる。38は深鉢の上半部に描いたW字状文の端部である。加曾利E IV式と思われる。32は継位隆帯に接して横位の条線が見られる。他より古いものかもしれない。

2 第2群 称名寺式並行期の土器（第79図2・第82図34～37・39～50）

2・34～37は加曾利E式終末の土器の系統上にある。いずれも胴部中位がくびれる深鉢で、逆U字状などの文様意匠を微隆起帯で描くものである。2は上半を失し現存高17cmを測る。胴下部に間隔の開いた大柄なU字状文を5単位配している。縄文LRを充填し隆帯脇にナゾリを施す。無文部は縦ヘラミガキ、内面はくびれ部より上を横、下を縦のヘラミガキで調整している。明るい褐色を呈する器壁の薄い土器である。36は内湾する口縁部に橋状把手が付き、把手外面に縄文を施している。二次焼成のため剥落

が著しい。同一個体の可能性がある小破片がやまとまっている。34は低い波頂部である。いずれも地文は節の細かい縄文LRである。35は無文部の間隔が狭く文様は上下一帯構成らしい。37と共に縄文は微隆起帶上にかぶっている。これらは砂を多く含む摩滅しやすい胎土である。

39~42・45は関沢類型である。42は貼付文をもつ把手が付く波頂部で、刺突文帯がめぐっている。39~41は同一個体で、屈曲部の横位縄文部からJ字文が垂下するらしい。沈線内に42同様の円形刺突文を施している。45は沈線で描いた胴下部のJ字文である。

43・46・47・49は称名寺式である。43はやや大形の深鉢と思われ、沈線で無文帯を画している。49は直線的な薄手の口縁部で、幅の狭い帯縄文が垂下している。46・47は胴下半部のJ字文である。47には沈線内に円形刺突文を加えている。加曾利E式系統の土器と関沢類型は称名寺式の比較的古い段階に位置し、49などに先行するものであろう。

48は胴部上半が外反する波状口縁深鉢で、橋状把手が剥落している。波頂下に幅の狭い無文部で矩形の意匠を描き、胴部中位を横位区画している。胴下部まで地文に燃糸文を充填する。この時期の新しい段階に並行する東北地方の土器であろう。44は刻みを施す隆帯がめぐり、外反する無文の頸部に貼付文が見られる。地文は確認できないが、三十稻場式の可能性がある。50は瓢箪形の口縁部と思われ、微隆起帯で文様を描いている。

3 第3群 堀之内1式並行期の土器 (第82図51~53)

図示した3点のみである。51は屈曲する口唇端部に竹管状工具で沈線を施し、ボタン状貼付文が剥落しているらしい。52は外反する無文の口縁部に縦位の刺突文が施されている。53は丸みのある胴部に最大径があり、屈曲する短い口縁部の端部が三角形に肥厚して、突起部があるらしい。大形の注口土器の可能性がある。この時期の新しい段階に並行する関東地方以外の土器と推定される。

4 第4群 堀之内2式及び並行期の土器 (第79図3~15・第80図16~22・24・第81図25~28・第82図54・第83図55~69・第84図70~94・第85図95~128・第86図129~138・第87図139~163・166~171・第88図172~175)

後期縄文土器のうち、圧倒的多数を占める堀之内2式の有文土器の器形には、朝顔形深鉢、胴下部が屈曲する深鉢、鉢、注口土器がある。このほかいわゆる石神類型の深鉢と少数の南三十稻場式がある。

第1類 朝顔形深鉢 (第79図3・7~15・第83図56~第85図128・第88図172)

本群の主体を占める類であるが、破片では第2類の器形と識別できないものを含んでいる。口唇部が肥厚して短く内屈するか内面に沈線がめぐり、刻みを施した細い隆帯と8字状貼付文を口縁部に有することを共通の特徴とする。地文には節の細かい縄文LRを充填している。胴部文様から12種に分類して説明する。

A種 斜行文 (第79図3・第83図58・59・61)

3は口縁部を欠失し、現存高14.5cmを測る。砂粒の多い胎土で暗褐色を呈する。懸垂文と下端区画は無文部で描出され、右下がり単方向の斜行文とともに縄文施文部が並走している。無文部で画された三角形部分には縄文を施し、縄文部で画された部分は無文としている。施文後ナゾリを施し、胴下半は縦ヘラミガキしている。58・61とも胴部文様は5と同じ構図を描き、三角形部分の処理も同様である。58はやや厚

手で推定口径約31cmを測る大形の深鉢である。口縁部に密接した隆帯2条がめぐるように見えるが、上段は口唇部に直接刻みを施し、下段は貼付隆帯である。61は推定口径約17.5cm、やや薄手である。いずれも無文部の三角文の頂点は、文様帶上端の沈線に接している。

B種 懸垂文（第83図56・57・60）

いずれも小破片のため、分類には確信がない。56・57は縱位の磨消繩文を描く胸部である。56はやや広い無文部に刻みを施す隆帯が垂下している。57にはわずかに斜位沈線が見える。60は8字状貼付文下に二又の繩文部の垂下を認めるが、対弧文の可能性もある。

C種 対弧文+斜行文（第83図63・67・69）

67は推定口径約18cmを測る。繩文部の幅を広くとり、8字状貼付文の下に配した対弧文内の無文部が小さい。斜行文は左下がりである。入念にミガキを施すが内面の剥落が著しい。63は右上がりの斜行文が見えるがピッチが短く、別の意匠かもしれない。69は文様帶上端の繩文部が開いて8字状貼付文に接し、この下に二重の対弧文を配する。斜行文は左右双方向に下がるらしい。内面に煤状付着物が頗著である。

D種 重弧文（第84図70）

推定口径約17cmを測る、隆帯のない薄手の深鉢である。三角文に近い構図だが曲線的であり、下端区画はさらに下部をめぐると推定される。

E種 蛇行文（第79図7・第83図64～66）

同一個体で7は口径約21cmを測る口縁部、他は胸部破片である。胎土に砂粒を多く含んだ黒褐色の土器である。文様帶上端は直接隆帯に接し、懸垂文で縱位区画している。蛇行文の構図は明らかではないが、幅狭の帶繩文で表現され、懸垂文と交差している。

F種 三角文（第79図8・11・第84図71～79・81・82）

本類の文様で最も多数を占める種である。口縁部の隆帯には8・71・82の一条と、11・72・75・76の二条がある。8は現存高11.5cm、口径17.3cmを測る。胸部文様は1帯の帶繩文で均整のとれた三角文を描いている。本種はこのような構図の例が多い。11は口径16cmを測り、文様帶の幅はやや狭い。71は推定口径約20cm、75は約28cmと比較的大形で器壁が厚い。72は推定口径が約15cmを測り器壁が薄く、口唇部の内面に沈線がめぐり要所に刻みを施す。76は小突起の内面に円形刺突文を施している。72・76の胸部の三角形無文部の頂点は、文様帶上端の沈線に接している。73・77は三角文を二重に描き、A種の3同様の空間処理を行っている。74・78・79・82は意匠の上下幅が狭く、二段構成か菱形文の可能性もある。

G種 菱形文（第79図9・第84図80・83～93）

9は胸部上半が半周程度遺存し、推定口径16cm、現存高11.2cmを測る。83は同一個体である。胎土に細かい砂を含み、外表面は暗褐色、内面は黒褐色を呈する。文様帶の幅は比較的狭く、上下の区画は沈線一条である。区画内には繩文部で連接した菱形文が描かれ、連接部の上下の空間に三角文を配している。所どころ文様を描き直した線が残り、意匠に沿ってミガキを施している。80は推定口径約23cmを測る。文様帶の幅は広く均整のとれた帶繩文で意匠を描き、菱形の区画内は繩文を充填した菱形文で埋めている。86は推定口径21cmを測る。二条の隆帯へ異方向から刻みを施し、矢羽状に見える。菱形文を二重に描き、内部

に縄文を施していない。87も同様な菱形文である。93は縄文部の幅が狭い。

84・85・88~91は区画の一部に集合沈線を充填するものである。84は細い隆帯が三条めぐり、孔のある小突起内面に沈線を施す。85は推定口径14cmほどの器壁の薄い深鉢で、二条の隆帯は纏細である。広い無文部を残し、上端の区画を分断して沈線充填の菱形文を配している。縄文施文後、入念なミガキを施す。同一個体88・89は菱形文内部に沈線充填、90・91は施文部位が異なっている。

H種 潟巻文（第79図12・第84図94~第85図107-109・110）

12・94は同一個体で、推定口径17.2cmを測る。中粒砂を含む暗褐色の土器である。二条の隆帯がめぐり2個一対の貼付文を施す。幅の狭い帯状部で意匠を描き、地文を充填していない。J字状の渦巻文の中途から斜行文がとなりの単位へ連絡している。96・98・110は渦巻文の部分の破片である。96は中心部が入組文風となるらしい。97には3本単位の沈線による斜行文が見られる。4点とも明確な帯縄文となっていない。95は推定口径28cmほどと比較的大形であるが、器壁が極めて薄い。細い隆帯2条がめぐらしくある。幅狭の帯縄文で文様を描き、上部区画と右上がりの斜行文の間に沈線で矢じり形を配している。99~109には大柄の渦巻文が描かれている。

100~101と102~104はそれぞれ同一個体である。いずれも器壁が薄く幅の狭い帯縄文で意匠を描き、斜行文で画された空間に三角形状の文様を配している。105~107は同一個体である。渦巻文を描くと推定されるが、部位によって縄文部の幅が著しく異なっている。

I種 桟状文（第79図10・13・第83図68・第85図112）

10は推定口径14cmを測る。胴部文様の幅が広く、一対の8字状貼付文を基準に柵状文を二段描いて、意匠内に無節縄文を充填している。13は推定口径17.6cmを測り、口縁部の8字状貼付文の間に小突起が付く。縄文帯の間に無文の柵状文を一段配している。68は10、112は13と同様の表現である。

J種 帯状縄文（第85図116~118・120~122）

いずれも残存部が少ないため、胴部に別の意匠が入る可能性がある。116は波状口縁を呈し、波頂部に縦位沈線を刻み、波底部に8字状貼付文を配する。太目の隆帯に接近してめぐる帶縄文は貼付文下で弧状となる。117~118は2条の隆帯がめぐる。117は推定口径16.4cm、帯縄文は沈線3条からなる。118は推定口径18.6cm、8字状貼付文の間が小突起となり、口唇部内面の肥厚部に沈線を施している。120~122は帯縄文の幅が狭い。

K種 その他の文様（第85図108・111・113・114）

108は渦巻文などと推定される。幅広の縄文部に沈線を一条加えている。111は縄文部で横位の意匠を描き、蛇行文の可能性もある。113は上下の区画線の間に極めて幅の狭い斜行文を連ねている。114は隆帯に接近して幅の狭い帯縄文でJ字文あるいは斜行文を描く。第5類の体形土器の文様と似ている。

L種 脇部文様不明のもの（第79図14・15・第83図62・第85図115・119・123~128・第88図172）

14は口縁部に一条の隆帯がめぐる、推定口径約13cmの深鉢である。沈線は極細い。15~115は口縁部に突起を有する。隆帯三条めぐり、これをまたいで縦位隆帯を貼付し円形刺突文を施している。15は推定口径約15cmを測る。大小一対の突起の内面に渦巻文と円形刺突文を施し、両者を沈線で結んでいる。62は突起をもつ口縁部に隆帯一条がめぐり、横方向から刻みを施す。脇部には斜行文のような意匠が見られる。

115は推定口径約17.5cmを測る。円形突起の上面と内面に渦巻文を配し、両側に円形刺突文を施す。119は特に細い隆帯が四条めぐっている。

127は胴部文様下端で、幅の狭い帯繩文で三角文などが描かれるらしい。123は振った8字状の突起部で、二つの円孔は内面と上を向いている。124～126は磨消繩文が観察されるのみである。124は隆帯がなく幅の広い繩文部が見られる。128は胴部文様下端を区画する沈線と思われ、地文は見られない。172は推定口径27cmほどの比較的大形の土器で、二条の隆帯に大振りな8字状貼付文を伴う。口唇上に刻みを施した突起とS字状突起を配し、内面に五条の平行沈線文を描く。

第2類 胴下部の屈曲部が文様帶下端区画となる深鉢（第79図4～6・第83図55）

4は3単位の波状口縁を呈し、推定口径26cm、現存高13.5cmを測る。白色の粗粒砂が目立つ胎土で、暗褐色を呈する。扇形の波頂部内面には縦位の刻みと円形刺突文を施す。波形に沿ってめぐる一条の隆帯の波頂と波底に8字状貼付文を施し、これに並走する文様帶上端の沈線は貼付文を避けて湾曲する。渦巻文は6単位配され、幅広い帯繩文で描いた斜行文に沈線を一条加え、末端は渦巻文内で入り組ませる。沈線に沿ってミガキを施し、繩文も一部でつぶれている。5は口径33.6cm、現存高15.4cmで比較的大形の平口縁深鉢である。第1類の可能性もあるが、大きさから本類とした。明るい褐色を呈し焼成がよい。隆帯一条めぐり、8字状貼付文を4カ所施して4単位の渦巻文の基点としている。沈線は深く繩文充填後のナゾリは施さず、無文部はケズリに近い仕上げである。右上がりの幅広い斜行文の中に帯状の無文部めぐり、渦巻文の部分で入り組んでいる。6はほぼ完形で、口径28cm、高さ26cmを測る。細かい砂を含む比較的緻密な胎土で、焼成がよく黄褐色を呈している。内面は横位のヘラミガキを入念に施し、屈曲部以下は黒褐色を呈し付着物が残る。口縁部に隆帯一条めぐり、4カ所に8字状貼付文を施す。胴部には均等な幅の帯繩文で曲線的な菱形文を描き、上下に対向する三角形区画に蕨手文、菱形区画に菱形文を配している。55は隆帯のない平口縁で、推定口径28cmを測るが、破片が図のような配置になるわけではない。粗粒の砂が多くもろい。右上がりの斜行文内に沈線一条が加わり、4のような構成になるらしい。

第3類 いわゆる石神類型に属する深鉢（第81図27・28・第86図129～138）

堀之内2式の新しい段階に長野県を中心として分布する一群で、より薄手に作り、繊細な沈線文を描いて光沢を帯びるほど入念にミガキを施した、精製度の高い土器である。

27・28・131～133・135～137は胴部下半に最大径があり、上半部がゆるくくびれて外反する口縁部に至る器形である。上面觀が8字状を呈する突起をもつ、3または4単位の低い波状口縁となるものが多い。口唇部内面に1条の沈線が沿い、内面文は発達していない。口縁部には四～八条の横縁帯めぐり、これを縦に連鎖状に区切る装飾から結紐状の意匠が胴部上半に横位展開している。

27は高さ15.8cm、口径約11cmを測り、90%以上が遺存する。二次焼成のためか器面の摩滅が著しい。横縁帯に繩文を施す。3単位の小振りな突起に対応して胴部に円文を配し、上下の連鎖状部分は口縁部の横縁帯と最大径をめぐる2条の沈線に、左右は十字状文を介して脇の円文に連結している。28は上半部分のみ50%ほどが遺存し、推定口径約15cmを測る。8字状文を半ひねりした環状の突起から大振りな連鎖状文が胴部中位まで垂下し、左右に蕨手状の枝を出して主文様となる。これを菱形状に囲む意匠は脇の単位と入り組ませて文様を連結している。胴部文様を中心に繩文を施している。

131は推定口径が16cmを測り、8字状突起は確認できず小突起がめぐる平口縁らしい。胴部文様は27と同じ円文を4単位配し、連鎖状文で連結している。地文は施さない。132は推定口径18cm前後で、突起は8字状文を半ひねりしたものと、内面に隆帯の円文を伴う2種を付した4単位である。胴部文様は2条沈線で

菱形状の意匠を描き、両端を入り組ませている。口縁・胴部とも地文を施す。この類にしては器壁が厚く、沈線が太い繊細さに欠ける作りである。133は4単位の8字状突起下の横線帯に綴列の円形刺突を施し、連鎖状文に至る。地文は見られない。136は平口縁で、同様な文様である。135は突起を欠失し、横線帯を直線的に縦に区切って連鎖状文に至る。137は横線帯下に十字状の結縄文がある。

138は張り出し気味の広い底部に連鎖状文がめぐり、目の細かい編代痕がある。134は外反する無文の口縁部に縄文帯が見られ、沈線1条がめぐる口唇部内面に細かい刻みを施している。本類に属すか明確ではないが、堀之内2式には見られない装飾である。

129は底部が大きい筒状の深鉢で、器壁は3~4mmと薄い。小突起が連続する平口縁で、縄文帯にクランク文を連ね、下位に横線帯がめぐる。胴部文様は上下の帶縄文の間に第1類G種と同じ菱形文を配している。130は27などと同じ器形で、口縁部に隆帯がめぐる。胴部文様は比較的幅が狭く、上端を横線帯で画し、集合沈線で三角文を描いてから下端に横線帯をめぐらす。129・130は石神類型と堀之内2式との折衷的なものである。

第4類 南三十稻場式（第82図54）

同一個体10数点の破片である。胴部に最大径があり、推定14cmを測る。外反する無文の口縁部が立ち上がる器形である。肥厚した口縁部に1条の沈線がめぐり、突起部に縦の刻みを施す。横位沈線4条で胴部文様上端を画し、4条程度の集合沈線で縦位の弧状あるいは蛇行状の意匠を描き、所どころ小渦巻文を配する。長石・石英の粗粒砂が目立つ胎土で、暗灰褐色を呈する。

第5類 鉢形土器（第88図173~175）

外反する無文の口縁部を有する土器で、確認あるいは推定できた全点を図示した。173は推定胴部径11cm程度の無文の小型土器で、屈曲部に隆帯がめぐり、8字状貼付文を施す。175は推定口径17cmを測り、口唇部内面に2条の沈線がめぐり、刻みを加える部分がある。内外面ともミガキが入念である。174は推定口径23cmを測り、内面に沈線1条と小突起部に渦巻文を施す。沈線は太い。

第6類 注口土器（第80図16~22・24・第81図25・26・第87図139~163・166~171）

有文土器としては第1類に次いで個体数が多く、大多数は体部文様に大小各種の渦巻文を描いている。口縁部形態が確認できる資料では、21以外はすべて短い頸部が立ち上がるものである。

16はソロバン玉形に屈曲する器形の上半部が遺存し、最大径22.2cmを測る。焼成がよく灰褐色から黒褐色を呈し、胎土に粗粒砂を含むミガキによって沈んでいる。屈曲部の粘土帯接合面には刻みが見える。口縁部が短く立ち上がり、無文の靴籠状把手に接して器体上部に短い注口が付き、背面の把手基部には8字状貼付文がある。副軸方向の側面と把手の周間に渦巻文を配して帶縄文で連絡し、残余の区画は形態に応じ多重沈線で充填している。139は同じ形態の把手を有し、体部に磨消繩文で意匠を描く。

17は全体の約70%が遺存し、高さ19.9cm、最大径18.5cmを測る。普通の焼成で黄褐色を呈し、細粒砂を少量含む比較的緻密な胎土である。底部は台状に立ち上がり、屈曲部は器体上部にある。正面観が三角形を呈する把手は外反気味に立ち上がり、短い連繩部を介して頸部に接続する。把手には正面と側面に沈線を施し、頂部に円形突起を付加して2面に渦巻文を描いている。副軸方向と把手下に渦巻文を配し、2・3条単位の沈線で連絡する。底面に目の細かい編代痕を有し、周囲はやや摩滅している。同一個体143・144は同様の把手を有し、把手下と副軸の渦巻文を幅の狭い帶縄文で連絡している。

18は上半部の図化した部分だけが遺存し、最大径は推定16.5cm前後となる。胎土に細かい砂粒を含み、

暗褐色を呈する。器壁が3~5mmの薄手の作りで、内面は輪積痕が見える程度のナデを施す。体部は丸みを帯び、無文の橈状把手が頸部に接続している。体部文様は17と似ており、副軸のS字状を呈す二段の渦巻文と把手周囲の渦巻文を三条単位の沈線で連絡している。

19は注口部側40%程度が遺存し、高さ14.2cm、推定最大径約18cmを測る。砂を多く含む胎土で、灰褐色を呈する。底部は台状に作り、最大径部分の輪積面に直接接着して上向きの注口部を作っている。短い頸部と一体化した橈状把手を有する。副軸方向の体部両面に斜行文を伴う渦巻文を描いた後、ヘラミガキによって消去している。

20は全体の半分程が遺存し、現存高11.5cm、最大径約13cmの小形注口土器である。底部は外に張り出す高台状に作り、把手と注口部は分離している。副軸方向の体部最大径には第1類H種同様の渦巻文を描き、帶繩文内に沈線一条を加えている。

21は全体の半分程が遺存し、現存高19cm、最大径約20cmを測る。体部は球形に近く無頸で、底部を台状に作るらしい。胎土に細粒砂を少量含み、焼成がよく橙褐色を呈する。橈状把手を有し、副軸方向の体部中央と把手周囲に渦巻文を配し、幅狭の縄文帯で側面上半全体を連絡している。縄文施文部には細かい円形刺突穴が施される。この種の文様は深鉢にはごくまれで、中空土偶に施されるものである。

22は半分程が遺存し、現存高15.2cm、推定最大径22.5cmを測る。胎土に細かい砂粒を含み、暗褐色を呈する。体部は偏球形で底部を台状に作る。副軸方向と把手下の体部に四条単位の沈線で大小二段の渦巻文を描き、意匠の上下を同様の沈線で横位に連絡している。

26は口縁部を欠失して半分程が遺存し、最大径17.5cmを測る。底部は台状に作る。最大径部に沈線一条をめぐらして下端区画し、背面には沈線で大柄の半円状渦巻文を描き、磨消繩文が囲んでいる。副軸方向も同様であろう。注口部は沈線が囲み、黒斑が顯著である。底面に編代痕を有するが、摩滅が著しい。

25は口縁部を欠失し、全体の60%程が遺存する。ソロバン玉状の体部最大径は17.7cmを測る。体部下半と底面はヘラケズリの後ミガキを施している。磨消繩文で下端区画し、主軸・副軸方向の文様を囲んでいる。副軸方向には第1類の69同様の鉢縫文を配する。背面の把手下には隆帯が垂下し、85のような集合沈線を充填する菱形文を描く。注口部の両脇は沈線と円形刺突穴を伴うC字状貼付文を施す。

140~142・145~163は文様を有する体部破片である。140はやや厚手の作りで、沈線により曲折のある意匠を描くらしい。141は139と同種の文様である。142~145~152は渦巻文で、142~149を除き地文は見られない。142は注口部の脇に描かれている。同一個体145~146は沈線を重ねた大柄の渦巻文で、中心の渦巻を囲む椭円文中に細かい刺突穴を施す。150~151は同一個体であろう。152は特に薄手で、渦巻文の中心で沈線が入り組んでいる。153は8字状貼付文が見られる。

154~163は渦巻文以外の意匠を描く。154~155は同一個体の把手下と屈曲部で、沈線と磨消繩文を組合せている。156~159~162は幅狭の帶繩文で意匠を描く。同一個体160~161は、注口部に8字状文を伴う貼付文がめぐる。縦位の三角文には沈線間に細かい刺突穴を施す。163は雷文を描いている。

166~169は注口部である。166~167は身が長く、168~169は短い。166の下面には半隆起線で円文を配する。いずれも把手から分離し、体部にソケット式に差し込んで接着している。

170~171は編代痕を有する底部で、170は台状に作り出す。24は丸みのある胴下部で、胎土に粗粒の砂を多く含み、ヨコヘラミガキを施して器面調整している。

5 第5群 加曾利B1式土器 (第80図23・第81図29・第87図164~165・第88図176~178)

出土量は少なく、確認できた個体をすべて図示した。177は突起のない波状口縁深鉢で、外削ぎ状の口唇

部に刻みを施し、横帯文に「の」字状の単位文を配する。内面には断面三角形の段を作つて刺突列が沿い、3条の沈線がめぐる。176は同じ口縁部形態を呈し、内外面に沈線帯がめぐる深鉢である。178は推定口径8cmほどの小形器種で、一段の縄文帯を斜位に区切る。

29は浅鉢で全体の20%程度が遺存し、推定口径28.8cmを測る。細粒砂を含む比較的緻密な胎土で焼成がよく、黒褐色を呈する。口縁部形態は177と似て、外面に稜を有し断面三角形となる。内面は段に沿つて深い円形刺突列がめぐる。沈線帯には斜位の刻みを加え、上下の突出部で途切れている。外面には口縁部の稜以下にヘラケズリに近い調整を施し、斜位の砂の移動痕が残る。

23・164・165は注口土器である。23は頸部に付けた把手頂部に突起を付加し、内外面には盲孔をもつ。口唇部に「の」字状文を配する。164は頸部に斜位の刻みがめぐり、胴部に集合沈線で意匠を描く。23と同一個体の可能性がある。165には「の」字状の単位文が見える。

6 第6群 加曾利B2式以降の土器 (第81図31・第88図179~182)

確認できた個体をすべて図示した。長野県を中心に分布する羽状沈線文土器である。

31は口縁部が外傾し、胴部で強く屈曲する深鉢である。胴部は半周程度、口縁部は団化した部分が遺存し、高さ26.1cm、推定口径28.5cmを測る。胎土に粗粒砂を多く含み、普通の焼成である。外面は胴部下半が赤変して器面が荒れ、屈曲部あたりは黒変、内面は底部付近に黒色の付着物が見られる。断面形がやや角張る口唇部に2山一対の低い突起が12単位程度付くが、素文平縁深鉢の仲間である。内面に波形に沿つて太い沈線一条がめぐるが、ヨコヘラミガキによってつぶれ気味である。外面は沈線で口縁文様部を水平に区画し、右下がりの沈線を施す。胴部上半にはヨコヘラケズリ痕を明瞭に残し、太い羽状沈線を浅めに施す。沈線の上下の切り合いは浅い。

179~182は深鉢か浅鉢であるが、判然としない。179は精円文タイプと思われ、刻目帶で口縁部文様を画し、細い羽状沈線をやや間隔を開けて施す。180・181は口唇部内面が肥厚し、意匠の上下とも縄文帯で口縁部文様を描いている。要所に継位二段の突起を付している。182は口縁の縄文部に円形貼付文を付す。細年位置は定かでないが、181との類似から本群に含めた。

7 第7群 無文土器 (第81図30・第89図183~210)

これまで記述してきた第2群以下の縄文後期土器群の無文部及び粗製土器で、出土量は第4群に次ぐ。出土層位から縄文後期として扱った。この前後の時期については、第1群及びそれ以前の前・中期には無文土器自体がほとんど存在しないため、有文土器の無文部破片が若干混入している程度であろう。晩期に属するものは明確に分離できないが、後期土器との出土量は大差があり、混入率は低いと考えられる。本群の時期には縄文施文の粗製土器が少量伴う可能性があるが、縄文前期後半、弥生中期などの土器と明確に区別できないため、分類から除外した。

図示した資料はすべて粗製土器と思われる。外面調整には、指ナデ・ケズリ・ナデ・ミガキの4類がある。複合するものも見られるが、顕著な手法によって分類した。特にヘラミガキは他の調整の後に行われる手法であるが、疎らなものはミガキ調整として扱わなかった。内面調整は部位によって横あるいは縦方向のナデかヘラミガキを施しておおむね平滑に仕上げており、外面ほど手法の差は顕著ではない。

第1類 凹凸のある指ナデ痕が顕著なもの (30・203・204)

30は全体の70%以上が遺存し、歪みがあるが高さ約32.8cm、口径32cmを測る。底部から口縁部まで残る資料としては最も大形で、胎土に粗粒砂が多く含み器壁も1cm前後と厚い。色調は上半が褐色、下半が暗褐色から赤褐色を呈する。胴中位がややふくらみ、外反気味の口縁部に至る。外面調整は、口縁部は右下がりのケズリの後ヨコナデを施す。胴中位は指頭によるヨコナデが顕著で、胴下部は縱方向のケズリの後ナデを施している。底部外周は横にケズリを行う。底面に網代痕は見えず、擦痕が観察される。

203・204は胴下部と思われる。203は輪積痕の凹凸が残り、204は縱方向のナデの後疊らにミガキを施している。

第2類 ケズリ調整のもの (185・187・192・193・196・197・202・205)

185・187・192・193・196・197は口縁部で、いずれも横方向にケズリを行う。185・187は内面に細い沈線1条がめぐる。192・193・196は内湾気味で、器壁が薄く口唇部は鈍く尖る。197はやや厚く口唇部は丸い。202・205は胴部で、右下がりにケズリを行い、砂の移動痕が顕著である。

第3類 ナデ調整のもの (186・191・194・195・198・199・201・210)

201以外は口縁部で、基本的にはヨコナデを行っている。191は口唇部が薄いが、他は面取りされてやや角張った形態である。194・198・199はナデの後にミガキを併用している。201・210とも胴下部と思われる。201は上半は横、下半は縱にナデを行っている。210は胎土に空隙が多く、不定方向にナデを施して粘土がこびりついた状態である。

第4類 ミガキ調整のもの (183・184・188～190・200・206～209)

183から200の口縁部のうち、内面に沈線一条がめぐる183、内面が丸く肥厚する184は第4群第1類の口唇部形態と共に通する。189は口唇部を面取りし、雑なナデの後にミガキを施す。188・190・200は口唇部が丸い。190はケズリの後にミガキを施す。200は密接して横方向にミガキを行う。206～209は底部近くの破片であり、斜めから縱方向のミガキを施す。208は密接したミガキである。209は二次焼成のため器面が摩滅しているが、図示した部分より上位に位置する破片を見ると、ケズリの後にミガキを施していることがわかる。

8 第8群 土器底部 (第90図211～236・第91図237～252)

底部破片のみのため、本節で扱った土器群のいずれに属すか不明の資料を便宜的にまとめた。破片数は355点を数える。このうち網代痕を有する底部の比率は、破片数・重量とも73%前後を占めている。すでに図示した第79～81図の完形土器や第6類注口土器の底部を含め、網代痕を有する底部の点数（破片数ではなく個体数）は124点を数えた。これには摩滅や小破片のため編み方が不明の資料17点が含まれている。網代の種類と原体（素材）の幅を観察すると、次のとおりである。

網代痕の種類

網代の分類は通常行われているとおり越える数が多い方向を緯とし、図示した資料を（ ）に記す。

第1類 「2本越え、1本潜り、1本送り」のもの 94点 （第86図138・第87図170・171・第90図211・214・215・217～228・230～234・第91図238～247・249・250）

第2類 「2本越え、2本潜り、1本送り」のもの 9点 (第90図229・236)

第3類 「3本越え、3本潜り、1本送り」のもの 1点

第4類 「1本越え、1本潜り、1本送り」のもの 2点 (第90図235)

第5類 「4本越え、2本潜り、1本送り」のもの 1点 (第91図248)

第6類 その他 2点 (第91図251・252)

不明のもの 17点 (第83図67・第90図212・213・216)

上記のとおり本群に属す網代の種類は、観察可能だった107点の約88%を第1類が占め、他の類はいずれも少数であった。170・171・212・213・216・247・248は注口土器、その他は深鉢と推定されるが、器種と網代の種類の相関性は見出せない。編み方の種類が不明の17点のうち5点は注口土器と推定され、212・213・216は底面が著しく摩滅している。226は2本越え、1本潜りであるが、一部が3本越えになって不規則である。235は1本越え、1本送り、1本潜りであるが、経・縫の素材は著しく異なる。236は2本一組の素材を用いている。240は土器を置き直したため異方向の網代痕が重なる。

251・252はもじり編である。2点とも深鉢の底部形態とは異なり、注口土器の可能性が高い。やや磨滅している。経・縫ともきわめて細い素材を用い、一見織物のような緻密なものとなっている。

網代原体の幅

経または縫のより明瞭な圧痕の最大幅部分を計測し、観察できた110点について1mm単位で点数を示した。経と縫の素材が異なる場合は幅の広い方をとった。

1.0mm以下 15点 (第90図215・217・218・221・222・225)

1.1mm~2.0mm 42点 (第86図138・第87図170・171・第90図212・213・219・220・223・224・227・229・234・第91図248)

2.1mm~3.0mm 28点 (第90図214・226・233・第91図238・239・241・242・245・247)

3.1mm~4.0mm 15点 (第90図211・230~232・236・第91図237・240・246)

4.1mm~5.0mm 9点 (第90図235・第91図243・244・249・250)

5.1mm以上 1点

網代の素材は幅1mmを下回るものから5.5mmまでが見られる。1.1mm~3.0mmのものが約64%を占め、4.1mmを超えるものは少数となる。小破片が大部分のため底径・器種との相関性は明らかではないが、原体幅の狭い・広いと底径の大小とは相関性が見出せないようである。経縫の幅が異なるものが1割程度認められ、図示した資料では220・223・243~246・249が該当する。比較的幅の広いものに多いのは、観察の容易さに起因する可能性がある。素材には竹を用いたものが多いと推定されるが、246は経には扁平の素材、縫には半截した丸みのある素材を用いている。



写真13 もじり網底部圧痕 (第91図251・252)

9 土器群の編年位置

本節で扱った縄文土器群の編年上の位置については、冒頭の分類と個別の資料説明の中すでにふれてきたが、第4群を中心に補足しておく。中期末葉の第1群と前節で取り上げられた少數の中期中葉土器の間には長い絶続期間がある。第1～3群はいずれも10個体以下と推定され、断続的である。第1群には加曾利E III式の新段階が確実にあるがIV式はごく少量である。第2群では加曾利E IV式の流れを受け継ぐいわゆる加曾利E V式と関沢類型が比較的古い段階にあり、少數の称名寺式が後出するらしい。この時期に伴うと推定した東北系土器48は周辺で類例を知らない。堀之内1式期の第3群は特に少量である。

堀之内2式と並行期の有文土器をまとめた第4群は、本節の対象とした土器群全体の過半数を占める。第1類の朝顔形深鉢、第2類の胴下部が屈曲する深鉢を石井寛氏の堀之内2式細分編年に対照すると、大部分が堀之内2 b式に比定される。小破片のため時期比定が確実でない資料を考慮してもa式にさかのぼる例は知られず、c式に下るもののが若干含まれている。第6類注口土器の大部分もそれらと同時期と見られる。第4類の南三十稻場式54はこの時期に位置するであろう。従って第4群の主体的な時期はかなり限定された時間幅と考えられる。

一方第1類J種の帯縄文や内面文様の発達した172、第3類の石神類型は堀之内2式の新しい段階に現れるものである。両者を比べると石神類型が目立つが、J種は破片では識別しにくいため石神類型が優勢を示すとは言い切れない。口縁部をめぐる隆帯が3・4条に多条化する119のような例は長野県に顕著であるが、石神類型の横線帯に呼応した堀之内2式の変化とも見られる。これらは堀之内2 d・e式に位置するであろうが、2 b式と比較すればはるかに少量と推定される。

第5群の加曾利B 1式と第6群の同2式以降の土器は再び10個体未満となる。羽状沈線文土器31は加曾利B 3式並行期と推定され、これ以降空白期を挟んで縄文晩期に至るらしい。

長野県で縄文後期に無文土器が現れるのは称名寺式後半頃と思われ、以後は有文土器と器種や形態、法量、製作手法を分かち、粗製化・多量化していく。有文土器の胴部下半を含めて無文土器をまとめた第7群は第2～6群、あるいは晩期に伴うものであるが、時期的な細分は困難である。有文土器の多寡を根拠として、第8群の底部とともに大部分は第4群に伴うと推定する。指ナデの顕著な唯一の実測個体30は堀之内2式に伴った例が知られている。

10 後期の土器組成（第5表・第92図）

本遺跡は標高約1,600mの山岳地帯に立地する洞窟遺跡であり、周辺は亜高山帯の植生である。このため土器は平地にある集落遺跡から調査され、主たる食料が異なることは容易に想像される。食料採集活動の違いは石器組成が物語るであろうが、土器収入の選択性と食料の加工・調理から食事に関する諸活動の違いは土器組成に反映されている可能性がある。深鉢・鉢・注口土器などの器種と精製・粗製土器の分化が明瞭な縄文後期土器のうち、本遺跡で最も資料が充実している第4群堀之内2式期の土器組成を明らかにし、平地にある遺跡と比較してみることとする。

本節で扱った縄文中期末葉から後期後半に至る縄文土器から、分類不可能の細片若干量を除いた全点の数量を第5表に掲げた。記述に従って第1群から第8群の群別とし、第4群は第1～6類まで類別の数量を示した。本遺跡では小破片が圧倒的に多い、遺物包含層の性質によって同一個体でも変色や摩滅の状態が著しく異なる場合があり、個体識別が困難であった。このため破片数と重量の両者を示した。復原・

第5表 繩文中期末～後期土器組成表

分類	湯倉洞窟		村東山手遺跡SB8・10・13		備考
	破片数(%)	重量g(%)	破片数(%)	重量g(%)	
第1群	15(0.32)	414(0.86)	201(2.80)	3,910(3.70)	中期
第2群	157(3.68)	2,069(4.29)	0	0	
第3群	5(0.12)	71(0.15)	131(1.82)	2,052(1.94)	堀之内1式
第4群	第1類	1,519(54.84)	11,452(45.51)	1,010(54.80)	13,460(41.17) ※1
	第2類	188(6.79)	3,457(13.74)	272(14.76)	7,296(22.32) 深鉢A2類
	第3類	403(14.55)	1,986(7.89)	1(0.05)	11(0.03) 深鉢A3類
	第4類	19(0.69)	295(1.17)	2(0.10)	28(0.08) 深鉢A4類
	第5類	23(0.83)	233(0.93)	222(12.05)	5,639(17.25) 深鉢B
	第6類	618(22.31)	7,738(30.75)	336(18.23)	6,260(19.15) 注口土器
	小計	2,770(64.87)	25,161(52.18)	1,843(25.64)	32,694(30.94) ※2
第5群	52(1.22)	560(1.16)	9(0.13)	135(0.13)	加曾利B1式
第6群	65(1.52)	1,298(2.69)	0	0	
第7群	843(19.74)	11,945(24.77)	4,785(66.58)	59,772(56.57)	無文土器
第8群	363(8.50)	6,699(13.89)	218(3.03)	7,098(6.72)	
合計	4,270点	48,217g	7,187点	105,661g	

注(1) 「破片数」には復原・接合資料についても破片の点数として集計した。

(2) 「備考」には村東山手遺跡報告書の分類名を記した。

(3) ※1以下第6類までの()内には第4群内での第1～6類それぞれの百分率を記した。

(4) ※2を付した「小計」には第1～8群全体での第4群の百分率を記した。

接合資料は破片数と重量それぞれの百分率を示したが、両者には5～10%強の差が見られ、第4群第2・3類では約2倍の開きとなった。そこで仮に破片数・重量の百分率の中間を探ると、第4群が全体の58.5%、時期細分がほとんど不可能な第7・8群が33.4%、少數の第1～3・5・6群をまとめると8.0%となる。同様に算出した第4群の内訳は、第1類50.2%、第2類10.3%、第3類11.2%、第4類0.9%、第5類0.9%、第6類26.5%となる。これを概観すると、前述した堀之内2b式期には朝顔形深鉢が約半数を占め、注口土器がこれに次ぎ、胴下部が屈曲する深鉢が伴う。新しい時期には石神類型が加わり、いずれの時期も鉢形土器は極めて少量である。無文土器と底部にはそれらの胴下部破片及び他の群に伴うものを含むため、この時期の無文粗製土器の比率は有文土器の半分程度と推定できる。

湯倉洞窟と比較する平地の遺跡として、長野市松代町大室に所在する村東山手遺跡を取り上げる。この遺跡は奇妙山系の山麓に発達した崖錐地形の末端部に立地し、尾根に挟まれた谷間の北向き斜面、標高約350mの地点にある。湯倉洞窟からは西へ約20kmを測り、自然堤防を隔て北西へ約1kmで千曲川に至る。1989・90年に長野県埋蔵文化財センターが発掘調査し、報告書から資料の全容を詳細に窺える。時期は繩文草創期から中世に及び、繩文土器は早・前期2,149点、中期3,390点、後期9,222点、晚期23点が集計されている。後期前半では敷石住居址10軒を検出したが、本稿では堀之内2式でも湯倉洞窟第4群の主体的な時期とはほぼ並行するSB8・10・13の3軒の住居址出土土器(第92図)を検討する。資料の分類・集計は湯倉洞窟と同様とし、当該遺構の出土資料全点を対象としたが、早・前・晚期(細密条痕)は除外した。

胎土分析用など報告書掲載資料の少數が確認できず、補填材重量の除去は湯倉以上に不正確となった。

中期土器の大多数は湯倉洞窟第1群と同じ加曾利E III・IV式期であり、第2・4群は空白期となる。破片数・重量の中間値では、第4群27.8%、第7・8群69.6%、第1・3・5群計5.3%となる。第4群の内訳は第1類48.0%、第2類18.5%、第4類0.1%、第5類14.7%、第6類18.7%となる。これを概観すると、堀之内2式期の無文粗製土器は少なく見積もっても有文土器の約2倍に近く、有文の内訳は朝顔形深鉢が半数、その他に胴下部が屈曲する深鉢、鉢形土器、注口土器がほぼ等量ずつを占める構成となる。石神類型が欠落するのは新しい時期を交えないためである。

湯倉洞窟と村東山手遺跡の土器組成の顕著な違いの第一は、有文土器と無文粗製土器の比率が逆転していることである。この原因として、比較的大形で厚手の粗製土器が山道の運搬には敬遠されたことと、多量の堅果類の処理など、大形土器を用いる植物食料の加工を行わなかったことが考えられる。この点については、石器組成に占める植物食料加工具のあり方と、今回行わなかった土器の法量の比較検討が必要である。

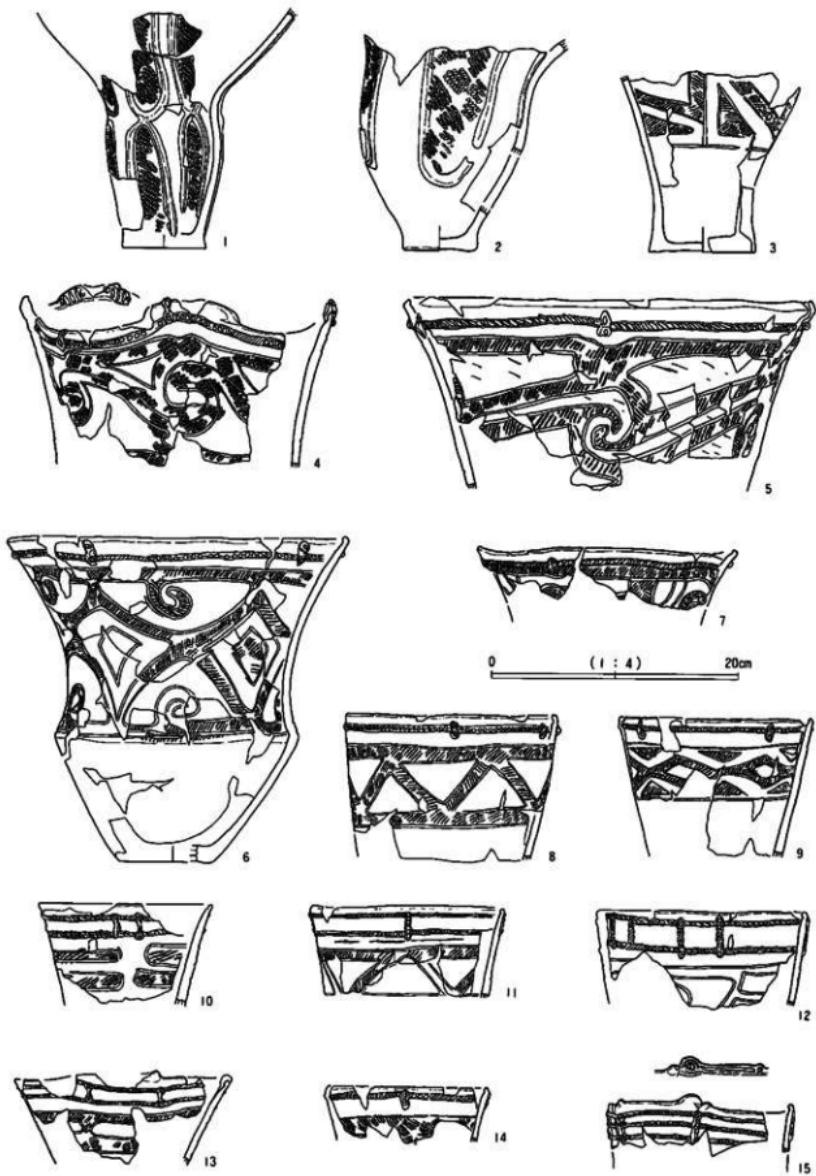
第二に村東山手遺跡に限らず堀之内1・2式を通じて長野県では普遍的に見られる鉢形土器が、湯倉洞窟では欠落していることである。朝顔形深鉢なら入れ子にして多数運びやすいが、頸部が屈曲する浅い鉢形はかさばって壊れやすいなどの難点があったのか、特定の器種を用いて行う行為が欠落していたのか。土坑墓や石棺墓内の甕被葬には、この種の鉢形土器を用いる例が多いことに注目すれば、土偶・石棒の欠如と相まって、精神生活に関わる要因を追求すべきかもしれない。

第三に、顕著な差ではないが湯倉洞窟では注口土器がや或多いことが目を引く。明らかな煮沸の痕跡は確認できなかったものの、亜高山帯の気候では水より湯が好まれたのか、煎じ葉など盛んに用いたのか。あるいは季節的にせよ狩猟に専従する場合にはことさら儀礼が多く、その度に果実酒や動物血などが必要とされたのか、いずれも空想の域を出ない。山岳と平地各1遺跡の比較ではあるが、山と里の生活とでは土器組成に明瞭な差が見られることを指摘し、その背景の解明については課題とする。

参考文献

- 秋田かな子 1994「加曾利B 1式注口土器の成立（予察）」『東海大学校地内遺跡調査団報告』4
- 秋田かな子 1996「南関東西部の様相」『第9回縄文セミナー 後期中葉の諸様相－記録集－』
- 石井 寛 1984「堀之内2式土器の研究（予察）」『調査研究集録』5 横浜市埋蔵文化財調査委員会
- 石井 寛 1992「称名寺式土器の分類と変遷」『調査研究集録』9 横浜市ふるさと歴史財團
- 宇賀神誠司 2000「岩下遺跡」「上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書19一小諸市内3-」
- 小山岳夫・緑田弘実他 1997「境沢遺跡」御代田町教育委員会
- 鈴木徳雄 1992「縄紋後期注口土器の成立」『縄文時代』3
- 岡 孝一 1969「長野県上高井郡山村坪井遺跡の発掘調査」『信濃』III21-8
- 岡 孝一・青木広安 1971「長野県須坂市三入道縄文後期遺跡の発掘調査」『信濃』III23-11
- 田中耕作・渡邊裕之 1999「縄文土器 第5項後期」『新潟県の考古学』
- 鶴田典昭他 1999「上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書8-長野市内その6-村東山手遺跡」
- 花岡 弘・緑田弘実他 1994「石神遺跡」小諸市教育委員会
- 平林 彰・緑田弘実 1988「縄文後期の土器」『長野県史考古資料編全1巻(4) 遺構・遺物』
- 平林 彰他 1993「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書11-明科町内-北村遺跡」
- 百瀬長秀 1996「長野県の様相」『第9回縄文セミナー 後期中葉の諸様相』
- 百瀬長秀 1999「離山遺跡羽状沈線文の編年観」『長野県考古学会誌』90
- 緑田弘実 1990「長野県の縄文後期前葉の土器群」『第4回縄文セミナー 縄文後期の諸問題』

(緑田弘実)



第79図 後期縄文土器(1) (中期末土器を含む)